

ポケモン「絵描き」の 旅

金銀yourphone

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、ポケモンの世界に転生した『選ばれた』主人公の話。
初投稿なので至らないところもありますが、よろしくお願いいたします。

目次

番外編

ポケモン「おしゃべり」の旅	U A 5 0
0 記念	1
ポケモン「優しき伝説」の旅	U A 1 0
0 0 0 記念	11
ポケモン「岩の娘」の旅	U A 1 5 0 0
0 記念	20
ポケモン「黒の始まり」の旅	U A 2 0
0 0 0 記念	29
ポケモン「一周年」の旅	U A 2 5 0 0
0 記念	37
「もう一人」の日常	U A 3 0 0 0 0 0 記

念

本編

プロローグ	夢	47
転生準備	特権と出演最後?	のおじい
さん		51
転生完了	卵マゴマゴ	54
両親	タマゴを割って	58
兄弟	それと+α	63
マーク	転生者のなごり	72
父の右手	大事件のお話	76
ゆめうつつ	おじいさんリターンズ	84
地方ワープ	(上) バトル練習	

ポケモン協会トップ〜伝説の男〜

206

アカ、赤、レッド〜転生と憑依〜

212

Mr. Nin 博物館〜待ちぼうけ

〜 218

妄信的で狂信的な科学者〜V.S. ゾン

ビ〜 225

皆と会話と後悔と〜事件は終わった〜

〜 237

ヤグルマの森〜何故迷う〜

244

252

メイコとNと〜はぐれはぐれて〜

嵐の前のなんとやら〜流石メイコさ

(ry)〜 258

掃討戦〜プラ〜ズマ〜!〜

264

バトルインザフォレスト〜メイコさん

縛り〜 271

バトルへのカウント〜一週間って短い

よね〜 282

ヒウンジム戦〜前哨戦〜

298

ヒウンジム戦〜圧倒的相性の悪さ〜

〜 308

激戦。その夜の事〜バッチゲット〜

夜の砂漠でく砂ずなしいく

319

古代の城の闘いく炎タイプつて少なく

ね？く

324

またはぐれてくすなあらしの恐ろしさ

く

331

ベストウイツシユく俺達の旅はこれか

らだ！く

336

三度マスゴミくライモンシティでく

343

ライモンジム戦くビリビリさせてあ

げるく

349

電車と双子く上る？下る？く

364

バトルアンドバトルく電車内の激闘く

370

V S. ノボリくシングルトレインく

375

未だ着かぬ電車の中でく手術中く

383

メイコさんリターンズく特権！特権！

く

387

岩のあの娘く再開く

一対一対一く新システムバトルく

399

途切れ途切れく新たな…く

一休みく手紙の行方く

413

408

ライモンシティを越えて〜レッツツフラ
イング〜 | 417

ファンとバトルと〜ホドモエシティで

〜 | 421

訓練〜転生者はやけに強い〜 | 432

エリートのリナ〜BWで実在します〜 | 436

クエイクバツジ〜ヤーコンロードは未

だ無い〜 | 444

ポケセンの中で〜のんびりゆっくりお

話し〜 | 451

ポケッター始めました!〜おお、荒れ

る荒れる〜 | 457

夜更かし〜ブルって中身小学生だか
らね?〜 | 466

寝起き〜騒々しくも進まないストー

リー〜 | 472

電気石の洞穴へ〜研究所なんて無かつ

たんや〜 | 478

アララギスルー〜洞窟の中で〜 | 483

逃避行〜ダツシユ、ダツシユ、ダツシユ

!〜 | 488

二対一〜あたいたい!〜 | 494

到着〜風吹き寄せる街〜 | 501

はぐれて別れて〜出会って戻って〜

〜 | 501

BダツシユならぬDダツシユ　くドブ

ドブ！く

517

そううまく行かないのが人生だけどく

感動の再会く

524

ほのぼのくあれ？　何か忘れてる？く

529

ぶっ飛びボディく飛行のジム戦く

533

俯瞰く赤い翼は何を見るく

550

再出発く志、新たにく

555

リスタートく山を前にしてく

562

分散くもはや恒例行事く

566

恋の味はく甘いポフィンと渋いポロッ

クく

572

特訓　くバトルバトルバトル！　もつ

とこい！く

583

猛進くもはや勝てる者はなくく

595

マスコミくいつものく

603

波乱万丈く世の中山ばかりだけでもく

609

伝説の　く倒せるのか？く

618

立ち向かいしは　く勝てそうに無いく

633

転生者　く倒したいく　――　648

タオスく限界を越えてく　――　667

戦後く戦いの後、戦士たちはく

685

そろそろく起きてよ、主人公く

693

リハビリく荒療治、かな？く　――　700

のうのうとく旅とはいったいく

705

エリートトレーナー(?)レナくお、お

もい　――　710

さざ波く女性たちの別荘地く　――　721

チャンピオンの余裕く電話にバトルく

お話し友好度上昇イベント的なあれく　727

――　742

バウツバウツくハツサンのターン！く　749

――　749

ギツツツツガア！くギイカのターン

！く　――　754

ナットウ……くレイカのターン！く

760

ペアギユアアアツ！くペテイのターン

！く　――　764

旅の再開くえ、あたしのターンは？く

――　771

エリートトレーナーの里帰りく彼氏を

添えてく

775

灰色の廃墟く存在しない街く

780

特異点く神との邂逅く

786

バトル AND アセプトくアセプ

トって『認める』ってことく

793

番外編

ポケモン「おしやべり」の旅〜UA5000記念〜

あたしは植村 明子。〇〇高校在学、インターネット部所属の一介のJKです。あたしはいわゆるネットサーファーで、昼夜を問わず2chやnknkを徘徊している。そんなあたしは今

「そこ赤になるか普通!?電車行っちゃうじゃん!」

遅刻してます。あーくそ。昨日の夜、テレビで見逃しちゃった今期のアニメをやったからって徹夜しなきゃ良かった。ああいうアニメって一度見始めると止められないのよね。

「あぁー!信号長い!」

押しボタンをカチカチ。

「車も来ないし、渡っちゃうか?」

そんな事はない。車はある。ただ、微妙な間隔は空いている。いつもなら安全の為に一人では渡らない。

だが、徹夜明けの頭はGOサインを出した。

「遅刻しちゃうし、良いよねー！」

赤信号を渡る。渡りきる。

・・・が、反対側にいた人とぶつかって、転んでしまう。反射的に謝る。

「あたっ！つとスミマセン！急いでるんです！」の「スミマ」のタイミングでトラックにどかん。

~~~~~

気付いたら雲の上に立っていた。

現実味がない。まるで、夢の中みたいだ。

「・・・あれ？あたし、死んだ？」

ここ、どう考えても天国だね？とはいえ普通は地獄に落ちると思うのだけど。

「しょーじき、今の世の中で天国行ける人なんて居ないと思うのよね。」

にしても、全身が痛い。まるで筋肉痛。

「お主、メイコというのか。すまんかったの。」

「は？何言ってるのじいさん」

あれ？こんなじいさん居た？

「所謂、お約束☆というやつじゃ。」

「あー、つまりあんたのせいであたしは死んじゃったの？」

「そういうことじゃ。信号待ちしてるわしにぶつかってきたお主が悪いと思うのじゃが、そこは規則で決まっておつての。お詫びに、」

「好きな世界に転生させて貰える、と。」

「わ、分かるのか・・・。」

当たり前。ネット市民なめんな。

「それで、何の世界に転生したいかの？」

本当はさつきまで見ていたアニメの世界に行きたい。けどなあ。ホラーなんだよなあ。けどスレに転生とか訳分からんし。

「じゃあ、ポケモンの世界で。」

困ったときのポケモン様様。

「あたしのゲームに色違いのペラップがいるから、その子を頂戴。」

「ぐいぐいくるのお。うむ、分かったぞ。お主は色違いのペラップとポケモンの世界に転生する。これでよいかの？」

「うん。」

「それでは、次に目覚めたらそこはポケモンの世界じゃ。おやすみ。」

目の前が真っ暗になった。

~~~~~

コンコン。

ん？ノックの音？とりあえず返事。

「ハーイ」

ファツ!?声が!どこの外国人だって感じに!

ピシピシッ

ん、聞いた事のある音だ。いつだったか、ニワトリの子供が産まれる瞬間を見たことがあるけど、その時の音にそっくり。・・・嫌な予感が。

ピシッという音と共に、光がさす。

「アラ、ナニコノコ」

「トウ^赤トウ^いトウ[…]トウ^ね」

目の前にいるのは二匹のペラツプ。

・・・あれれ、おかしいぞ？

自分の体を見してみる。…めっちゃペラツプですやん。赤いけど、赤いけど!

「アんのクそジジい〜!」

これが、あたしの新生活の第一声となった。

〜〇〜〇〜〇〜〇〜〇〜

三ヶ月がたった。あのジジイ、あたしがペラツプになったこと以外は完璧な仕事しや

がって。技構成が一緒なのは確認できた。流石にステータスは覚えて無いけど、きつと忠実に再現されているんだろう。

「トウーメイトウー。」

「なに、お父さん。」

「トウーお客トウー。」

「あー、お客さま?」

この三ヶ月で声も元に戻したし、ポケモンバトルにも慣れた。ただ、お父さん以外のペラップはあたしに近付きさえしないけど。

それより、お客さま? またトレーナーかしらね? いつだったか、この森に色違いのペラップが居るって噂が広まったからなあ。流石にもう下火になったし、ノンビリ暮らせると思ったのにな。

「分かった、今行く。」

「トウートウー。」

頷いて家に戻る。

「お客さまはどちら様々♪つと。」

そこにはいたのを見たことのないポケモンだった。

「ええと、どなた?」

「オイラはフーパ！珍しいポケモンをコレクションしてるの…さ！」
「うわっ！」

投げつけてきたリングをかわす。

「は、な、ナニすんのさ！」

「フフフ、オイラに『おしやべり』は効かない。大人しく捕まれ！」

フーパが態度を豹変させて襲いかかる。

「そんな事言われて捕まるアホはいない！」

いいつつ、『ばくおんば』を放つ。が、全く効いていない。

「オイラに技は効かない！さっき言ったよ？」

「言ってるよ!!!」

く、技が効かないんじゃ戦って捕まるか、逃げた挙げ句捕まるかの二択じゃない！

おおお落ち着け、もちつけあたし！こういう時こそ、ネットパワーをメテオに！いい

ですとも！

「残念だったわね。あたしには、ジジイから教わった必殺技がある！」

「なに!?!」

「逃げるんだよ〜！スモ〜キ〜！」

あたしは『そらをとぶ』で逃げ出した。

トウートウーという声を置き去りにして。

くくくくくくくくくくくく

あいつワープしてくるせいで寝れない！気が抜けない！

「ばあ〜。」

「喰らうかつー！」

背後からの手をかわす。

「下からだぞ〜！」

「上から来るぞー！気を付けろー！」

声で惑わしてくるからたちが悪い。

「キャハハハハ☆」

あ〜もう！楽しんでやがる！

「くくく〜！」

「イザナミだ！」

無理矢理深夜テンションで頑張っているけどそろそろ限界。

「ホレー！」

「うひゃあー！」

あ、危なかった。高速宙返りをしてなかったらやられてた。

「ホラホラホラー！」

「ぐ、ぐぐぐ！」

もうダメ！限界！せめて、下の森に突っ込んでいけばあるいは！

「ありやいやー？落ちちゃった。・・・メンドウなことを！！」

悔しがる顔、いただきました。

~~~~~

はっ！気を失ってたわ。一瞬か、一週間か。周りを見渡す。辺りに食べ物が散らばり、あれは・・・ドープルの家族？

「……は？」

「七番道路のドープル族の縄張りのなかだ。」

ふと上を見ると見いつけたとでも言いそうなニヤケ顔をしたフーパが空にいた。リングを大きくして、ゆっくり下ろしてくる。

ヤバイ。あたしは逃げようとしたけど体から力が抜けたように動けない。ドープルの家族は気付いて無いみたい。・・・なら、仕方ない。

「……から逃げて！」

『おしやべり』を発動する。

「……から逃げて！」

せめて、捕まるのは自分だけにしようと。

「ここから逃げて！」

なのに、こつちに近づいてくるドーブルがいる。

「ここから逃げて！」

「お前のせいでこつちのテンションがおかしくなるんだよ!! 黙れ!!」

殴られた。

「ぐはっ…なんでこつちくんのよ! 速くあっちいきなさい! でないと…!」

「もう遅いよ☆」

リングが二匹を包む。

どこに行くのだろうか。この先どうなるのか。あたしには分からない。・・・とりあ

えず、このガキ、後でつつこう。

世界が歪んだ。

く〇く〇く〇く〇く〇く

こうしてあたしの旅は始まったのだ。

「私、メイコさん。今あなたの上空5メートル地点にいるの。」

なーんでもさらこんんことを思い出すのか。

「オンドウルルラギツタンデイスカー!」

まあいい。まだまだ時間はあるのだ。

「Good<sup>グッド</sup> bye<sup>バイ</sup> BOOOOL<sup>ブーール</sup>!!」

「ぐはあっ!」

「よっおはよう。」

「も、もつと優しく起こして…ガクッ」

「寝るな!」バシッ

一時は諦めたりしたけど、あたしは元気です。

## ポケモン「優しき伝説」の旅〜UA10000記念〜

とあるカロス地方の港町。

そこに、伝説のポケモンと伝説のトレーナーが船を待つていた。

「私の昔話を聞きたい？楽しいものではないぞ？」

……そうか。分かった。少し長くなるから座って聞いてくれ。」

トレーナーは部屋の椅子に腰掛ける。

ポケモンは軽く息を吸い、話始める。

〜〇〜〇〜〇〜〇〜

私には二年前以前の記憶が無い。気が付いたら村に倒れていた。

聞いたところによると、何か強いポケモンと戦った後のようなボロボロの姿で川を流

れてきたらしい。

私は村の人たちの看病で一命をとりとめた。

村の人たちは優しかった。

少しの間はな。

彼らが私を畏れの目で見始めたのは村にあるトレーナーがやって来たせいだ。そのトレーナーは何を考えていたのか村の人を攻撃し、乱獲を始めた。

勿論、今までも村にやって来てはポケモンバトルをするトレーナーは居た。

だが、常識の範囲内だったし数回来た後は二度と来なくなるのが普通だった。

……奴は毎日毎日やって来た。

村の人たちも初めはいつも通り戦った。

だが、奴がメタモンしか狙って無いと分かると、皆隠れるようになった。

正義感の強い人たちが立ち上がったが敵わなかった。

それどころか、ストレスをぶつけるかのように必要以上に痛め付けられた。

それこそ、死ぬ一步手前まで、な。

私は村の人たちに大丈夫だ、問題ないと言われていたので仕方無く大人しくしていた

が……直ぐに限界が来た。

私はそのトレーナーと戦った。奴の使うポケモンは強かった。が、私には遠く及ばな

かった。

村の人たちに運ばれていくそいつを見て、私はこれで奴も懲りただろうと思った。

甘かった。

むしろ奴は積極的に来るようになった。

それも集団で、だ。

こんなでも私は『伝説』だ。そこらのトレーナーが何人増えてもそう簡単にはやられない。

奴が来る度に私は返り討ちにしたが……あまりのしつこさに、私はキレた。

キレてしまった。

私は奴自身を攻撃した。

殺しはしなかったが、トレーナーとして生活出来なくさせた。具体的には目を……何でもない。

とにかく、気が付いたら奴は血まみれで倒れていた。

村の人たちは遠巻きに私と奴を囲っていた。

『何故皆、嬉しそうな顔をしないのだろうか？』

…その時に思ったことだ。今考えると、実に浅はかだな。

オーロッドが奴を近くの町に運ばれて行った。

私は、村の人たちに告げた。

「村を荒らす悪い奴は私が倒した。二度と来れなくしたから、もう荒らされる事は無い

だろう。」

と。

村長である年取ったゾロアークは私にこう言った。

「それは、有難い。奴には困っていた。…だが、貴方はやり過ぎた。トレーナー自身を攻撃するなんて、正気の沙汰では無い。…正直、今すぐ村を出て行って欲しいが、我々は敢えて貴方を村に迎え入れます。その力が、他へ向かわないように。」

私は周りを見回した。

村の人たちの眼には、恐怖と、嫌悪が、混ざっていた。

私はその視線に堪えきれず、村の外れにある洞窟に引き籠こもった。

…。その後、奴がどうなったかは知らない。

やり過ぎた事に後悔はあるが、やったこと自体には後悔は無いからだ。

こんな私にも、友達が居た。というより、出来た。

名前は伏せるが、カビゴンとメタモンだ。

カビゴンは正義感が強く、奴を倒そうとして返り討ちに合ったポケモンの一人だ。

メタモンはなんとというか、ニヒルだった。

…どうやって出会ったか？カビゴンが乗り込んで来たんだよ。メタモンを肩に乗せて。私の洞窟に。



しかも、奴に付けられた傷も癒えてないのに、だ。

しかも乗り込んで来て何て言ったと思う？

「やり過ぎだ」？違う。「俺のが強い」？少し違う。

正解は、

「何で奴を倒したんだ！オレが倒す筈だったんだぞ！」

だ。

そう言つて殴つてきた。

余りに唐突で、余りに無遠慮で、『メガトンパンチ』をもちに喰らつてしまったよ。

……。考えてみる。他の人から避けられている自分の元に包帯グルグル巻きの巨人

がやつて来て、訳の分からない理屈を怒鳴り付けてきて、本気で殴つてきたんだぞ？

どうして友達になれたのか不思議な出会い方だろう？

だが、私と彼らは友達だ。親友……。だ。

洞窟から飛び出して外を走り回るなんて出来なかったが、何時も三人で喋っていた。

何処から聞き付けたのか偶然か分からないが、偶にやつて来るポケモントレーナーを

振り返りにした。

三人で協力して、洞窟を広げ、住みやすくしたりした。

楽しい時間だった……。あの時までには。

あの時も、何時も通り三人で喋りあっていた。

そこに、なんとというか、赤い奴らがやって来た。

いや、やって来たなんて物じゃない。攻めて…そう、攻め入ってきたんだ。

奇襲だったせいで、親友たちは直ぐに倒された。

私は二人を洞窟の奥に避難させ、一人で奴らに立ち向かった。

ゴルバット…グラエナ…ヒノヤコマ…一人一人は強くないが、いかんせん多すぎた。

倒しても倒しても、きりが無かった。

結果として、私は負けなかった。

ただ、金髪で…言い表しにくい髪型をした眼鏡の研究員に、そいつの出した機械に

…屈した。

…そう、君たちが壊してくれたあれだ。

一つ付けられると技を出せなくなつた。

二つ付けられると動けなくなる。

三つ付けられると激痛で思考がぶれる。

四つ付けられると感情をコントロールされる。

五つ付けられると…意識を持つてかれた。

それからの私の行動は君の方が詳しいだろう。

意識を持つてかれたと言ったが、偶に戻ってくる時もあった。

目の前は全て真つ赤で、絶え間無く激痛が走る。

まともな思考が出来ず、まるで全てを壊すことが生き甲斐のような感情が湧いてくる。

心の中では駄目だと叫んでも、体はただただ殺戮を繰り返した。

目を逸らすことさえ出来なかつた。

私を見る眼は、恐怖、嫌悪、憎悪、諦念、絶望、敵愾心、恨み、怨み、その他名前すら着いてない負の感情が渦巻いていた。

……だが、例外もいた。そう、君と親友たちだ。

君は、憐れんだ眼で見えてきた。

親友たちは……。悲壮な決意を……。込めていた……。

言うことを聴かない私の体は、親友たちさえ……。攻撃……。した。

『はどうだん』を撃ち込んだ。『サイコブレイク』で……。吹き飛ばした。

それでも親友たちは、諦めなかつた。

……私は、自分を許さない。許せない。許されてはいけない。

出来るなら、親友たちに謝りたい。私の被害に合った人たちに謝りたい。

だが、私のせいで家族を無くしたポケモンたちが許さない。町を壊された人々が許さ

ない。何よりも、私自身が許さない。

親友たちは…許すだろう。許して、しまおうだろう。

ゲラゲラと笑って。全くやれやれと言って。

だから、出来ない。二度と彼らと会うことは出来ない。

血にまみれたこの手では、体では。

死んでも、生き続けても償うことの出来ない罪を、業を背負った私では、親友に会う資格は、無い。

だからこそ、君には感謝しているよ、レッド、アカ。

君は、私を止めてくれた。捕まえてくれた。

そして君は今から別の地方へ行くのだろうか？なら私は彼らに会うことは、恐らく一生無いだろう。

…逃がっている？そうかもしれない。いや、実際逃がっているのだろう。

だが、私はもう二度とあの恐怖の眼で見られたくはない。あの憎悪の視線に堪える事は出来ない。君と、君たちと一緒に居れば人を傷付ける事は無い。畏れられることも少なくなる。ただの一匹の『ポケモン』として見てもらえる。

軟弱だと思えるか？それでもいい。

むしろ、そうでなければならぬ。

笑われようと怒鳴られようと哀れまれようと、私は自分の力に、そして利用しようとするこの世界に対して臆病に生きねばならない……死ぬことを君が許さないのなら。……そうか。

くくくくくくくくくくくく

ポオーー

船が港にやって来る。

「船が来たようだな。では、ボールに戻ろう。」

トレーナーはポケモンをボールに戻す。

ボールから出た赤い光がポケモンを包む。

「さよなら、私の親友。」

そしてトレーナーは部屋を出て、船へ向かう。

# ポケモン「岩の娘」の旅～UA15000記念～

「ゴロツ！ゴロツ！」

（まったく！頭にきちやう！）

走りながらダンゴロは思う。

（そりゃあ私たちの種族が一番強いと自惚れている訳じゃ無いけど、だからといってプライドが無い訳じゃ無い！）

ダンゴロは激怒した。

必ずかの暴虐インコに一泡吹かせなければならぬと決意した。

その為には、強くなる必要があった。

「ゴロゴローツ！」

（強くなって！目にももの見せてやる！）

そして、一週間がたった

「バスウ…。」

「バスラオ！」

いつの間にか、ダンゴロはガントルへと進化していた。

ただただ強さを求めたダンゴロ…いや、ガントルは、もはや地下水脈の洞穴の主として君臨していた。

「いけっ！マルスケ！」

「ルシヤア！」

このトレーナーもガントルの噂を聞き付けたのだろう。ガントルの苦手な水タイプや草タイプを連れてきていた。

「ガットウ！」

「ルシヤアツ!?!」

「マルスケ!?!」

だが、何分弱い。

最後のフタチマルはなかなかだつたが…他のポケモンはあからさまに『ついさつき捕

まえました』とばかりに扱いなれて無かった。

(……も潮時ね)

逃げていくトレーナーを眺めながら考えるガントル。

ここに居るポケモンたちで自分にかなう相手は居なくなつた。

トレーナーが来るのを待っても良いが、本当に強い……それこそあのドーブルぐらい強い相手は現れないだろう。

故に、ガントルは旅立つ。

今までの自分のほぼ全てであつた洞穴を抜け出し、外へ。

くくくくくくくくくくくく

ゆっくり、しっかりと大地を踏み締め、ガントルは走る。

傍目には歩くよりも遅い。だがガントルからしてみれば、確かに走っている。

ガントルの硬く重い身体は敵の攻撃をしっかりと受け止めてくれるが、こうなるとダングロの頃の軽い体が懐かしい。

「うおっすげえ。ガントルだ。しかもボロボロ……これはゲットのチャンスだな!」

だが、ガントルにとってそう悪い事ばかりでも無いようだ。



歩いている…訂正、走っているだけでそこいらからトレーナーやポケモンがうじゃうじゃと寄ってくる。

ただただ強くなりたいガントルにはむしろ、ご褒美だ。  
連戦に次ぐ連戦で『がんじょう』は意味をなさない。

一歩間違えたら、いや、間違えずとも即刻倒れるほどに体は削れている。

だが、ガントルは戦い続けた。

戦い、走り、戦い、走り。

昼夜を問わずこれを繰り返した。

小道を駆け、草むらを抜け、森を踏破し、長い橋を渡り、見たことの無い高い建物に  
囲まれ…遂に、倒れた。

くくくくくくくくくくくく

気が付けば何か良く分からない事になっていた。

それが、目覚めたガントルが真っ先に思った事だ。

『いとをはく』でも喰らったのか、身体中に白い紐状のものが繋がっている。

体が動かない。『しびれごな』を掛けられたの？

しかし、それにしては疲れが取れている。タブンネに『いやしはどう』でも使ってくれたのか。

勿論、違う。

親切な大工が、ロープシンを使ってポケモンセンターまで運んでくれたのだ。

実際、ガントルは死にかけていた。

タマタマがスピアーに食べられるように、ヒトカゲの尻尾の火が消えるように、ペアと離されたギアルが動かなくなるように、ガントルはただの岩になりかけていた。

ジヨーンさんは、鬼のように怒っていた。

「何でこんなになるまで戦ってたの!？」

「ガトウ…。」

「せめて木の実食べるとか、タブンネに頼むとかしなさい!」

「ガトウ…。」

「今回は何とかなったけど、毎回こうなるとは限らないのよ!？」

「ガトウ…。」

「いい?これからはこんな無茶はしないこと!良いわね!？」

「ガットウ…。」

しおらしく頷くガントル。

だが、それは無茶をしないと約束した訳でも、ましてや強くなる方法に妥協した訳で

も無かった。

というか、ジョーイさんの話は全然聴いていなかった。

あの鳥にギャフンと言わせるにはまだ足りない。

ギリギリの戦いで勝つことは、あるいは出来るかもしれない。

だが、それではいけない。

もつと、もつと圧倒的な差を見せないと。

(その為には…進化が必要不可欠ね。リーダーのように、ギガイアスにならないと)

くくくくくくくくくくく

さて、ここで考えて欲しい。

ガントルの進化方法は少し特殊だ。普通に育てるだけでは絶対に進化しない。

では、どうすれば進化するのか。

答えは、『通信交換』。

そう。あのボッチ殺しの進化方法だ。

つまり、トレーナーが二人居なければガントルは進化出来ない。

故に、ギガイアスは野生には存在しない。

と、思われがちだが。

実際には存在する。

ゲンガーやカイリキー、フーデインやゴローニヤも野生で存在する。

更に言えば、『道具を持たせて通信交換』しなければいけない、ニョロトノやハガネール、ドサイドンやポリゴンZでさえも、野生にいる。

何故か。

答えは、カブルモやチョコボマキの図鑑説明文に書かれている。

要するに、『電氣的な刺激』を受ければ良いのだ。

だが、当のガントルはそんなことをは知らない。

ならどうして進化したかと言うと…偶然だった。

く〇く〇く〇く〇く〇く

ガントルはイライラしていた。

「ゴッゴロゴロゴロ！ゴロゴロゴッゴゴロ！」

(もう治ったわ！大丈夫だからここから出してよ！)

精一杯アピールするが、ジョーイさんには伝わらない。

強くなりたいたガントルとしては、さっさとここを出て強者の居る場所へ行きたい。

だが、ガントルは瀕死状態だったのだ。そう簡単には出してもらえない。

ここはゲームの世界ではなく、現実の世界なのだ。ゲームでの『ひんし』と現実での瀕死は大幅に違う。

人間よりよっぽど生命力に溢れたポケモンでさえ、最低三日は回復に専念しなければいけないのだ。

よつてこの場合ジョーイさんのが正しいのだが、如何せんガントルは若かった。

動かない筈の体を無理矢理動かし、暴れたのだ。

『じならし』『うちおとす』『ストーンエッジ』『ロックブラスト』

使える技を全て使い、部屋から出ようと暴れ、近くにあつた機械を踏みつける。

壁に体当たりをかまし、強化ガラスを割り、外に出ようとする。

バチバチッ

ふと耳に入った音が気になり、ガントルは一度部屋を振り替える。

目の前で機械が暴発。

ヒウンシテイ全体をを停電にさせるほどの電流がガントルの体を駆け巡る。

そして、進化が始まる。

くくくくくくくくくくくく

ガントル・・・いや、ギガイアスが始めに取った行動は、『外へ出る』事だった。

下を見る。前よりも地面が遠い。

上を見る。空が、雲が近い。

(行ける…これなら、きつと！)

勝ちへの予感。進化の際に大幅に技が変わったのを感じた。その技の使い方は本能で分かる。

体が震える。

全身のエネルギーコアを光らせ、吼えた。

「ギツッガアアアアア！」

## ポケモン「黒の始まり」の旅〜UA20000記念〜

「ええと……」

ブラックは困惑していた。

何故なら、朝起きたら『神様からの手紙』が枕元に置いてあったから。

『ブラック は 「かみさまからのてがみ」 を たいせつなもの ポケット に 入れた！』

「勢いでリュックに入れちゃったけど……どうしよう……これ……胡散臭いんだけど……凄く……」

とにもかくにも、今日は旅に出る大切な日。

アニメの主人公みたいに母親に早くしなさいとか言われたく「ブラッカー！ 早くしなさい！」…… Oh, my god !

〜〇〜〇〜〇〜〇〜〇〜

「ちゃんと鍵は持った？ 食べ物は？ 服の襟、立ってるわよ」

「おつとと、ありがとう。大丈夫、僕は元気だよ」

「あのねえ……いや、それも大事だけど」

「大丈夫だからさ。心配なのは分かるけど」

なにせ一人息子の旅立ちだ。これで心配しなかったら親としてどうなのかと思う。

朝御飯を食べ終え、リュックを背負う。

「それじゃあ、行ってきますー！」

「はい、行ってらっしゃい。……怪我には気を付けてね！」

さあいこう！ 新たなる冒険へ！

まず最初はアララギ博士の元でポケモンを貰いに行こう！

貰うポケモンは決まってる！

「アララ！ いらっしやい！ ブラック君だよ？ 待ってたわ！ さあ、どの子にする？ どの子にする!! 選んで！ さあさあさあ！ 草タイプのツタージャ？ 炎タイプのポカブ？ はたまた水タイプのミジユマル!! あなたは見た目的にどの子でも似合うわね！」



「ツ、ツタージャでお願いします」

博士、キャラが濃いんだけど……。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「タアブツ！」

「うぎゃあつ!!」

「ジャツ!!」

うそうそうそでしよ聞いてないよこんなに強いポケモンが一番道路に居るなんて！  
てかタブンネがこんなに強いとか聞いてないっ！

僕の知ってるタブンネはもつとピンク色で優しくて回復してくれて 「タツ  
ブウウウツ！」 うわあつ！

「ツタージャ、『つるのむち』！」

「ジャアツ！」

ツタージャが懸命に攻撃してくれてるけど、全然効いてないってかなんでこのタブン  
ネ僕ばっかり狙ってくるの!?

「タアーブウーン……ッ」

また来る。タブンネの『すてみタツクル』が……！

「ネッ！」

「うわあっ！」ビリッ

リュックが破かれて中身が！

と、タブンネが動きを止める。

「……チッ」

「待って今舌打ちしたよね絶対したよね!？」

「タブウ？」

あ、あ？ みたいな感じで睨まれる。

ああ、タブンネのイメージがガンガン崩れてく……。

「タブ。タアブン」

「え、何？」

タブンネが何かを渡してくる。

それは朝、突然に現れた胡散臭い手紙だった。

「タブ」

「読めって？」





「タブツ♪」

「今更可愛いポケモン気取ってんじゃねーよ!? お前の本性とつくに知ってつから!」

「……チツ」

聞こえてるから……はあ。

いつの間にか握っていたモンスターボールをタブンネに押し付ける。

「ほい、ゲットだぜ。……さあて、行きますか。ポケモンの世界へ」

「タブツ……?」

あ、展開に付いてこれてない? ごめんなツタージヤ。

手の中にある手紙を最後にチラツと見る。

「ふん、いらねえや」

捨てる。ポイ捨てるな? 知ったこつちやないね。

手紙が風に吹かれ、カサリと最後の文面を見せる。  
『それでは、お主の旅がより良きものになることを願っておるぞ。』

## ポケモン「一周年」の旅〜UA25000記念〜

『ブルーールだよ!』

「ブルーールっさい。メイコよ」

《レナです》

神じゃ……って何故わしだけかつこで括って無いのじゃ?

「メタい話するからよ」

理由になつておらん!?

《まあまあ。と、言うわけでサブタイトル通りです》

「適当ねえ」

『で、何話すの?』

メタい話じゃろ?

「そうよ。んじやまずはブルーールから」

《ブルーールさんは……と、その前に。こういう小説のネタってそもそもどうやって出来る  
と思いますか?》

「ん? まあ普通はテレビなりゲームなりで “これがこうだったら面白そうだな” って

「思ってた……みたいな感じでしょ？」

《ですよね。でも、投稿者は自分の妄想から始まるみたいです》

その妄想の始まりはなんじゃの？

《二次創作以外は夢らしいです。二次創作ではその話のルール内で『最強』とは何か……かららしいですけど》

『つまり、僕は最強？』

「つてことになるわね。……まあ伝説には勝てなさそうだけ」

グレーキュレムは別でいいと思うのじゃが

『ううん。……それでも、負けは負けだよ』

《ひ、ひきわけですよ！》

『まあね……』

「話戻すわよ。この小説って確か、その妄想とは少し違ってるとはでしょ？」

《そうですね。旅の出だしから変わってるらしいです》

『そこから？』

ブルルは……フープのせいでイツシユ地方に移動したんじゃったか

《さあ、その頃は私居ませんでしたから。妄想ではパルキアによってシンオウに飛ばされるらしいです》



『えちよっ』

《あ、その前にカロス地方の各地を回って『そらをとぶ』『へんしん』『しんそく』ともう一つ技を『スケッチ』するはずだったらしいです》

「最後の一個は？」

《忘れました》

なんじゃ、つまらんのもう

「んなこと言ってるんじゃないわじじいが」

『まあまあ』

本来は……妄想ではブルの一人旅じゃったのか？

「そうね。レナやあたし<sup>メイコ</sup>どころかそういちろうさんも居なかったらしいわね」

《シンオウ地方のテンガン山の頂上で女トレーナーとバトルするらしいですけど、その程度ですね》

『……とはいえまあ、かなり前の話だからね』

「次はあたしかしらね」

色違いのペラップ、性格は横暴で横柄じゃ

「ああん？」

『悪意に満ちてるね……よく言えば分け隔てなく平等で、ムードメーカー？』

「ふうん？」

《姉御肌で良いんじゃないですか？》

「ほほう？」

何やら投稿者の他の作品に出ておるらしいの？

『そうなの!?! ずるい!』

「あー、あれは今のとこ似た設定の別人だから。……設定に無理は無いから同一人物にも出来るけど」

《あの作品に出てくる純香さんも、更に他の作品から名前だけ貰ったキャラですよね》

そんなオリジナル性が欠如しかけておる『まどマギ「助けない」少女』、チラシの裏で絶賛投稿中じゃ

「違うわよ。『まどマギ「助けない」少女』よ」

『えっと、何が違うの?』

《……あ、助けないを囲む括弧が違いますね》

『そこ!?!』

「大切よ、そこ」

まあ、宣伝もそこそこしておくぞい

「あんたが始めたんでしようが！」

《まったく……で、私ですか？》

『そうなるね。……レナさんかあ』

「まったくもって予期しない参入よね」

しかもメイコの物かと思われていたヒロインポジションを易々と奪っていきおった

《酷い言われよう!?!》

『それもこれも投稿者のその場書きのせいだね』

「そうねー。まったく、今は無理でしょうけど前は毎日投稿してたものねー」

そうじゃのう……懐かしいのう

《一話が1000と少しですからね……》

「これを見てて尚且つ自分も小説書いてみようかな……とか、沢山のUAが欲しい!

みたいな奴は短くて良いから毎日投稿すればいいわよ!」

『それとなるべく止めずに続けることだね』

そうすればこんな評価低めの小説でさえUA25000行くのじゃ

《これは『小説家になろう』の方でも使われている手です》

『文庫化されてる小説も最初は毎日投稿してるしね!』

「最終的には更新止まるけどね」

《——言っちゃ駄目ですよ》

「そうかしら」

小説家になろうの総計ランキング上位の小説の最終投稿日を見てみるといいぞい

『さて、これで1631文字だね』

《これでですか……》

「グレーキュレムとのバトルの時は5000行ってたんだからもつと行けるわよね？」

《無理じゃないですか？》

あらかじめ何を書いて欲しいか聞けば良かったのう

『そうだね……はあ』

「んじや、今回はこれで終わっておく？」

《では締めはブルルさん、お願いします》

『あ、うん。』

えっと、UA25000もありがとうございます。まだまだ下手くそな文章ですしバトル・背景・見た目の描写が苦手ですけど最後まで見てくれたら嬉しいですよ！』

## 「もう一人」の日常〜UA30000記念〜

俺は今日も学校へ行く。

「、――。――！」

つまらない。ただただ、つまらない。意味もなく、つまらない。

こういうときは過去の自分を思い出して、俺は何処で何をしているのかを想像するに限る。

――俺は自殺を未遂で終わらせた。

いや、怖じ気づいたとかそういう事じゃない。

どうにも飛び降りた先は車のボンネットだかなんだったからしく、全身打撲とか骨折とかしたものの一命を取り留めてしまった。

親からは怒られて、泣かれて、怒られた。

――俺<sup>両</sup>たちが何<sup>親</sup>か嫌なことでもしたか？ それとも、いじめでもされていたのか!?

まさか。二人とも良い両親だし、友達とも仲が良いよ。

——じゃあどうして飛び降りたの!?

夢を信じたからだよ。

——夢って何よ!

夢は、夢だよ。言葉通り、文字通りに。

死ねばポケモンの世界に行ける筈だったんだ。

——バカなの!?

とまあこんな風に、目が覚めてから色々面倒なことになったけど、今は落ち着いた。

……ただ。あの日から、俺の趣味が一つ消えた。

ポケモンが、輝かなくなった。つまらなくなつた。面白いのは面白いけれど、なんとなくやる気が無くなった。アニメを見る気も失せた。漫画もタイトルを眺める程度にとどまった。

もしかしたらそれは、大人になるにつれて自然となつていくものなのかもしれない。病院の先生は頭を打った後遺症だって言つてた。

或いは、夢に破れたからその八つ当たり……じゃなくて、うくん、意気消沈? なのかもしれない。だからその内にポケモンへのやる気は復活するかもしれない。

けど、そんな気はしない。なんとなくなんだけど俺がポケモンへ興味を持つことは、

二度と無いと思う。

きつと、あの飛び降りた時に俺の何かが……そう、俺の中のポケモンへの『思い』みたいなのが死んだんだと思う。

『思い』は死んで、ポケモンの世界へと行ったんだらう。

『思い』は、夢を延々と信じ続けたぐらい純真で。

『思い』は、躊躇いもなく死ねるほど無鉄砲で。

『思い』は、人生を輝かせるほどに素晴らしいもので。

それを無くしたとは思いたくない。だから俺は、想像をする。

もう一人の俺を。ポケモンの世界へ行った『思い』を。

どの世界へ飛んだのだろう。カントー、ジョウト、ホウエンにシンオウ。イツシユシリーズかも。それとも……カロスが一番可能性があるかな。それとも現実こっちより一歩先にアローラかな？

ダブルが好きだから、きつと最初のパートナーはダブルだね。……いやでも、それだと色々辛いかな。もしかしたら自分自身がダブルになったりして——

キーンコーンカーンコーン

鐘の音で現実に戻される。

「———」

「きりーっ！」

……はあー、つまんない。つまなくても俺は生きていかなきゃいけない。きつと楽しんでるであろう『思い』の為に。楽しんでることを知っているのは、きつと俺だけなんだから。

俺は、明日は学校へ行かない。

休日だから。



## 本編

## プロローグ〈夢〉

ふと気づくと草原に立っていた。

辺り一面、草が風に揺れていた。

見たことのない花が生えていた。

知らない動物が走っていた。

未知の鳥が飛んでいた。

あまりに美しい世界に鳥肌がたった。

強い風が吹いた。

何かに引き寄せられるかのように歩き出した。

草原の端に着いた。

ダ○ブルドアのようなおじいさんが立っていた。

足元には、ピカチュウがいてこつちを見ていた。

「君は選ばれた。」

おじいさんはそう喋り出した。

「君の十二歳の誕生日に七階より高い建物から身を投げろ。」

そう言った。

何故？と聞き返した：はずだ。よく覚えていない。

そのおじいさんは

「そうすれば、この素晴らしい世界に：ポケモンの世界に転生させてやろう。」

そう言った。

わかった!!と叫んだところで目が覚めた。

俺が三歳のときに見た夢だ。

恥ずかしながら、その日はお漏らしをしていた。

この夢は今でもあまりに不自然過ぎるほどはつきりと覚えている。

草の匂い、おじいさんの深い海から響いてくるような声、澄んだ空。

今だからわかるけど、あの動物はルクシオだった。あの植物はチェリムだろう。あの鳥はムクバードのはずだ。(ピカチュウは三歳のときにはすでに知っていた)

あのおじいさんはきつと神様なのだろう。それも、ポケモンの世界で一番偉い。となるときつと彼は：いや、今考えることではないな。話を戻そう。

当時、親にこの事を話したが、相手にされなかった。

ただ、自殺は絶つつつ対にするなど言われた。

小学校で友達にも話してみた。

みんなバカにして信じてくれなかった。

それから他人にこの夢のことは話さなくなった。

ただ、一度も忘れたことはなかった。

転生のためにポケモンのことはあらかた覚えた。

ゲームも全てのカセットをやった。

アニメも全部見た。

映画も以下同文。

転生ものの小説もたくさん読み込んだ。

小説にはバットエンドのものもあったが、きつと大丈夫。根拠はないがそう思った。

準備は万端だ。両親への遺言は手紙に書いて残しておいた。周囲に人影はない。一

応、学校の宿題も終わらせてある。

ふと、本当にただの夢だったらしに損じやあないかという考えが頭をよぎった。定期的におきる思考だ。

だが、今更後戻りはできない。それに、あの夢のリアリティーが本当だとささやいて  
いる。不安は頭から振り払う。

今日は十二歳の誕生日。

20XX年7月16日、俺は、いまから、アパートの十階から、  
空へ飛ぶ

さようなら、この世界！

こんにちは、ポケモンの世界！

そして、ひどく強い衝撃が来て意識はなくなつた。

## 転生準備く特権と出演最後？のおじいさんく

「まさか本当に飛び降りるとは…。」

ん…誰だ…？

「起きたかの？まあ、ここでは『気がついた』と言うべきじゃが。」

あ、おじいさん。つてことは？

「その通り。ここは神々の世界。」

へー。(棒)

「棒読みじゃのう…。」

そんなことより(。▽。 )。オミ。テンセイ!!テンセイ!!

「元気がいいのう。まあ、少し落ち着け。」

えー。

「おぬしには転生の際に幾つか特権をやろう。」

お、待ってましたお約束!!

「お約束じゃったかな…？まあよい。胡散臭い夢を信じ続けた信用にこたえて一つ、十階から飛び降りた勇気を讃えて一つ、もとの世界での人生を失わせたことのお詫びに一

つ、合計三つの特権を与えよう。」

ふーん、三つかあ…。とりあえず一つは決まっているよ。

「ほう、何かな?」

俺の好きなポケモンに、ドールブルに転生させてください!

「なに、ドールブルとな?…何故か、ときいていいかの?」

だって、どう考えても公式チートキャラなのに小説のネタにしている人がいないんだよ?!こんな絶対おかしいよ!

「小説…?…まあよい。」

よくない。おじいさんでもそれは許されない。というか、俺が許さない。ステータスの低さを技で補う、プレイヤーの頭脳が試されるポケモンのことを…

「ええと、言いたいことはまだありそうじゃが少し置いておこう。それよりも残りの二つの特権はどうするかの?」

…うーん。じゃあ、ポケモンの世界での基礎知識をちょうだい。知識不足のせいで変な目で見られる、とか嫌だからね。

「ふむ、よろしい。最後の一つはどうするかの?」

えーと、うーんと、んーと、むう…どうする?

「決まらないのなら、わしが決めてやってもよいぞ。その場合は前の世界でどれだけ良

いことをしたかによって内容のグレードが変わるかの。」

ならそれで。傲慢じゃないけどこの九年間、いい子にしてきたからね。俺じゃあ思い付かない位いい特権がもらえるはずだね!!

「そうか。では一応の確認じゃ。そなたはこれからポケモンの世界に転生する。特権は以下の三つ。

一つ、ドーブルに転生する。

一つ、必要な知識の自動インストール。

一つ、善の行為に比例する神様特権。

これでいいかの?」

必要な知識うんぬんが少し違う気がする。まあいいか。

それでいいです!

「それでは、お待ちかねの転生といこうかの。」

OK、OK、待ってました!

「では今一度眠るがいい。次に起きたとき、おぬしはポケモンの世界にいるであろう。」

うん、ありが…とう…、お…じい…ZZZZ

「…これでも神様なんじゃよ、少年よ。」

## 転生完了～卵マゴマゴ～

…んむう、朝？いや、それにしても暗いな。朝の…4時…前ぐらいかな？

…あれ？ポケモンの世界に転生するんじや？

…まさかの夢落ち!?!となるとここは…病院かな？飛び降りたしね、十階から。

…あー、お母さんとお父さんに怒られるな。

というか、何で生きているのやら。着地点に車か花壇でもあったのかな？飛ぶ前に確認したんだけどな。

…もう一度寝るか。

…寝れない。完全に目が覚めたな。頭が働いてる感がある。

じゃあ、目を開けるか。どうにも体が動かさないしね。起きるには必要な行動だよ  
ね。

…あれ、俺、目を開けた、よね？真つ暗なんですけど。試しに目をぱちぱちさせてみる。やっぱ真つ暗。違いが見つからないね。いまだに体も動かさないね。

…えーと。



……どこに閉じ込められてるんだよ、俺は！

『ココハ、タマゴノナカ。』

ほう、卵の中ねえ。……とりあえず二つほど突っ込んでいいか？……返事がない、お待ちかねのようだ。

(、、、) ナンデタマゴ…？

あと、(、、、) アナタダレデスカ…？

……返事がない、自分で考察しなければいけないようだ。

今の女性の声が本当だとしたら、転生は完了したらしい。なるほど、ポケモンは卵から生まれる。ポケモンに転生した俺は生まれるところからスタートした、ということか。

となると、もしかしなくても今の俺はドール!? やったぜ!! おじいさんありがとう！  
さて、あの声はなんなのかね。普通に考えるとあの特権の二番目だけだ。

『スコシチガウ。ワタシハコノセカイノキオク』

はあ、世界の記憶さんですか。厨二心をくすぐりますな。小六だけだね、俺。というかほとんど違わないですけど？……無視ですかそうですか。

とりあえずこの人？のことは特権二番さんと呼ぼう。思ってたより使い勝手が悪い特権だな。

そろそろ卵を割って外の世界を見てみますか。

とはいえ…体が動かないのにどうやって割るんだろうか？二番さん、教えてくれないんだよ？

『トニカクウゴイテクダサイ。ソノウチワレマス』

返事あり。ただ、適当すぎませんか？怒ったのかな？

謝らないよ？俺、悪いことしてないし？

まあ、今は二番さんの助言に従うしかないんだけど。

くグラグラ…ノビノビ…ガタガタ…ドカドカ…ピシッ！

うを、まぶしっ！やっどヒビが入ったよ。どれだけの時間がたったのか分からないから、永遠に暴れる事になるかと思ったよ。とりあえず一息ついてつと。

朝…なわけないか。勘だけど、お昼過ぎだな。

今気づいたけど、水のようなものが俺の周りを覆ってるな。

卵白のかわり、というか、卵白そのものか。呼吸出来ないはずなのに息苦しくないんだよね。ポケモンの不思議だね。

じゃあ、もう一踏ん張り、頑張りますか。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

「あなた、やっどヒビが入ったわ。」

「うん。残るはこの子だけだよな。」

「ええ。五人目よ。」

「他の四人が生まれても動かないから悪い方に考えていたが…大丈夫そうだな。」

「この子も元気だといいわね。」

「ああ。」

「あ、出てきたわよ!!」

## 両親くタマゴを割ってく

テーテーテー、テテテテツテテー！

タマゴがかえってドーブルおれがうまれた！

げほげほっ！と咳払いで気道に入っていた水を吐き出す。

いやー、疲れた!! 殻を割るのにいつたい何時間かかったのやらー！ここは、森のなか？  
どこの地方かな？

「ココハ、かろすチホウです。」

おお、カロス地方か！流石です、二番さん!!

と、目の前に二匹のドーブルがいるね。こっちでの両親かな？

「はじめまして、私があなたの母親の『シリル』よ。」

「あ、はじめまして。…ってドーブルがシャベツタアアア!?!」

「あら、あなたもドーブルでしょう？何を驚いているの？」

それもそうでした。ここは慌てずに対応するに限るね。

「い、いや、いい言ってみみみたかったただただけだしししし。」

「…この子、大丈夫か？おもにあたまが。」ヒソヒソ

「…大丈夫よ。…たぶん。」ヒソヒソ

…聞こえてますよ。まあ、その反応も仕方な…!?

「俺がお前の父親の『そういちろう』だ。…ん、なに青ざめている?」

いや、だって…、

「お父さん、右腕が…。」

お父さん  
ドーブルの右肘から先が…ない…!」

「ああ、これか。昔ミュウツーと戦ったときにちよつとな。」

「あのとときのあなたは素敵だったわよ♥」

はあ!? ミュウツー!?

「お父さん、…あなたいったい何者ですか?」

「ただのドーブルだよ。しかし…。」

「どうかしたの?」

え?…あ、しまった。生まれたばかりなのにミュウツーを知ってるのはおかしいな。  
どうしよう…?」

「おまえ、…転生者だな?」

「…え?」

なんで転生者って言葉が?

「ああ、なるほどねえ。どうりでタマゴからかえるのが遅かったわけだわ。」

ええ、ええ？

「訳が分からないという顔だな。まあ仕方ないけども。この世界では転生者なんてたくさんいるんだよ。」

「へえ。…そんなのおじいさんから聞いてない。」

「あのじじいはなあ…。」

「？なんの話かしら？」

「あれ？お母さんは転生者じゃないんですか？」

「私はここで生まれて育ったわ。あと、敬語じゃなくてもいいわよ？」

「じゃあ、お言葉に甘えて。ええと、お父さんは転生者なんだよね？」

「そうだ「あ、そうだわ！あなたの名前を決めなきゃ！」」

へえ、名前をつけるのか。てっきり全員『ダブル』なのかとおもってたよ。

……お父さん、しょんぼりしないで、ね？

「……それもそうだな。」

「そうねえ、男の子だから…。」

「待った。お前のネーミングセンスは酷いから俺が決める。」

「えー。」

どうやらお母さんのネーミングセンスが無いらしい。

「どんな感じに酷いの？」

「…お前の兄弟の名前が上から順に『カラ』、『キリ』、『クル』、『ケン』だ。」

「…性別は？」

「メス、メス、オス、オスだな。」

…そこまで酷いとは思えないけど？

「カラの名前の理由はなんだと思う？」

「え、えーと…、なんでなの？」

「今描いている絵にヤミカラスがいるからよ♥」

それは…その…。

「しかも、俺が止めなければ、『ケン』は『ケレ』になっていたぞ。」

カラキリクルケレか…。確かに酷い。ん、ということとは、

「…さすがに『コロ』は嫌だよ、お母さん？」

「えー。いいじゃない。」

さすがに恥ずかしいです。

「名前ぐらい自分で決めるよ。」

「ん？俺が決めてもいいんだぞ？というかもこの世界での名前は？」

「ううん、違うのがいい。自分で決めたい。」

「そう…それなら仕方ないわね。どうするの？」

理解ある親でよかったよ。うーん、ダブルだから…うん、そうだな。

「おれ…僕の名前は『ブール』。『ブール』です。」

「…それでいいのか？」

「うん！」

「そう？じゃあ、これからよろしくね、ブール。」

「よろしくお願ひします!!」



## 兄弟くそれと十αく

どうやら俺が生まれた場所はここらへんのダブル族専用の孵化場だったらしく、両親についていくとなかなか大きな家についた。スゲー、ツリーハウスかよ。

くくくくくくくくくくくく

前の世界では兄弟とかいかなかったからなー。兄弟がたくさんでいいなー。

とか思っていた時期が俺にもありました。

<sup>長女</sup>カラ「わーん、わーん、キリがきのみとったー!」

<sup>次女</sup>キリ「これわたしのきのみだもん!!」

<sup>長男</sup>クル「……。」ムシヤムシヤ

<sup>次男</sup>ケン「キリ姉ちゃん!!それはカラ姉ちゃんのぶんだよ!」

「あらあら、大変ね。」

「いや、お母さん?なんか喧嘩してるけど止めないの?」

「それは、」

「けんかは やめろー!ー!ー!ー!」

「お父さんの役目よ♥」

「あ、はい。」

怒ったお父さんこえー。迫力がやべー。兄弟たちみんな黙っちゃったよ。

「ハイハイみんな、最後の弟よー。ブルって言う名前よー。仲良くしなさいよ?」

え、そんな感じ? 転校生かよ。

「えーと、ブルです。よろしくね、お兄ちゃん、お姉ちゃん。」

まず、さつきまで大泣きしていたダブルが自己紹介してきた。

「うう…ぐすつ。私はカラよ。これでも長女。よろしくね、ブル。」

「とりあえず泣き止んでね。よろしく、カラお姉ちゃん。」

妹にいじめられるって長女としてどうなの? まあ、優しそうでよかったよ。

「ふんつ。わたしが一番偉いんだからね!」

やけに上から目線なダブルが話しかけてきた。

「ええと、名前は何て言うの?…お姉ちゃん。」

「それぐらい分かるでしょ! わたしはキリよ!」

分かるかつ!! なんなのこいつ!?

…いやまあ、予想はついてたけど。

「……よろしくね、キリお姉ちゃん。」

「ふんつ。いい? わたしは兄弟のなかで一番強いの! わたしを敬いつつ、せいぜい二番

争いでもすればいいわ！」

イラッ ……いや、まだだ。こっちの技は『スケッチ』しかない。落ち着こう。

「……あげる。」

「え？」

ブルルはオレンの実をもらった。

ありがたいけど（実はお腹減ってた）、なんで？

「たぶん元氣出せて事だと思っうよ。」

「そうなの？ええと、クルお兄ちゃん？」

「違う違う。僕はケン。クル兄ちゃんは、ブルルにきのみを渡したほうだよ。お礼は言

いなよ？」

「うん。ありがとう、クルお兄ちゃん！」

「……。」

「あはは、どういたしましてだつて。」

「…何言ってるのか分かるの？」

「なんとなくだけどね。双子みたいなものだから。」

「ふーん。」

泣き虫の長女、生意気な次女、無口な長男、おしゃべりな次男つてところかな？

○○○○○○○○○○

「自己紹介はすんだか？それじゃあカラ、ブルにドーブル族の縄張りを案内してくれ。」

「うん、分かった。行こう、ブル。」

「あ、うん。」

カラお姉ちゃんと一緒に家から出る。木々の匂いがすごいね。

「じゃあまずは広場に行きましょう。」

「お姉ちゃん。」

「なに？ブル。」

「広場って何するところなの？」

公園みたいに遊ぶところなのかな？

「広場にはいつもたくさんドーブルのみんながいて絵とか音楽とかの練習をしたり、バトルの練習したりするの。」

「へー。」

年中無休で入会費無料の塾みたいなものか。：他の例えが思いつかなかつたよ。

家を出てから十五分ぐらいで件の広場についた。

「おー！広い!!」

「でしょ！私も初めて見たときはびっくりしたわ。」

東京ドームより広いのでは？というぐらい広い広場にたくさんのだーブルたちがいるんなことをしている。

あるだーブルはこの広場の絵を描いている。

またあるだーブルたちは一匹のだーブル（おそらく先生）を囲んで座っている。青空教室かね。

カラお姉ちゃんのとに続いて歩いていくと、年をとっただーブルに声をかけられた。

「やあ、カラちゃん。こっちの子は？」

「あ、長老!!この子は一番下の弟のブルです。ついさつき生まれました。ブル、この人はだーブル族の長老のドブドブさんだよ。」

人のことは言えないかもだけど、ドブドブって変な名前だね。

「はじめまして、ドブドブさん。ブルっています。」

「ふむ、よろしくの。しかし、ブル、か…。その名前は誰がつけたんじゃ？」

「え、えーと、」

自分で決めましたとかいえやしない、いえやしないよ。

「…………お父さんです。」

「そうか。しかし、そういちろうの子だからかの？生まれただけにしてはバカに礼儀正しいが。」

ヤベツ。どうごまかすか。…むしろ正直にうちあけるか？

『お父さんの子だから』ってどういう意味なの？長老。」

ナー…イスフオロー、カラお姉ちゃん!!!

「うむ、そういちろう…君たちの父親も生まれたばかりなのに礼儀たたく、また、自分よりも大きな相手を打ち負かしたりするような子での。よく言えば元気な天才、悪く言えば…突飛だったんじゃよ。」

「へー。お母さんによく怒られてるあのお父さんが突飛な子、ねえ。」

…：そういえばお父さんの特権の内容をきいてないや。

あと特権で思い出したけど俺の三つ目の特権の内容は結局どうなったんだろう？

二番さん、教えて！…返事が（ry

く〇く〇く〇く〇く〇く

長老と別れて広場から出たところで、気になったことをカラお姉ちゃんに聞いてみた。

「お姉ちゃん、さつきは聞かなかったけどお父さんってそんなによくお母さんに怒られてるの？」

「うん。結構よく怒られてるよ。」

「ふーん。」

「お父さんは何かに集中すると周りが見えなくなるからね。」

そうやって喋りながら歩いていると向こうからカラお姉ちゃんが歩いてきた。…え？今俺の手を引いているのはカラお姉ちゃんだ…ね。

…ありのまま今起きていることを（ry

「え、私？…ああ、メタヤンさんか。」

「え、私？…ああ、メタヤンさんか。」

二人のカラお姉ちゃんが同時に言う。

「メタヤンさん、真似しないでください。」

「メタヤンさん、真似しないでください。」

また同時に言う。と、向こうからきたカラお姉ちゃんが笑い出した。

「あははは！その子は末っ子？生まれたばかり？あははは！！キョトンとして可愛いねえ！あはははははは！！」

「いいから『へんしん』を解いてくださいよ、メタヤンさん。ブルが戸惑っているじゃないですか！」

「あははははは。…ふー。ごめんごめん。つい、ね。」

向こうからきたカラお姉ちゃんがひかりでした。

「え、え？」

光が収まったあとにいたのは一匹のメタモンだった。

「メタ、メタメタ、メタ。」

え？何て言ってるんだ？というか何で理解出来ないんだ？さっきまで解ってたのに。  
…何かを待ってるな。じゃあ、

「メタメタ、メタ。」

「メタ？」

「え？」

違ったらしい。じゃあ普通に。

「あー、ブルっついていいます。よろしく、メタやんさん。」

「メタメタ、メターメタメタ。」

うーん

「…カラお姉ちゃん、メタやんさんは何て言ってるの？」ヒソヒソ

『ポケモンバトルの練習に来るのを待ってるぜ』っていったのよ。…どうしたの？さっきまでは普通に話せてたのに。」ヒソヒソ

「メタメタ？」



「ああ、えーと、ブルーがメタヤんさんの言葉が解らないみたいで…。」

ああ、カラお姉ちゃん、そんなすぐにばらさないで。声を潜めた意味が…。

「メタ？ン〜。メタ！」

メタヤんさんが何かに気がついたようにこつちを見ると、ひかりはじめた。そこそこ眩しいから目を背けた。

光が収まったとき、目の前にいたのは他ならぬ自分自身だった。自分が目の前にいるのはなかなか落ち着かない。

「これで分かるかな？」

「あ、はい。分かります。何でだろう？」

「たまにいるんだわ、自分と同じ種族じゃないと言葉が分からないやつ。ブルー、お前もその口なんだろう。」

そうなのか…。これじゃあ旅をしにくいかな？

旅をするかは分からないけども。

「まあ、そういうことだ。俺とバトルの練習をしたきや広場にこいよ。いつでもまってるぜ。」

「はー!!」

## マーク～転生者のなごり～

メタモンのメタやんさんと別れてから十数分。

木々にいろんな緑色のマークがところせましと描かれている場所に来た。木がブロッコリーのようになってる!?

「ここまでがダブル族の縄張り。ダブル族のマークはあの真ん中の『万年筆に花』だよー!」

「え、どれ?…あ、これか!」

周りのマークよりも一回り大きなマークが目の前に描かれている。

何かの花をペン万年筆で描いているようなマークだ。

「それとお父さんのマークは、えーと。．．あつた!これこれ!」

あ、これ社会の歴史の授業で調べたやつだ!確か、えーと。

「お父さんが言うには『これは由緒正しいマーク』で『六紋銭』って言うらしいの。」

そうそう、真田六紋銭だ。でも、知らないふりをした方がいいんだろうな。

「へー。」

「お母さんはそれを信じてるけど、私はたんに難しいマークを描くのが面倒だっただけ

だと思ってるわ。」

「あー、なるほど。確かにこれは簡単に描けるね。」

丸を六個描けば終わりだしね。他のマークはすごいごちゃごちゃしてるのもあるの  
にね。

「お母さんのマークはこの後ろにあるの。」

というので木の後ろにまわってみた。

「…うわ、木の後ろもまっ緑。」

「まっ緑？」

「一面真っ白って言うでしょ？この木は緑だからまっ緑。…おかしいかな？」

「おかしいと思うわ。」

即答されました。

「そうかな…。」

「そんなことより、これ、これがお母さんのマークの『三日月にシチュー』よ。」

おお、細かい！そしてうまい！

「お姉ちゃん、これ、誰が描いたの？」

「もちろん、お母さんよ。上手でしょ！」

「うん！」

「私たちも大人になったらここに自分のマークをつけることができるの。早く大人になりたいわ。」

「そうだね、お姉ちゃん。」

~~~~~

「こほん、この木より先は大人しか行けないの。」

「えー！なんで!?!」

何となく分かるけどね。

「なぜならば、この先には七番道路っていうところにいるからよ！七番道路には私たちを捕まえようとする怖いポケモンがいるらしいの！」

「え、なにそれ怖い。」

ポケモントレーナーならわかるけど、ポケモン？

「そのポケモンに捕まったがさいご、『パソコンのボックス』っていうところに一生入れられるらしいわ！」

「ワー、スゴクコワイ」(棒)

ポケモンではなくポケモン^にトレーナー^ののことでした。

「でしょー！」

「でも、どうやってその事を知ったの？」

「その事？」

「だって捕まったら一生、その、ボックスに入れられるんでしょ？」

「ああ、それは、偶然逃げられた人がいるの。その人が教えてくれたの。珍しい技を『スケッチ』^{ドール}していて強いんだよ！」

「へー、珍しい技ねえ。」

「なんだろうね？ 珍しいって言うぐらいだから『あくうせつだん』みたいな伝説のポケモン専用技かな？」

「それじゃあ、そろそろ帰ろうか、ブルル。」

「うん、カラお姉ちゃん。」

く〇く〇く〇く〇く〇く

家にはお昼頃についた。もうお腹がペコペコだ。

「ただいまー。」

「あ、お姉ちゃんとブルルが帰ってきたよー！」

「あら、お帰りなさい。今日のご飯はキノコシチューよー！」

父の右手～大事件のお話～

ブ「う、うまい……！」

シ「そう？ふふ、ブルも速く食べないとクルがゼーンぶ食べちゃうわよ？」

ク「……ムシヤムシヤ……おかわり。」

ブ「はや!？」

ケ「うわ、ぼくこのキノコ苦手……。キリ姉ちゃん、食べる?」

キ「何でわたしがあんたのぶんを食べなきゃいけないのよ。クルにでもあげれば?」

そ「こら、ケン。好き嫌いはいかんぞ。お母さんが作ったキノコシチューなんだ。どのキノコもうまいに決まってる。」

一家団らんとはこのことだね。楽しい夕飯だよ。

お母さんが作ったキノコシチューは凄くおいしくていくらでも食べられそう。

ケ「あ、お父さん、こぼしたよ。」

そ「おっと。イヤー左手での食事も馴れたはずなんだがな? たまに失敗しちゃうんだ。」

ク「……ムシヤムシヤ」ジー

そ「クル、そんな目で見ないでくれ。気を付けるから。」

そういうえばお父さんの右肘から先無いんだった。うまく隠してるから忘れがちなんだよね。…でも、

ブ「お父さん、その右肘ミュウツにやられたって聞いたけど。」

カ「え、ミュウツ？ 私そんなの初耳だけど。」

そ「ん、お前たちには話してなかったかな？」

ケ「うん、『昔、ちよつとな。』としかいわれてないよ。」

ほえ？ お父さん、あなた俺にだけひーきしてるのかな？ かな？

シ「あなた、話してあげたら？ 私とあなたの出会いの話を。」

そ「そんなこつぱずかしいもんじゃあねえよ。長くなるからシチューを食い終わってからな。」

キ「わかったわ!!クル、あなたの全力を見せるのよ！」ピシッ

ク「わかった…」バクバク

クルお兄ちゃんの活躍により、米俵二個分の量のキノコシチューは二十分後には無くなった。

く〇く〇く〇く〇く〇く

おれたち兄弟とお父さんそういちろうは食器をすべて片付けた机を囲むように座った。

そ「それじゃあ、話すか。あれは、二、三年前のことだな。

あの頃はとある理由で各地を旅していたんだが、そう、あのときはたまたま近くに来たから寄っただけだったんだ。」

——数年前 そういちろうの家——

「ふー。まさか顔を出したら教師にされるとは。長老め、覚えとけよ…!

…しかしなんだかんだでここも故郷なんだな。すごく落ち着く。」

その時ドーンだかバーンだか、音が聴こえたんだ。

「ん、何か騒がしいな? ……なんだ? 嫌な予感がプンプンするぞ? これは急いだ方がいいな。音は…広場のほうか…?」

全力で走ったね。こういうときの『嫌な予感』つてのはよく当たるんだ。最悪なことにな、な、

く〇く〇く〇く〇く〇く

「な、なんなんだ、これは…?」

そこにあつたのは…荒れ果てた広場だった。今はないが、真ん中の神木も倒れて…いや、倒されていた。

倒れた神木の上にピンク色で、俺たちと同じかそれより長い尻尾を持った人が、いや

人型のポケモンが 浮いていた。そいつの両手両足と首にはまるで拘束具のような機械をつけていた。目は血走っていて他のどんなポケモンよりも恐ろしい目つきをしていた。

そいつの周りには力自慢の仲間たちが全員倒れ伏していた。ただ、戦う術すべを持たない女子供たちがそいつの放つ強大な『プレッシャー』の前に逃げることもできず、ただ震えていた。

そいつは今にも一人のドローブルを襲おうとしていた。俺は飛び出していたよ。

幸いなことに俺は……特技のようなものを持っていて、戦いが始まってから二十秒の間は、その、…無敵なんだ。——なんだその目は。本当のことだぞ？ じゃなければ、俺はそいつに…ミュウツーにころされていただろう。それも、近づくこともできずに、な。

「ウオオオオオオ!!!!」

俺はまず『マツハパンチ』をうった。ミュウツーは…かわすどころかガード、いや、動くこともしなかったよ。ただ、こつちをみただけだった。

「オワツ!!? ツトウ!」

それだけなのに、俺は吹き飛びかけた。『戦闘モード』で『マツハパンチ』をうってなかつたら確実に吹っ飛んでたな。

とにかくミュウツーに『マツハパンチ』は当たった。威力はほとんどなくなっていたけど、近づくことが目的だったからまあ、よかった。そこから『10まんボルト』二発を顔面に当てて『インフライト』で追撃、『ブレイズキック』を当てつつ距離をとった。相当相性が悪くない限り、このコンボをくらって耐えた野生のポケモンはいなかった。今回も倒したと思った。それが油断に繋がったんだ。

「やったか?……ナニ!?!」

ミュウツーはいなかった。否、居なくなつたように見えた。ミュウツーは、俺が気を緩めたその一瞬で俺の後ろに周っていた。俺は『はどうだん』をくらった。効果はバツグンだった。戦闘を始めて二十一秒のことだった。俺は今度こそぶつ飛んで倒れた神木に叩きつけられた。それだけで動けなくなつた。

ミュウツーは動けない俺にも手を抜かなかつた。『サイコキネシス』で滅多打ちにしてきた。右足は折れた。左足はあり得ない方向に曲がっていた。右腕は強烈に引き裂かれた。左腕は複雑骨折だ。尻尾が残っているのが不思議だ。

「や、やめてえ!!」

襲われそうになっていたダブルの女の子が俺をかばいに来た。やめろばか、俺のことはいから逃げろ!!、と言ったんだが、肺がつぶれたせいかもしれないかそれとも無視したか、その子は逃げなかった。それどころかミュウツーに向かって『やどりぎのタネ』を投げつ

けたんだ。

ミュウツーは『バリアー』で防ぎつつこちらに歩いてきた。その子は諦めずに『キノコのほうし』を吹き付けた。

ミュウツーは『サイコネシス』でほうしをすべて跳ね返した。『キノコのほうし』をくらった俺とその子はそのまま寝てしまったんだ。

〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

「……」

目が覚めたときミュウツーはいなかった。代わりにメタモンとポロポロのカビゴンがいた。赤い服を着て、赤い帽子をかぶったポケモントレーナーもいた。ドープルの仲間たちは広場の修理をしていた。俺は…助かった。あの勇敢な女の子は隣で寝ていた。怪我がないようだった。

「……」

ドープルのなかで一番重症だったのは俺だった。重症ですんでよかったとメタモンは、メタヤんさんは言った。

何人もの仲間たちが、二度と会えなくなつた。

〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

そ「……これが右肘から先を無くすことになつた『ミュウツー襲撃事件』とあらまし

だ。」

「……………」

シ「ついでに言えば、そのときに助けてもらった女の子は私のことですよ。」

ブ「・・・よくたすかったね。」

キ「ミュウツ―ってそんなに強いのか？」

そ「俺と戦ってみるか？技構成は変えたけどお前らなんかには負けんぞ？」

キ「ムムム。」

シ「…あらあら、もうこんな時間。みんなは寝なさい。」

カ「うう……、私一人じゃ寝れないよ。」

ク「……………」コクコク

ケ「僕達もだよ、カラ姉ちゃん。」

カ「じゃあ一緒に寝よう？キリも一緒に寝る？」

キ「…う。……ふん、わたしはこんな程度じゃ怖く無いわ。一人で寝れるもん!! (震

え声)

ブ「震えてるじゃん。みんなと一緒に寝よう？」

キ「むう、大丈夫だもん!!」

カ「でも私は怖いわ。お願いだから一緒に寝て？」

キ「・・・そこまで言うなら。一緒に寝てもいいわ。」

結局、兄弟みんなで寝た。

〽〽〽〽〽〽〽〽〽

シ「今日は寝かさないわ。」

そ「えっ」

ゆめうつつ～おじいさんリターンズ～

「おお、久しぶりじゃの。元気かの？」

「ポケモンワールドはどうじゃ？」

「え、まだ生まれてから一日しかたっていない？」

「おかしいのう、転生させてから少なくとも三日はたっているはずなんじゃが」

「なに、卵から出れなかった？」

「はっはっはww」

「おう、すまんすまん」

「ん？」

「ああ、何で夢に出てきたか？」

「三つ目の特権の事を教えにきたのじゃよ」

「ズバリ、『身体障害と引き換えに同時に使える技上限の解放』というものじゃ」

「分かりにくい？」

「詳しく教えるから、まあ待て」

「まず身体障害のことじゃが、お主の場合シッポが動かさないはずじゃ」

「なぜデメリットがあるか？」

「お主の『いいポイント』的なものが足りんかったんじや」

「・・・そんな顔しても無駄じや。自業自得というやつじやよ」

「次に、『同時に使える技上限の解放』じや」

「簡単にいえば技を四つ以上覚えられるということじや」

「そうかそうか嬉しいか」

「…チート？」

「違う違う、特権じやよ？」

「こつちの話？ならいいのじやが」

「聞きたいことがある？なんじや？」

「ミュウツーが強すぎる気がする？」

「よくわからんがそのポケモン、伝説のポケモンなんじやろ？」

「伊達や見栄で伝説を名乗れるわけじやあない」

「としかいえないのう」

「ただ、転生者は伝説や幻と互角以上に戦える」

「・・・やもしれん」

「『選ばれた』転生者のお主ならなおさらじや」

「まあ、二つ目の特権の『世界の記憶』にきいた方が詳しいかもしれん」

「二番さん？」

「お主……名前のセンス無いの〜」

「もつといい名前をつけられるじゃろうに」

「え、」

「そそそそれはの、知識のアップデートじゃつまらないだろうと思ったわしの心意気じゃなくて心掛けというかなんというか」

「……はい、間違えました」

「わしだつて間違えることはあるんじゃ」

「ゆるせ、お主」

「……いたちネタはやめろ？」

「さーて、なんのことかのー？」 ヒューヒュー

「冗談じゃ。そんな目で見んでくれ。謝るから」

「何でお主を『選んだ』か？」

「それはの……」

「くじ引きじゃ」

「正確には違うがの。似たようなもんじゃ」

「もうこんな時間か」

「まだ聞きたいことがある？」

「二番さんに聞けばよからう」

「転生者が多いのは、わしが担当だからじゃ」

「じゃあの」

くくくくくくくくくく

起きてく。ブル、朝よ。．．はやく

キ「どきなきーい!!!」

ブ「ウヒャア!!」

シ「おはよう、ねぼすけさん♥」

ク「……おはよう。」

ケ「ほらほら、顔洗ったら？ブル。」

ブ「……いまは、ここが、俺の家なんだ。」ボソツ

ケ「何かあった？」

ブ「何でもないよ、ケンお兄ちゃん!!」

地方ワープ（上） ～バトル練習～

「……………(ど)？二番さん。」

「ココハいつしゆチホウデス」

なるほど流石二番さん。頼りになる。

え、なんで俺が^{バトル}イツシユ地方にいるか？

説明するには時間をさかのぼる必要があるね。

具体的には朝ごはんの時から。

くくくくくくくくくく

そ「今日はバトルの練習をする。」

朝ごはんのとき、お父さんが突然そういった。

カ「えっ」

キ「やったー！」

ク「……………」

ケ「うえー、マジか。」

ブ「おー！……………」

……なんか喜んでるのは俺とキリオ姉ちゃんだけみたい。…訂正、クルお兄ちゃんもこつそりガッツポーズしてる。

シ「あら、でもブルは産まれたばかりよ？」

む、確かに。

そ「ブルなら大丈夫だ。たぶん。」

シ「そう。それならいいのだけど。」

え、いいの？『たぶん』っていつてるけど？

カ「わ、私は遠慮するわ。」

ケ「なら僕も。またキリ姉ちゃんにボコボコにされたくはないな。」

キ「ふん、カラ姉はともかくケン！そんなだとクルどころかブルにも負けちゃう

わよ？」

ケ「ドーブルの強さはバトルだけでは決まらないってドブドブ長老もいった。」

ああ、ケンお兄ちゃん、キリオ姉ちゃんに負けたことがあるのか。そりやあやりたく

ないだろうな。

そ「いいや、ブル含め全員こい！あ、お母さんはどうする？」

シ「うーん。じゃあ後から行くわ。美味しいお昼ごはんをつくってきてあげる。」

そ「そうか。…みんな食べ終わったな？」

「[[[[うんー]]]]」

そ「では広場にいくぞ！」

く〇く〇く〇く〇く〇く

メタヤン「メおメおメそうメいメちメろメう!!」

そ「おお、メタヤン！」

メ「メどメうメしメたメと、メーた」

メタヤンさんの体がひかりはじめ、ドおー父ブルさんに『へんしん』した。

そ「え、なんでおれに『へんしん』したんだよ。」

メ「いや、そのブル坊にも聞かせないと思って思ってたな。」

そ「へ?・・・ああ、そういうことか。」

ケ「どういうこと?」

ブ「ああああとで教えてあああげるから！」

∴いやなんでこんなに慌てるんだよ、俺。

そ「ちやうどいいや、メタヤン、こいつらと戦ってみてくれないか?」

メ「おう、いいぜ!!それがここでのおれのやくめさ!だからやる?」

お、初バトルか?

ブ「じゃあぼk

キ「はいはいはい！わたし、わたしがやる!!」

ク「……」ハイ!

メ「よし、ならキリ、クル、二人でかかってこい！」

・・・Σ(。D。)エエ!!

ブ「ぼくm

そ「じゃあ残りの三人は『スケッチ』の極意を教えてやろう！」

ブ「(・ω・) ショボン」

カ「ブル、その、気をおとさないで？」

ケ「大丈夫だよ、あとで嫌になるほどやらされるから。」

そうか、ならいいんだけど。

そ「いいか? 『スケッチ』はドールが唯一使える技にしてあらゆる可能性を秘める技だ。『スケッチ』を極めることはそのままドールを極めるといってもいい。

『スケッチ』は相手の技をコピーするという効果を持つ。つまり、かつこいい技、使いやすい技を自由に覚えられるんだ。」

少し誇張がある気がするけど、じつに分かりやすい『スケッチ』の説明だね。

そ「しかし！そんなのは教えなくても分かる！生まれたばかりのブルでも使える！

『スケッチ』の本質はその観察力にある！」

え、どういふことだ？

そ「どういふことだ？という顔をしてるな。まず『スケッチ』の仕方から説明するが、

一、相手をよく観る

二、スケッチした技を叫ぶ

だけだ！」

カ「え、それだけ？」

そ「そうだ。ただ、この相手をよく観る、というのが大変なんだ。考えてもみる？相手はこつちを攻撃してきているんだぞ？それをかわしつつくらくらいつつそれでも相手を
見続ける必要があるんだ。」

ケ「うへえ、それは辛い。」

そ「だろう？だからそれを教えてないのに自力で『たいあたり』を『スケッチ』した
キリとクルはなかなかのバトルセンスがあるんだ。」

ふーん。つて

ブ「え!?!キリお姉ちゃんとクルお兄ちゃんはもう技を覚えているの!?!」

そ「ああ、二人とも『たいあたり』を『スケッチ』しているぞ。」

だからメタやんさんはあの二人を選んだのか。なるほど。

そ「お、ちょうどあつちも終わったようだな。」

みると、キリお姉ちゃんとクルお兄ちゃんがばくはつしていた。・・・は？

メ「いやー、流石そういちろう！『マグネットボム』なんて始めて使ったぜ！」

カ「め、メタヤンさん！キリとクルは大丈夫なんですか!?!」

メ「大丈夫だ、問題ない。その辺の手加減はちやんとしているさ。」

ブ「ちよ、それはフラグ。」

メ「あ、痙攣してるな。」

……それはまずいのでは？

くくくくくくくくくくく

そ「カラ、ケン、ブル、大丈夫だ。二人とも生きてる。」

それはよかった。どう考えても瀕死だろうけど。

メ「ほれ、お前らまとめて相手してやる。」

ピカーーと体がひかりはじめ、メタヤンさんはメタモンに戻った。

ケ「あれ？『へんしん』といちやうの？」

メ「メタ、あああ おまえらにはこれでいいんだメタメタメタメタ。」

カ「でもお互いに何もできなくなる気がするけど。」

メ「いいいったらいいのメメメメメメ！」

カ「そこまで言うなら気にしませんけど…。」

・ ・ ・ 話についていけない。

何て言ってるんだよ!! 分からないんだよ!! 何が『気にしませんけど』だよすごく気になるんだよ!! どうすりゃいいんだよ!!

そ「それじゃあ、メタやんVS三人! バトルスタート!!」

エエエエエエ(ㄟ ㄩ) エエエエエエ

地方ワープ（中）　　～初バトル～

メ「メメメータメタメタ？」

メタやんは　なにか　はなしかけてきた!!!

ブ「……カラお姉ちゃん、通訳お願いします。」

カ「『何にへんしんしてほしい?』だつて。」

ケ「じゃあどうせ負けるんだからミュウツーになつてよ!!」

ブ「ちよ、ケンお兄ちゃんそれは、」

限りなくまずいのでは!?

メ「メ!?!メタ、メメメメ……。」

ほら、メタやんさんも困つてる。

メ「……メタ!メーター。」

カ「……ええと、ブルー?」

ブ「なに、カラお姉ちゃん。」

カ「……もしものときは逃げてね?」

ブ「……ハイ?」

メタヤんさんの体がひかりはじめ、っとそうだった！

ブル^俺ルは メタヤんを じっくりかんさつした!!!

メ「メ……メメタア。」

ケ「お、おお、おお……。」

カ「ひい、う、ううう。」

目の前にはあのミュウツーが立っていた。

たえ声がメタモンのもので恐ろしい。

カラお姉ちゃんもケンお兄ちゃんもプレッシャーにつぶされかけてる。

俺？とつくのとうに諦めてるよ。

ブ「ケンお兄ちゃん……だからいったのに。カラお姉ちゃん、泣いてる暇ないよ……!?!」

カラお姉ちゃんが突然吹き飛んだ!!!

メ「メメタア、メタメー？」

ケ「カラお姉ちゃん!」

そ「カラ、戦闘不能!」

うわお。これが……ポケモンバトル!

ブ「ケンお兄ちゃん!! カラお姉ちゃんをお願い!」

ケ「ブル!?!」

俺は二人の前に立つ。

カラお姉ちゃんをたおした技はおそらく、いや確実に『サイコキネシス』だ。
レベル差のせいが一撃でもくらはば確実にやられる威力がある。そのくせにガード不可能ときた。

・・・こつちは『スケッチ』しか覚えてない：

と おもっていたのか!!!

メ「メタ？」

ブ「いくぞ！『へんしん』!!!」

ブル俺は メタやんに へんしんした！

ケ「な、ブルが、ミユウツーに！」

おお、力がみなぎる・・・溢れる・・・！

今なら、何も怖くない!!勝てる!!

メ「まさか俺の『へんしん』を『スケッチ』しているとはなあ。」

ブ「生まれる前から決めてたので。」

メ「ふーん？まあ、このミュウツーは俺の大親友なんだな。お前よりかうまく使いなすさ。」

ブ「負けませんヤ「え、大親友!？」またか。」

メ「ああ、そうだがなにか？今はバトル中だぞ？」

メタヤんの サイコキネシス!!

ケン は たおれた!!

ブ「え、ええ〜！これ、練習ですよね!？」

メ「恨むならミュウツーになってほしいと言ったケンをうらめ。」

ブ「……ケンお兄ちゃん、あとでお仕置きね。」

ケ「無慈悲!!」

当然である。…なんだ、元気じゃん。

メ「で？かかってこないのか？」

ブ「いきますよ！はあっ！」

メ「無駄あ!!」

二人の『サイコキネシス』がぶつかり合う。その中心は空間が歪んでみえる。

空間の歪みが限界をこえたのかばくはつをおこす。

メ「やるな！」

ブ「当然！」

お互いに無傷。

二匹のミュウツーが向かい合っているすがたはどこか非現実的で、なにかひどく現実的である。

ブ「次はこつちから！」

ブルルからサイコキネシスがはなたれる。が、メタヤンはそれをあえてくろう。

ブ「なっ！」

メ『『へんしん』はポケモンのことをよく知らなけりや使いこなせないんだよ。』はど
うだん』!!」

メタヤンの右手から青い気の塊がはなたれる。

ブ「くっ！」

ブルルはそれを紙一重でかわす。

が、はどうだんはブーメランのように曲がり、ブルルの背中に着弾した。

ブ「うわあ!？」

メ『『はどうだん』は敵にあたるまでどこまでも追いかける。まだまだだな！』サイコ
キネシス』!!」

見えない歪みがブルーを襲う！が、

ブ「待っていた！『バリアー』!!」

ブルーの体を透明な幕が覆う。

ブルーは たおれた!!

「・・・あれえ？」

くくくくくくくくくくく

そ「確かに『バリアー』は物理の技に強くなるがな。残念ながら『サイコキネシス』は特殊の技だ。」

メ「惜しかったな。」

ブ「むううう。」

ケ「でもすごいじゃん!!おれもカラ姉ちゃんも一撃でやられたのにブルーは…ええと…もうちよつとだったじゃん！」

完全に頭に血がのぼってました。なんだよ俺のバカ!!ちよつと考えれば『サイコキネシス』は『バリアー』でガードできないってわかるだろ!!

シ「そうねえ。あれは『サイコキネシス』で相殺するほうが良かったわね？」

ブ「くそう。」

でもそうするところちも『サイコキネシス』のPPがなくなるんだよなー。あ、『はど

うだん』打てばいいじゃん。

メ「だが、ミュウツウの覚えている技が『バリアー』じゃなくて『めいそう』なり『まもる』だったらどうなつてたか分かんねーぞ?」

そ「そういう意味ではブルル、お前は兄弟のなかで一番センスがあるぞ?」

ブ「そう?」

誉められたー!!うれしー!!

……ハッ、殺気!!

キ「……わたしより、センスが、あるのねえ。」

ブ「ヒエツ!」

ケ「きききキリ姉ちゃん!くろい!くろいなにかがでてる!」

キリお姉ちゃんが、こつちにちかづいてくる!

ちよ、嫉妬で首絞めないで!息が、息がー!!

シ「キリ?」ブフワ!!

キ「な あ に?おかあ」Z z z

シリルは キノコのほうしを つかつた!

キリは ねてしまった!

ブ「げげげほっ!お母さん、ありがとう。」

シ「いえいえ。」ピッピッ

シリルの ゆびをふる!!

ゆびをふるは だいばくはつになった!

シリルの だいばくはつ!!!

みんな「えええ!!!」

チュドーーーーン

地方ワープ（下）　～メインヒロイン登場～

シ「ごめんなさい、バトルスイッチがはいっちゃってたみたいね。」

ブ「それはギルガルドのとくせいだよな？」

というか振ったのは両手だったよね？なんで『ゆびをふる』になるんだよ。

そ「まあ、まわりに他の仲間^ドたちがいなかっただけまじいだろ。」

ケ「キリ姉ちゃんとメタやんさんがまだ気絶しているけどね。」

ク「……」コクコク

カ「キリはともかくメタやんさんが気絶したのはびっくりしたわ。」

そ「そりゃあ戦った後だからな。いくらメタやんでも連戦の後に『だいばくはつ』くらったらたおれるだろう。」

シ「もう、謝ってるじゃない。」

グー

そ「……そうか、お腹減ったかクル。」

ク「……ドブ！」コクコク!!

ブ「僕もお腹すいた!!」

ケ「僕も!!」

カ「わ、私も…。」

シ「そうでしよう? おいしいお弁当はここにあ……………つたわ。」

ク「え!？」

お母さんが指差した場所にはきのみの残骸が……。

〃〃〃〃三分後〃〃〃〃

シ「速攻でつくつてきたわ!」

カ「いっぱい手伝ったよ!」

ク「……まっつた。」グー

ブ「それじゃあ食べようよ!」

キ「なんであんたがしきろうとしてんのよ。」

いいじゃん。

メ「すまんなメタメタ、ごちそうになるぜメタメタ。」

そ「いいんだよ。お礼とお詫びさ。それじゃあ、」

いただきま〜、ん?

ブ「親方! 空から女の子が!」

そ「急にどうしたブール。」

カ「あ、何かが落ちてくるわ！」

グシャーーン

ポケモンが我が家のお弁当にシューーーー!!

超！エキサイティン!!!

シ「ああ…お昼作り直し…」ガクッ

ク「お…お昼…ご飯…が」ガクッ

落ちてきたポケモンはペラッブ…なんだけどこかに怪我でもしているのか、青いはずの羽が真っ赤に染まっている。

ケ「うわあ!?!なにになんなの!?!」

キ「ケンうるさい！」

気を失っていたペラッブが目を覚ます。

ペラッブ「…ここは？」

そ「七番道路のダブル族の縄張りのなかだ。」

…あれ？

ブ「言葉がわかる？」

メ「ペラッブ語は人と同じだからな。いわゆる共通語ってやつだ。」

ブ「へー。…いつの間に僕に『へんしん』したのさ。」

メ「たった今さ。ん？」

ペラツプ「ここから逃げて!!ここから逃げて!!」

ブ「うわ、うるさい！」

脳が揺さぶられる!たまらず耳を押さえる。

ペラツプ「ここから逃げて!!ここから逃げて!!」

メ「まずい!あれは『おしやべり』だ!!みんなあの声を聞くな！」

ブ「メタやんさん!?!」

シ「ク、クル!カラとケンを押さえて!キリ!暴れないの!」

そうだった!『おしやべり』は確定でこんらんさせるんだった!

ドールブルはとくせいだが『マイペース』ならこんらんしないけど、

ペラツプ「ここから逃げて!!ここから逃げて!!」

カ「ウワアアア！」

ケ「うひやひやひやひや！」

ク「……辛い……!」クツ

ペラツプ「ここから逃げて!!ここから逃げて!!」

そ「う……ぐああ……!」

キ「ウガーーーー！」

シ「あなた！がんばって！キリ、落ち着いて！」

とくせいが『マイペース』なのはクルお兄ちゃんとお母さん、あと俺だけか！

幸い、メタやんさんは俺に『へんしん』しているお陰でこんらんはしない！なら！

ブ「メタやんさん！お母さんを手伝ってください！俺はあのペラツプ三十一歳独身を黙らせませす！」

メ「おいおい！お前はこんらんしないはずだろ！」

ブ「ええ！きわめて冷静です！」

メ「待ってっ！」

ブ「待てと言われて待つ馬鹿はいない！」

ダツシュ！即時到達！猪突猛進馬耳東風！四字熟語！

ペラツプ「ここから逃げて！！ここから逃げて！！」

ブ「お前のせいでこっちのテンションがおかしくなるんだよ！！黙れ！！」

殴る！蹴る！わしづかむ！

ペラツプ「ぐはっ…なんでこっちくんのよ！速くあっちいきなさい！でないと…！」

「もう遅いよ☆」

空がかげった。見上げた目に最後にうつったのは空間を歪ませるでかい金の環だつ

た。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

回想終了。こうして俺はイツシユ地方にワープしたのだった。それにしても、

「だから逃げてつて言ったのになんで逃げないでむしろ近づいてくんのよあんた人の言うこと聞かないの馬鹿なの？死ぬの？NDK？人の言うことを聞かないでこんなところに飛ばされちゃってNDK？」

「あー……っ、うるさい！さっきからわざと無視してるのわかんない!？」

「あ、やっぱり無視してたんだねこのクソガキそんなだからニコニコで消防大杉ワロタとか言われんのよわかんないの!？」

「それとこれはまっつったくの別だろ!？」

そもそも俺はユーチューバーだ!

「別じゃないわよあたしはその心持ちのことを言ってるのよどうせあんた学校で先生の言うこと聞かないであとで友達に聞いて回るとかそういうことしてんでしょ!？」

「そんな事したことねーよ!？」

「てゆーかなんでむこうのこと知ってるのよ!？」

「そりやあ俺は転生者だからな。」

「うわーどや顔してる。はずつ。中二病乙！」

「中二病じゃねーよ!!そもそも俺は小六だ!」

「え?じゃああんた年下じゃん。あたし高二。あー、あたしガキと年寄りはいじらないようにしてんのよ。」

「え、じゃあ謝ってくれる?」

「だが断る。」

「え」

「さつきガキはいじらないと言ったな、あれは嘘だ。」

「うーうー。」

駄目だ…この人には勝てない!

~~~~~

「なんか疲れたし現状確認。あたしたちはカロス地方からどこかに飛ばされた。OK  
?」

「これもネタなのか? そうなのか?

「ええと、情報提供、ここはイツシユ地方らしいです。」

「ふむ、どこ情報かね?」

「二番さんです。」

「は？」

あれ？声が小さかったかな？

「二番さんです。」

「…誰？」

このタイミングで名前を聞くか、この人は。

「僕の名前はブルです。よろしく」

「あたしはメイコです。こちらこそよろしくじゃなくて。二番さんって誰よ。」

ああ、そっち？…しってた。

「二番さんは僕の特権の一つです。なんでも知ってるすごい人です。」

「…：…あんた、敬語じゃなくていいわよ？」

「え？」

「一人称が俺から僕に変わってるし、あたしは猫かぶりは嫌いなものよ。」

そっか、なら仕方ない。

「わかったよ。」

「ウム、よろしい。次は自己紹介だね。名前はさつき言ったから、なにか聞きたいことある？」



「そこそこあるけどまずは、なんで赤いんですか?」

最初は血まみれなのかと思っただけ、そうじゃないっぽいからね。じゃないところなのにペラペラ喋らない。

「ああこれ? 返り血。」

「ヒュイ!!」

「冗談よ。あたしのヒツピーちゃんは色違いなの。」

「ヒツピーちゃん?」

「そう、この体の本来の持ち主。あのくそじじいめ、今度あつたらただじゃ済まさないわ。」

「どう言うこと?」

「あたしの特権はゲームで捕まえたポケモンを一匹もらえるってやつ…のはずだったのよ。なのになぜかあたしとそのポケモンになつてんのよ。」

「おじいさんエ…。なにしてんのさ…。」

「他には?」

「あ、ええと、なんで落ちてきたの? っていうかあのリング…なんなの?」

「…:…あーと、あんたフープってポケモン知ってる?」

「次の映画で出る幻のポケモンでしょ?」

あの映画観る前にこっち来たからなー。よくは知らないんだよなー。

「そいつから逃げてたんだけど、あの場所で力尽きちゃってね。」

「ふーん？じゃああの最後に聞こえた声が、」

「そう。フーパの声よ。」

「でも、戦わなかったの？」

「やったわよ。でも『おしゃべり』を聞かせても『ばくおんぱ』を叩きつけてもけろつとしてんのよ？逃げるしかないじゃない。」

伊達や見栄で伝説や幻と呼ばれてはいない…か。

「今度はこっちから質問するわ。」

「どうぞどうぞ。」

隠すことなどない！

「最後におねしよしたのっていつ？」

……隠すことなどそんなにない！

## エンカウントくキャラ崩壊注意報く

私はアララギ博士と呼ばれているわ。専門はポケモン生態学とポケモン言語学（とくに音韻学）。そんな私が何をしているかと言うと、

「迷った…。」

さつきね、森の方からね、大きな音がしたの。

だからまた何かやらかしたかと思つて大急ぎで研究所を飛び出したの。

そしたらね、何もなかったの。

…本当よ？伝説のポケモンが落ちてきた訳でももないし、何かの遺跡が出てきた訳でもない。

「しかも慌てて来たからコンパスもポケモンも持つてきてないし、現在地が分からないから地図も意味をなさないし、ライブキャスターは置いてきたし…。」

もうやだ。このまま帰れなかったらどうしよう。

食べ物がないから餓死？それとも凶暴なポケモンに食べられる？

「~~~~~！」「~~~~。」

ん？人の声？いやいやまさか。森こにいるのは私とポケモンだけ。人の言葉を使うポ

ケモンはこの地方にはいないし。

「あ……う？い……。」「だ……。……う……。いい。」「

…空耳よね。でなければ幻覚、幻聴。あらら、私もボケたのね。もう年なのね。

あららく♪ぼーけちゃーったー♪

「しっ。隠れて!!」「え？でモゴモゴ」

まだボケるには早かったようね。でも、いつボケ始めるかと思うと…。

「いやいや、それどころじゃないわね。出てきてくれる？じつは私かくれんぼで誰かを見つけられたためしがないのよ。」

しばしの間。

「それは…なんというか…。」「あ、バカ。」

「そこね。」

近くのしげみに手を突っ込む。

「さっきのは嘘。ほんとは見つかったことがないの。」

服と羽のようなものをつかみ、引っ張り出す。

「悪い子だーれd」

この両手につかんでいたのは

「この陰湿BBA！手え離しやがれ！」ときげぶ赤いペラップと、

「俺の同情を返せこの年増！」とすぐむ小さな男の子だった。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

ドーモ、ミナIIサン。ブルルです。

「あらら、助けてもらっちゃったわね。」

「いえ、当然のことでしたまです。」

「十割あたしのお陰だけだね。」

まさかアララギ博士とエンカウントするとは。

あ、人の姿なのは『へんしん』のおかげです。正確には前の世界の姿を描きました。詳しくはあとがきで。

…何いってんだ俺？ まあいいや。

「手伝うとは思わなかったよ、メイコさん。」

「あたしだって人助けぐらいするわよ。それに少し言い過ぎたし？」

「そうだね。」

俺たちに悪口を言われたアララギ博士はめにみえて落ち込んだ。そしてなんかぶつぶついい始めたのであわてて、ね？

決してじとつとした目で見られたり、チクチク痛いところを突かれたからじゃないんだからね！

「色違いのペラップ、ねえ。ね、あなたたち。私の研究所に来ない?」

「え?」

博士からのお誘い…なんだろう?

「あたしを実験台にするなら遠慮したいけど。」

そうメイコさんが言うと、

「あ、そ、そうよね。あなたたちにも予定とかあるもんね。そうよね。私なんかのお誘いよりも大事よね。来るわけないわよね。あ、あ、さっきの提案は忘れてくれていいわよ」というか忘れてちょうだい。」

「暗い!」 「わたモテか!」

結局アララギ研究所に行くことになった。

くくくくくくくくくく

ほへー。これが研究所かあ。うわ、本がぎっしり。スゲー!

「思ってたんと違う。」

「そうなの?」

「うん。もつとなんかよく分からない機械があつたり、白衣の人たちがなんか難しいことを話し合つてるとか、そんなのを想像してただけど…これじゃあただの本好きが住む家じゃん。」

「ああ、心にグサグサくるわね。あなたのペラッブは、すごいわね。えーと、」  
「あ、ブルっついていいます。」

「あたしはこいつのポケモンじゃないわよ！あと、メイコって名前よ。メイコ様って呼びなさいー！」

「あらら、なかなかグイグイくるわね、メイコ様？」

「うむ。それがあたしのアイデンティティだからね。」

・・・何、なんなの？圧倒的なレベルの差を感じる。

ここれが…ポケモンワールド…！

「ところでメイコ様。」

「なにかしら？」

「色々調べていいかしら？」

「いつもなら駄目だけど、今は凄く気分がいいわ。」

「じゃあ」「だが断る。」

「問答無用。」エイッ

「なん…だと…」バタンキュー

「な?!メイコさん!?!」

な、なにをするだー！許さん！

「ふっふーん。アララギ博士特製の睡眠薬には敵わないわね!!」

「ちよ、アララギ博士!?!何をするんですか!?!」

キャラが変わってますよ!いや、これがこの人の本性か!  
アララギ博士

「ふっふっふ。あんたみたいな子供にはこれよ!」

「な、そ、それは!」

「一目みたときからあんたたちがお腹を空かせているのは分かっているのよ!!」

アララギ博士が両手でもっているのは!カレーの入った鍋だ!!

「く、メイコさん…ごめん…!」

カレーには勝てなかったよ…。

くくくくくくくくくく

ふうー、くったくった。メイコさんもしっかり食べました。まる。

メイコさんはレントゲンとって、採血されて、起こされて、怒って、なだめられて、問診をしました。内容は知らない。

解剖とかされなくて良かった良かった。

「ごめんなさいね…。私、定期的にテンションが高くなる病気らしいの。驚かせちゃったよね。ビックリしたよね。…でも自分でもどうしようもないの。」

「躁鬱病ね。あたしの知り合いにもいたわ。躁鬱病の説明は…要らないわね?」



「うん。」

実例を目の前で見ましたから。あと、アララギ博士、そっちが基本ですか。

「あー。トレーナーカードほしい？」

「え？」

トレーナーカード？まじで!?

「あたしはもらえるもんは貰つとくわ。」

「ごめんなさいね、ポケモンはトレーナーにはなれないの。」

「あ、それなら僕も無理です。」

「あらら？どういうこと？」

「ちよつと『へんしん』とききますね。」

体のまわりのインクを落とす。

「見ての通り僕はドーブルd」

肩を掴まれた。

「研究させてもらうわ。」

目が怖いです、アララギ博士。

## 旅立つ〜いざ出発!〜

ブル（ドーブル）♂ 特性『マイペース』

人に『へんしん』して、研究所に侵入してきた。

私はこれを確保、調査をした。

この個体の驚くべき点には、人の言葉を使うというものがある。

この個体と一緒にペラップがいたが、たとえドーブルの『スケッチ』といえどペラップの専用技の『おしやべり』はコピーできない。よって人の言葉を使うというのはこの個体特有のものだと考えられる。

また、本来ドーブルの尻尾のインクの色は個体毎に決まっているが、この個体の尻尾のインクはどうやら本人（あえて本人という言葉を使わせてもらう）の意思によって色を変えられるようだ。

レントゲン検査の結果、尻尾に筋肉が一切存在せず本来筋肉がある場所に複数のインク線が確認できた。

メイコ（ペラップ）♀ 特性『するどいめ』

上記のドーブルと共に研究所に侵入してきた。

世にも珍しい色違いで、普通は青い羽が赤くなっている。

ペラツプは他の生き物の鳴き声、もしくは言葉を覚える。しかし、普通はカタコトで同じ言葉を繰り返すことしかできない。

この個体は実に流暢に研究所の内装に関する感想を語ったり悪口や軽口を言うことができた。

この個体たちはアララギ博士の独断で、ポケモントレーナーとしてチャンピオンリーグに参加させることにした。

く〇く〇く〇く〇く〇く

「おいBB A。これはどういうことだ。」

「そうだよ、僕はまだポケモントレーナーになるのを了解してな」

「なんであたしのほうがこいつより後に書かれてるんだ!」

「そつち!?!」

あのあと、アララギ博士の雰囲気よりは明るい検査と怒涛の問診を受けました。

そして、二人の検査の結果をレポート用紙に書いてもらったんだけど…。

「ば、BB A…。上等ね。博士は年老いたほうが信用性が増すのよ!」

「うげ、高テンションアララギ降臨。アララギインしたお!」

「フフフフ。私が神だ!そしてこれはとつくのとうにポケモン協会とポケモン研究会に送ったから君たちに拒否権はないのだよ!」

「えー!?!まあいいけどさ。」

ポケモンワールドに来たんだしポケモンマスターは目指すものだよね!

いい具合にチートがあるし。

「これがトレーナーカード。お金は三千P<sup>ポケ</sup>登録してあるわ!トレーナーとバトルしたら自動で増えたり減ったりするから、身分証明書として使ってね!あ、フレンドリイシヨップではこれを提示しないとトレーナー価格で買えないから気を付けて!」

「ちよ、顔写真いっつとったんですか!?!」

「問診中にこの高性能眼鏡カメラでカシヤツとね!」

な、なんだって〜!あ、人の顔です。

「これがモンスターボール!てきとうに十個渡しておくわ!」

「あ、ありがとうございます。でも、最初のポケモンは?」

「あなたがポケモンだしメイコちゃんっていういいパートナーがいるじゃない!」

「だーかーらー、あたしはこいつのポケモンじゃないって言ってるでしょ!」

「それじゃあ頑張ってるねー!」

あつという間に研究所を追いつき出された。と思つたらまた引き込まれた。「ゴローめんごめん、凶鑑渡し忘れてたわ！」

赤いポケモン凶鑑だ！

「ボールオツケー凶鑑オツケーカードオツケーポケモンは必要ないしあ、リュックあげる！」

「あ、はい。」

「これで万事オツケー！それでは、ベストウィッシュユ！よい旅を!!!」

また追いつかれた。なんなんだか。

くくくくくくくくくく

はい、只今一番道路にいます。

そして今、何をしてるかというと、

物凄く強そうなヨーテリーに襲われています。

メイコさんがポケモンバトルを手伝ってくれないから逃げ回っています。

「メイコさん！手伝ってよー！」

「いやよ」

「バウ！ババウバウバウ！」

あのヨーテリー怖いです。

なんかやけに声が低いんです。例えるならチワワの体なのにライオンの鳴き声なんです。

しかも速いんです。そして目付きが鋭いんです。

あれだね、某段ボールの人みたい。

「あんたがバトればー?」

「くつそ仕方ないな!」

『へんしん』解除、向かい合う!

「バ、バウ!」

「ざーあ、バトルだ!」

先手必勝! インクは赤!! 研究所で知った新たな可能性!!!

「想像で描く『だいまんじ』!」

空中に大きな大の字をかく!

赤い大の字は燃え上がり、ヨーテリーへ飛んでいく!

「バウウ。バオーーーン!」

ヨーテリーの周りを緑色のシールドが包む。

『だいまんじ』がぶつかり弾けるがヨーテリーは無傷。

しかも体が赤みがかっている!

「な、『まもる』!?そしてあれは『ふるいたてる』、かな!?」  
「確か『とおぼえ』は覚えなかった気がする！」

「ガウツ!!」

押さえつけられた。…え?もつと離れてたよね!?アニメの『でんこうせっか』とも違うし『しんそく』は覚ええない。なら『さしおさえ』?

「ババウ!」

「それは『とつておき』らしいわよ?」

「な、なるほど。メイコさん!ナイスです!」

となるとこのヨーテリーの技は『まもる』『ふるいたてる』『とつておき』そして追っかけてきた時に使ってきた『とつしん』。

…よし!脱出↓へんしん↓倒す!!

インクは茶色!

「雰囲気を使う『あなをほる』!」

「ガウツ!?!」

砂ボコリをあげ、後ろ向きに地面に消える。

まさか『あなをほる』まで使えるとは。まあ、あとは地面の下から攻撃すれば。

…あれ?あのヨーテリーはどこに立ってるんだ?

…まあ、当たらなくても大丈夫だろう。

「ここだあ!」

「キャイン!」

まぐれ当たり!そして颯爽と『へんしん!」

ババババ!完了!

「自らの炎に焼かれるがいい!」

「さくらつと『ふるいたてる』」。

「ふん。やるな。だが!この俺は!今まで負けた事がない!」

うわあ。想像に違わぬ渋い声。

「なら今回がお前の敗北記念だ!泣いて喜べ!」

吠えながらさりげなく『ふるいたてる』」。

「泣くのは貴様だ!」

『とっしん』で距離を詰めてくる。

僕はく♪それをく♪後ろへ受け流すく♪

「なんだと!?!ぐわっ!」

鼻歌混じりに躲されたヨーテリーが勢い余って木にぶつかる。痛そう。だが手は抜かない!



「ぬうつ、『まもる』！」  
ふらふらしているヨーテリーに向かって『とっしん』を仕掛ける。

緑色のシールドにぶつかると、反動が強いなあ。

ヨーテリーが笑う。

「これで終わりだ！『とつておき』！」

俺も笑う。

「お見通しだ。よ。」

今度は俺が緑色のシールドに包まれる。

「なにっ！」

「やられたらやり返す！倍返しだ!!!」

『とっしん』で弾き飛ばす。空中にいるところに『とつておき』！

：うわっ！瞬間移動するかと思っただけならなんかヨーテリー型のオーラみたいなのが三個……三匹？飛んでいった。

うーん。『とつておき』はポケモンによって変わるのか。

ガブツ ザクツ ドガツ

噛まれ、引つ掻かれ、体当たりをくらったヨーテリーは俺の目の前に飛んでくる。

え？もう一回いいの？やっっちゃうよ？

「ドーン。」

『とっしん』。そして『とっておき』。

ガブツ ザクツ ドガツ

「く、俺の負けだ。」

ヨーテリーは 降参した。

やったー!初勝利!

「なあ、お前に付いていってもいいか?」

「え?」

ヨーテリーは 語りだした!

「俺は昔、旅のゴチルゼルに予言されたんだ。

『あなたを倒す者、それすなわちあなたの主』とな。

それ以来俺は戦い続けた。そして俺を倒したのはお前だ。」

「:僕は人もどきのポケモンだけど?」

「なら、同じポケモンが指示しても不快にならない俺は必須だな。ん?」

ヨーテリーの様子が:。輝きだした!?

「へえ。やるじゃんあんた。これ、進化の光よ。」

「し、進化!」

光が収まった。そこにいたのは目付きが鋭く、老獪な雰囲気をかもし出すハーデリアだった。

「これからよろしくだ。ご主人。」

「よ、よろしく。」

「ご、ご主人つて…ププ。」クスクス

へんしん解いて人の姿になってモンスターボールをハーデリアに投げる。

「ハーデリア、ゲットだぜ!!!」「ペラップー!」

いやー。やってみたかったんだよね。

メイコさんもノツテくれたし、いいね!

ハーデリアをボールから出す。

「お前のニツクネームは」「ハッサンね。」

な、なん…だと…。め、メイコさん…、

「……………センスあるっすね!」

「ふふふ、トーゼン!」

「<sup>ええええ</sup>バウウ!!」

「じゃあ改めて、これからよろしく!ハッサン!」

「バウバウ!」

## 初ジム〜Battle in サンヨウジム①〜

現在サンヨウシティのポケモンセンターにいます。

カラクサタウンと二番道路ではハッサンが大活躍しました。というか、ハッサンの特性『いかく』のせいゲフンゲフンおかげで野生のポケモンに出会わなかったよ。

一番道路と二番道路のボスだったみたいだし当然か。

俺のことをご主人ってよぶ真面目ない子だよ。

ただ、メイコさんと仲が悪いせいでそれに挟まれるおれはたまったもんじやないけど。

「ジム戦の前にメイコさん直伝のバトルのコツを教えてあげるわ!」

ポケモンセンターのテーブルを一つ占拠してメイコさんが叫ぶ。

「それは嬉しいけど、声はもう少し押さえてほしいよ。」

「パウパウ。」

「何言ってるのあたし直伝のバトルテクニクよ?」

「それが?」

「わかんないの?こっそり聞き耳たててるやつがいるかもしれないじゃない!」

「ババウ。」

「あり得んとか言うな髭犬！」

「バツバウ！」

「ま、まあまあ。」

「これが五分に一度行われると言えば俺の苦勞がわかるだろう。」

「それでバトルのコツって？」

「それはまず『戦う前に勝つ』、そして『戦わせずに勝つ』の二つよ！」

「なんで隣の席から同時にため息が聞こえるのかな？」

「どういふこと？」

「要するにこつちがダメージを受ける前に相手を倒せばそれが一番ってわけよ。」

「バウバウ。バツバウバウウ。」

「へえ、ハッサンはなかなか分かってるじゃない。」

「ハッサンが納得した!?!これは…」

「喧嘩するほど仲が良いってやつか。」

「アン？」

「バウ？」

「なんでもないよ。」

メイコさん、目が怖いです。

「話を戻すけど、実際はそんなことはなかなかできない……」

メイコさんの講義は夜になって寝る時間が来るまで続いた。

～○○○○○○○○○○

おはよう、みんな！

メイコさんにいつも通りの乱暴な起こされ方をされたブルだよ！

今日は初ジム戦をします！

そのために俺たちはカフェでメニューを見えています！

「どーゆーことよ、ブル。」

「あれ、知らないの？この『カフェ・サンヨウ』の経営者たちがジムリーダーなんだよ。」

「ふーん。……ししし知ってたしいいい今のはあんたを試したただけだし。」

「バウウ……」

別に知らなくてもいいんだけどね。それにしても、

『バトルコース』が赤青緑の三つ。そこからさらにレベルが五つ。合計十五もあるけど、どうする？メイコさん。個人的には緑の最低レベルなら簡単に勝てると思うけど。」

対人戦に限ってメイコさんも戦ってくれるらしいしね。」

「じゃあ赤の最高レベルで。」

「えええ!?なんでさ!」

「あたしの好きなことはあんたみたいなきん野郎の提案をガン無視することだ!すいませーん。」チリンチリン

ああ、呼ばないで!ここはもつとよく相談を!

「お待たせしました。おや、珍しいポケモンだね?」

生デントさんだ!おお、髪の毛がすごい緑!

「そうでもないわ。『レッドバトルコース』のレベル5をお願いするわ。」

「ポケモンがしゃべつ!?!……と、失礼ですがバッチはいくつお持ちでしょうか?」

「まだ一つも。ここが最初のジムなんです。」

メイコさんがしゃべった事に少し驚いたようだが流石プロ、一瞬で仕事の顔に戻った。

「それならばお客様、せめてレベルは1か2にしたほうがよろしいのでは?」

「……なんでよ。」

「グルルル……」

あ、二人がキレそう。…え!?マ、マズイ!

「じゃ、じゃあそれd」

「あんたもジムリーダーよね?」

「ええ。」

遅かった…。これは腹くるしかない、か。

「なら！あんたのコースの！レベル5に！挑戦するわ！」

「ええ!？」

「あたしたちをなめたその態度！トレーナーを見下したその態度を！粉々に粉砕！してやるわ！」

「ガウ！ガウ！」

「ぼ、僕は君たちのためを思って…」

「こうなったら何を言っても無駄ですよ。さっきのは変更で、『グリーンバトルコース』のレベル5をお願いします。」

うろたえてるな。それでも手はメニューを書き換えてる。もう、なんとというか、流石プロとしか言いようがないです。

「・・・分かったよ。ご注文を繰り返します。『グリーンバトルコース』のレベル5が一つ。『シングルバトル』、『ダブルバトル』、『トリプルバトル』のどれかを選べますがどうしますか？」

「シングルかダブルだね。どうする？メイコさん。」

「ポケモンバトルは対一。『シングルバトル』を所望するわ。」



「バウ。」

「分かりました。準備が出来次第、お呼びします。」

なんかごめんなさい、デントさん。

~~~~~

「それでは只今より、ジムリーダー デント対挑戦者 ブールのバトルを始めます！お互い使用ポケモンは二匹！アイテムの使用は禁止、ポケモンの交換は挑戦者にも認められません！」

「僕から出そう。いけ！ヤナツキー！」

デントさんの先鋒はヤナツキーか。

ジム戦開始ですよ、メイコさん。

「最初はハッサンにやらせなさい。」

「え、なんで？」

「あの犬、やる気満々だったじゃない。」

「本当は？」

「戦わずに勝てればそれに越したことはない。昨日言ったでしょう？」

「あ、はい。」

なんだかなあ？

「キバってけ！ハッサン！」

「バウ！」

ハッサンの『いかく』でヤナツキーがたじろ…がない。むしろにらみ返してる。

ううむ、流石レベル5。

「とりあえず『ふるいたてる』！」

「ヤナツキー、『やどりぎのタネ』！」

ハッサンの体がほんのり赤くなる。が、『やどりぎのタネ』がハッサンの体を縛る。

「怯むな！もう一回『ふるいたてる』！」

「攻撃しないと勝てないよ！『タネばくだん』！」

ハッサンの体がさらに赤くなるが、その瞬間爆発に巻き込まれる。ハッサンは…まだ立っている！なら！

「やどりぎが緩んだ！『とっしん』だ！」

「バウ、ガウ！」

ヤナツキーに直撃した！

「よし！『まもる』！」

「ヤナツキー！『エナジーボール』！……ハッ！」

メイコさん直伝！『相手の行動を先読みする』！

ハッサンを包む緑色のシールドに『エナジーボール』がぶつかり、爆発する。

「ヤナツキー！『けたぐり』！」

『『まもる』からの『とっておき』！』

緑色のシールドが……張られた！よし！

硬いシールドを蹴りつけたヤナツキーは痛みに跳ねる。そこを！押さえつける！

「近距離』とっしん』！」

「恐れず『タネばくだん』！」

何!?!『タネばくだん』!?

ヤナツキー自身を巻き込み爆発する。黒煙で見えない……。一応。

「ハッサン、『ふるいたてる』！」

……返事がない。これは。

「君のハーデリアはかなり強いね。まさか僕のヤナツキーと相打ちだなんて。」

煙が晴れたとき、ハッサンとヤナツキーは倒れていた。

「ヤナツキー、ハーデリア、共に戦闘不能！」

「……ヤナツキーはあなたのパートナーじゃないんですか。」

「ああ。パートナーさ。だけど、あそこで『タネばくだん』以外を選んでいたら君のハー

デリアはまだ立っていただろう。だから相打ち覚悟で『タネばくだん』をうった。」

「……。」

「…君の言いたいことは分かる。ただ、時にトレーナーは、最愛のパートナーを、言い方が悪いけど見捨てるという選択をしなければいけないんだ。トレーナーになったばかりの君には受け入れ難いことかもしれないけどね…。」

「…ありがとう。もどれ、ハッサン。」

デントさんの言うことはもつともだ。

「僕の最後のポケモンはこの子だよ。いけ！メブキジカ！」

でも、それでも…！

「仲間は、見捨てるものじゃない…。メイコさん。」

「あいよ。」

「ヤつちやつてください。」

「おk。…ハッサン、お疲れさん。あとは任せな！」

メイコさんが俺の肩から飛び立つ。

「おい、ピーマン頭の小僧！」

「ピ、ピーマン…?！」

「最初つからあんたみたいなのひよろひよろのお坊ちゃんは気に入らなかったんだ！」

「ひよ、ひよろひよろって。」

「いいか！改めて言わせてもらおうわ！

テメーは俺らを、怒らせた。」

これが、後に『赤い騒害』と呼ばれるメイコさんのデビュー戦だった。

初ジム～Battle in サンヨウジム2～

「メブキジカ対…ええと？」

「ペラッパつていうポケモンです。」

「ペラッパ！バトル開始！」

相手はメブキジカ（春の姿）。

メイコさんの技は『おしやべり』『そらをどぶ』『はねやすめ』『ぼくおんぱ』。

「なら、メイコさん！『おしやべり』！」

「メブキジカ！『にほんばれ』！」

メイコさんはスーツと息を吸い込み、

「なーんであந்தの言うことを聞かなきゃなんないのよ！」

「エエエエエエ（ハ、）エエエエエエ」

とかやつてる間にメブキジカの角から小型の太陽のようなものを出した。

「あたしはあたしのやりたいようにやるわ！」

「……プール君。自分のポケモンを使いこなさ」

「黙れ小僧！あたしはこの世の誰よりも偉いのだ！よってプールがあたしを使いこなそ

うとすればするほどあたしはそれに反発するのだ！分かったか！小僧！」

「……メイコさん。もはや飛んでさえないんですが。デントさんも絶句しちやつてますよ？メブキジカも……あれ？」

「はん！これくらいで何も言えなくなるようならジムリーダーなんて止めちまえこのガラスハート！ピーマン！」

「くっ。言われっぱなしは沽券に関わる！メブキジカ！『ソーラービーム』！」

「グ、ヒー！」バタバタ

「な！混乱している!?どういう事だ!？」

デントさんもペラツプの事を知らないのか。

別の地方のポケモンだから無理もないけど。

あれ？アララギ博士は何で…博士だからか。

「知らぬなら！教えてあげよう！ホトトギス！」

「ペラツプの専用技である『おしやべり』は相手を確定で混乱させるんです。」

「なんだって!？」

そう、つまり！

「メイコさんは最初っからポケモンとして！僕の言うことを聞いてくれていたんだ！」

「ブール！」

「何ですか、メイコさん。」

「悪いがあたしはあなたの言うことを聞いたことはない！」

「えええ!!」

カツコつけちやつたじゃん！めーっちやくちや恥ずかしい!!!

「なんというか…御愁傷様。」

「同情するなら金をくれ。」

「ええと、それは。」

．．．うん。勝ったな（確信）

「まだバトル中よ！」スウ…！

「形だけでも！『ぼくおんぼ』！」

「は！しまった！」

パーーーー！バーーーー！ラーーーー！

ラツパとバスとホルンが耳元で鳴らされたような爆音がフィールドを駆け巡り、メブキジカにぶつかる。

「油断した！メブキジカ！」

メブキジカは．．．目を回している。

「メブキジカ、戦闘不能！ペラップの勝ち！よって勝者、ブルー！」
「ヤッターー（棒）」

終わってから思うこと。これは・・・バッチもらえるかなあ？

反省会～事件勃発～

「うん、ぼくの負けだね。ぼくに勝った君にこれをあげよう。これはトライバッチ。サンヨウジムのジムリーダーに勝った証だよ。」

「ありがとうございます！」

今のはノーカン！とかにならなくてよかったよ、ホントに。

「それと、君たちにはこれも渡しておこうかな。」

「これは：『カフェ・サンヨウ』の永久フリーパス!?!いいんですか!?!こんなもの貰っちゃって!」

これを見せるだけで全てのメニューがタダで食べられる!

「太っ腹ねえ。潰れるわよ?お店。」

「ハハハ。大丈夫!このフリーパスは君たちを含めて三人にしか渡して無いよ。」

「え、レベル5をクリアした人はそんなに少ないの?」

「違う違う。このフリーパスはぼくたちが認めた人にしか渡さない、いわゆるレア物だよ!」

「へー。」

ってことはこれを渡された俺たちって…実は凄いい!

「それは光栄ね。ちなみに他の二人は誰か教えてくれるかしら?」

「君たち、バトルの時とキャラが変わり過ぎじゃ無いかな…? まあいいや。このフリーパスを初めて手に入れた人は現イッシユリーグチャンピオンのアデクさんだよ。」

へー、流石チャンピオンって感じだね!

「ふーん。残りは?」

「…。彼は当時、ポケモン協会の中で最も弱いと言われていた。だけど僕たち三兄弟との連戦を一度もダメージを受けずにクリアした。彼の名前は…レッド。」

「レ、レッド!?!」

「ハア!?!あの、『原点』にして『頂点』の!?!」

ま、マジか〜! レッドさんもこの世界に居るのか! 会ってみたいなく生レッド!

「『原点』かは知らないけど、そう、『頂点』^{トッポ}のレッドさんだよ。彼とバトルしたことは今でも僕たち兄弟の誇りなんだ。」

〜〇〜〇〜〇〜〇〜

この世界にもポケモンセンターはある。

ただ、ゲームのようにテンテンテレレン♪と回復はしなくて、アニメのように回復まで時間がかかる。

メイコさんは『自然回復するからいい!』と拒否したからハッサンだけジョーイさんに預けたよ。

今はポケモンセンターのテーブルで作戦会議：なんか違う。えー、戦後会議? うーん? をやってる。

「…反省会ね。」

「そう、それ! でも、勝つたのに反省会っておかしくない?」

「ナニいってんの。ハッサンはやられたじゃない。」

やられたの発音!

「まあ、そうだね。」

く会議内容は無いようです。．．．言ってみたかったんだよ! く

「OK? つまり、あそこで退いてれば良かったのよ。」

「はー。成る程!」

流石メイコさん! 年季が違うね!

「バトルの話はこれで良いとして。ピーマンが最後に言ってた事。」

「ピーマン?」

．．．あ、デントさんのことか。

「ア?」

「察したんで続けてください。」

「あの話から解ることは何？」

「えーと、今はアデクさんがチャンピオンってこと、レッドさんは強いってこと…でしよ？」

「そうね。あと、ポケモン協会にはレッドでさえ一時期勝てなかったトレーナーがわんさか居ることがわかるわ。」

「言われて見ればそうだ。そうだけど、」

「え？デントさんはそんな事言ってなかったよ？」

「口に出さなくても分かる事ってたくさんあるのよ。」

「ふーん。流石メイコさん。ねん（ry）」

「シー、つまり、メイコさんは、ポケモン協会のトレーナーと戦えと？」

「何だよ。逆よ、逆。ポケモン協会の奴らとは絶対に戦わないようにしなさい。」

「アイアイサー！…でも意外だね。」

「…何がよ。」

「だつてつきり『ポケモン協会の奴らなんか余裕よ、よゆう。私が直々に正義の鉄槌を下してやるわ！』とか言うのかと…。」

「ふーん？」

あ・・・やっちゃった・・・。

「つまり、あんたは、あたしが、バトルジ」バサッ

「よっしやズラカレ!!!」

「テメーらドケー！」

「あーばよー！へっへっへ！」

黒い三連星・・・じゃなくて三人組がメイコさんの入った袋を担いで逃げていく。

・・・ええ!?

「ちよっ、おまつ、ふざけんなドロボー!!!」

追跡くストーリーキングとも言うく

ちよつと！何なのよ！フザケルナー！

「おい！うるさいぞー！」

「俺は何も言つてねーよー！」

「袋を叩いとけ。うるさいのはそいつだ。」

・・・騒がしい奴らだなあ。

なのに誰にも捕まえられ無かったのは何でだ？

あ、ただ今三番道路で走っています。ブルです。

サンヨウシティで『へんしん』解いてドーブルの姿です。

だつて子供の姿だと追いつかないどころか距離が離れていくんだもん。

サンヨウシティの路地裏で『へんしん』解いて『でんこうせつか』もどきで追いかけてました。まる。

さて、現状はーとなると、

「しっかし、なんで誰もこんな珍しいポケモンを奪おうとしなかったんだ？」

「そりゃあ、あのガキのポケモンだと思ったからじゃねーか？」

「…単純にここらは俺らの縄張りだからだろ。」

草むらに身を隠しながらストーキングしてます、はい。

流石に一对三はきついからね。多分。

あの落ち着いた黒服がリーダーかな？ポケモンセンターでドケー！とか言ってた奴だ。

がつしりした体格で目付きが…あれだ、サカキみたい。

「おい！そろそろ袋を持つの代われよ！」

「何でだよ！俺は誰か来てないか確認するという仕事があんだよ！」

あの袋持ったうるさい黒服は背が低くてポケモンで例えるとナゲキみたい。へっへっへの人だ。

周囲の確認しているらしい黒服はヒョロっとしてて背が高い。例えるならダゲキかな？ズラカレーの人だ。

「よし。ここらでいいだろう。森に入って着替えるぞ。」

「リョーカイ！」

あ、着替えるんですかそうですか。

…奇襲をかけるか。

く〇く〇く〇く〇く〇く

さつき奇襲するといったな、あれは嘘だ。

いや、正確には奇襲というか目を盗んで袋だけ回収しようとしたんだけど

「メイコさん。」ヒソヒソ

「…ブールなの？」

「うん。助けるよ。」

「まだいいわ。あんたはこいつらのアジトの場所を調べてからポケセンに戻って。」

「え?でも」

「いいから!」

というやりとりの末、ストーキング続行中です。

「着替え終わりました!」

「よし。アジトに戻るぞ。」

お、動いたな。木の上を飛び移って追いかける。

イヤ、ポケモンの体って便利。走っても脇腹が痛くなることは無いしジャンプ力は

段違いだし。

「…!誰だ!!!」

ひいつ!?

「ど、どーしたんすか、アニキ。」

「…いや、何かの気配を感じてな…気のせいかな。」

「び、びつくりさせないでくださいよ。」

・・・少し自重します。

~~~~~

二番さん、久しぶり。あのね、この洞窟の名前をね、教えてくれる？

『ココハ、チカスイミヤクノアナトヨバレテイマス』

あの黒服…じゃないのか、今は。じゃあドロボーたちはここに入っていた。

どうする？ 後を追う？ それともここで戻る？

『コノチカスイミヤクノアナニイルドロボウニカンスルジヨウホウヲエマスカ？』

…え？ 何だつて？

『コノチカスイミヤクノアナニイルドロボウニカンスルジヨウホウヲエマスカ？』

…欲しい。欲しいけど。「二番さん、漢字表記とかのアップデートして欲しいかな。」

ん？ 今俺なんか言つてた？

『アップデートトチュウ……アップデートカンリヨウ。サイキドウシマス』

え？ え？ なんて？

『再起動シマシタ』

あつハイ。アツガイ。

・・・なんだったんだ？まあいいや。中に入ろう。

「ゴロゴロ！」

ん？ダンゴロだ。…そうだ！

「へい、そこのダンゴロ君。」

「ゴロ？」

「ちよつとモデルになつてくれないか？」

## 対決準備～突入～

「あのねえ、急に私に変身しないでよ。」

「ごめんごめん。必要な事だったんだよ。」

今から地下水脈の穴にいるドロボーのアジトに潜入します。

その為には人の姿だとばれやすいし、かといってダブルのままだと見つかりやすいので、このダンゴロの姿を借りました。

「とうるか、なんで『へんしん』を知ってるの?」

「え? 技だったの?」

「え?」

・・・あれえ?

「あー、そうだよ。あ、それよりここにいるドロボーたちのすみかかって知らない?」

「え!! あいつらと戦うの!?!」

「違うよ。僕のパートナーが捕まったから取り返しに来たんだよ。」

「ふーん。止めといた方が良くない?」

「え、何で?」

「あいつらの使うポケモンは凄く強い。誰も勝てないわ。」

「やってみなきゃ分かんないだろ？」

ダンゴロは何も言わない。

二匹のダンゴロの歩く足音が洞窟に響く。

「・・・なんで何も言わないの？」

「私たちダンゴロのリーダーがあいつに捕まったから。」

「え、それは・・・その・・・ご愁傷様です。」

「フフ・・・死んではないわよ。リーダーはあの目付きが鋭い人の手持ちに居るの。強いわ

よ？リーダーは。」

「むう・・・何のポケモンが出るか分かれればやりようはあるよ。」

なんせ前世ではダブル一匹でガブリアスをボッコにする妄想をしていた位だから  
ね！

「ふーん？じゃあ教えてあげるわ。」

「え？」

「よく聞いてね？デブの人間が使うポケモンはドリリュウズ。技は『ドリルライナー』『き

あいだま』『じしん』『あなをほる』」

「う、うん。」

「ひよろつとした人間が使うポケモンはゼブライカ。技は『ワイルドボルト』『でんこうせっか』『10まんボルト』『とっしん』」

「ほうほう。」

「そして残りの一人、あの四人組のリーダーが使うポケモンはギガイアスとサザンドラ。」

「ん、待った。四人組？」

三人組だったよな？

「そう。一人はポケモンを何処かに運んでいく人間よ。ろくなポケモンを持ってないから省略するわよ。」

「あつハイ。」

なるほど。三人がポケモンを捕まえる役目で一人がポケモンを…売るんだろう。

「サザンドラは強いわ。確認できた技は『かみくだく』だけよ。」

「…『かみくだく』だけでギガイアスを捕まえられるの？」

「そういうこと。リーダー…ギガイアスの技は『うちおとす』『パワージェム』『じしん』『ロックブラスト』よ。」

「分かった。」

…どうにかして二対一にすればあるいはつてところかな？

「あいつらのすみかはあそこを左に行った場所よ。」

「うん。案内ありがとう。ここからは僕がいく。」

さて、どうすれば二対一にできるかな？

## バトル!～仁義なき戦い～

ドロボーたちのアジトはそれなりに豪華?で、奥には幾つかの鉄の檻に色んなポケモンが捕まっている。

メイコさんは袋に入れられたまま檻に入れられている。

「おい!チビはまだなのか!」

「後十分で来る!いちいち怒鳴るなデブ!」

後十分で倒しきらなくちやならんのか。・・・メンドイ。

あ、コロモリ。・・・いいこと思い付いた。

コロモリに『へんしん』する。そのままドロボーたちの上に飛んでいく。

「!・・・なんだ、コロモリか。」

「おい、ノツポ。」

「なんですか、アニキ。たかがコロモリですよ?」

「全てのポケモンにトレーナーのポケモンの可能性が有ると何回言えば解るんだ!」

「は、はい!いけ!ゼブライカ!」

「ヒヒーーン!」



やっべー！

「ゼブライカ！ 『10まんボルト』！」

『へんしん』解く・・・暇が無い！逃げる！

「ブルヒーーン！」

バチイ!!!

あぶねー！紙一重！

「へっへっへ。外してやがんの。」

「うるせえ。」

「ふん。まあ、近づけさせなければいい。」

「アイアイサー。戻れ、ゼブライカ。」

今!!!

『でんこうせつか』からの再度『へんしん』！

「何っ！」

うる覚えのロードローラーだ！

「ぐへえ。」

「ノツポ！くそ、なんでこんな所にカビゴンが!？」

「うろたえるなデブ！そいつはメタモンだ。」

「メタモン!?それはそれでどうなんです!？」

喋ってる暇は無いぜ。

おもいつきりジャンプ!かーらーのー?

「のしかかりだ！」

「カービー!!」

「ウワアアアアア!!」

ベターン!

「・・・成る程、強いな。良いポケモンだ。」

む、アニキを残しちゃったか。・・・二対一とは何だったのか。

「ならば本気で相手をしよう。いけ、ギガイアス、サザンドラ。」

「グツガア!」

「ズギャース!」

そうだった、アニキはポケモン二匹持ってたんだった。

・・・二対一!計画通り・・・!ニヤリ

「サザンドラ『かみくだく』、ギガイアス『じしん』。」

ギガイアスが力を溜めて、サザンドラの三つの頭がこっちの頭と両腕を狙う。

ここはまず、『へんしん』を解く!

サザンドラの鋭い歯がカビゴンを噛み砕く。が、カビゴンはインク。サザンドラは相

手を見失う。

「ギャズー!?!」

俺はサザンドラの真ん中の頭にしがみつくと!

次の瞬間、ギガイアスの『じしん』が洞窟を揺らす。

「む、当たってないだど? どういう事だ!」

教えるかよバーカ。

尻尾のインクをサザンドラの目に塗って視界を潰し、ギガイアスに跳び移る。

「ググウ?」

「な、ドープルだど?!」

「ドブドブ!」

特に意味の無い威嚇をする。

よし、インクの色は青! インクを水に変える!

「ブクブクドブドブ!」

「グガア!」

こうかは ばつぐんだ!

「グググ…ガア!」

流石に倒れないか。一旦離脱!

「ふん、『へんしん』に『アクアテール』か。俺のギガイアスは倒せそうだが、サザンドラはどうかな?」

インクの色はピンク。鮮やかに発光するインクを飛ばす。

『マジカルシャイン』  
「ドブドブドーブ。」

「スギャ!ズ、ギャア、ス!」

「何!?!」

のんびりしてるからこうなる。念のためもう一回。

インクが光りだす。

「サザンドラ!かわせ!」

じゃあギガイアスに『マジカルシャイン』。

「グガッ!」

「くっギガイアスにだど!?!」

二対一での利点は普通無い。だが!トレーナーが一人なら!それは一対一と何ら変わりない!

「今の立ち位置はアニキ<ギガ<ブル<サザンとなっています。よって全体攻撃の『マジカルシャイン』が単体にしか効いてません。by二番」

なんか聞こえた!けど気にしない!

「くそっ！戻れ、サザンドラ！」

アニキがサザンドラをボールに戻す。

メイコさんなら良い判断ねとか言いそうだな。ギガイアスのタイプは岩。こつちのタイプ一致技の効きが悪い。

関係ないけどね！

「ドブドブ！」

「ギガイアス！『パワージェム』！」

「グガガガッガー！」

うわ、なんか飛んできた！『まもる』！

「ふふふ。『へんしん』『アクアテール』『まもる』に見たことの無い技……見切ったぞ  
！」

混乱させてやる。

インクは茶色！『あなをほる』！

尻尾をドリル代わりに地面を削っていく。

「はあ？」

アニキの呆けた声が聞こえて来た。

楽しい！

「ドブリャア!!!」

「グガッ!」

こうかは ばつぐんだ!

一瞬の気の緩みが命取りだ!

「ギ、ギガイアス!」

「グ・・・ガア・・・」

ギガイアスを倒した! 経験値うまうま!

「・・・仕方ない。サザンドラ、本気でいけ。」

「「ズギヤスギヤー!」」

うん? 腕の頭も吠えたぞ? なんか変わるのか?

「サザンドラ、『トライアタック』」

「「ズギ、アーッ!」」

右頭が氷のブレスを放ち、左頭が放電し、真ん中の頭が炎の息を吐く。

あー、『まもる』しかないな。

「ドブッ。」

「よし、『ドラゴンダイブ』だ!」

やべっ! 『あなをほる』? 当たらない。『そらをとぶ』? ここは洞窟だ! ならば!

『こらえる』  
「ドーブー。」

「ズギャー!!」

ぐっ! なん．．．とか．．．こらえた!

「なんなんだ! 貴様は!」

「ドブドブ!!!」

人間です!!!

「があー! 貴様は俺が! ここで倒す! 覚悟し!」  
「うるさいわよ。」

パーーーーバーーーーラー! !

「ズギャー!」

「があ!」

これは．．．『ぼくおんば!」

「メイコさん!」

「つたく。一回町に戻れって言ったでしょ? このアホ。」

「な、どうやって檻から出たんだ!」

「そりゃ『じしん』うったら檻は歪むわよ。」

「言われてみればメイコさんがいた檻は…いや、全部の檻が壊れて中にいたポケモン達が出てきている!」

「なんだと!？」

「さあ、総計三十匹。サザンドラ一体でどれだけやれるかしら?。」

「む、くく…っ!」

「当然逃がさないわよ? ブール、『くろいまなぎし』なり『とうせんぼ』なりしなさい。」

「ドーブブ!」

『とうせんぼ』でいいかな。インクは…あ。やっぱり『くろいまなぎし』で。インクは黒。

ジー…とサザンドラを見つめる。

「ズ、ギギアア!」

オツケー、かかった。

「デンチュラ達はそのに転がってる奴等を縛って。ブールはサンヨウシテイに戻って  
ジュンサーさんと呼んで。今すぐ!」

「ドーブ!」

洞窟…地下水脈の穴からだと、

「うおっ!何だ!?!」

なんか背の低いやつと鉢合わせたのでとりあえず気絶させておく。

どう考えてもあいつらの仲間だしね。



キングクリームゾン！　　時はとんで……

んあ？……、これは……。

「見知らぬ天井だ……。」

「何言ってるのよアホ。」

「あ、メイコさん。あれ？なんで僕は寝てるの？確か、サンヨウシティまで走って、ジュンサーさんを見つけて……それで……」

「疲労でぶっ倒れてポケセンへ連れていかれたのよ、アホ。ここはポケセンの介護室。」

マジか……。確かに考えてみればこっちに來てから……三日!?三日しか経ってないの!?

「あー、そりゃ倒れもするわ。あ、ドロボー達は？」

「めでたく刑務所送りよ。捕まってたポケモンたちも皆解放されたわ。今は奴らの取引ルートを探っているそうよ。」

「ふーん。良かったね。」

「バカじゃねーの？今の自分の姿をよく見なよ。」

え？あつドーブルの姿だ。

「町に行くまでに『へんしん』したのは偉いけど、倒れた時に『へんしん』が溶けちゃ意

味無いじゃない。」

「でも、それがどうしたの?」

「はあー。あんたはマスゴミの恐ろしさを知らないの? そのドアの隙間から外を見てみなさい。」

「うん。」

白いベッドから飛び降りて言われた通りにしてみる。

「本当に……ポケモン……!!」

「……人が……!!」

「あの泥棒を……!」

「皆さん! 落ち着いて下さい!」

うわあ。怒鳴り声のせいで上手く聞き取れないけど、これは……。

「何? 僕有名人なの?」

「そーよ。新聞でも、「他地方のポケモンがポケモン泥棒を退治!」「メタモン以外が『へんしん』か?」「ポケモンがトレーナー、許されるのか」……まだまだあるわ。あ、顔写真。」

「うわあ凄いい。」

何が凄いつて情報が伝わる速さがヤバイ。

「ああ、そう言えばあんたが倒れてから二日たってるわよ。」

「アイエエエ!? 二日!? 二日ナンデ!」

「あたしに聞くな! さて、どうする? 何故かあの b b a、ドールあんたがトレーナーだと発表しやがったし、ここでのある意味英雄だしで、マスゴミがあんたを逃がすとは思えないけど?」

うーん。こつそり逃げ出すか…。

「あ、ハッサンとリュックはそこに置いてあるわ。」

「え、リュック?…ああ! 置きっぱだったっけ。」

メイコさんが捕まってそれどころじゃ無かったしね。

「じゃあ荷物は全部あるのか。…窓は?」

「有るけど、小さいし高いところにあるし、あたししか通れないわ。」

「じゃあメイコさん、ポケセンの前にもマスゴミが居るか見てきて! じゃなくて見えて下さい。」

「はいよ。ちよつと待つてな。」

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

「ヤバイわね。どつから湧いてきたってぐらい居るわ。」

「うーん。そうか…どうしよ。」

結局夜になるまで何も出来なかったよ。

「…あの窓の外にマスゴミは?」

「さつきは居なかったけど、めぎとい奴ならあたしが出入りしたのを見てるでしょうね。」

これで窓から脱出は出来なくなったと。

…やらかしたな。

「メイコさんは何か良い案は無いの?」

「そうねえ。『おしゃべり』か『ばくおんば』でマスゴミを潰す?」

「却下です。」

「でしようね。」

ガチャ

「あら、起きたのなら教えてくれたら良いのに。」

「あ、ジョーイさん。お疲れ様です。」

「あのマスゴミ達は?」

「なんとかポケセンの中から追い出したわ。流石に営業妨害だしね。」

ポケセンの中にマスゴミは居ない…か。なら、今しかない!

「それにしても、本当に喋れるのね。この地方にはそんなポケモンは居ないから珍しいのよ。」

「ジョーイさん！少し手伝ってください！」

「え？」

~~~~~

「こちら、サンヨウシティポケモンセンター前です。こちらにあのポケモントレーナーのドーブルが居るとの情報が入っています。」

似たようなことを延々と繰り返す報道陣がポケモンセンターを囲んでいる。

普通のポケモントレーナーのためにポケモンセンターに入る為の道は空けているが、入る人は顔を覚えられ、出てきた人にはキャスターが質問責めにするという、マスゴミの補食の道と成り果てていた。

「あ、おい！あいつだ！あいつとくダネが出てきたぞ！」

そんな補食の道に敢えて身を晒すドーブル。ポケセンから出てきた彼女に報道陣が殺到する。

「貴方が泥棒を退治したんですか！」「トレーナーカードを見せてもらっても宜しいですか！」「本当に喋れるんですか！」

と、ドーブルの体が溶け出す。

「う、うわ!」「な、なんなんだ!」「ど、どうなってんだよ、おい！」

ドーブルの中から出てきたのはジョーイさんだった。

「皆さん!落ち着いて聞いてください!見ての通り、あのポケモンは他人を『へんしん』させることが出来ます!私は、部屋に入った時にあのポケモンに襲われてあんな姿にされてしまいました!そして、あのポケモンは、すぐに外に出て行きました!」

「「なんだとー!?!?!」」

「探せ!奴は近くにいるはずだ!」「せっかく捕まえた特ダネなんだ!」

「いや、あいつは『へんしん』出来る!きつとここの誰かに『へんしん』しているぞ!」「お、お前!ポケモンだろ!」「んなわけねーだろ!!!そういうてめえこそポケモンなんじゃねーのか!」「女だからって可能性が無いわけじゃねーんだよ、特ダネ!」「だから違うって言うてんでしょこの脳筋!どうせあんたが特ダネなんだでしょ!」「お、おい!お前は…違うよな…?」「あ、ああ、違う!お、お前こそ…違うよな?」「ち、違うに決まっているだろう!!!」

くくくくくくくくくくくく

「うわあ。これはヒドイ。」

「何言ってるのよ、あんたが考えた案でしょ。」

実は未だにポケセンの中に居ます。あ、ジョーイさん帰ってきた。敬礼でお迎え。

「お疲れ様です!」

「フフフ。楽しかったわ。こんなに興奮したの久しぶり!これでも小さいときは演劇を

しておこづかいを稼いでいたのよ？」

「さ、さいですか。」

なんて凄いいことしてるんだ、この人は！

「これでいつも通りに『へんしん』してここを出るだけなのよね？」

「うん。ちょうどあのトレーナーさんが手伝ってくれるらしいしね。」

どうみてもNさんだけだ。

「おねがいます。」

「いやいや、こんな面白い物を見せてくれたお礼だよ。さあ、そろそろ良い頃だろう、行こうか。」

「ジョーイさん、お騒がせしました。」

ペコリ。

「フフフ。ベストウィツシュ、よい旅を。」

夜の散歩～with Mr. N～

夜に出発は失敗したなあ。

Nさんが居なかったらあの混沌カオスな状況のポケセンに逆戻りだったよ。

あ、今は三番道路を歩いていきます。夜だけ。

「僕はナ：Nっていうんだ。よろしく、ポケモンくん。」

「知ってると思いますけど、ブルです。よろしくお願いしますNさん。」

「あたしはメイコよ。つたく、鳥目だからよく見えないわ。」

「ハハハ。君たちは裏表がないんだね！」

はあ？つて顔をしたんだろうな。Nさんは続ける。

「ああ、いや、そんな顔をしなくても。僕はポケモンどもの気持ちが分かるんだ。」

「あー、そんな設定だったつけ。」

「？なにか言った？」

「何も言っていないわ。というか、気持ち分かるんでしょ？」

ああ、また俺が入るには少し高い次元のやり取りが。

「そうなんだけど…：どうにも君たちの気持ちは…：その…：」

「複雑？」

「うん…いや、複雑というより…多い？うーん、上手く言葉に出来ないな。」

「そりゃあ、人間の心がそんな簡単に読めるわけ無いじゃない？」

「え？」

「フア!!」

「え!?!ちよつとメイコさん！」

「なによ。」

「そこまでばらしちゃうの!?!」

「良いじゃない。」

「えーと、え?君たちは…人間？」

「はあ。観念するか。」

「はい。正確には人間だったころの記憶があるんです。」

「そういうこと。」

~~~~~

「つまり、前の世界ではポケモンはゲームの中の話なのかい！信じられないな！」

「別に証拠が有るわけでもないし、信じるかどうかはあんた次第よ。私は外で寝るから。」

「じゃっ。」

地下水脈の穴で寝る準備をしています。ここに来るまでに前の世界の事をNさんに教えました。

「うーん…信じるよ。」

「あ、信じるんですか。」

「うん。」

気さくな人だなあ、Nさんは。

「寝袋引きましたし、寝ますか？」

「…うん。僕は少しポケモンどもだちと話してから寝るよ。」

「そうですか。じゃあお先に。」

少し寝にくいな…。すやあ…。

くくくくくくくくくく

…ブル君は寝たみたいだね。

メイコ君は外で寝ると言って出ていったし。

「別の世界…か。」

かなり凄まじい体験をしたんだね。

この二人は一度死んだ後にこの世界に転生したと言った。

ブル君は子供なのに自ら高いビルから飛び降りたとか。とてもじゃないが、真似は

出来ない。そんなただの夢をそこまで信じる事は出来ない。

そして、ブルー君がいた世界ではポケモンはイコールでゲームということらしい。

「ゲーム、か。」

あいつらも、ゲーム感覚なのかな……。

ゲーム感覚で大量のポケモンを傷つけて、笑って。

それは……酷いと思う。

ポケモンどもだちのためにどうにかしたい。

でも、僕は無力だ。

こうやって逃げ回る事しか出来ない。

「僕は……どうしたら……?」

「自分の信じる道を進めばいいのよ。」

「…メイコ君?外で寝るんじゃない。」

心配と、確信と、なにか暖かい物を感じる。

「そのメイコ君ってやめてくれる?あたしは、あんたみたいな暗ーい顔した奴が大嫌いなよ。相談しなさい。拒否権は無いわ。」

凄く押ししの強いポケ……いや、人だな。口調もぶつきらぼうだし、一見怒っているように見える。

「でも、優しいね。うん。相談させてもらおうよ。」  
あいつらの事を・・・僕の父親と、プラズマ団の事を。

## N, s history 過去と今

僕は貴族…金持ちの家に産まれた、自分で言うのもなんだけどお坊っちゃんなんだ。僕の両親は二人とも良い人だったよ。

僕が産まれた時からともだちの…ポケモンの気持ちが分かる事に気付くまでは。

母はこの事に気付くと、僕を嫌悪し始めた。「なんでこの子はそんな気味の悪いことを言うのだろう」ってね。

父は、五歳の僕を傷だらけのポケモンしかいない箱庭に閉じ込めた。

この箱庭にいたポケモン達はだいたいポケモンハンターに傷つけられていた。残りはトレーナーに捨てられたポケモンだった。

僕は箱庭に閉じ込めた父を尊敬した。

ともだちはいるし、衣食住も揃っていたし、何より母の冷たい目を向けられなくてすんだから。

外を知らなかった僕は「この世の人は皆悪い人。僕と父だけが良い人なんだ」と考え

た。

だから、父から「この間違った世界の為に手を貸してくれ」と言われたとき、すぐに頷いたんだ。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「それが間違いだったんだ。」

「・・・」

「メイコく…ちゃん？」

「…はっ!?寝てない、寝てないですよ!」

「ええと…つまらなかつたかな？」

「いや、ちゃんと聞いてたし。聞き漏らしてないし。…なによその目は。疑ってるの？」

「え?いや、疑ってなんかいないよ?」

「ふーん?…まあ、五、六歳のガキんちよだったんだし、そんな状態だったんならむしろ当然の判断よね。」

「・・・聞いてたんだ。」

「やっぱり疑ってたんじゃないの!」

「ま、まあまあ。」



少年は「前世の記憶さ。おまえ、ちよつとこつちにこいよ」とかいつて僕を近くの路地裏まで連れていった。

そこで僕は初めて第三者から見たプラズマ団の行動を知ったんだ。

演説は騒音になり、ポケモンハンターを私刑にして、人のポケモンと野生のポケモンをいっしょくたに解放した。傷付いたポケモンはポケモンセンターにも行けずに傷が悪化した。

僕は動揺して、ポケモンバトルを挑んだ。結果はぼろ負けだった。手も足も出なかった。

～○○○○○○○○

「僕はプラズマ団を抜けた。今はこうして一人旅をして、人とポケモンの生活を見学させてもらっているんだ。」

「ふーん。だから別の世界が在るって知ってたのね?」

「知ってたというか…三人も同じ事をいう人がいるんだ。信じない訳にはいかないよ。」

「…成る程お坊っちゃんね。」

「え?」

「何でもないわ。流石に眠いから、おやすみ。」スヤースヤー

「もう寝たの!?!…僕も寝ようかな。」



この人たちなら…もしかしたら…。

## 一体六～V S. N～

ドローモ、ミナニサン。メイコです。

さつきちらつと外をみたらちようど日の出だったから現在時刻は午前五時つてところですよ。

「・・・誰に言ってるんだか。」

ブルルがたまに実況してるのよね。本人に自覚は無いだらうけど。

「さて、どうやって起こすか。」

サンヨウシテイでは急降下ダイブを鳩尾にぶち当てて起こしたんだけど、今は寝袋にくるまつてるから顔面にしかダメージが与えられない。

「『おしやべり』?・・・生ぬるいわね。そもそもブルルに『おしやべり』は効きにくいし。」

ブルルは特性が『マイペース』だから混乱しないのよね。と、なると。

「残りは『ばくおんぱ』『はねやすめ』『そらをとぶ』。∴『そらをとぶ』は前回とかぶるし、『はねやすめ』は攻撃技じゃないから・・・」

・・・流石に可哀想だよなあ。

「ゴツゴツしたの？」

「あら、ダンゴロ。」

未だに不思議なのよね、この鳴き声の意味が分かるのが。

「あ、良いこと思い付いた。ねえ、ちよつといいい？」

「ゴ<sup>え</sup>ロ？」

「起きろオオオ！」

「ぐはあつ!!!」

~~~~~

ドーモ、ミナ||サン。まさかダンゴロを落としてくるとは思わなかったブルです。

「ゴロゴロ？」

「だ、大丈夫だよ。って君はあの時の！」

「あら、知り合い？」

「うん。ドロボー達のアジトまで案内してくれたんだ。改めて、ありがとう！」
「ゴロ！」

寝袋をしまう。と、隣の寝袋がもぞもぞ動き出す。

「ふああ。あ、もう二人とも起きてたの？」

「あ、Nさん。おはようございます。」

「おはよう、寝ぼすけお坊っちゃん。」

「ん、あ、そのダンゴロ、君と友達になりたいって言ってるよ。ふわあー。」

「ゴツゴロ!?ゴロゴローロゴロゴロ!ゴツゴツゴロロ！」

成る程わからん。

「メイコさん。」

「通訳はしないわよ。」

「あー、うん。ちよつと待って。」

ダンゴロに『へんしん』する。

「はい。」

「だからなんで私に変身するのよ。」

「おんなじ姿じゃないと何言ってるのか分からないんだよ。」

「はあ!?!なに、障害者なの!?!」

「いや、そういう訳じゃないけど…。」

「あ、そう。そういうえば、私のアドバイスは役に立った?」

「あー…うん。おかげさまでかなり楽だったよ。」

「リーダー強かったでしょ。」

「…アニキの使い方が悪くてね。」

だって技何使った? 『じしん』と『パワージエム』だけだよな? 『じしん』はサザンドラに乗ってかわしたし、『パワージエム』は『まもる』でかわしたし。

「正直、それでも…。」

「ああ、あのギガイアスのこと? あれはねえ。ギガイアス自身は強いんだろうけどねえ。あたしだったらもつと上手く使えたけどねえ。」

「む、ぐぐぐ。なら! 私が強くなってあなたたちを倒します!」 ダダダダダ

あ、行っちゃった。

「あれ? 君の手持ちに入れるんじゃないかなかったの? あの子にはその気があったと思うんだけど。」

「フラグは折るものよ。」

…え、フラグ!?! フラグたってたの!?!

「まあ、いまのところこいつの手持ちはハッサン一匹で良いんじゃない？強くなってから捕まえた方が効率が良いし。」

「あ、捕まえるつもりではあるんだ。」

「当然よ。『がんばろう』持ちは強いだよ。あ、今日はブルとNをしごくから。」
「え？」

～○○○○○○○○

「ご飯を食べてから外にあつたちっちゃい原っぱに移動。」

「まずは普通にバトルよ。お互いに全力で戦う事。」

「分かったよ。行け、チヨロネコ！」

「にゃん！」

「ハッサン！お願い！」

「ババウ！」

「では、ブル対N！試合開始！」

「チヨロネコ、『いちゃもん』！」

「ハッサン、『ふるいたてる』！」

チヨロネコがにゃんにゃん叫び、ハッサンが赤みを帯びる。

うーん、『いちゃもん』か。面倒だな。

「なら、『とっしん』！」

「『すなかけ』だ！」

ハッサンが勢い良く飛びかかるがチヨロネコは足元の砂をハッサンの目に向けてかける。

「バウツ！」

む、目に入っちゃったか。『とっしん』が外れる。

「よし、『みだれひつかき』！」

「『まもる』！その後『とっしん』！」

チヨロネコが爪を伸ばして襲いかかるが、ハッサンが張った緑のバリアに弾かれる。そしてから空きのボディにハッサンが『とっしん』する。

ドガツ！

「にゃー！」

オツケー、当たった！

「チヨロネコ戦闘不能！」

「うん。よく頑張ったね。お疲れ様。」

Nさんがチヨロネコをモンスターボールに戻す。

「マメパト、行ってくれ！」

「パット〜♪」

マメパトか。飛ばれると厄介だね。

『でんこうせっか』！」

『ふるいたてる』！耐えてくれ！」

マメパトがハッサンにぶつかる。ハッサンは耐えきり、赤みを増す。

「よし！『とつておき』を見せてやれ！」

『エアカッター』だ！」

マメパトが『エアカッター』を放つが、そこにいたはずのハッサンは既にマメパトの上にいる。

「な、瞬間移動!? どう言うことだ!?!」

「そのままぶち落とせ!!!」

「ババウー！」

「ボヒユウ！」

「ん、マメパト戦闘不能! N、ポケモンはまだいる?」

「あと四匹いるよ。…このともだちは強いけど、良いの?」

「あたしの言葉聞いてた? 『全力で戦う事』って言ったはずよ。」

「…行け、ギギギアル。」

「ギアギアギア」

「バウツ！」

ギギギアルか。鋼の身体はハッサンの技を通しにくい。

「ギギギアル、『ギアチェンジ』。」

「ハッサン、『ふるいたてる』！」

「ギギギ」ガチャ、ガチャン

「バフツ！」アカイー

むう、ここで『いちやもん』が効いてくるな。

個人的には『ふるいたてる』で限界まで攻撃を上げたいんだけど、いちいち間に他の技を挟まないといけない。

「もう一度『ギアチェンジ』。」

「あーくそ！『とつしん』！その後『ふるいたてる』！」

「ガガガ」ガチャ、ガチャン

「ババウツ！」

あ、『とつしん』外れた。けど着地と同時に『ふるいたてる』してる。やっぱりバトルセンスあるね。

「『じゅうでん』。」

『とっしん』！』」

今度は当たったけど、あんまり効いてないな。

しかし、淡々と技を出していくNさんは怖いな。

「ハッサン、『まもる』だ！」

「ならもう一度『じゆうでん』。」

ハッサンの周りに緑のバリアが張られるがギギギアルは電気を溜めて攻撃はしない。

しまった、テンポを崩された。

『『チャージビーム』。』」

「だけど『まもる』！あつ！」

『いちやもん』忘れてた！

ハッサンはバリアを張れず、『チャージビーム』をもらにくらう。

「ハッサン！」

「バ…ウ…。」

「ハッサン戦闘不能！Nの勝ち！」

「負けた〜！お疲れ様！ハッサン！」

「君のともだちは強いね。」

「はい。正直、僕に不釣り合いなほど強いですよね。」

「つたく、『いちやもん』忘れて『まもる』連発とかダメダメね。…まあ、他のポケモンがいればもうちよつといけただろうけど」

「おっしやる通りで。」

あそこは『とつておき』のが良かったかな。…緊急回避にも使えるし、押さえつけも出来るし、『とつておき』強くね？

「Nはチョコロネコの『すなかけ』と『いちやもん』は流石だったわ。ノーマルタイプが効きにくいギギギアルを出したのもグッド。ただ、マメパトが微妙ね。技は？」

「ええと、『エアカッター』『でんこうせっか』『かぜおこし』『はねやすめ』だよ。」

「ふーん。なら『エアカッター』のあとは『でんこうせっか』でハッサンの『とつておき』をかわしてから攻撃って感じのが良かったわね。」

「成る程。」

やっぱりメイコさんはすごいなあー！

流石メイコさん！年季が違うね！

厨ポケパーティー～ゲームとリアルの違い～

あの後、俺自身がNさんの残りのポケモンとバトルしました。

辛かった…よ…。

既に強化されているギギギアルを『キノコのほうし』で寝かせてから『だいもんじ』三回当てて倒したんだけど、次に出てきたデスカーンがなあ。

『シャドーボール』投げつけたら『ナイトバースト』撃ってきたんだよ。

デスカーン、もといゾロアークは『わるだくみ』を積んで『ナイトバースト』を連射してきたんだよね。お陰で近づけ無いから遠くから『どくどく』投げつけて『まもる』したり『あなをほる』で逃げたりしてなんとか倒したよ。

…最後のデスカーンは…考えたくもないよ…。

技は『どくどく』『おにび』『まもる』『たたりめ』。

後は…分かるね…？

ミスって『どくどく』触れちゃった時は負けたと思ったよ…。

「死にかけてるわねえ。思考がダダ漏れよ？」

「そんな事よりポケモンセンターに連れていかないと！」

「正直、引き返したくないのよ。でも…仕方無いか。戻るわよ。今回はあたしが雑魚共を倒していくわ。」

お願います。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

いやー！スツキリ！ジョーイさんは有能だね！

「ウフフ、また来てね。」

「そんな毎日来なきや行けなくなるほど、あたしらは弱くないわよ。」

「フフフ。それもそうね。」

…せいぜい三回しか来てないんだけどなー。

「あ、そうそう。シツポウシテイの前に強いトレーナーが居て初心者狩りをしているみたいなの。あなたたちなら大丈夫だと思うけど、気を付けてね。」

「分かったよ、ジョーイさん！」

「それは酷いことをしますね。灸を据えないと。」

「はん、どうせガキでしょ。どうにでもなるわよ。」

「…ええと、気を付けてね？」

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

「おい！お前ら！バッチはいくつだ！」

あ、あれが例の初心者狩りかな？見事な短パン小僧だ。

「僕は持つて無いよ。」

「俺は…一つだけ。」

「俺？あんたその一人称はバトルの時に使うんじや無いの？」

「Nさんと被るから変えた。とうかそんな分け方してないよ。」

「ふん。ゼロと一個か。まあいいや。そこの一個野郎！俺と勝負だ！」

「ええ〜。」

「俺が勝つたらお前のバッチをいただく！」

「はあー？」

どうやら金めあてではなく、ライバルを減らしたいだけのようだ。…とはいえ。

「やりたくないなー。」

「何アホなこと言ってるのよ。こんなガキ、あっさりボコして身ぐるみ剥ぐわよ。」

「メイコく…ちゃん。身ぐるみ剥ぐはやり過ぎだよ。せいぜいトレーナーカードの没収

ぐらいにしないと。」

「あーもう！勝負するのか、しないのか！しないんならバッチを置いてとつとと行きや

がれ！」

あー。こういうジャイアンタイプは嫌いだな。

「分かったよ、やるよ。行けっハッサン。」

「バウツ！」

「そこなくちや！行けっ！ギルガルド！」

「ギルリン！」

うえっ!?ギルガルド!?

「見たこと無いポケモンだね。…ブルー君は知ってるのかい？」

「はい、Nさん。めんどくさい相手です。」

特性『バトルスイッチ』のフォームチェンジが厄介なポケモンです。

「うわー！そのポケモン格好いいわねー！」

「へ？」

メイコさん!?何してんの!?

「凄いいー！剣と盾ね!!」

「フツフツフ。そうだろう！俺のポケモンは格好よくて強いんだ！」

「へー！じゃあこのポケモンのどこが強いのか!?!」

メ…メイコさんが…壊れた!?

「メイコさ」

「しっ。ブルー君、ストップ。」

「え、なんで。」

「メイコ君の作戦だよ。今はメイコ君に任せて。」

「…分かりました。」

Nさんにそんな事言われたら信じるしか無いか。

「…今の内だよ。」

「え？」

~~~~~

「・・・と言うことだ！分かったか？」

「成る程～！そんな面白い特性を持つてるのね！」

「話が分かるペラツプだな！色違いだし、どうだ？あんな奴らじゃなくて俺と一緒に来ないか？」

「ん～。どうしよつかなく。」

「俺のがお前を上手く使ってやれるぞ！」

「そうね～・・・あんたみたいなクソガキについていく訳ないでしょ。」

「は？」

「自分のポケモンの状態さえ分からないあんたよりも、あたしの考えを尊重するあいつ



らのがよっぽど強いわよ、バーク。」

「ギルア…ガリ…」

「はい。『おしやべり』だけでギルガルド、戦闘不能！バツカよね〜！ギャハハハ！！」  
「なんだと!?!」

成る程、それを狙ってたのか！流石メイコさん、年季が違う！

「卑怯だぞ！」

「君!!!」

「な、なんだよ。」

うわ、Nさんが怒ってる。

「君のポケモンの心配はしないのかい？」

「なんでだよ。俺のポケモンは強いんだぞ？心配することなんてないさ。」

「…君のギルガルドは君の事を信用していたから『おしやべり』を耐えていたんだ。せめて、『ありがとう』とか『ごめん』とか、声をかけてあげたらどうだい？」

「はあ？戦ってさえないのに『ありがとう』なんて言う必要は無いし、俺が謝る筋合いは無いね。」

「…そうか。ブルー君、本気でやってくれるかい？」

「勿論ですよ。あんなトレーナー、いや、人間として失格な奴はこのブルー様が直々にぶちのめす！」

「あんななんかに『様』なんてつける奴居ないわよ、アホ。ハッサンじゃギルガルドにダメージ入れらんないからわざわざあたしが出張つたのよ？あたしは疲れたから、後は自分で頑張りなさいよ？」

言われてみれば。ありがとうございます、メイコさん。

「ちつ。戻れ、ギルガルド。もう手加減はしないで！」

「手加減もなにも、戦いにすらなっていないじゃん。」

「うるさい！行けっ！ガルーラ！」

「ガルツシャア！」

ガルーラか…ガルーラ？いやまさか。

「ハツハツハ！見せてやる！ガルーラ、メガ進化！」

うっそだろ。不味すぎる。

ガルーラの袋の中にいた子供が成長する。

「な、何なんだ！あの進化は!?!」

「メガ進化よ。カロス地方での研究によって新たに見つかった『ポケモンの可能性』。：

さてはあいつ、転生者ね？」

「くっそ、ハッサン！ 『まもる』！」

「『ねこだまし』だ！」

パシパシーン！

『ねこだまし』が緑のバリアに弾かれる。よし、『ねこだまし』は出てきた瞬間じゃないと効果が無いから、技を一つ潰したのと同じだ！

『まもる』持ちか！だが『グロウパンチ』！」

『とっしん』でかわせ！」

赤みを帯びているハッサンが『とっしん』の勢いでガルーラの『グロウパンチ』をかわす。が、子ガルーラの『グロウパンチ』にあたってしまう。

「ハッサン!!!」

「バ…ババウ！」

よ、よかった…。『ねこだまし』が当たってたら負けてた。ただ、次に何か…それこそ一番道路のミネズミに『たいあたり』されただけでも倒れるな。

だけど、これで！

「ガルーラ、もう一度『グロウパンチ』だ！」

「ハッサン！ 小さい方に『とっておき』だ！」

ハッサンが子ガルーラを押しさえつける。

そしてすかさずガルーラを威嚇する。

「んなっ!? 技三つなのか!？」

「違う! ついさつきまで『ふるいたてる』を積んでいたのさ!」

「いつの間に…まさか、あの時!」

むしろメイコさんが気を逸らしてくれてた時以外に無いよね。

「だが六段階積んだとしても、メガガルーラを倒しきる事は出来ない! ガルーラ! 『じしん』だ!」

「ガ…ギユルウ…。」

「どうした! なんて『じしん』をしない!」

どうして…。

「子供が捕まっているんだよ?」

「それがなんだよ。」

あ、こいつ駄目だ。Twitterとかで顔晒しちゃうタイプの人だ。ポケモンに直接話しかけた方が良いか。

「ガルーラ、降参すれば子供は開放するよ? どうする?」

「グ…ガルーウ。」

「は? 何言ってるんだ! 『グロウパンチ』だ! 『グロウパンチ』で吹き飛ばせ!」

「グ…ガウ…。」

子ガルーラが元の姿に戻る。

「な、おい！」

「へえ。あの進化は自分で解けるんだ。」

「そうよ。ほら、ボール。」

「分かつてる。ハッサン、子供を返してあげて。」

「バウ。」

ハッサンが子ガルーラを優しくくわえて、ガルーラの元へ戻す。

「ガウ、ガルルウガ！」

「…ふざけんなよ！なに勝手にメガ進化解いてんだよ！」ゲシツ

「ガッ！」

短パン小僧がガルーラを蹴る。

「！！！！」

「使えねーな！戻ってろ！」

短パン小僧はガルーラをボールに戻して、新しいモンスターボールを取り出す。が、短パン小僧がボールを投げるより速く、Nさんが殴り飛ばす。

「ぐばっ!? な、何しやがる！」

「君みたいな奴が…ともだちを…使う…トレーナー…う…だつたら…僕は…。」

「がっ！うわっ！やめろ！やめてくれ！」

Nさんは短にんげんしつかくパン小僧を蹴り続ける。

「なんなんだい…君は…生きている…ともだちの…気持ちを…感じたことが…考えたことが…無いのか…？そんな君が…ポケモントレーナーだなんて…認められないよ…。」  
 「うぐっ！がっ！やめ、やめて！がふう！あ、あやま、ぐはっ！謝るから！ぎやつ！」  
 まずい、Nさんが暴走してる…でも、止めない方が良い気もしてくる。

「…ブール、止めないの？」

「バウ。」

「…。くくっ！」

その質問はズルいですが、メイコさん。

「Nさん！ストップ！」

「ブール君。止めないで。」

「落ち着いて！僕たちがこの短のうなしやろうパン小僧を攻撃しても、何にもならないです！」

「だけど」

「ムカついているのはNさんだけじゃない！」

「…分かったよ。」

Nさんが短くパン小僧から離れる。

「がはっ！ふうー、ふうー。直接、殴って、来るなんて、ずるいぞ！はー、はー。」

「知ったこつちや無いわよ。そんな事言ったら初心者相手にギルガルドとかガルーラとか出してくるな。そつちのがおもしろいのよ。」

「なんだと！」

「そこまで。」

誰かが声をかける。

後ろを振り返ると、赤い帽子に赤いジャケットを着た男性が立っていた。・・・いや

いやいや、嘘だろ？

「揉め事はポケモンバトルで解決。」

「君は…いつたい…?」

「レツド!?!」

## ポケモン協会トップ～伝説の男～

「君のポケモンは。」

レッドさん、声が小さいな。まあ、ゲームではどつかの山頂にいて、喋らないはずだし、仕方の無いことかな？

「お前、ポケモン協会の奴だな？」

「……。」

「ならちようどいいや。今ここでお前を倒して、俺が世界一つて事を証明してやる！行けっ！ガブリアス！」

「ガブツパー！」

うげ、ガブリアス!?!ギルガルドに、メガガルーラに、ガブリアス…。

「ま、真面目にやったら負けてた。」

「今さらなに言ってるの。」

「…それもそうだね、メイコさん。」

「二人とも、彼は？」

「え、えーと、あの人の名前は『レッド』。」



「ポケモン協会のトッププらしいわよ？」

「へえ。強いんだね。」

あ、レッドさんがモンスターボールを手に取った。

「ププリン。行つて。」

「プッピー！」

あ、ププリン。可愛い。じゃなくて！

「れ、レッドさん！勝てるんですか!？」

「やってみなきゃ分からない。」

「ぶ、あつはつはっ！プ、ププリン？ガブリアス相手に？あはははは！気でも狂ったの？

あはははは！」

確かにそういわれてもおおしく無い。そんな選出だ。ココドラとか、ダンゴロとかならまだしも。

「いやでも、フェアリータイプ入ってるんじゃない。」

「そもそもの種族値が違いすぎるわ。それにドラゴン無効だったって、ガブリアスはじめんタイプが入ってるわ。」

「そっか。となると、何らかの布石？」

「分身タッチで次のポケモンで…かしら。」

「いや、彼の目はあのプリンで倒すと言ってる…気がする。」

Nさんはレッドさんを食い入るようにつめている。

「やっちゃんえガブリアス！『どくづき』！」

ガブリアスが右手を紫に光らせて、プリンに突きつける。

「回れ。」

レッドさんはそれだけを呟いた。

プリンが回転して、ガブリアスの『どくづき』を受け流した。

「プリヤッ！」

「ガブアッ!?!」

「は、はあ!?!」

レッドさんは静かに指示を出す。

「プリン、触って。」

「プツチ。」ペタ

「ガ…ブウ。」

ガブリアスの目がハートに変わる。何でだ？

「あ、『メロメロボディ』ね。」

「そうか、プリンの特性だね。」

『メロメロボディ』…えっと、触れた相手を『メロメロ』の状態にするんだよね。」

プリンの特性とか、さすがに覚えてなかったよ。

「ガブリアス!?!しつかりしろ!」

「ガブウ〜アー。」

「プリン、怪我は?」

「プツピイア!」

「となると、すながくれか。」

「・・・あのプリン、本当にポケモン?」

「え、どういうことですか、Nさん。」

「プリンの心からは『楽しみ』と『信頼』しか感じないんだ。普通、『恐怖』があつて当然なのに・・・。」

「へ?」

「ついでにいい? あんたたちはあのプリンの言葉を理解出来なくて幸いだと思うわよ。あいつ、修羅よ。」

「え、ええ!?!」

あんな可愛いプリンが、修羅!?!

「見た目に騙されるなつてことね。」

「ガブリアス、『ストーンエッジ』だ！」

だが、ガブリアスはメロメロで手が出せない。

「ププリン、『どくどく』からの『ハイパーボイス』。立ってたら『ここえるかぜ』だ。」

そこからはププリンがガブリアスをボコボコにする光景が延々と続いた。

「メロメロで動けなくしてから猛毒状態にしてボッコねえ。」

「修羅の意味が分かったよ。これはエグい。」

たまにガブリアスが行動できても、全て回転して受け流される。

そして、ガブリアスが倒れた。

「ガブウア…。」

「く、くっそ！ だったらキノガツ」

「そこ！ ポケモンバトルを止めなさい！」

短パン小僧がモンスターボールを投げるより先にシッポウシティからジュンサーさんが走って来る。

「うげっ。い、命拾いしたな！ 次は絶対勝ってやる！ じゃあな！」

短パン小僧が逃げ出そうとするが、メイコさんが立ちふさがる。

「だー！ ！ れがあんたを逃がすと思ってるの？」

「はん！ 逃げ場なんて幾らでも…。」

「逃がさないよ。」

Nさんが短パン小僧の襟首を掴む。

「あ、てめ、ずるいぞ！」

「君！ここで初心者狩りしているらしいわね！それもジムバッチを不正に手に入れるなんていくら子供でも目に余るわ！逮捕します！」

## アカ、赤、レッド～転生と憑依～

「ご協力、ありがとうございます！」

「…気にしないで。」

あの短パン小僧はジュンサーさんに連れられて何処かに行ってしまった。

今は、シツポウシテイの警察署でレッドさんと一緒に居ます。

「…。」

「ブルー、レッド様が何か言いたそうにこつちを見てるわよ？」

「え、うん。…レッド様？」

「本当の意味で強い相手は尊敬するものよ。」

レッドさんが口を開く。

「君達、一緒に来て。」

「「ええ!?!」」

レッドさん直々のお誘いだ！

「ただ…貴方は、ここに。」

「…分かりました。」

「へ？」

Nさんだけ別行動させるの？

「ちよつとー！なんで…」

「いいよ、メイコく…ちゃん、ブル君。二人ともこんな機会は滅多に無いんだから行つてきなよ。僕はここの博物館にでもいくとするよ。」

「ごめんね。じゃあ、こつち。」

「は、はい…。」

なぜか、Nさんがハプニングに会う気がした。

くくくくくくくくくくくく

レッドさんはあたしたちを家に案内した。

その間に名前は名乗っておいた。あたしはメイコで、こいつはブルって名前よ、ってね。

「えつと、こころは…？」

「見ての通り、隠れ家つてとこね。」

「こころは…協会の物。」

言っちゃ悪いけど、こんなへんぴな所にさえ隠れ家を用意出来るのか。協会、恐るべし。

「で、なんであたし達だけ連れてきたの？なんであたしを人としてカウントしたの？」  
「…話したいってアカが言うから。ちよっと待って。」

レッドが両手で顔をほぐすように揉む。

「ん。待たせたな！俺が紹介に預かったアカって者だ！」

「ヘア!? 雰囲気が全然違う！」

「二重人格？ いや、まさかと思うけど、もしやあんた…。」

「ああ。俺は憑依転生者だ。」

「ええええええ!？」

「ブールうっさい。」バシッ

「あいたっ！」

憑依転生者ねえ。

「一応聞くけど、証拠は？」

「さっきのお前の台詞。あれ、DQのパクリっていかもじりだろ？」

「…元の台詞は？」

「詳しくは覚えてねーよ？ 確か、『スライムが起き上がり、仲間になりたそうにこつちを見ている!』だったよな？」

「大正解。いいわ、あんたが転生者だって信じてあげる。」



でも、そうなると少々不自然なただけど。

「えーと、アカさん？」

「アカで良いぞ、小僧。呼びにくいならレッドでも…ああ、いや、やっぱりアカって呼んでくれ。」

「分かったよ、アカ。」

「馴れ馴れしい。」

「どうしろと!!!」

理不尽ね。流れとしては嫌いじゃないけど。

「と、とにかく質問があるんですけどー!」

「おう、聞いてやる。」

「なんで「なんで憑依転生してんのに体に乗っ取れてないの?」メイコさくん…。台詞とらないで。」

ほんつとブールは弄り甲斐があるわ。

「あのなあ、スーパーマサラ人のレッドの意識に乗っとれ?無理な話だよ。」

「ふむ…確かに。」

「まあ、今みたいにレッドが渡してくれれば表に出れるけどな。」

「難儀な状態ね。」

「取り敢えずあの緑髪の青年を連れてこなかったのは転生者同士、腹割って話せる用にするためだ。」

「はいはい、しつもん！」

「なんだ？小僧。」

「えっと、なんで僕たちが転生者だつて分かったんですか？」

あ、確かに。あたしだけ或いはブルルだけなら分かるけど、両方つてのは不思議ね。

「それは、あれだ。なんとなくだ。まあ、あんな戦い方するのは転生者か協会の奴等のどっちかで、小僧、お前は協会の総会で見えたことは無いからな。」

「ふーん。」

「あたしは？」

「ただの色違いペラツプつてだけならあれなんだが、自分で考えてギルガルドを倒したから…かな。まあ、人の言葉をそこまで流暢に喋れるペラツプなんて見たことないからつてのもあるが。」

「成る程。」

・・・喋りすぎも良くないかしらね。

「じゃあ、『へんしん』解いても良いかな？」

「やめときなさい。あんたは『へんしん』解いたらドブドブしか喋れないんだから。」

「へえ、君、ドープルなんだ。つとごめんごめん、つい、ね。」

「え？」

「ああ、いや、何でもねーよ。レッドの奴が急に出てきたただけだ。」

メンドウね〜。…というか、あのクソじじいのせいじゃ？

「どうして、この世界に？」

「そりゃあ、あれだ。事故った…」

ドーーーン

「ん？なんだ!?!」

「あっちの方から聞こえたよ!」

「あつちは・・・博物館があるわ!」

「つて事は、Nさんが危ない!行かなきゃ!」

「よし、レッド!頑張れよ!…分かってるよ。」

## Mr. N in 博物館～待ちぼうけ～

シッポウ博物館のその広さと展示品にはため息が出る。もちろん、感嘆のため息だ。

「昔の時代の土器に、ポケモントレナーが居なかつた時代の武器まであるなんてね。」

ブル君とメイコ君はレッドさんと何を話しているんだろうか。

レッドさん…か。不思議な人だ。あの人の目は澄んでいてとてもポケモントレナーとは思えないのに、彼の使ったププリンはメイコ君曰く『修羅』。そんな育成が出来る人じゃなさそうだし、ププリンの性格なんだろう。きつと。

「…まあ、彼とポケモンバトルはしたくないね。」

そんなことにはならないと思うけど。あ、これは…。

「…世界は…雷と炎に…包まれた。…真実の…王子は…雷に…撃たれ、その…短い人生を…終わらせた？」

僕が居た所にあつた石板と内容が違つてる…。真実ではなく理想の王子が、雷ではなく炎に焼かれて死ぬはずだ。

「うーん。これが間違つてる…それとも、あれが？いや、両方違う可能性もあるのか…。」

「おや、珍しい髪色だね、お客さん。」

後ろを向くと、髪の毛が凄い女の人が立っていた。

「ええと、おか、あなたは…?」

「ついついお母さんと呼ぶところだった。何故だ?」

「あたしかい? あたしはこの館主にして、シッポウジムのジムリーダーであるアロエって言うんだ。」

「はじめまして、アロエさん。僕は…」

「おっと、別にお客さんのプライバシーをほじくるような真似はしないよ。まあ、ジムに挑戦するって言うなら名前ぐらいは聞いてあげるけど。」

「凄く上から目線。なのになぜか、腹がたたない。これが『包容力』か。」

「いえ、ジムに挑戦する気は無いです。」

「そうかい? やけに強そうなポケモンを持っているのに、残念だね。あんたなら現チャンピオンのアデクのじじいを倒せそうなのね。」

「ははは、流石に買いかぶり過ぎですよ。・・・それで、僕に何か用でも?」

まさかジムの挑戦者かどうか確かめに来たわけでは無いだろう。

「雰囲気不思議だから…なんてね。あんたの独り言が聞こえちゃっただけさ。」

「はあ。」

独り言? なにか聞かれちゃ不味いことでも言ったかな?

「あなた、その石板を読めるんだね？」

「はい。古代語を少し習っているので…。」

『『古代語を少し』ねえ。嘘はいけないよ、坊っちゃん。その石板の下にある説明をよく読んでみな。』

「？」

改めてよく見ると確かに説明用のプレートが掛けてあった。

「ええと、『この石板は○○年○○月○○日アララギ博士がジャイアントホールで発掘したもの精巧なレプリカである。これに掘られている文字は古代文字だ。しかし、あまりにも古い時代のもので解説が出来ていない』…成る程。」

「あたしがあなたに声を掛けた理由を分かってくれたかい？」

「ええ。」

解説不可能な文字をすらすらと解説していたからか。

「確かに僕はこの文字を読めます。それで、何が言いたいんですか？」

「ふふ。良い顔してるね。きな。良い場所に連れてってやるよ。」

「…。分かりました。」

○○○○○○○○○○

「これは…！」

「凄いだらう？ 大き過ぎて展示が出来ない代物さ。」

博物館の裏にあるジムの地下にこんな巨大な研究室があるなんて。いや、それよりも驚くべきことがある。

「この石板…いや、岩盤に書いてあること。あんたなら読めるだらう？」

「…ええ、多分。」

石板と言うには大き過ぎる物にびつしりと文字が記されている。

「大雑把な内容だけで良い。教えてくれないかね？ もちろん報酬は出そう。」

「…。」

・・・よし、覚えた。解読は後で良いかな。

「すみません、お断りします。」

「へえ？ なんてか聞いても良いかい？」

「友達と待ち合わせをしてるんです。博物館で待っているって伝えてあるんですよ。」

ブル君とメイコ君は僕の事をどう思っているんだろうか。友達か、せめて仲間ぐらいに思ってくれてたら良いな。

「…そうかい。なら仕方無いね。まあ、気が向いたらまたここに来な。」

「はい。あ、あの一番始めの単語は『我らの』です。」

「え？」

「流石に何もしないで戻るのは気が咎めるんですよ。」

「そうかい。ありがたいね。博物館に戻るにはその扉の先を真っ直ぐ進めば良いよ。ただし、他の部屋には入ら無いでもらいたいねえ。」

「分かりましたよ。では、さようなら。」

~~~~~

博物館に戻ると、見覚えのある青い集団が博物館に溢れていた。

「ふっふっふ。プラズママー！この博物館は我らプラズマ団が乗っ取りましたよ！」

「お父さん!?何故ここに!?!」

青い集団の中心には僕を育ててくれたゲーチスが立っていた。

「ん?ああ、探しましたよ。偶然ですが、見つかったのでよしとしましょう。さあ!あなたこそ我らプラズマ団のトップです!」

ゲーチスお父さんが手を差しのべる。

「う…。」

嫌だ。プラズマ団あんなとこには戻りたくない!

「どうしたのです?今までみたいになわたしの事を闇雲に信用すれば良いのです。さあ、手を!」

ああ、駄目だ。逆らえない。手を…伸ばす…。

ドーリーン

「な、なんだ！」

「ま、またあいつです！」

「またですか！」

「はい！今回はあの骨からポケモンを蘇生させるとかなんとか…。」

「馬鹿者！何故止めなかったのです!？」

「すみません！」

「ちっ。ここまで大袈裟にするとジュンサーがうるさく…くそっ！」

ゲーチスがこっちを向く。

「あなたのあれを呼び出すのです！今すぐ！」

「な…！こんな博物館であれを呼び出せというのか！駄目だ！いくらお父さんの命令で

もあれは出せない！」

「ハハハハ！復元出来たぞ！」

「グギャ〜!!!」

「くっ！アクロマの奴！仕方無い！あなたがあれを出さないのなら、この博物館が粉々になるだけです！総員！退避！退避です！」

扉を壊し、プラズマ団たちをお父さんもろとも吹き飛ばし、それが現れる。

それは、カイリユウのようで、しかし色がおかしかった。

「グゲリガゴリツシャ〜！」

とてもポケモンの声とは思えない叫びだ。

でも、苦しんでる！助けなきや！…でも、どうする？お父さんの言う通り、あれを出すしか無いのか…！

「ハッサン！『とっしん』！」

「ピカチュウ、『10まんボルト』。」

「ババウ！」

「ピカ〜〜チュ〜！」

「Nさん！大丈夫ですか！」

「そこで待ってなさい、お坊っちゃん!!!」

この声は！

「ブルー君！メイコちゃん！」

妄信的で狂信的な科学者くVS. ゾンビく

「うわっ。きもっ!」

博物館に急行した俺たちは有り得ない物を見ることとなった。

「何あれ。カイリユー?」

「違う。あれは…ポケモンですらない。」

見た目はカイリユー! 頭脳はゾンビ! その名も!

「名探偵、キヨンシー!」

「頭大丈夫、ブルル?」

「あ、変なこと考えてただけです。ブルルは正常です、メイコさん。」

「いけ。ピカチュウ。」

「ビツカ〜!」

あ、戦うんだ。じゃあ、俺も。

「ハッサン! お願い!」

「バウ! …ウガウ!」

「驚いてる暇は無いわよ! 皆耳塞いで!」

パーーーーバーーーーラーーーー!!!

メイコさんの『ぼくおんば』が炸裂する。

「グギイ…」

が、全く効いてない。というか、聞いてない。

「はあ!?!防音かなにかなの!?!」

「メイコさんはNさんを探して!ハッサン!『ふるいたてる』!三回!」

「アオーーーン!」

「ピカチュウ、『こうそくいどう』。」

「ピッ!カッ!チュッ!」

ゾンビカイリユースは奥へ奥へと進んでいく。ああ、博物館が!色々見たかったのに!

「あ!居たわよ!」

「分かった!ハッサン!『とっしん』!」

「ピカチュウ、『10まんボルト』。」

「ババウ!」

「ピカ〜〜チュ〜〜!」

ゾンビカイリユースの気をそらす。

「Nさん!大丈夫ですか!」

「そこで待ってなさい、お坊っちゃん!!!」

「ブール君！メイコちゃん！」

良かった！Nさんは無事だ！

「いや！僕も手伝うよ！いけ！ギギギアル！」

「ギツガリツガ！」

「ゲリユラリバンチャー！」

三対一！勝てる！

ゾンビカイリユーが右腕で薙ぎ払う。

「ハッサン、『まもる』！止めて！」

「ガガウ！」

ハッサンが緑のバリアを展開して右腕を受け止める。

「ピカチュウ、もう一度『10まんボルト』」

「カチュウ！」

「ブゲアー！」

よしっ！効いてる！

「ギギギアル、『チャージビーム』だ！」

「ギツギツガー！」

「ガウリニャー！」

効いてる、けど…。

「ちよつと！どんだけ固いのよ、あいつ！」

「グ・・・ゲア・・・！」

あれ、なんか溜めてるぞ？

「ま、不味い！ギギギアル！『じゅうでん』！」

「ピカチュウ、『かげぶんしん』。」

「えつ、え？ハ、ハッサン！『まもる』！」

「ちっ！頑張ってて！」バサバサッ

「バァー……！」

これは！『はかいこうせん』!?

ギギギアルは『じゅうでん』のとくぼう上げタイプ相性でなんとか耐える。

ピカチュウは『かげぶんしん』のお陰でそもそも当たらなかった。

ハッサンは間一髪で『まもる』に成功した。

けど、後にくる凶悪な爆風に耐えたトレーナーはレッドさんだけだった。

「ウヒャア！」

「うわっ！」

俺とNさんは吹っ飛んだ。

「ピカチュウ、『でんこうせっか』。攪乱して。」

「ピカッ！」

ピカチュウがゾンビカイリユウの周りを回る。

「グギアア！ガベルウリヤア！」

ゾンビカイリユウが両腕を振り回すが、ピカチュウにはかすりもしない。

「大丈夫？」

「は、はい。ありがとうございます。」

なんとか立ち上がる。

「な、なんて威力なんだ……だ、大丈夫かい？ブルー君。」

Nさんがこつちに来る。

「はい。でも、倒れ無いですよ、あれ。」

「……倒れるまで戦うだけ。」

おお。レッドさんは前向きだ。……アカさんよりレッドさんのが好きかな、俺は。

「ピカチュウ、『10まんボルト』。」

「ギギアアル、『ミラーショット』！」

あ、指示しなきゃ！

「ハッサン、『とっておき』！」

ハッサンがゾンビカイリユウの頭を強打して、下を向かせる。そこに『10まんボルト』と『ミラーショット』がぶつかる。

「ガウリラバレラルサコリバツシャー!!!」

な、なに言ってるの？怖いんだけど！

「…苦しんでる。」

「え？」

「あのカイリユウは望んであんな姿になつたんじゃない。…楽にさせてあげなきゃ！」

Nさんが四角いアクセサリーを掴む。が、レッドさんに止められる。

「それは、ダメ。…僕のポケモンが、やる。」

「で、でもー！」

「問答無用。」

レッドさんはピカチュウをボールに戻し、新しいボールを取り出す。

「二人とも、ポケモンを戻して。」

う…。レッドさんが言うなら。

「戻って、ハッサン。」

「…ありがとう、ギギギアル。」

「うー、ラッシャア！」

あ、メイコさんが上から降ってきた。ゾンビカイリユの頭にぶつかる。

「あたた。ふー、疲れた。」

「あの人も戻して。」

「え、あ、はい。メイコさん！こつち！こつちに来てー！」

「あ、そつち!?今行く！」

「ウゲラバグゲゾリヨチャリバッター！」

ゾンビカイリユが両腕を振り上げ、メイコさんを狙って降り下ろす。

「メイコさん！」

「メイコちゃん！危ない！」

「はい!？」

駄目だ！避けられない！思わず目を塞ぐ。

「ミュウツー。」

「ふん！」

ブオンツ！

「ブ…ガベラレラ!?」

…おそるおそる目を開ける。

「ばあっ!!!」

「うわあっ!」

目の前でメイコさんがおどかしてきた。

「び、びつくりさせないでよ!」

「死んだと思った? 死んだと思った? ぎーんねん、生きてるよ! どっこい、イキテル!」

「よ、良かった…!」

本当に良かった!

「それより、あれ、ミュウツーよね?」

「え?」

あ、ほんとだ。…ええ!?

『サイコブレイク』」

「はああっ!」

ゾンビカイリユウの腕が吹き飛ぶ。

「ゲバリヤツ!」

「…。」バサバサツ

「ごめんね。こうするしか無いんだ。『サイコブレイク』」

「はあっ!」

翼が崩れた。そこでNさんに目を覆われた。

「Nさん？」

「これ以上は…教育に悪いからね。」

グチャンツ バキンツ ボカンツ

…自分で耳をふさいだ。

〜〇〜〇〜〇〜〇〜

こっそり隠れて情報収集していましたが…。

「ふふふ。素晴らしい！ミュウツーですか！あの時の、ミュウツーですか!!」

あれは手痛い失敗だった。そのせいでフレア団から追放されて、カロス地方からイツシユ地方まで逃げることになった。

「失敗は成功の母とはよく言った物です。お陰で、なかなか良い情報が取れました。」

「へーっ。どんなの？」

「フフフ！ポケモンを骨から作り上げる方法！そのポケモンの強さ！ついでにあの時出来なかったミュウツターの強さ！全て！このパソコンに入っています！」

「成る程〜。」

これを応用すればミュウツターより強いポケモンを作ることが出来るはず。ミュウツターより速く、ミュウツターよりタフで、ミュウツターより大胆な！

「そう、言うなればミュウスリーの作成！人類の夢！」

と、パソコンが取られる。

「何する…の…です…。」

「させないわよ。」

パソコンを取ったのは、体の赤い、ペラッパだった。

「これは没収。抵抗するならこの場で壊す。」

滑らかな発音！スベスベしたときさか!!美しい羽根!!!

「び」

「び?」

「beautiful! wonderful!」

「はあ?」

「あなたのようなポケモン、見たことはありません!ぜひ、是非とも、研究したい!」

「嫌よ。」

ばっさり断られる。

「な、何故です!?!」

「もうされたから。」

「な、なんと!先を越されていた!?!ど、どこで、誰に!?!」

「アララギ博士。女の方ね。」

あ、あの人が！

「こうしちやいられません！今すぐにアララギ博士に情報を渡してもらわないと！あ、パソコン返してください！」

スカッ。手が空を切る。

「パ、パソコンを…。」

「没収って言ったでしょ？」

「な、せ、殺生な…！」

命より大事なパソコンを！

「そこに座りなさい。言うこと聞かなかつたら壊す。何処かに連絡したら壊す。ここにあなたの仲間が来たら壊す。良いわね？」

「く、グググ…！人質とは…卑怯です！」

「ん？今すぐに壊しても良いのよ？」

慌てて座る。

「良い子ね。さーてと。」

このペラップはパソコンを開いてなにかしでした。

「な、何を！」

「安心しなさい。データを消すことはしないから。」

カタカタカタカタ…

「よしっ、送信完了。」

「送信…?」

「お膳立てしてあげたわ。あんたは今すぐにアララギ博士の研究所に行きなさい。匿つてくれるはずよ。」

「…はい?」

「アララギ博士に情報を聞きに行くんでしょ? だからプラズマ団に退団届け出して、アララギ博士にあんたの研究結果の一部と逃亡届けを出したわ。ほら、さっさと行きなさい。」

なんて強引な…。だが、それが良い。

「…いつかあなたに仕返ししますから。では。」

このペラップは約束を守りました。なら、私も誠意を見せましょう。

皆と会話と後悔とく事件は終わったく

ゾンビカイリユーはレッドさんのミュウツーによつて粉々にされた。

Nさんは「彼は最後にありがとうつて言つてたよ。」つて言つてくれたけど…どうしても考えてしまう。

もつとやり方は無かつたのか。上手くやれば生きてままあのカイリユーを救えたんじゃないか。

「ブル君。」

「なんですか、レッドさん。」

「僕を恨むかい。」

「なんでですか？」

「あの方法しか思いつかなかつたから。」

「…レッドさんを恨むのはお門違いでしょう。あれが最善だった。恨むなら、あのカイリユーを救う力の無かつた自分を恨みます。」

「そう。」

レッドさんは少し淋しげな顔をして黙つた。

「んあ？なーんでそんなしんみりした空気になつてんの？」

「…メイコちゃん、今はそつとしてあげて。」

今頃になつてジュンサーさんがやってくる。

「こ、これは!？」

「遅い。もう終わった。」

「レ、レッドさん!?!それはどういう…」

「おつそいのよ!ここの警察はなんなの!?!トロイの!?!馬鹿なの!?!とつくのとうに犯人共は逃げ去つたわよ!プラズマ団!プラズマ団を探しなさい!」

「は、はい!」

メイコさんがジュンサーさんを追い払う。強引だなあ。

「そうだ、ブル。アクロマは強制的に足を洗わせたからもうこんなことは起きないわよ。」

「そうなの?ありがとう、メイコさん。」

「…元気ないわね。どうしたの?」

「メイコちゃん、こつちに。」

「何よ。」

Nさんがメイコさんに説明する。

「…ああ、成る程。トラウマ必至と。」

「そういう事。だからそつとしてあげて？」

「だが断る。」

メイコさんがこつちに来る。

「はい、ブール。何考えてんのよ？」

「…。あのカイリユーを救う方法。」

「無いわよ。」

「え？」

「世の中、そんな都合の良い方法なんて無いのよ。そんなん考えてないで、もつと建設的な事を考えなさい。例えばハツサンを鍛えるとか。」

メイコさんの言う通り。終わった話、後の祭り、無駄な思考。

「…でも。」

「でもじゃない。詰まんないこと考えてないで前向け、前！」

「だって！可哀想じゃん！悲しいじゃん！助ける方法を考えて何が悪いんだよ！」

「…悪いとは言っていないわよ。」

イライラしてきた。と、誰かが話かけてきた。

「ブール、といたったか？」

「はい。…ってミュウツー!？」

話かけてきたのはレッドさんのミュウツーだった。

「え、しゃ、しゃべ、しゃべッタアアア！」

「これはテレパシーだ。じゃなくて、すまなかつた。」

「え？」

「あのカイリユウを壊したのは私だからな。」

「…別に謝らなくても」

「助けられたかも知れない…のにか？」

「は？」

今なんて？

「私ならあのカイリユウを助けられたと言っている。」

「嘘でしょ？」

「本当だ。カイリユウの体を固定できたかも知れない。」

「な…な…!？」

「おいおい、馬鹿な事を言ってんじゃねーよ、ミュウツー。そんなことしたら死んだ方がマシな程の苦痛を与える事になるだろうが。」

アカさんが割り込んでくる。

「…そんなにも自分を恨ませたいの?」

レッドさん変わる。…頭が回りそうだ。

「それで万事解決だろう? 恨まれるのには慣れてる。」

「え、ええと?」

「ミュウツウの言った事は忘れて。」

「しかし…。」

「誰かきた。戻って、ミュウツウ。」

どこかから、アフロみたいな髪型のおばさんが出てくる。

「うひゃあ、派手にやってくれちゃって。こりゃあ直すのが大変だね。あ、これ壊れちゃってるじゃないか!」

「アロエさん、お久しぶりです。」

「ん? おお! レッドじゃないか! 久しぶりだねえ!」

アロエさん?…アロエ…あ! シツポウジムのジムリーダーじゃないか!

「お、坊っちゃん。お友達と会えたのかい。」

「ええ、お陰さまで。ただ、見ての通りひどい有り様ですけど。」

Nさんとも顔見知りっぽい。

「ほんとにねえ。あそこは防音が完璧過ぎて騒ぎに気づきにくいのが欠点だね。で、何

があつたんだい、レッド。」

「プラズマ団がでしゃばった。あのデカイ骨格が復元されて暴れた。僕たちで壊した。」
「はあ!? あれはうちの看板だったのに! …はあ。今言つてもしょうがないね。プラズマ団の連中は?」

「アイアントが散る様に逃げた。」

「そうかい。ご苦労様。」

と、アロエさんがこつちを見る。

「んー? 坊主はジムの挑戦者かい? ごめんね、見ての通りジムバトルなんて出来るような状態じゃ無いんだ。他を当たってくれないかね。」

「あ、はい。」

強引さはメイコさんとどっこいどっこいだね。

「…あんな今あたしに失礼な事を考えたでしょ。」

「いやいやまさか。」

…今回の事は頭の中にしっかり入れておこう。ゾンビカイリユ一の事を忘れない様に。

でも、前向きに行こう。それが俺のキャラだから。

「…吹っ切れたみたいね。」

「
うん。
」

で、二番さんの道案内でヤグルマの森を抜けたけど。

「……ここは？」

『思索ノ原デス』
シサク

「成る程。」

目の前でビリジオンがこつちを睨み付けている。

……どうしてこうなった。

「ききゅあああああ!!!」

「うわっ！」

ビリジオンが頭から光る角つのを出して襲いかかってきた。

「ちよっ、待ってよ！」

紙一重でかわす。

「きゅいあああ！」

「あーもう！ハッサン！」

ボールからハッサンを出す。

「パウッ！」

「ハッサン、『ふるいたてる』だ！」

「アオーン！」

ハツサンの体が少し赤くなる。

「きゅああー！」

ビリジオンが叫ぶとハツサンの体から緑色の何かが出ていこうとする。

『ギガドレイン』!?ハツサン、『まもる』!」

ハツサンの周りに緑のバリアが張られる。緑色の何かはバリアにはばまれて、ハツサンの体に戻っていく。

「きゅううあー！」

「ストップ！待ってよ！僕はただの迷子なんだってば！」

「ききゅあああああ!!!」

ああ、全然聞いてくれない。と、ハツサンが何かしやべり始めた。

「ババウツ！」

「きゅああっ！」

「バウツ！ガウウ…。」

「ききゅあああ？」

「バウツ！」

ん？こつちを見て何が言いたいの？

「バウツ！ババウツ！バウバウ！」

「え、ええと？」

「バ→ウ、バ→ウ！」

「へ、ん、し、ん？ 『へんしん』 しろって？」

「バウツ！」

「当たり前らしい。じゃあ、何に『へんしん』するかだけけど…。」

「ビリジオンに『へんしん』すれば良いかな？」

「バウツ！」

「良いらしい。じゃあ、とりあえず一回『へんしん』を解くか。」

「きゅ、きゅああ?!」

「あ、どーも。」

「そう言えばダブルの姿に戻るのは久しぶりな感じがするな。そうでもないはずだけど。」

「ビリジオンの姿を自分の周りに描いていく。」

「はい、『へんしん』終了。」

「む、まさか本当にお仲間だったとは。」

「お仲間？」

「バウバウ。」

「ええ。勿論謝りますよ。すみません、まさかお仲間が人間どもに『へんしん』しているとは思っていなかったたのでつい襲いかかってしまいました。」

に、人間ども!?

「い、いえ、大丈夫ですよ。」

「それにしても、何故人間なんぞに『へんしん』していたのです?」

「ええと、人の姿になって旅をすることで人間について理解を深めようと…」

「理解?人間のような愚かな生き物を理解したいと?」

「愚かつて…そんなに悪くは無いですよ、人間も。」

「これは元人間として言い返さないかね。」

「いいえ、愚かです。何かいさかいがあればすぐ戦争します。そこまでいなくても、気に入らないことがあればすぐケンカになります。」

「それは、まあ。」

「あまりにも愚か。故に私たちは人間に戦いを挑んだのです。」

「あー。聞いた事はありません。」

確かにゲームでは『人間に戦いを挑んだ』的な感じの説明があつたな。

「コバルオン、テラキオンと一緒に仲間たちを守る為に戦ったんですよ?」

「そうです。その結果を知っていますか?」

「え?」

流石にそこまでは覚えてない。

「・・・悔しい事に、相討ちです。私たちの制裁のお陰で、人間たちは戦争を終わらせました。しかし、私たちは死にかねない大怪我を負いました。」

「お、大怪我・・・」

「ええ。百年間はそれぞれのすみかから動けなくなるくらい酷い怪我でした。タブンネの方々が居なければどうなっていたか・・・」

ブリジオンは遠い目をしていたが、ふっと俺を見据える。

「ですから、人間たちと共に過ごすなど諦めた方が良いのです。今からでも遅くありません、家に帰るべきです。」

「家・・・ですか。ん、ちよつと帰れませんか。」

「なんですって? 家出してきたのなら早めに謝った方が」

「あ、そうじゃなくて。遠すぎるんです。カロス地方ですから。」

「は、はい?」

あ、今さら過ぎるけどお父さんとお母さんとカラお姉ちゃん、キリお姉ちゃん、クルお兄ちゃん、ケンお兄ちゃんたちは元気にしてるかな? 手紙出さないとな。

「カロス地方からどうやってこの地方へ?」

「えっと、メイコさんが言うにはフーパの仕業らしいです。」

「フーパ：聞いたことの無い名前ですね。」

「そうですか。」

・・・沈黙が重い。

「バウツ！バウバウ！」

「え？…しかし、人間は。」

「ババウツ！バウウ！」

「そうですか。貴方ほどのポケモンが信頼を寄せる人間たちですか。ならば安心です。」

ハッサンとビリジオンが何か話している。

「ブールさん。」

「は、はい。」

「貴方を人間の元へ送ってあげましょう。」

「い、良いんですか!？」

「ええ。ただ、貴方と共に旅をすることは出来ません。」

「う…。」

密かに狙っていた事を読まれてる!？」

「まあ、何か私の力が必要な時はこれを吹きなさい。すぐに駆けつけます。」

ビリジオンが肩の葉っぱを一つ引き抜く。

「これは、草笛？」

「そうです。吹き方はポケモンの本能で分かります。では、人の姿に『へんしん』しなさい。乗せて行きます。」

「ありがとうございます！」

人の…元の姿に『へんしん』する。

メイコとNとくはぐれはぐれてく

「つたく。ブルはどこに行つたのよ。」

「うーん。」

あたしたちは今、ヤグルマの森に居る。

さつきまで一緒にいたブルは突然現れたペンドラーに追いかけられたせいで完全にはぐれてしまった。

「あのペンドラー、何だつたんだろう？なんか使命感に燃えていたけど。」

「使命感？となると…誘拐？」

ペンドラーはブルだけを狙つて『メガホーン』を叩きつけ、ブルがボールを手に取ると『どくどく』放つてきて、たまらずブルが飛びすさると『おいうち』してくるとかいう初心者トレーナー殺しな連撃を撃つてきていた。

あれはかなりよく訓練されているポケモンね。

「それならトレーナーの声が聞こえるはずだよ。」

「いやいや、あらかじめ技を使うタイミングとかを覚えておけば勝手にやってくれるわよ。ポケモンだって馬鹿じゃないんだから。ただ、誘拐だとするとなんでブルを狙つ

たのか分からないけどね。」

「そうだね…。お金ならあのペンドラーを使ってあのトレーナーたちを倒した方が効率がいい。なら、ポケモン目当て?」

「ならあたしかあんたを狙うわよ。」

「そうだよね。」

結局原因は分からないままスカイアローブリッジの前まで来てしまった。

~~~~~

あのなんで存在するのか分からない建物の中。

「ん、やっぱり居ないね。」

「流石に勝手に先に行つてたりはしないはずよ。多分。」

「じゃあまだ森の中に?」

「そうなるわね。あるいは、ポケモンバトルに負けてシツポウシティのポケモンセンターに居たりして。」

「…戻るにはあのトレーナーたちを倒さないといけない…よね?」

「きばりなさい、N。」

「ええ…。」

と、突風が吹く。

「うわっ!」「なんだなんだ!」「きゃっ!」

「ん?」

目の前を緑色のポケモンが通った…気がした。

「な、なんだったんだ、今の風は。」

ヤグルマの森…緑色のポケモン……伝説?

「ビリジオン…。」

「ビリジオン?なんで今その名前が?」

「ここを駆け抜けたのは…ビリジオン。…何故ここを通ったの?…確か、昔の戦争に関わった…。まさか。」

あり得ない。でも、こっ恥ずかしいけど、もしあたしかブルーのどちらかが、主人公だとしたら…。

「メイコちゃん?」

「不味いわね。N、ヒウンシティに急ぐわよ。」

「え、何でだい?」

「今の風はポケモンによるものよ。」

「まあ、それ以外考えられないけど。」

「そして、そのポケモンは恐らくビリジオン。」



「え？そんなまさか。」

「あたしみたいな転生者が存在する時点で『まさか』なんてありふれてるわ。問題はビリジオンがなんで走り去ったのかよ。」

「それは…。成る程、不味いね。」

ヒウンシティに向けて走り出す。

～○○○○○○○○

「アウエイアワワ…。」

「きゅああ。きゅあつああ！」

「だ、大丈夫…ありがとう、ビリジオンさん。」

「きゅああ。」

ビリジオンに乗ること。

いい経験になるな。後でメイコさんたちに自慢できるな。なんて考えでやってはいけなかった。

「うわあ。なんか、世界が、回る。」

「きゅああ!？」

前世では乗り物に酔った事は無かったのになあ。

「う、うう。…うえっ。」

「きゅああ。きゅあ〜！」

うー。な、なんとか、治って、きた。

…気持ち悪くて吐きそうだけど、それだけだ。

「うん？なんかざわついてる…。」

『ココハ、ヒウンシテイデス。』

ああ、あの絶対迷う町か。…え？

「ビ…ビリジオンさん。」

「きゅあ？」

「えつと…ここまで運んでくれてありがとうございます。だから、その…ここに居ると危ないと思うから…。」

「きゅああ？きゅああああ〜！」

辺りを見渡す。…うわ、人だかりが。写真撮るなよ。

「きゅああつきゅあ〜！」

ビリジオンさんが走り去る。

さーて、どうやって逃げ出すか。

「ん〜？君は…ああ！例の〜！」

なんだ？人だかりが分かれて、ひよろつとした男の人が歩いてきた。…ってこの人

「は。  
アーティーさん？」

## 嵐の前のなんとやら～流石メイコさ（ry～

ヒウンシティ。イツシユ地方で1、2位を争うほど巨大な都市だ。

ここにはあの有名なゲームを作成している大手の会社がある。

惜しむらくは少し辺鄙な土地にあること、急速に発展したせいで必要以上に混み合っていることか。

「……！メイコちゃん、こっち。」

「何?。」

「あそこの船、よく見て。」

「ん?…あの服は、プラズマ団ね。」

僕たちはブルー君を探していた。のだけど、メイコちゃん曰く『事件あるところ、ブルーあり』だそうで、その事件を探していたんだけど…。

「本当に事件が起きてるとは。」

「言ったでしょ?ピリジオンが動くんだからそれなりの理由があるのよ。」

「それが、これかい?」

「そう。どうせ人のポケモンを盗んでどっかに行こうってんでしょ。」

「そうだね。じゃあ、」

「まだよ。待つてれば所謂、主人公つて奴が解決に来るはずよ。そこにブルもくついで来る…はず。あたしたちがでしゃばるのはその主人公たちが来なかつた時よ。」

「…分かつた。」

もどかしいけど、幸い今すぐに出発するようでは無いみたいだし、そもその目的はブル君との合流だから…ここは我慢だ。

○○○○○○○○

「アーティーさん。助けてくれてありがとうございます。」

「いやいや、困つた時はお互い様。これ、ボクがジムリーダーとしてやっていける秘訣だよー！」

「は、はあ。」

あ、皆さんどうもこんにちは。人とドーブルの間で揺れてるブルです。

あの人だからの中からアーティーさんに助けて貰つたのはいいんだけど、今の状態は…。

「ええと、なんで、そのう…。」

「マスコミに囲まれながら話し合っているか？」

「はい。」

「それは君が有名だからだよ。…嫉妬しちゃうネー！」

ウインクと茶目つ気のある笑顔が似合う人だなあ。

ちよつとカメラのフラッシュがまぶしい。…訂正、かなりまぶしい。

「いや、まあ。」

「うーん？ そんなに緊張しなくても良いよ？ 周りはイシツブテでも思つて、リラック  
スしてよ！」

「そ、そこまで割りきれないですよ。」

「そうかい？ まあ、初めてなら仕方無いよ。そのうち慣れるさ。」

「いや、こんなことに慣れたくは無いです。」

アーティーさんが真面目な顔になる。

「こんなこと、ねえ。あの伝説のポケモンであるビリジオンに乗つて颯爽と現れしト  
レーナー！ その正体はなんとダブルというポケモン！…残念ながら、マスコミはずつ  
と…場合によっては一生ついて回るよ。」

「う。そんな気はしてまずけど。」

「ハハハ！ 分かつてるなら良いんだよ！ 嫌でも慣れる！ さあ、今のボクはジムリーダー  
のアーティーじゃなくて、芸術家のアーティーだ！ ブール君、ちよつとモデルに成つて  
くれるかい？」

「え？」

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

連れてこられたのはアーティーさんのアトリエ。

マスコミたちは外で待つてもらってる。

にしても、うわ。これ、全部アーティーさんが描いた絵なのかな？軽く五十以上はあるぞ！

「ふう。やっと二人きりになれたよ。」

「あれ？アーティーさんも疲れるんですか？」

「人間だしね。疲れないなんてこと無いんだよ。特にマスコミはね。下手なこと言ったらすぐにすっぱ抜かれる。油断出来ないよ。」

うん。なんとなくだけど、これからの教訓にしよう。『マスコミに隙を見せるな』。

「さて、実はブルー君に頼みがある。」

「はい。：何に『へんしん』すれば良いですか？」

「ああ、いや。モデルに成ってっていうのは二人きりになる口実だよ。後で描くけど。」

あ、描くには描くんだ。

「じゃあ、頼みってなんですか？」

「それがねえ。あ、プラズマ団って知ってるかい？」

「…はい。」

ゾンビカイリユウの姿がフラッシュバックする。

「プラズマ団がまた何か？」

「人のポケモンを盗んでいるらしいんだ。」

「は？」

「しかも堂々とヒウンの船着き場から逃げ出そうとしている。」

「…。」

「手伝ってくれるかい？ボクも行くし、他にも一人、手伝いはいる。」

「行きます。あいつらは…許しません。」

「…いい顔だ。」サラサラ…

アーティーさんが小さい画板に絵を描く。

「うーん。今はここまで。ブラック君も待たせてるしね。」

~~~~~

「あ、ブル。やっと来たわね。」

「うん。…!?何で、彼が!?!」

「どうしたの？」

「…いや、むしろ当然か。それに、彼と一緒になら安全…。」

「なんなのよ！」ガスッ

「痛っ。っ、つつかないでよ。」

「急に驚いてブツブツ愚痴るほうが悪い。で、なんなの？」

「前に話したよね、僕がポケモンバトルで負けたこと。」

「ええ、あの洞穴でね。」

「…その彼が、ブルー君とヒウンジムのジムリーダー、アーティーさんと一緒に居た。」

「ふーん。じゃあ、そろそろ突撃しますか。」

「…話聞いてた？」

掃討戦～ブラ～ズマ～！～

ハロー、ボンジュール、皆さん。ブルです。

今、アーティーさんとBWの主人公のブラックさんと一緒に行動しています。

「ブツブツ何言ってるんだ？」

「はい？なにも言ってる無いですよ、ブラックさん。」

「いや、言ってたね。」

「言ってる無いですよ。」

「言ってた。」

「二人とも、着いたよ。ここが我がヒウンシティが誇る船着き場だよ！」

なんか・・・思ってたんと違う。

「漁村って訳でもないし、こんなもんだぜ？ダブル。」

「うーん。でもなあ。って人の考え読まないで下さいよ。」

というかこの人怖い。だってさつき会ったとき、一目で俺がダブルだっけ見抜いたし。

「こんな好青年のどこが怖いんだよ。」

「その勝手に人の考えを読めるところですよ。」

「二人とも仲良しなのは良いことだけど今は集中してほしいな…」

「それじゃ、さっさとやりますか。」

「なんか発音がおかしい気が…」

。プラズマ団の皆さん、ご愁傷さま。

〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

「うげっ！ジムリーダーだ！」

「なんだって！みんな逃げろ！」

「逃がすかよお！ジャローダ！『リーフストーム』だ！」

「ジャルアア！」

「ウギヤアアア！！！」

「うわー。ブラックさん、飛ばすなあ。」

「ハハハ。ブラック君はあのジャローダ一匹でボクを倒した猛者だからね。さあブール君、ボクたちも負けてられないよ！行け！クルマユ！『いとをはく』！」

「マユーツ」

「うわっ！なんだこれ！」

「絡まって…動けない！」

・・・出番無くね？ね？

「まあいいや。出てきて、ハッサン。」

「バウ。」

「『ふるいたてる』六回。近所迷惑にならない程度に。」

「バ、バウ？アオーン。」

やる事が無いから観察。

そこそこ大きい船をプラズマ団は用意していたようで、パツとみ、旅する豪華客船みたいだ。

ブラツクさんはジャローダと共に乗り込んでプラズマ団たちをフルボッコにしている。

命からがら逃げ出せたプラズマ団はアーティーさんのクルマユに捕まってる。

ん？あれ、一人逃げだしたぞ？

「ハッサン、あれに『とっしん』！」

「バウツ！」

「うわっ！」

あらかじめ渡されてた紐でぐるぐる巻きにする。

「はい、逮捕です。」

なぜかNさんはブラックさんと会いたく無いみたい。

ただ、まあ、そのですね…。

ついさっきの会話を思い出す。

「おいおい、何逃がしてんだよ。」

「ご、ごめんなさい。」

「まあまあ、ブラック君。そんなに怒らないであげてよ。」

「そうよこの帽子野郎。だってさつきあいつを逃がしたのはあたしだし。」

「ちつ、ならしようがない…つてええ!？」

全ての元凶はメイコさんだった！

この後メイコさんとブラックさんの壮絶な言い合いが勃発。勝者はメイコさんでした。

まあ、メイコさんはメイコさんなりの理由があつて、曰く、『こういうのは敢えて一人逃がして本拠地を叩くのが定石』だそうぞ。

「まあたブツブツと。五月蠅いぞ。」

「そつちがウルサイわ、黒帽子。面白いこと呟いているんだから止めないでよ。」

「メイコさん…感謝したくても出来ないよ。」

「賑やかだねえ。だけど、分かれ道だよ。どうするかい？」

道が左右に分かれている。

「じゃあ僕右で。」

「あたしはブルルに着いてくわ。一人にすると何しでかすか分からないし。」

「酷い！」

「んじゃ、俺は左。やつと五月蠅いインコと離れられる。」

「誰がインコよ、このまる○ンコ！」

「ん。じゃあブラック君のストッパーが居なくなるのは不味いから、ボクも左に行こうかな。」

「アーティーさん、貴方は俺のことなんだと思ってるんですか？」

「後でゆっくり教えてあげるよ。じゃあ気をつけて、ブルル君。」

くくくくくくくくくく

あの分かれ道から先は一本道だった。たまにある横道は全て扉によって塞がれた。

メイコさんの鑑定では、全部ここ数週間は動かされて無いらしい。

「うーん、プラズマ団は見つからないね。」

「どつかから上に登ったのかもね。そうなったら流石にお手上げね。あたしが発信器を持ってなかった事が悔やまれるわ。」

「そうだね。まあ、ブラックさんとアーティーさんが見つけてるかも知れないし。」

「…うーん、あんまり得意じゃないからやりたくないけど。プール、耳ふさいで物音たてないで。ハッサンも。」

「バウ。」

そういうえばハッサンを出しっぱにしてたんだよね。

良い感じに赤いよ！

「スウ…、~~~~ツッ！」

耳ふさいでるからなんて叫んだか分からないけど、メイコさんが何か叫んだ。

「ふう、もういいわよ。」

訂正、耳ふさいで無くても聞こえなかったと思う。

「何したの？」

「音響マツピング。詳しくは分からないけど、おおぎつばな位置関係は掴んだわ。今地下水路に居るのはあたしたちだけ。どうやらひよろひよろと帽子はどつかから上に登ったみたい。あるいは諦めて帰ったか。」

「そつか…。じゃあ、戻ろう。」

「そうね。」

「バウツッ！」

バトルインザフォレスト〜メイコさん縛り〜

「いや〜、悪かったわね。」

「いやいや。一人ぐらい逃がしてもなんの問題も無いよ。だってもっといっぱい捕まえたらからね。」

「そう、なら良かったわ。」

「・・・。」

「...。」

え〜と、ブルです。時刻は夕方、アーティーさんたちもプラズマ団を見つけられずに戻っていました。

まあ、アーティーさんの言う通り他にも捕まったプラズマ団は沢山居るし、大丈夫だよね。

問題は。

「Nさん、こちらブラックさん。少し口は悪いけどいい人だよ。多分。」

「おいこら多分ってなんだ。」

「ブラックさん、こちらNさん。」

「……。」

Nさんが何も喋らない事。というか、Nさんとブラックさんの仲が悪そう。初対面なのに、何でだ？

「あのなあ、そもそも俺とこいつは既に顔見知りだぞ？ポケモンバトルもした仲だ。」
「ありやま。」

知り合いだったか。…まあ、良く考えなくても主人公とNさんが会ったことが無いなんておかしいのか。

ん？あれ、でもBWの主人公とNさんはライバル的な関係だった気がする。

「ああ、だから。」

「何だ？」

「Nさん、もしかしてブラックさんにボッコボコにされたんですね？」

「……うん。そうだよ、ブルー君。」

「だからブラックさんと会うのが気まずいと。」

「まあ、そう…だね。」

「じゃあもう一回ポケモンバトルすれば良いじゃないですか。」

「え？」

あれ？なんかおかしな事言ったっけ？

「だってポケモン関係の気まずさだから、ポケモンバトルで解決出来るでしょ?」

「いや、その、もう少し深いというか…大人の事情というか…」

「ク…クク…アハハハ! そうだな! おい、N! こっち来い! ポケモンバトルするぞ! あの時より強くなってるよな!」

「あ、え? あの、ちよつと…」

Nさんがブラックさんに連れて行かれる。

仲が良くて何よりだね!

「ブール、一週間後にジムに挑戦するわよ。」

「え、一週間後? 何で?」

「今回のジムバトルは手伝わないからよ。」

「え? つまり?」

「だーかーらー! あたしは! 今回! あんたのポケモンとして! バトルは! しないうって! 言ってるの!」

「痛い痛い! 区切り毎につつかないで!」

禿げる、禿げちゃう…あ、俺ポケモンだから禿げないか。

「でも、なんで手伝わないの?」

「何時までもあたしに頼ってばっかだとあんたが成長しないから」

メイコさんとNさんは別行動なんです…けど。

「なんでブラックさんが着いてきてるんですか？」

「あ？別に良いだろ。面白そうだし、もし仮にお前が倒れつちまった時に連れて帰る奴が必要だろ？」

「まあ、そうですね。」

昨日寝る前にテレビを見たんだけど、ニュースで俺が出てきた時は焦ったね。いやー、恥ずかしいね。

後、ジョーイさんがついでにと持ってきてくれたビデオも見たけど…アララギ博士、何してくれてんですか。

いや、あのサンヨウシテイの騒ぎでアララギ博士が『ポケモンがポケモントレーナーになりました』的な発表をしたことは知ってたけど。

「お前がポケモンだったとはなあ。昨日の夜アーティーさんが教えてくれたぜ。」
「つて事はブラックさんはテレビとか全く見ないんですか？」

「ああ。というか、旅する男にテレビを常に見るなんて無茶言うなよ。」

「いや、そうは言っていないですけど。」

あ、草が揺れてる。

「あれは…おっ、ヒヤップか。」

「よーし、行けっ！ハッサン！」

「バウバウ！」

ヒヤップはハッサンの特性『いかく』で怯んで…逃げ出した。

「ええ!？」

「ふーん。お前のハーデリアが強すぎるんだな。多分、この先そのハーデリアで苦戦する野生のポケモンはほとんど出てこないだろうな。」

「つまりハッサンは強いと。」

「ババウツ！」

「ああ、強い。けど、その程度の強さではそのうち勝てなくなる。」

「う…まあ、そうですね。」

まあそもそも、ハッサンは後一回進化を残している。ハーデリアのまままで勝ち続けられるとは思ってない。

「だから、強くなりたいならトレーナーと戦う必要がある。それも、俺レベルで強いやつ。」

「ええー。」

「ええー、じゃないんだよ。そうだ、俺とバトルするか？」

「じゃあ、それで。」

「ハッサン、油断するなよ！ 『ふるいたてる』！」

「ジャローダ、『へびにらみ』！」

ハッサンが『ふるいたてる』より速く、ジャローダがハッサンを強く睨み付ける。

「ジャルアアア…。」

「バ…バウ…：ウバウアツ！」

ハッサンは体が痺れつつも吠え、体に赤みをつける。

とはいえ、麻痺が治る訳じゃない。体の自由が効かないのは不味い。とくに、今回は格上が相手だ。何も出来ずに倒される可能性もある。

「ハッサン、大丈夫!?!」

「バウ！」

「喋ってる場合か？ 『リーフストーム』だ！」

「『まもる』！」

ハッサンの周りにバリアが…出ない。

草が舞う大竜巻がハッサンを包み込む。

このままだと負ける！

だからこそごり押す！

「ハッサン！」

「こんなもんか…」

「もう一度『まもる』！」

「はあ？」

今度は体が動いたらしく、見えづらいけどバリアが張られたみたいだ。

「よし！いいぞ！」

「そんなことしてもダメージは通ってる！二回目の『まもる』は意味がないだろ！」
「煩い！ハッサン！風が止んだら『とっしん』！」

『リーフストーム』が止まった。

と同時にハッサンが弾丸のようにジャローダにぶつかる。

「ジャルア!？」

「なんだと!？」

「バウアツ！」

「もつと『とっしん』を続けろ！止められるまで！」

「ウガアオーン!!!」

ドガッ！ドガッ！

『とっしん』がジャローダを痛め付ける。

が、四回目は無かった。ハッサンの体がまた痺れたみたいだ。

「くそっ！ジャローダ、『ギガドレイン』だ！」

「ジャルアッ！」

『『まもる』！からの『とっておき』！』

「アオーン！」

もはや見慣れた緑のバリアが、ハッサンのエネルギーが漏れ出ていくのを防ぐ。

そして、瞬間移動。

「ジャ!？」

「な、どこに」

「ババウアッ！」

「上!？」

ハッサンの全体重を乗せた『とっておき』が、ジャローダの頭を地面に叩きつける。

「ジャグルアッ！」

「ジャローダ！」

「ハッサン、一旦下がって。」

「バウ！ハッ…ハッ…。」

流石に疲労が溜まっているか。傷薬はシツポウシテイで補充したから良いんだけど

…。

「傷薬使う？」

「…ババウツ！」

断られた。ハツサンはこういう人工の薬が嫌いみたいなんだ。

「くそっ！俺のジャローダは戦闘不能だ！戻れ、ジャローダ！」

「えと、まだやるんですか？ハツサンはもう戦えないから、僕の負けでいいですよ。」

「っっ！いや！これは引き分けだ！ドローゲーム！」

「えっ？なんで。」

「そっちの手持ちは一体でこっちは六体。そんでこっちのポケモンを一匹倒した。けどそっちはもう瀕死間近。こっちの勝ちでも良いが、俺のパートナーを倒した褒美に引き分けにしてやる。ありがたく思え！」

「は、はあ。」

うん。今回のバトルで分かったこと。

手持ちを増やそう。

バトルへのカウント～一週間って短いよね～

「チュツ！チュリツチュリツ！」

「あ！こら逃げるな！」

あ、皆さんどうも。ブルです。現状ハッサンのレベルアップはほぼ不可能と判断して、新しいポケモンを捕まえようとしているところです。

「バ、バウ……」

「いや、ハッサンのせいじゃ無いよ。はあ。」

見ての通り、全く成果は挙がってないけど。

うーん……やり方を変えた方が良いのかな？

もうプラズマ団を捕まえたあの日から既に五日も経っている。

明後日にはアーティースさんとバトルしなくちゃいけない。

それも恐らくマスコミや他のトレーナーに見られながら。

「考えるだけで疲れてきた。ハッサン、一旦休憩。」

「バウツ！」

ちようどいい切り株があつたので腰掛ける。

そういえば、このトレーナーたちは見た目より弱かったなあ。

ビリジオン、元気にしてるかなあ。

・・・あ！

「そうだ、あのペンドラを探そう。このトレーナーたちは使って無かったから、あれはきつと野生のポケモンだよ…ね？」

「バ、バウウ…。」

「あ、そんな考え込まなくていいよ。独り言だから。さて、問題はあのペンドラがどこに…いるか…って居たあ!?!」

というかわざわざのっしのっしと現れたよ!?

「ペアギユアアア!」

「え、えつとえつとハツサン! 『とっしん』!」

「バウ。ババウバウ。」

「え? あれ、なんで『とっしん』しないの?」

「ババウバウバウ!」

あ、れえ? なんだ? こんな状況、前にもあった…というかつい最近あった。

「あーはいはい。『へんしん』するよ。」

周りには人は居ない…ね。

ドーブルの姿に戻る。そこからさらにペンドラーの姿を正確に模写し、描いていく。

「はいはい、こんなんでどうかな？」

「あら、ワタシの姿になる必要は？」

「えっと、同じ種族じゃないと話が出来ないから。っていうか女性？」

「そうよ。この間はごめんなさいね？急に襲っちゃって。」

ペンドラーがペコリと頭を下げる。

「いや、良いんですけど…なんで？」

「ビリジオン様の偏見を少しでも直したかったの。あの方は聡明なんだけど、未だに人間を嫌っている。それは可哀想だなって少し思ったのよ。」

「ああ、成る程。」

「貴方を送って正解だったわ。偏見は無くなってないけど、少なくとも一方的に嫌うなんて事は無くなったわ。」

「それは良かったです。」

伝説のポケモンだからこそ、人間を好きになって欲しいね。

「ね、お礼は何がいい？できる範囲で何でもするけど。」

「何でも…？」

来た！来た来た！

「じゃあ、僕のポケモンになってください！」

「…え？告白？」

「あ、いや、ええと、そうじゃなくて、いやそうかも…いやいやいや、えーとー。」

「フフフ。良いわよ。貴方と一緒に旅してあげる。」

「…え？やったー！」

思わず跳び跳ねる。

「でも、ちよつと待ってね。こつちにも生活があるの。…着いてきて。」

「あ、はい。」

一応人の姿になっておくか。

く〇く〇く〇く〇く〇く

「ペアギユウウア！」

「フシー。」

「きゅあああ？」

んんん…思索しそくの原!?

「あ、ビリジオンさん。ご無沙汰してます。お陰様でメイ…はぐれた仲間と会うことが
出来ました。」

「きゅああ。きゅああ？」

「ペアギヤア。」

「きゅああ。きゅあああー！」

・・・何を…言ってるんだ？

と、ペンドラーがこっちを向いて

「ペアギユアアアア!!!」

威嚇してくる。

「バウ。バウバウ！」

「え？つまり…バトルしろと？」

「バウバウ！」

ハッサンが足をこっちに向けて、ペンドラーに向ける。

「…え。俺が戦わなきゃ駄目？」

「バウ！」

力強く頷かれた。

「分かったよ。」

ドーブルの姿になる。

「さあ！勝負だ！」

「ペアギユアアア！」

「うわー！」

紫の液体を飛ばしてくる。これは、トラウマの『どくどく』じゃないか！
飛んで避ける。

「ペアギユギユア！」

『どくどく』を連続で飛ばしてくる。

かわしてよけてさけて懐ふとこみへ！

尻尾の色は赤！

「浄化しろ！『かえんほうしや』！」

尻尾のインクが吹き出て、炎になる。

「ペアギア！」

よし！効果は抜群だ！

次は茶色！

「追い討ちの『ロックブラスト』だ！」

インクを飛ばす。インクは空中で固まり、岩となる。

「パツギユツアツ」

・・・三発しか当たらなかったか。まあいい。

「さあどう…!?!」

「『へんしん』…だ。」

前が見えなくても、一度描いたものは記憶出来る。ペンドラーに『へんしん』する。

「はあ…はあ…。」

少し楽になった。毒タイプは毒にならない。

「なかなか、やるわね。」

「勝たなきゃ…仲間に…なつてくれない…んでしょ？」

「ええ。だから、次で、決める！」

ペンドラーの角が光る。ちらつと地面を見る。

…あのクレーターを作った『メガホーン』をくらつたらひとたまりもない。

「ハアアアア！」

ペンドラーが突進してくる。

勝つには…狡いけどやるしかない。

ペンドラーの体はドープルに比べて大きく、長い。

そして、俺の『へんしん』は言つてしまえば特殊なインクによる張りぼて。

ここから導き出せる逆転劇への策。それは。

「ギユアツ！」

ペンドラーの『メガホーン』が俺の描いたペンドラーを、散らす。

が。

「ペアギユア!?!」

そこには既に俺は居ない。

散ったインクがペンドラーへの目隠しになる。

「尻尾の色は赤!朱!アカ!」

背中に翼を描く。

右手を尻尾に突っ込む、引き抜く。

「感覚で使う『ブレイブバード』と!『ほのおのパンチ』!」

全身が赤く染まる。

『ブレイブバード』の推進力を持った『ほのおのパンチ』がペンドラーの顔面に突き刺さる。

「ペアギユアギギア!!!」

ペンドラーは吹き飛び、壁に叩きつけられる。

目を・・・回している。

「か・・・勝った・・・!」

そして、目の前が真っ暗になった。

ヒウンジム戦〜前哨戦〜

…ふあっ!?

あ、あれ?ここは?

「タブ〜ンネ〜!」

「きゅあああ!」

「ペアギユアア?」

あー、えーと?

『ココハ、思索ノ原デス』

…ああ!確か、ペンドラーとバトルしたんだっけ。

それで…どうなったんだ?

「ペアギユア。」

「バウバウ!」

「ドブードツブドツブドブ。」
あつとーちよつと待って

ゆるゆると起き上がる。

尻尾使ってペンドラーを描く。

『へんしん』完了。でえっと…どっちが勝ったんだっけ？」

「あなたよ、ブール。最後のあれは効いたわ。」

「えっと、『ブレイブバード』と『ほのおのパンチ』だよね。」

「ええ。それにバトル中に『へんしん』を解くのも、インクを目隠しにするのも、凄くびつくりしたわ。」

「夢中だったからね。その場の思い付きでやったらあなただけだよ。」

「同じこととして言われても出来る気がしない。」

「きゅあああ。きゅきゅあああ？」

「ええ。そういう約束ですから。ビリジオン様、ワタシの勝手をお許し下さい。」

「きゅああ…。」

『へんしん』を解いてもう一度『へんしん』して人の姿になる。

「じゃあ、良いんだね？」

「ペアギョア。」

「それじゃあ。」

モンスターボールを使う。

「ペンドラー、ゲットだぜ!!!」

「パウパウッ！」

…うーん、メイコさんが居ないと調子が出ないな。

「まあいつか。さて、ニツクネームはどうしようかな〜♪」

「きゅああああ?」

「パウツパウツ!」

ペンドラーで、女の子か…。

ペンちゃん…ダメ。ペンギンじゃ無いんだから。

ペツカ…ダメ。なんだよペツカつて。

ペアー…呼びにくい、ダメ。

「うーん、ペア…ペテ…ペティ…ペティ?...これだ!」

ペンドラーを出す。

「ペアギユア!」

「これからお前の名前はペティな!よろしく、ペティ!」

「ペアギユアアアア!」

じゃあ、ヒウンシティに戻りますか。

〜〇〜〇〜〇〜〇

今更だけど、俺たちはヒウンシティのポケモンセンターに泊まっている。

今回は迷わずに帰れたよ!

「ただいま！」

「お帰り、ブルー君。」

「やっと帰ってきたの？ 今日こそは何か成果を挙げたんでしょうね？」

「うん！ 出てきて、ペティ！」

「ペアギユアア！」

ありや、角が部屋天井を掠めてる。

「どうだ！」

「ふーん？ なかなか良いやつゲットしたじゃない。これからよろしく、ペティ。あたしはメイコよ。」

「僕はN。よろしく。…とところで、このペンドラーってヤグルマの森でブルー君を追いかけたペンドラーだよな？」

「うん。でも、ビリジオンを何とかしたいっていう理由があったらしいし、僕は気にしないよ。」

「…まあ、ブルー君がそう言うなら良いか。」

ペティをボールに戻す。あ、天井に傷が…。

「さあ、今日は夕飯食べて寝るわよ。」

「え、なんで？」

「ジム戦は明後日。バトル練習出来るのが明日しか無いのよ。だから今日は寝て、明日みっちり練習するわよ。覚悟しなさい。」

「は…はい…。」

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

どうも皆さん、ブルルです。

今日は遂にジム戦だ！

え？バトル練習？やだなあ、何を言ってるのさ。

思い出したくもないよ…。

「やあ。久しぶりだね、ブルル君？」

「お久しぶりです、アーティールさん。」

アーティールさんの横にはブラックさんも居る。

「はん、自分は気取って特等席かしら？黒帽子。」

「ジムリーダーと仲が良いとこういう特権があるんだよ、騒音。」

「何よ騒音って。」

「お似合いだぜ？」

あ、Nさんは二階の傍観者席に居ます。

ついでにやたら煩いマスコミも居ます。

「まあまあ、メイコさん。今回は出番無いからって拗ねないですよ。」

「んな訳無いでしょ。自惚れるな。」バシッ

「あ痛っ」

「アハハ。仲が良い事は素晴らしい事だね！まあ、君たちの絵は後で描かせて貰うとするよ。」

今のボクはジムリーダーのアーティ―！遠慮なくやらせてもらうよ！審判！ルールの説明を！」

「はい！今回のジムバトルは特殊ルールで行われます！」

主な変更点は三つ！

一つ！チャレンジャーはペラップの使用が出来ません！

一つ！ジムリーダーはジム戦用のポケモンではなく、個人で育てたポケモンを使用します！

一つ！チャレンジャーはジムリーダーのポケモンを一匹でも倒せばジムバッチを獲得する権利が与えられます！

お互いに使用出来るポケモンは最大三匹！」

「オーケー！じゃあボクからポケモンを見せよう！行けっ！イワパレス！」

「ラッパース！」

イワパレスか。…あれ？辛くね？

「ハッサン！頑張ってくれ！」

「バウバウ！」

「それでは！バトルスタート！」

ヒウンジム戦～圧倒的相性の悪さ～

「イワパレス、『いわなだれ』！」

「ハッサン避けつつ『とっしん』！」

ハッサンが軽やかなステップで岩をかわす。

そして、イワパレスの顔面めがけて『とっしん』を繰り返すが、寸前で岩に籠こもられる。
「バウアツ！」

タイプ相性的にも当たった場所的にも全くダメージが通ってない。

「『がんせきほう』だよ！」

「横に回り込んで『ふるいたてる』二回！」

ハッサンは『がんせきほう』を紙一重でかわし、イワパレスの真横で吠える。

「アオーンツ！バオーン！！」

「赤み増し増し！『とっしん』！」

「振り向き『きりさく』！」

「やっぱ『まもる』！」

流石に遅いか。

ハッサンの『とっしん』がイワパレスの側面に炸裂する。が、イワパレスには効いてない上に強い反動で動きが止まる。そして、イワパレスの『きりさく』がハッサンに当たらない。

直前に緑のバリアがハッサンを包む。

「ナイスハッサン！一端下がって！」

「無茶させるわね。」

良いんです。無茶しなきゃ勝てない相手だし。

「うくん。ブルル君。君のハーデリアは強いねえ。でも！ボクも負けるつもりは無いからね！イワパレス！『からをやぶる』だ！」

「バーーーーー！！！」

イワパレスが岩から飛び出て、赤く光る。

なんか皮膚？がパラパラ剥がれ落ちる。

「イワパレス！『がんせきほう』で決めろ！」

かなりの大きさの岩が現れる。イワパレスが両手で岩を持ち、投げつけてくる。

「ハッサン『まもる』。」

「バウッ！」

ハッサンが緑のバリア以下略。

「ハッサン！『とっておき』を見せてやれ！」

「バウアツ！」

ハッサンがイワパレスを地面に叩き付け、押し付ける。

「イワパレス！」

アーティーさんが叫ぶ。

「ハッサン全力で『ふるいたてる』！」

「イツパ」「アオーンツ！」

イワパレスの声をハッサンの『ふるいたてる』でかき消す。

狡猾ずるい？勝てばよかろうなのだ！

「イワパレス！『いわなだれ』だ！」

「バー……！」

ありや、失敗。まあ良いや。

岩が何処からかワープされ、上の方から落ち始める。

「ハッサン、『とっておき』！岩より上からやれ！」

ハッサンが消える。イワパレスは自らの『いわなだれ』を必死になっ

る。

「パツパツパツ！」

「よくもまあかわせるわね。」

『『からをやぶる』のお蔭だよ。』

『いわなだれ』が止まる。イワパレスがほつとしたところでハッサンが上空から『とつておき』をぶちかます。

「バウアアツ！」

「イツパー!?!」

今度こそイワパレスが倒れる。

「イワパレス戦闘不能！ハーデリアの勝ち！」

「戻れ、イワパレス。お疲れさまだよ。……まさかこっちの技を逆手に取るなんて、やるねえ。」

「いえ、偶然ですよ。」

狙ったけどさ。押さえ付けられて『きりさく』は当たらないし、『からをやぶる』は……危険過ぎる。ゼロ距離『とつしん』が有るしね。

後、『がんせきほう』。これは賭けになったけど、こっちに『まもる』の選択肢があるから反動で動けなくなる『がんせきほう』をうつ可能性は低い。

それに、ジムリーダーは勝つためなら自分のポケモンさえも犠牲にするからね。

まあ、後から考えた結果だけ。

「そうかい。さあ、ブルー君。これで君はボクのバッチを獲得する権利を貰った訳だ。それでもまだやるかい？」

「当然です！やるなら最後まで！」

「そうかい！良い返事だ！よし、行け！アイアント！」

「アリツリヤリツ！」

ア、アイアント?!いや、確かに虫タイプだけどき！

「ハッサン、いける？」

「バウツ！」

「そっか。なら最初から飛ばすよ！『ふるいたてる』！」

「アオーンツ！」

これで四回。

「アイアント、『てっぺき』だよ。」

「アイツリヤイツ」

うげ。不味い。こっちのポケモンはハッサンとペティの二匹。ハッサンは半減する物理技しかないし、ペティは『おいうち』か半減の『メガホーン』しかない。

……詰んだ。負けそう。

「ええい！『とつておき』だ！」

「アイアント、『あなをほる』でかわすんだ！」

アイアントが地面に消える方がハッサンが押さえ付けるより速かった。

「くっ。」

「どうだい？これがジムリーダーの本気だよ。」

「ハッサン、『まもる』準備！」

相手の声に耳を貸さない。今は勝つことだけを考える。

「……。っ！ 今だ！」

「バウツ！」

良いね。何とか『まもる』が成功した。

「逃がすな！『とっしん』！」

「『アイアンヘッド』！からの『あなをほる』！」

ハッサンとアイアントの頭がぶつかり合う。

くっ、ハッサンが衝撃でクラクラしてるうちにアイアントは『あなをほる』をしてしまった。

「ハッサン！大丈夫か!？」

「バウツ！」

まだ行ける、と。

「よし！なら…ジャンプ！からの『とっておき』！」

「ババウツ！」

「アイツ!?リヤグツ！」

ジャンプで『あなをほる』をかわす。アイアントが周りの確認をするタイミングで『とっておき』がやつと当たる。

だが半減だ。

「アイアント！『ギガインパクト』！」

「はあ!?『まもる』！間に合え！」

どうなったか確認出来ずに爆発が起きる。

煙い。けど、『まもる』が間に合ったなら…！

「ハッサン！『とっしん』だ！」

「バアオオオーン!!!」

ドカアツ！

煙が晴れる。

そこには、倒れるハッサンとまだ立っているアイアントが居た。

「ハーデリア、戦闘不能！アイアントの勝ち！」

ダメだったか……。多分倒れた理由は『とっしん』による反動ダメージだ。

「戻って、ハッサン。無茶させてごめん。ありがとう。行けっ、ペティ！タイプの違いを覆せ！」

「ペアギユアギユアアア！」

アイアントは反動で動けない。動く前に倒す！

「ほう、ペンドラーか。強いぞ？」

「ブラック君、ボクは今まで一度も相手を見下した事は無い。強くても、弱くても、全力で倒すよ。」

「ハッサンの敵討ちだ！『メガホーン』！当たれえ！」

ペティの角が光り、上体を仰げ反らせ……仰げ反らせ……ダメが長いな。

アイアントが逃げ出そうとする。

しかし、ペティの『メガホーン』が放たれる。

ズドガアアアアア……！

う、うわあ。

「一撃……かよ……。」

ブラックさんの眩きが大きく聞こえる。

フィールドには巨大なクレーターが出来ている。

アイアントはクレーターの中央に埋まっている。

「…審判！」

「はっ！あ、アイアント、戦闘不能！ペンドラーの勝ち！」

「ボール君。」

「なんですか？アーティーさん。」

「そのペンドラー、この前は持って無かったよね？」

「はい。一昨日おととい捕まえました。」

「そうか…。戻れ、アイアント。お疲れさま。」

アーティーさんはアイアントをボールに戻す。

「そのペンドラー、前に一度会った事がある。…久しぶりだね、森の主。」

「ペアギユアア！」

へー、知り合いましたか。これはあれだ、運命ってやつだね。

「奇しくも、あの時と同じ対面だ。行け！ハハコモリ！」

「コモリー。」

ペティとハハコモリの中に火花が散った…様に見えた。

「あの時は遅れをとった。けど、今回はそうはいかないよ！ハハコモリ、『にほんばれ』」

「コーモラーツ！」

ハハコモリが強く光る球体を上に放る。

ひざしが つよくなった。

「やるぞペティー！『どくどく』だ！」

「ペアギユツ！」

毒の塊がハハコモリに向かって飛ぶ。

が、かわされる。

「な、速！」

「『ソーラービーム』！」

「かわして『どくどく』！」

ペティは紙一重で『ソーラービーム』をかわした。

のは良い。素晴らしい。

問題は ハハコモリーペティー俺 の順に一直線になっていて『ソーラービーム』はビームでペティがかわしてもすぐには止まらなくてつまり何が言いたいかと言うと「ふざぶつ！」

俺がかかせ無かったら意味無いよねって。

ハハコモリの『ソーラービーム』は、一匹のダブルの意識を刈り取った。

ヒウンジム戦～後味の悪い終わり方～

「ふげぶっ!？」

ブルルに『ソーラービーム』が直撃した。

「はあ!？」

「ええ!？」

「モリツ!？」
嘘おツ

「ペアギユツ!？」

「なにしてんのよ!？」

こ、こいつ! 何時もあたしの予想を斜め上に覆しやがる!

あ、あたしが今! 出来る事は!

『へんしん』の溶けたブルルの肩を掴み浮かばせる。

操り人形ブルル! ブルルの声を真似る。

「ペテイ! 気にせず『ベノムシヨック』!」

ブルルがさりげなく命令した『どくどく』はハハコモリに当たっている。

確か『ベノムシヨック』は毒状態の相手には倍の威力になる技。

しかもハハコモリは草タイプが入っているから弱点二倍！
「え、はいっ！ペ、ペア！ギユツアツ！」

ペティの二本の角の間に紫のプラズマが走る。

「はっ！ハハコモリ、避け……」「遅い！」

プラズマ状の『ベノムシヨック』がハハコモリに当たる。

「う、ぼっ、あ、ぼっハハバツババツ。」

うわ、きも。

女として見せちゃいけないような感じに痺れてる。

「ハ……ババ……り。」

あ、倒れた。

……勝った！第三部、完！

あー、いや、まあ、その…。

「悪い……わね？」

「あ……うん。えつと……審判！」

「うえ!?……はい！えー、このバトル、ジムリーダーのポケモンが三匹倒されました。よって通常ならばチャレンジャーの勝利となります！しかし、チャレンジャー自身が戦闘不能となっております。なので協会の規定により、このバトルは無効となります！」

無効試合。つまりジムバッチは貰えない…ん？

「ちよつと審判！」

「何でしょうか？」

「ジムバッチは貰えるわよね？」

「え？無効試合ですが…あつ。」

「うん。その通りだねメイコちゃん。ボクは既にブル君を認め、ジムバッチを渡す権利をあげた。無効試合となって残念だよ。」

あのひよろひよろ、見た目に似合わず良いジムリーダーね。

試合の結果によらず約束を守る人間性がある。

…まあ、それぐらい出来ないジムリーダーとして認めて貰えないでしょうけど。

「無効試合ねえ。あたしも残念よ。」

「おお？じゃあ、俺とやるか？ジャローダが疼くぜ？」

ひよろひよろの横に立ってたBWの男主人公がけしかけてくる。

てか何が『ジャローダが疼くぜ？』よ。厨二病なの？

「はあ。これだからバトルジャンキーの黒帽子は。」

「何だと騒音！バトルジャンキーなんかじゃねえよ！」

「やんの？」

「ああ、やってやる！」

「はいバトルジャンキー確定。ざまあみろ。」

「へ?…あ。い、いやそれは誘導尋問って奴だ！狡いぞ！」

「口喧嘩であたしに勝とうなんざ二百年早いわ。」

さあてと。

「じゃあ、後でブルルが起きてからまたバッチを貰いに来るわ。N！」

「ちよつと待ってメイコちゃん！今行く！」

Nが二階の視聴者席から飛び降りる。

「ふーん？やるじゃない、N。マスコミの眼が釘付けよ。」

「そんなつもり無いんだけどな。あ、ブルル君は僕が運ぶよ。」

「ええ。そのつもりで呼んだのよ。あたしじゃブルルをポケモンセンターまで運びきれ

ないわよ。と、言うわけで！また明日ね、ひよろひよろ！」

「ボクの名前はアーティードよ！」

さーて、ブルルが起きたらどうしてやろうかしら。

激戦。その夜の事～バッチゲット～

「はいは～い。メイコさんよ！」

「えー、Nです。」

「今から、ブルドツキリ大作戦を敢行します！」

「い、いえ。」

「何よN。元氣無いわね。」

「まだ夜なんだけど？」

「起きないブルが悪い。」

「ここはポケモンセンターの 一室。

アーティーさんとのポケモンバトルで不慮の事故によって気絶したブル君が寝ている。

「あの『ソーラービーム』は強烈だったし、まだ寝かせてあげても…。」

「あたしはマスコミについて回られたく無いのよ。」

「あー。」

マスコミか…。彼ら彼女らは酷かった。

無駄なお喋りが多い。

技の意味を分かかってない。

無意味にけな貶す。

二階から飛び降りるっていうショートカットをしなかったらポケモンセンターまでたどり着かなかったかも知れない。

「でも、アーティーさんが起きてないんじゃない？」

「そこはさつき黒帽子に連絡しといたわ。」

「ブラツク君に？」

「そ。あいつ相当あのひよろひよろに気に入られてるみたいね。二つ返事だったわよ。」

「はあ。」

いつもながらメイコちゃんの行動力には驚かされる。

「じゃあ、起こす？」

「だからさつきからそう言ってるじゃない。」

○○○○○○○○○○

「ホッホッホ。久しぶりじゃの。」

あ、おじいさん。久しぶりです。

「ポケモン人生はどうじゃ？」

ポケモントレーナーと兼任してて楽しいです。

「ん？あれ、お主兼任なんて知ってるのか？」

はい。二つの事を同時にやる…みたいな意味ですよね？

「まあ、そうじゃ。…ポケモンの成長速度かのう。」

あとメイコさんのお陰です。

「メイコか。ああ！メイコに悪かったと伝えてくれるかの？」

良いですよ。

「そうかそうか。お願いじゃぞ？じゃあ、またの。」

うん。ばいばいいいいぢい！

くくくくくくくくくくくく

「ほらほら起きろく。」

「ドブツ！ドブツ！ドブツ！あだっ！あだだだだ！」

「あ！メイコちゃん！起きた！ブル君起きたよ！」

「もつとやれ！」

「ギギイ!!」

く、これは?!頭がああ！潰れる！

「戻れ！ギギギアル！」

「ごふう。い、痛かった。」

「ド、ドブ。……皆さんどうも、ブルです。今日はギギギアルの間に頭を挟まれての起床です。遂にNさんが敵に回りました。」

「ほれ、バカ言つて無いで行くわよ。」

「えつと、どこに?」

「アーティーさんのところに、だよ。ブル君。」

「はえ?」

~~~~~

「やあ、来たね。」

「お邪魔するわよ。」

アーティーさんのアトリエ。

絵が沢山掛かってます。

「ええと、夜分遅くに失礼します。ブルです。」

「ああ。知ってる。ブラックだ。」

「知ってます。で、どうして夜に?」

「メイコちゃんがマスコミが居ない内にこの町を出たいんだって。」

「成る程。」

メイコさんの独断専行ですかそうですか。

良いけど。マスコミに良い思いはない。

「じゃあ早速。これがボクに勝った証。ビートルバッチだよ。」

「ありがとうございます！」

「あと、ボクに勝った人達は皆ここに飾ってある。意味はわかるね？」

「…あ、はい。」

記念写真的なあれってことか。

「じゃあブルー君のポケモンを出して。メイコちゃんも。」

「あー？なんであたしが。」

「良いじゃん、メイコさん。描いてもらおうよ。出てきて、ハッサン、ペティ！」

「バウバウ！」

「ペアギユアツ！」

「よし、じゃあそこに並んで。…ブルー君が中心になるように…うん、よし！」

サラサラ…：かきかき…：

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

「少し時間かかっちゃったかな。出来たよ！」

「やっとな。ほら、見せてみなさい。」

どれどれ…わあ！上手だ！ウズく！

「…え？ウズく？」

「どうしたの、ブルー君。」

「あ、Nさん。描いて貰わなくて良かったんですか？」

「うん。僕は良いんだ。それより、なんかウズウズしてないかい？」

「うん…何ですかね？」

「あれだな。ドーブルの本能だ。」

「え、ブラツクさん、どういう事ですか？」

「ドーブルは絵かきポケモン。上手い絵を見たら自分も描きたくなるんだろう。」

「成る程…。」

絵かき…俺は、何を描きたいんだ？

「Nさん、ブラツクさん、アーティーさん、そっちに。」

「え？」

「僕が描きたいです。三人で座ってください。」

「いや、僕は…。」

「固いこと言うなよ、N！アーティーさんも良いよな？」

「うん。ボクは描いてばっかりだったから、描かれるのは新鮮だね！」

画板だけ借りる。

『へんしん』を溶く。

「ドブ…。」

アーティーさんを挟んで右にNさん。左にブラックさん。

「ドブ…ドブ…ドブドブドブドブ。」

ドブドブドブドブ!

ドドッブドブドブ!

ドドドドブドブ!

「ドブ…。」

『へんしん』する。

「出来ました。初めて描くのでお気に召すか分かりませんが。」

「凄い…。」

「おお!鏡みたいだ!」

「う…ん…。複雑だなあ。人間じゃあポケモンには勝てないのかな? つて思わせる出来

映えだね。」

えーと、つまり上手なのか? 良く分からないけど。

「お気に召したようで何よりです。」



## 夜の砂漠でく砂ずなしく

夜の砂漠って寒いね。ブルです。

四番道路は砂漠そのもの。砂嵐が痛いです。

「もう、メイコさん。昨日手紙出してあったから良いものの、ジム戦終わったら即出発とか事前に言つてよ。」

「・・・。」

「ん？あれ、メイコさくん？」

「・・・ZZZ。」

「えーと、寝てる…ね。」

ああ、メイコさん鳥だしね。鳥目で周りが見えないもんね。つまないと寝ちやうよね。うん。

「Nさん、そのペラッブ置いてきましよう。」

「ふわあ…。ん？何か言った？ブル君。」

「何でもないです。」

くくくくくくくくくく

さっさとテント張って寝ることに。

なつたのは良いんだけど寝れない。

くそう。Nさんとメイコさんはぐっすり寝てるのに。

「とはいえ、ハッサンとペティを出すのもなあ。」

…一人で外に。『へんしん』を溶く。

「ドブ…。」

手紙、届くかなあ。

そもそも宛先が『カロス地方七番道路ドーブルの里宛』っていうのがなあ。でもこれ

以外無いしなあ。

念のため、一回だけ見たお父さんのマーク…『六紋銭』を描いたし、多分大丈夫だろ

う。多分。

「ドドブ…。」

アーティーさん、良い人だよなあ。元気で、お茶目で、冗談も言えて、気をつかえて、

ポケモンバトルも強くて、更にアーティストなんだよなあ。

本当、凄い人だね。

ブラックさんは先に行ったらしいし、また会えるかなあ。あのジャローダを倒すには

ペティを出せば良いとして、問題は他のポケモンだよなあ。どんなポケモン持つてるんだろ。

お父さん、お母さん、カラキリクルケン、こ…。

ああ、こは俺か。ブールです。

それにメタやんに、それに…長老か。

意外と知る相手が少ないなあ。良いんだけど。

どうしてるんだろうなあ。

良く分かんないや。そんなに長い間居た訳じゃないし。

次会ったときは…胸はつて…いや、涙の再会…？

「ドゥブドブ…。」

良い感じに…目の前が真つ暗に…なってきた…。

「ドブドブ…。」

ブルはすなあらしによるダメージを受けた！  
ブルは倒れた！

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「…。おはようございます。」

ええと、ここどこだよ。

『ココハ、リゾートデザートノ古代ノ城デス』

…まじか。

「マツカ！」「ダルダル！」

目の前に双子(?)のダルマツカが居る。

「ドブドブ、ドブドブ。ドブドブ僕ブルドブは。」

「ダルマツカ！」「ダルマツカ！」

「ドブドブドブ。」

『へんしん』、対象は目の前のダルマツカ。

シユバツと描く。

「はい。姿借りたよ。」

「すげえ！」「スゴい！」

「そうかな？」

照れちやうな。てへへ。

「これは殺りがいが有りそうだ！」

「…へ？」

何だって？

古代の城の闘い～炎タイプって少なくね?～

「うわっはっどひゃあ!」

「ほらほら〜!」「おらおら〜!」

炎が飛んでくる。

足下に着弾し、爆発する。

吹き飛ぶ。

「うわあ!」

転ぶ。

で、ダルマツカの体は丸くて。

丸い体は走った勢いで転ぶと転がって。

「アワアワアワアワ!」

壁にぶつかって止まる。

「もう終わり?」

くそう。こんなガキ二匹にやられっぱなしなんて…

「沽券マッに関わる！」

本気で行く！

『へんしん』解除！

尻尾のインクの色は水色！

「ダル？」

「ドブドブ、ドブドブ！高まれ、俺の怒り！ドブドブ！消え去れ！ドブドブ！『なみのり』だ！ドブドブ！」

尻尾を横に振る。

水色のインクが膨張し、巨大な波となりダルマツカたちを飲み込む。

「ダルダルマー！」

ふうー。ダルマツカたちは通路の向こうに流れていつちやった。

なんなんだったのか。

ダ〜ル〜

うん？何か聞こえたような…上？

「ダ〜〜ルマ〜!!!」

「うわあ！」

天井を突き破って赤い塊が落ちてきた。

ってか危うく踏まれる所だったよ!?

「ダルマ～～ア～～!!」ドカドカドカ

何だっけ?ドラミングしてきた。

「ダ～～ル～～マ～～ア～～!」

俺は、何故か他のポケモンの言葉が分からない。

それでも、分かる。

このヒビダルマ。

…メツチャ怒ってらっしやる。

～〇～〇～〇～〇～

ありのまま今起きたことを話すわ…。

朝起きたらブルが居なかった。

何を言ってるのか分からないと思うけどあたしにも何が起きたのか全く分からない。

だつて寝てたし。

「と言うわけで、おはよう、N。ブルを探しに行くわよ。」

「うーん…。あ、おはようメイコちゃん。」

「おはよう、N。ブルを探しに行くわよ。」

「うん…ちよつと待って。着替えるから。」



「ブールを探しに行くわよ。」

「…え!? ブール君居ないの!?!」

「探しに行くわよ。」

「わ、分かった! すぐ行く!」

「行くわよ。」

ア~~~~! 焦れたい!

「ハヨ! ハヨハヨ!」

「準備できた! 行こう!」

○○○○○○○○○○

「ダルツ! マツ!」 ドガンドガン

ブールです。ピンチなので短めに。

「ダルバ〜!」 ボボウ

今はヒビダルマが入ってこれない大きさのL字通路の奥に籠こもってます。

「ダルダルバ〜!」

メツチャ怖いよあのヒビダルマ。

いきなり襲ってくるし。

『へんしん』する暇も無かった。

「ダルツッ!ダルツッ!ダルツッ!」

今のところ使ってきた技は『アームハンマー』『かえんぐるま』『やきつくす』の三つ。あと、恐らくあのドラミング?が『はらいこ』で四つ。

「ダルダルダル!」ドンドンドン

さて、どうする?

まあ、多分ポケモンバトルなら勝てる。だろうけど、そもそもバトルって状況じゃ無くなつてしまった。

「L字通路の角から頭がでた瞬間に『やきつくす』が炸裂する筈だ。

「L字のせいで『みずてつぽう』は当たらない。

音系の技は俺にもダメージが来ちゃうし…。

「ダールーバ〜!」ボボボウツ

『あなをほる』?…駄目だな。この城、堅すぎる。俺の尻尾じゃ無理。

助けを呼ぼうにもメイコさんたちが近くに居るとは思えない。

「ダダアルマア…!」ドガンツ

『みずのはどう』?

却下。描けない。水の中なら或いはって感じ。

『なみのり』?

逆流して息ができなくなってゲームオーバーがあり得る。少し怖いかな。

『たきのぼり』？

どうしろと。

後は…『アクアテール』？

近付けないんだって！

『ハイドロポンプ』と『ハイドロカノン』も『みずてつぼう』と同じく。

「ダルダルダル！」ドゴドゴドゴ

水タイプは、後は…『しおふき』、『みずびたし』…『アクアジェット』に…ん？

『アクアジェット』か。

水を纏って突進。炎ははじく。スピードは抜群。

これしか無さそう…かな？

『アクアジェット』で脱出

←  
ヒヒダルマの度肝を抜く

←  
動けない間に『へんしん』

←

よし、  
行ける！  
説得する

またはぐれてくすなあらしの恐ろしさく

「す・な！鬱陶しい！チクチクする！」

「メイコちゃん、今はプール君を探さないと！」

「分かってるわよ！『はねやすめ』。ったく。」

ハローマイネームイズメイコ。

プールはハッサンもペティも置いてどっかに行きました。おい主人公どこに行きやがった！

んで、プールを搜索してるんですけど。

ここは砂漠の四番道路。天氣が常に『すながふきあれる』となる過酷な環境。

今ほどボールに入りたいと思つた事は無いわ。

だつてNの肩に停まっているだけで体力がガンガン削られてくし。…ん？

「N、ここいら一带はざつと探したわよね？」

「そうだね。でもプール君は見付かつてないよ？」

「ねえ、プールはドールプルの姿でいる筈よ？分かつてる？」



のポケモンが住み着いている。

「ギギギアル、『チャージビーム』！」

「ギツギギッ。」

「デスッ！」

「ありがとう、ギギギアル。」

ギギギアルをボールに戻す。メイコちゃんが言うには、ブルル君はここに居るらしい。

「ブルル君！居るかい!!」

「すうう。つあうううう……んー、駄目ね。動く奴が多すぎてどれが誰だか。手当たり次第に探すわよ。」

「うん…ねえ、メイコちゃん、本当にブルル君はここに居るの?」

「恐らく、よ。野生の勘。だから居るかどうかは分からないわ。」

「ええ!!」

「居なかつたら…ゴメンね?」

とはいえ、メイコちゃんの勘しか頼れるものはないし…。

「うん。今は探そう!」

奥に行くために走り出そうとして

ボコオ!

「な!?!」

穴に落ちた。

ドサツ!

思ったより浅かった。

「ちよつと何やってんのよN……あんだ、何やってんの?」  
メイコちゃんは僕ではなく、僕の後ろに声をかけた。

後ろを見ると……って

「ブール君何してるの!?!」



「あ、メイコさん、Nさん！お説教ですよ！」

# ベストウィッシュ〜俺達の旅はこれからだ!〜

かくかくしかじか

ポリゴンオドシシ

「つまりどういう事だつてばよ。」

「ここでナルトネタツツコめるのは僕しか居ないですけど、メイコさん。」

「あんたと話してんだから良いのよ。で、どういう事なのよ。」

さつきも軽く説明したので面倒なブールです。久しぶり。

「要するに、双子のダルマツカの嫌がらせですよ。」

「そう…みたいだね。」

「あー成る程。少し整理させて。」

まず、外で倒れたポケモンはここに運ばれる。

すると、ダルマツカの双子がここに来たポケモンにちよつかいを出してくる。

ダルマツカとバトルして負ければ終わり。

もし勝ってしまったら…

ダルマツカたちが親のヒビダルマに泣きつく、と。」

「そう言うことです。凄く迷惑しました。だから、説教です。」

目の前にはまだ気絶しているヒビダルマと正座しているダルマツカたちが居る。

「なるほど。何をトチ狂ったのかあたしたちに説教するのかと思つたわよ。」

「そんな訳無いじゃないですか。」

まあ、思つたより速く合流できたから少しテンション上がったのは否定しないけど。

「別にここに来たポケモンにバトルを挑むのは良いんですよ。ポケモンの習性だつてなんとなく分かりますから。バトルに勝ち負けが有るのも当然。俺が気に入らないのは」

「親に泣きつく根性？」

「そうです、Nさん。負けたなら大人しく負けたー！悔しー！つてなつてれば良いんですよ。何でそこで親に行くかなあ。今まではそれで何とか成つてたんだろうけど今回みたいに親も倒す位強い奴が来たらどうするつもりだったんだよ。俺はポケモンだから気にしないけど普通のポケモントレーナーだったらこのヒビダルマはゲットの対象なんだよ。そこんとこどーすんのさ、ダルマツカ君。君たちの親が捕まったら？」

「ダルつー！」「マツカ！」

「何言つてるか分かりませーん。つまり何も考えてないんでしょ？」

「ブール…君？」

「そんな大甘な考えでつと何も考えて無いんだから甘いも辛いも無いか。そんなんでこの先生きていけると思ってるの?」

「ブル。終わりよ。」

「まったく。君たちみたいなのが居るからポケモン界全体の格が下がるんだよ。切断野郎が出てくるんだよ分かって…」

「終わりつつてんでしょ!」

「ババシイ!!」

「あたい!ててて…はっ!僕は何を!」

「地が出てたわよアホ。バカ。ドジマヌケ!」

「サーセン。」

我を忘れてた。

あ、ダルマツカたちが正座したまま気絶している。

……へあ!?

「そういえば、ブル君はどうやってこのヒヒダルマを倒したの?普通に強そうだけど。」

「あー、それはですね…」

回想でどうぞ。

く〇く〇く〇く〇く〇く

尻尾のインクは青。

ヒヒダルマの攻撃が止むのを待って…。

「よしっ！『アクアジェット』！」

周りにインクの水を纏まとい、走る走る走る。

足元をスライディングし…でかあ!?

通路の出口はヒヒダルマのでかい顔がすっぽりと嵌はまる位の大ききさだった。

そこに突進してつたらどうなるか。

ぶつかる。

「あわわわわ！」

慌てて止まろうと両手を前に突き出す。

さて、ここで少し落ち着いてヒヒダルマの顔を思い出してほしい。知らない人は画像検索してみてください。

ヒヒダルマの目、でかいよね？丸いよね？

ダブルの手ならずっぽり入る位、大きいよね？

つまり。

ブスッ!

「ダツダツダアツ?!?!?!」

ブールのこうげき!

『アクアジェット』!

ヒヒダルマの急所にあたった!

ヒヒダルマは悶もだえた!

「えーと…嘘お。」

ヒヒダルマは怯んでいる。

「何か…免まなさい。だけど、ポケモンバトルだから。」

ブールはとどめをさした!

くくくくくくくくくく

「…偶然じゃないか。」

「…偶然ですね。」

「それでいいの?」

「そもそも対等なポケモンバトルにすらさせて貰えなかったし、良いんじゃないですか

「？」

悪いとは思ってますけども。

「で、こいつらはどうするの?」

「んー。捕まえても良いですけど…:て言うか鋼タイプの弱点突けるから欲しいですけど…正直、要らないです。放置したいです。関わりたく無いです。」

「そう。じゃあさっさと次の町に行くわよ。」

「そうですね。」

「……。」

「あれ?どうしたんです? Nさん。」

「おや? Nさんの様子が…。」

「ゴメン、二人とも。僕はここでお別れしても良いかな?」

「ええ!」

「…理由は?」

「ん…:やっぱり、君たちはポケモンというより、人間なんだなあつて。そう思ったから…。」

「ああ…:そっか。」

「そういえば、Nさんはもともと人間嫌いだったよね。」

俺もメイコさんも元々人間だし。

「いや、トモダチとは思ってるよ。けど、その、なんて言えばいいか分からないけど。ポケモンでは…無い。何故か、そう、感じちやってね。」

「そう…。まあ、しようがないわね。もともとこんなに長く一緒に旅する予定じゃなかったし。また会いましょう、N。」

「メイコさんサバサバしてますね。僕はまだ一緒に居たいですけど…Nさんがそういうなら、そう、しようがないですね。」

あれ？そういうえ俺はともかく、メイコさんが人間だって教えたっけ？

…いや、こんだけぺらぺら喋ってたら分かるか。

「ゴメンね。二人とも。」

「いや、Nさんが謝る事じゃ無いですよ。…また、会えますよね？」

「…うん。きつと。」

なら、泣く必要もない、よね？

「さようなら、Nさん。(震え声)」

「こら、ブルル。違うでしょ。こういうときは。」

ベストウィッシュ！良い旅を！



## 三度マスゴミくライモンシティでく

Nさんは古代の城でダルマツカたちの教育とかをしてから各地を回るらしい。

Nさんらしいや。

んで、俺とメイコさんは二人で旅をする。

何処に居るかというと。

「ふうく。やつと着いたよ。」

ライモンシティだよ皆さん。ブルルです。

バトルサブウェイのあの人にお世話になった人は多いのでは？

とりあえずポケモンセンターに向かう。

「うーん、電子、電磁、電気。嫌いじゃないけど、この体だとねえ…。」

「効果は抜群だ！となると今回ジム戦はメイコさんの援軍は期待出来ない、と？」

「あたしだって昔色々戦ったからある程度対策は出来てるけど、まあ、そう思ってくれて良いわ。」

となると、ハッサンとペティのツートップか。

大丈夫だと思うけど…。

「エモンガの『ボルトチェンジ』が厄介かな。ゲームだとメグロコ捕まえて弱点突こうとして返り討ちにあったから結局レベル差があるチャオブーでごり押ししたなあ。地味にトラウマ。」

「へー。あんたポカブ選んだんだ。あたしはツタージャだったわ。」

「あー。最終進化はツタージャのがカッコいいんですね。」

喋ってたらポケモンセンターに着いた。  
んだけど。

ザワ・・・ ザワ・・・

ザワ・・・ ザワ・・・

マスゴミが、大量に、ステンバイ、してる。

あれ？嫌な予感しかないや。

「メイコさん。どうします？」

「ペティでも出しとけば？追っ払ってくれるでしょ。」

「でも砂嵐でダメージ酷いし…」

「あ！おい！お前ら！来たぞ！」

「ドーブル少年と『赤い騒害』だ！」

「行くぞ！出し抜かれんなよ！」

「取材良いですか！」

「今回のジム戦では——」

「どうやって——」

「勝算は——」

あ、駄目だ。逃げよう。

くくくくくくくくくくくく

観覧車ナウ。

「何で逃げたのよ。突撃すれば良かったんじや？」

「疲れるんですよ……このままジム戦に行つて、わざと負ければ……？」

そうすれば自分達のせいで俺が負けたとか気付くか？

「マスゴミつてのは自らの行いを顧みないからゴミなのよ。てか何よ！『赤い騒害』つて

！潰してやろうかしら。」

「そんな事したらそれこそ『赤い騒害、ご乱心!?!』とか書かれかねないよ？」

「何それすごい有り得る。てか、見出しそれっぽいわね。あんた意外と才能有るのね。」

「そうでもないですよ。」

さて、どうするか。

そつと下を見る。

「うわあ。ステンバイしてる。逃げられなさそう。」

「……あ！良いこと思い付いたわ！少しめんどろだけどこの際仕方無いわね。ブル。あんた、『へんしん』変えなさい。」

「え？」

~~~~~

「よし！降りてきたぞ！」

「あれだ！あの赤いやつだ！」

「まだだ……まだ抑えるんだ……。」

ガチャ

「行け！」

「取材良いです……つてあなたどちら様ですか!？」

観覧車から降りてきたのは少年ではなく、背が高く山高帽を被った女性だった。

「Wow!! what are you doing!？」

「え？」

「Oh, sorry. I'm not Bool. See you again.」

スタスタスタ…

「な、何なのよ…。」

「待てよ？確かあのドーブルって『へんしん』使えたよな…まさか！」

「馬鹿野郎！あいつがブルだ！おえ！おえ！おえ…！…いや、吐いてる訳じゃない。良いから追え！」

~~~~~

「流石メイコさん。英語の発音が流暢でしたね！」

「あたしにかかれば楽勝…と、言いたいけどね。ペラップである以上出来て当然なのよ。はあ。」

ポケモンセンターの個室ナウ。

マスゴミもここまででは追ってこれない。

ハッサンとペティは回復中。俺とメイコさんは明日のジム戦の為に英気を養ってます。

あ、『へんしん』は描き直して元の(?)姿です。

「ああ。ポケモンの本能ってあれですか。僕もお絵描きは本能出来ますよ。」

「自慢になってないわよ、アホ。まあそんなことよりライモンシティ攻略よ。ジムリーダーは確か、えくと。」

「カミツレさんですよ。電気タイプを使い手。パートナーはエモンガ。」

「そうそう。で、イツシュ地方の電気タイプは他には？」

「伝説抜くと…シママ、ゼブライカ、ギアルシリーズ、バチユル、デンチュラ、シラスの進化系、あとは…マツギヨ。」

「ギアルとマツギヨが辛いわね。シラス系はまあ、頑張るしか無いわね。実質弱点無しだし。」

このあと、少し話し合ってから寝た。

夜更かしは毛皮に悪いからね！

ライモンジム戦くビリビリさせてあげるく

「オラオラオラー……これからジム戦なのよドケー……」

朝から飛ばすメイコさん格好いい！へいへい皆さん、ブルだよ。

今日はジム戦。なんだけど、ポケモンセンターを出た途端マスコミに囲まれたんだよちくしょう。

だから今回出番が無い(筈の)メイコさんが朝っぱらからマスコミを追い払ってます。

「取材したいならあたしを倒してみろ……!!」

それはどうかと。

くくくくくくくくくく

メイコさんやべー。

真に受けた馬鹿なマスコミがだしたシママやバチユルを『ばくおんば』で一掃したよ。

そして一喝。

「その程度で取材しようなんて十年速いのよ！」

そしてボソツと「その頃にはもっと強くなってるけどね」。

「えー。」

さて。

「カミツレさん！宜しくお願いします！」

「元気で良いわね！ビリビリにしてあげる！」

ジム戦だよ！

ルールは三対三の勝ち抜きバトル、こっちだけ交代可。

「行きなさい、エモンガ！」

「エーモツ！」

『おおーつと!?我らがカミツレ、最初っからベストパートナーだ!』

「おお！実況だ！流石はライモンジム、豪勢だ！」

「負けませんよ！行けっ！ハツサン！」

「バウバウツ！」

『対するチャレンジャー、初手はハーデリア！そんなポケモンで勝てるのかあ!』

「グルルウ！バウツ！」

「落ち着いて、ハツサン！」

「ブル。まずは流れを掴みなさい。度肝を抜くのは後からでも出来るわ。」



頭の上からメイコさんのアドバイスが降ってくる。

「先手必勝！エモンガ、『エレキボール』！」

「ハッサン『まもる』からの『ふるいたてる』！」

エモンガの尻尾から電気の塊が飛ばされるが、ハッサンの緑のバリアに当たり爆発する。

おお、煙い煙い。けどうつすらと赤みがかかったハッサンが見える。

「エモンガ『ほうでん』！」

「『まもる』！』『ふるいたてる』！」

エモンガが電気をばらまくが、ハッサンの緑の（ry

「バウバウツ！」

「良いぞ！その調子だ！」

『カミツレの猛攻！チャレンジャーは手も足も出ない！守ってばかりでは勝てないぞお！?』

「……ウザいわね。」

「エモンガ、『でんこうせっか』！」

「『とっしん』で迎え撃て！」

エモンガとハッサンがぶつかり合う。

お互いに弾き飛ばされる。

「エモンガ！大丈夫!？」

「ハッサン、『とっておき』だ！」

エモンガが体制を建て直す前に倒す！

空中に居た筈のハッサンが消え、エモンガの上に現れる。

「エモツ!？」

「バウアアッ！」

地面に叩き付ける。

「エモンガ!？」

「エモンガ戦闘不能！ハーデリアの勝ち！」

『おおーと!?! エモンガ戦闘不能!?! 得意の『ボルトチェンジ』を見せずに散ったあゝ!』

「くっ。戻りなさい。…行きなさい！ゼブライカ！」

「ゼビヒイ！」

ゼブライカか。…あの四人組どうなったんだっけ？

「まあいいか。ハッサン！『ふるいたてる』だ！」

「ゼブライカ、『でんじは』！」

あ、やべ。麻痺った。

ハッサンの赤みが増すが、『でんじは』をまともには喰らう。

「フフフ。これで貴方のポケモンは自由に動けないわ！ゼブライカ『ニトロチャージ』！」

「くそっ！『まもる』だ！」

ハッサンが緑のバリアに包まれ…た！

ゼブライカがバリアにぶつかる。

「今こそ『とつておき』！」

「『でんげきは』よ！」

ハッサンが消え…無い。体が痺れたか！

『でんげきは』がハッサンに当たる。

「バフウ！」

…よしっ！耐えた！

「畳み掛けるわよ！『ニトロ…』」

「待った！戻って、ハッサン！」

『ふるいたてる』が勿体無いけどハッサンをボールに戻す。

『チャレンジャー、ここでポケモン交代だあ！次はどんなポケモンを出すのか!?』

そんなの一匹しか居ない。

「ペティー！」

「ペアギユアアア！」

『おおーつと、ペンドラーだ！チャレンジャーの二匹目はペンドラーだ！』

と、メイコさんが話しかけてくる。

「ねえ、ブル。最初だけあたしが指示してもいい？」

「え？まあ良いですけど。」

何するんだろう？

「ペンドラーね？でも私のゼブライカには敵わないわよ！」

「じゃ、メイコさん。指示どうぞ。」

「ええ？」

メイコさんはすうつと息を吸い込み、

「ペティー！実況者の所に『どくどく』！」

「ペアギユツ！」

毒の塊が実況者の所に飛んでいく。

防護ガラスのお陰で実況者には当たらなかったけど毒まみれで中を見る事は不可能

だ。逆もまたしかり。

『うわっ！な、何しやがる！』

「ハツハツハー！あんたの実況詰まんないのよ！全然実況してないくせにでかい顔してんじやないわよ！」

『何だと！こちとらもう何年も実況してるんだぞ！』

「何年も実況しててその程度なの？だったら実況者失格ね！田舎に帰ってヨーテリーと戯れてろこのガキ！」

『何い！やんのかこの野郎！』

「あたしの性別はメスよ盲目！野郎なんて言っちゃって実況者として恥ずかしくないの？ポケモンの性別を見分けられない実況者ここに現る！アハハハハ！」

『くくっ！』

「凶星すぎて何も言えないの？それでも実況者？ポケモン実況界隈のレベルの低さが見えるようだわ！」

ガンツ！と音がしてマイクが途切れる。

「ふう。あ、ご免なさいね。バトル中に。」

「え、いえ。…私のライモンジムに居る実況者があの程度だとは思わなかったわ。それを指摘してくれてありがとう。驚ヒリヒリいちゃったわ。でも、今度は私が貴女達をビリビリさせる番よ！ゼブライカ！『ニトロチャージ』！」

「ヒヒーーン！」

ゼブライカが走り始める。

「ほれ、ブルル！」

「分かってます！ペティ、『どくどく』を撒き散らせ！当たれば儲けものだ！」

「ペアギユアアア！」

ペティが『どくどく』を撒く。が、当たらない。

ちつ、速いな。ランダムに飛んでくる『どくどく』も、地面に溜まっている『どくどく』も全部かわしてる。

「ビヒーーン！」

『どくどく』止め！『メガホーン』でカウンターを狙え！」

「ペアギユア！」

激突。

「ヒ、ヒヒィ…。」

「ペア…ギユア…。」

お互いに倒れず、ふらつく。

『どくどく』！

『でんじは』よ！」

ほぼ同時に指示が飛ぶ。

先に動いたのは……ペティだ。

「ペアギューア！」

「ヒヒイ!?!」

やつと『どくどく』がゼブライカに当たる。

「ヒ、ヒヒイーン！」

「ペアギューア！」

が、ゼブライカの『でんじは』もペティに当たる。

よければいししようがないね。

「『ベノムシヨック』だ！」

「『ニトロチャージ』よ！」

ペティのが速い。特性『かそく』のお陰だね。

ペティの角から紫に輝くプラズマの様なものが放出され、ゼブライカの体を駆け巡る。

「ヒ、ヒヒイ、ン。」

ゼブライカはそれでも『ニトロチャージ』をしようと足を踏み鳴らしたが、倒れた。

「ゼブライカ戦闘不能！ペンドラーの勝ち！」

「ありがとう、ゼブライカ。やるわね：興奮しちやうわ。ヒリヒリ」

「勝つために来たから、この程度当然です！もつとビリビリさせてあげますよ！」

「言うわね？ならさせてみなさい！行って！デンチュラ！」

「ヂユイツヂユイツ！」

デンチュラか。良かった、マツギヨとかギギギアルじや無くて。

「ペティ、行ける？」

「ペアギユア！ペアギユアアア！」

おお！ヤル気満々！

「さあ！痺れる花が最後に見せる心意義！喰らいなさい！『10まんボルト』よ！」

「ヂユイツ！」

「ペティ、『どくどく』だ！」

ペティが動かない。麻痺のせいか。

『10まんボルト』が直撃する。

「耐えろよ!? 『どくどく』！」

「ペ、ペア、ペアギユアアア！」

上出来！

ペティが放った『どくどく』がデンチュラの『10まんボルト』を押し返していき、爆発。



「もう一回『どくどく』だ！当たったら『メガホーン』！」  
「ペアギョア！」

「『どくどく』は『きりさく』！隙を見て『エレキネット』よ！」  
「チュイツチュイツチュイツ！」

凄い応酬だ。

ペティは『どくどく』を飛ばす。

デンチュラはそれを『きりさく』で一刀両断していく。

デンチュラペティが麻痺する一瞬の隙を見て『エレキネット』をフィールドに張っている。  
く。

ペティはそれを踏まないように動き回る。

もう一度言う。凄い応酬だ。

だけど千日手。いや、じり貧だ。

そのうち『どくどく』のPPが切れるかフィールド全体に『エレキネット』が張られて動けなくなるかの二択。

…なら。

「ペティ！もういい！『ベノムショック』だ！」

「ペア！ギョア！ペアギョアアア！」

威力は低いけど恐らく確実に当たる技を選ぶ。

動き回るペティから紫に輝くプラズマが放出される。

「な！ならデンチュラ！『むしのさざめき』よ！」

「ヂュイツ！ヂュヂュヂュヂュ……」

プラズマはデンチュラに触れ、チビチビと確実に体力を削っていく。

デンチュラが全身を揺すって出す音はフィールド全体に広がりペティの体力を削っていく。

技の応酬から削り合いになる。

「ペアギユアアア！」

「ヂュヂュヂュヂュ……」

そして、終わりの時が来る。

「ペア、ギユア……」

「ん！今よ！『きりさく』！」

「ヂュイツ！」

ペティが先に倒れた。敗因は恐らく確実にゼブライカの『ニトロチャージ』だろう。

「ペンドラー、戦闘不能！デンチュラの勝ち！」

「ありがとう、ペティ！良くやったよ！ゆっくり休んでいてね！」

ボールに戻す。

「フフ。ビリビリしたかしら？」

「まだまだ！ビリビリされるだけじゃ終わらないですよ！」

「ブル、最後よ。一撃で終わらせなさい。流石に飽きてきたわ。」

「実況者を残して置けば良かったのに……。ハッサン！行って！」

「バ、ババウ！」

痺れが残ってるけど、相手はもう虫の息だ。蜘蛛だけに。

「あら？ハーデリアなの？……まあ良いわ。デンチュラ、『10まんボルト』！」

『『とっておき』！決めて！』

「チュイイツ！」

「バウバウ！」

『10まんボルト』が飛んでくるが、ハッサンは消える。

プチツ　とでも鳴りそうな踏み方でデンチュラは潰された。

「……負け、ね。」

「デンチュラ戦闘不能！ハーデリアの勝ち！よって勝者、チャレンジヤーのブル！」

勝った！けっこうギリギリの戦いになったな。

「フフフ、ビリビリしちゃったわ。はい、これ。ボルトバツヂよ。受け取ってちょうだ

い。」

「ありがとうございます！」

「ねえ、結局ハーデリアとペンドラーしか出さなかったけど、三匹目は何だったの？」

「う、えーと。」

「つてペラツプちゃんに決まってるか。ゴメンね、変なこと聞いて。」

早口！待って待ってまだ行かないで。

「いえ、違います。メイコさんは今回出せません。」

「え？」

「電気タイプのカムツレさんの飛行タイプのポケモンは辛いですし。ハッサンが倒されたら僕が出るつもりでした。」

「…そう。ほんと、面白<sup>ビリビリ</sup>いね、貴方。」

「そうだ！バトルサブウェイに行きなさいそうしなさい！彼処なら貴方もボロボロになるでしょ！」

「はい!?!」

「フフフ！貴方の泣き顔見てみたいわ！」

ええええ。

カムツレさんの性格が分かんないんだけど。

「そう。なら、今日はゆっくり休んで明日、バトルサブウェイね。」  
「う。まあ、行きますけど。」

## 電車と双子く上る?下る?く

「元気になった?ペティ、ハッサン。」

「ババウ!」

「ペアギユア…。」

あれ?ペティが元気ないな。あ、ブルです。

「ペティどうしたの?」

「ペアギユアアア…。」

「えつと…。」

多分ジム戦の事なんだろうけど…言葉が分からない。

『負けて悔しい。力に成れなくて残念』だそうよ。全くあんたは乙女心が分かって無いわね。」

「あ、メイコさんありがとうございます。そっか、昨日のジム戦で負けた事を気にしてるんだね?」

「ペアギユ。」

ペティが頷く。

「あれは僕の指示ミスだし気にしなくて良いよ。炎タイプの『ニトロチャージ』に突っ込ませたのは失敗だったね。」

「全くよ。とはいえあのタイミングじゃあ他の方法は……避けられるほどゼブライカは遅く無かったし、『どくどく』は蒸発しちゃうし、『おいうち』も使えないし、『ベノムシヨック』で停まるようには見えなかったし……どうしようもないわね。」

「バウバウ。」

「要するに相性の問題だよ。ペティが弱い訳じゃないから安心してよ。」

三人がかりでペティを慰める。

実際ペンドラって第五世代では普通に強いポケモンに入ってるし、ペティの特性は『かさく』だし、使いやすいんだよね。

「この世界に努力値とか無いから……強くなりたいならやっぱり技ね。『おいうち』を使いやすい他の技にする必要があるわ。」

「そうだね……でもウロコマニアに渡すハートのウロコなんて持ってないよ？そもそもあの人フキヨセまで行かなきゃ駄目だし。」

「何言ってるのよ。もつと楽な物あるでしょ？」

メイコさんが何処からかディスク状の物体を取り出す。

「ま、まさか！それは！」

「ふっふっふ。メイコ様の足下にひぎまずけ! 技マシンNO. 39『がんせきふうじ』! リゾートデザートで偶然偶々たまたま拾ったのよ! これが目に入らぬか!」

「は、ははあく。」「ペアギユア。」「パウ。」

思わずひぎまずく。

これは良いね! 『おいうち』が『がんせきふうじ』になるだけで戦略が大幅に変わるよ!

「でもあげない。」

「ええ!」「ペアギユ!」「パウパウ!」

「だって明日、バトルサブウェイに行くんでしょ? 電車の中じゃ『がんせきふうじ』は辛いわよ?」

「言われてみれば…。」

ゲームじゃそんなこと気にしなくても良かったけど、現実是非情だなあ。

「それじゃあ今日は修行よ。みっちりね。」

現実より非情なメイコさんだったとき。

くくくくくくくくくく

昨日は修行と称してマスコミをぼこぼこにしました。

マスコミ二人対ペティ、ハッサンのダブルバトル。



ルビサファを思い出したよ。カメラマンのバクオングとキャスターのレアコイル。まあ、ここではバチユルとかギアルとかだったけど。

「よし、あたしの計画通り。鬱陶しいマスコミは昨日の修行のお陰でやってこない。あたしたちは安全かつ静かに真のポケモンバトルを出来るって寸法よ!」

「成る程そこまで考えてるなんて流石です。」

「ま、本当は単にマスコミをぼこぼこにしたかっただけけど。」  
「台無しですよ…。」

メイコさんらしいけどさ。

それにしてもバトルサブウェイ、広いなあ。

「てか電車大きすぎない?」

「そうね。」

なにあれ。学校? 標高5m?

「それはですね、ポケモンバトル用の列車だからですよ。」

「うひゃあ!」

後ろから急に話し掛けられたってかエコーがかつてたよ!?

「おっと、これは失礼。驚かせてしまいましたね。」

「僕達はバトルサブウェイの管理人。」

「兼、車掌を勤めさせていただけます。」

「僕はクダリ。」

「私はノボリ。」

「どうぞお見知り置きを。」

「ど、どうも…ブールです。よろしく、です。」

なんか息の合った双子の独特の雰囲気呑まれそう。

「なにももってんのよ。あたしはメイコ。見ての通りペラップよ。メイコ様…いや、メイコちゃんと呼びなさい。」

ちよwメイコさんwちゃんつてwww

「分かったよ、メイコちゃん。」

「何を言っているのですクダリ。御客様にちゃん付けなど、車掌として恥ずかしく無いのですか。」

「でもその御客様にちゃん付けしてくれと言われてるんだよ、兄さん?」

「む…確かにそうですか…。」

メイコさんが双子独特の雰囲気崩した!?

「で、なんでこんな無駄にでかい車両があるのよ?」

「それはですね。」

「ポケモンにはびつくりするほど大きい個体が居ますから。」  
「例えばホエルオーのような巨大なポケモンですね。」

「そのようなポケモンを使っても大丈夫なようにですね。」

「巨大な車両にする必要が有るのですよ。」

「ふーん。まあそんな気はしてたけど。」

「じゃあ聴かなくても良いじゃん。」

「挑戦させて貰うけど？」

「ええ。待ってますよ。」

「電車の中で七人倒したら僕達と戦えるよ。」

「お待ちしております。」

そう言って、ノボリさんとクダリさんは何処かに行った。

## バトルアンドバトル～電車内の激闘～

「ハッサン、『とっておき』！」

「バウツ！」

ハッサンがハトーボーを床に叩き付ける。

「ホボウツ！」

「ハトーボー！……くっ、私の負けね。」

ちようど駅に到着する。

七人抜き達成しました！ブルです。

「にしても、思ってたより弱かったわね。」

「まあ、全然進化したポケモン居なかったですしね。それにまだ一週目だったわけだし、スーパーシングルトレインでもないし。」

電車から降りる。

と、ノボリさんとクダリさんが出迎えてくれた。

「あ、ノボリさん、クダリさん。」

「お疲れさです、メイコちゃんと…えーと。」

「ブルー殿ですよ、クダリ。御客様の名前位ちゃんと把握しなさい。」

「分かつてるよ兄さん。」

「さて…」

「七人抜き達成、おめでとうございます。」

「しかし残念です。」

「まだ私達は御客様とポケモンバトルをするわけにはいかないのです。」

「何故ならばそういう規則だからです。」

「御手数を掛けますがもう二回ほど七人抜きをしてもらう必要があるのです。」

「何故ならばそういう規則だからです。」

「しかし、御客様ならば直ぐに私達と戦えるでしょう。」

「お客様と戦える時を」

「御待ちしております。」

流れるようにお辞儀をするノボリさんとクダリさん。

「あたしに口を挟ませないなんて、やるわね。」

「お褒めの言葉として受け取らせて頂きます。」

「馳走さま。」

「何を言っているのです、クダリ？」

「兄さん一人で完結しちゃうから。」

「それは悪かったですね。」

「良いんだよ、兄さん。」

「おっと、時間ですね。」

「それでは…」

「ベストウイツシュ、良いバトルを！」

あ、行っちゃった。

口を挟めなかったよ…。

「台本でも作ってあるのかと思ったけど、そうじゃないみたいね。」

「アドリブが上手いだけかもよ？」

「そんなわけ無いじゃない。考える時間さえ無かったわよ？」

「…それもそうだね。」

とにかく、二週目に行きますか。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「ペティ、『ベノムシヨック』！」

「ペアギユアアアアア！」

「ダグウ!…ガハツ。」

「…おいどんの負けでござす。戻れ、ダゲキ。」

「良いバトルでした。」

「次は負けないでござすよ?」

駅に到着する。

七人抜き達成! (二回目) 電車から降りる。

意外と疲れるね。

「まあだだっ広いとはいえ、閉めきった空間だしね。どことなく息苦しくなるわよ。」

「そうだね。…今回はノボリさんとクダリさんは居ないのか。」

「あんなチラーミイの毛を撫でるような双子トークなんていちいち聴いてられないわ

よ。」

「チラーミイ?」

「…『立て板に水』って事よ。」

「ああ、成る程。」

「さらさらって事ね。」

「ブルー、一回外に出るわよ。ずっと動けないからいい加減疲れた。」

「ん、そうですね。」

くくくくくくくくくく

リフレッシュした俺たちに敵は居ない！とばかりに六人抜き達成。  
そして七人目。ノボリさん。

「本日はバトルサブウェイご乗車ありがとうございます。」

さて、次の目的地ですがあなたさまの実力で決めたいと考えております。

ポケモンのことをよく理解なさっているか、どんな相手にも自分を貫けるか……。  
勝利もしくは敗北どちらに向かうのか……。」

「テンプレートね？」

「その通りです。規則です。ではダストダス！出発進行ーッ!!」

「ほれ！プール！」

「分かってますよ！ハッサン！やっちゃって！」

「ダス。」

「バババウウツ！」



## V S. ノボリ〜シングルトレイン〜

「ダストダス！ 『どくびし』ですー！」

「ハツサン、『ふるいたてる』！」

「ダスダツ！」

「アオーンツ！」

ダストダスが毒々しいトゲトゲを撒き散らす。

その間にハツサンが吠え、赤みを増す。

「『ダストシユート』！」

「『まもる』！からの『とっしん』！」

ハツサンは投げつけられたゴミを緑のバリアで防ぎ、ダストダスに『とっしん』する。

「ガウツ！」

「ダズ〜！」

直撃。

ダストダスの体の一部…つまりゴミが吹き飛び、こっちに飛んできた。

「うわあ!?!」

「きゃつ!?! あ、危ないわね!」

「これは失礼しました。しかしながら私のダストダス、特性は『くだけるよろい』でございませぬ。多少のそれは御容赦頂きたく思います。さて、つまり私のダストダス。殴られる度に素早くなりますよ!」

「ダズアツ!」

まじか…、道理で臭くない訳だ。

『くだけるよろい』は物理技を喰らうと防御が下がる代わりに素早さが上がる特性。

そして、ハッサンの『とっしん』も『とっておき』も物理技だ。

「ま、速くなる分打たれ弱くなるわけだし。ハッサン! 『とっておき』で決めろ!」

「させません! 『だいばくはつ』です!」

はあ!?

ハッサンがダストダスの上に瞬間移動し、床に叩き付けようとして、

爆発。

「……っ。」

「お疲れさまです、ダストダス。」

「一瞬光ってたわね…ノーマルジュエルかしら?」

「あーっ、くそっ！戻って、ハッサン！」

まだ割りきれない。作戦の一つとして『だいはくはつ』は有用。分かっているけど…。「主力を潰させて頂きました。何、心配は御無用です。私のダストダスは『だいはくはつ』のプロですから。それでは！イワパレス、出発進行！」

「バーースッ！」

だが、まだバトル中だ。気を取り直す。

「怒れ、ペティ！」

「ペアギユア！」

ペティを出す。『どくびし』はペティによって潰され、粉になる。

しかし、イワパレスか。つい最近戦ったな。

「フム、折角の『どくびし』を消されましたか。まあ良いです。イワパレス、『からをやぶる』のです！」

「ペティ！『どくどく』だ！」

イワパレスが岩から飛び出て、自らの殻を剥がし落とす。そこに『どくどく』が直撃。

「『メガホーン』！畳み掛けろ！」

「『ストーンエッジ』です！」

ペティの角が光り、イワパレスが尖った大岩を作り出し、激突。

もうもうと煙がたつ。

「これは……」

「速い方が勝ってるわね。直ぐに分かるわ。」

換気扇がガーガー鳴り、煙が外に追い出される。

「……。イワパレス、お疲れさまです。」

立っていたのは、ペティだった。

「ペアギユアアアアア！」

「よし！良くやった、ペティ！」

「素晴らしい！ですが、私の最後のポケモンはそう簡単には負けませんよ！ギギギアル、出発進行！」

「ギアツギアツ！」

ギギギアルか……ギギギアル!?

「不味いわね……。有効打が『メガホーン』しか無いわよ？」ヒソヒソ

「うん……けど、とりあえず『かそく』のお陰で二段階速くなってるから。」ヒソヒソ

『おいうち』は……うん。辛いね。

あれ？でも鋼に悪って半減無かったよね……？

逆に虫は鋼で半減喰らう……。

「作戦会議は終わりましたか？それでは行きますよ！」

「あー、もうっ！ペティ！タイプは気にするなよ!？」

「ペアギユア！」

「『ギアチェンジ』です！」

「『おいうち』！」

ギギギアルがガチャガチャ音をたてる。

そこにペティが突っ込む。

「ペアギユアアア！」

「おや？『おいうち』、ですか。『ギアチェンジ』！」

「何か問題でも!？『おいうち』！」

ガチャガチャガツーンツ

「いえいえ、何も。ではそろそろ！ギギギアル！『かみなり』です！」

「動きが止まった！『メガホーン』！」

「ギギギギギギ…」

「ペアツギユアッ！」

ギギギアルは溜めた後、強力な『かみなり』を放つ。

ペティはそれを、飛んでかわす…おお！

「ペアギユアアアアア！」

光る角を叩き付け…床に傷を付ける。

「な、外した!？」

「今ですギギギアル!もう一度『かみなり』です!」

「ギギギギギ…ギギ…」

ギギギアルが電気を溜め始め、

「ペティイ!『おいうち』だあ!」

放たれる、直前。

「ペアギユアアアアア!!!」

ペティの『おいうち』がギギギアルの急所に…チビギアに当たる。

「ギギイ!？」

チビギアが外れる。

話がそれるが、本来『かみなり』は身に余る量の電気を任意の方向に放出する技だ。ギギギアルは電気を放つ方向付けを自らの回転で調節している。

回転の為にギギギアルを構成するチビギア、チュウギア、レッドコアの三つが必要

不可欠。

さて、『かみなり』を溜めている最中にチビギアが外れるとどうなるか。

答えは、『かみなり』の暴発。

「ギギギイアツ！」

「ペアギユア!？」

「むうっ！」

「うわあっ!？」

「あぶ、あぶなっ!きやつ！」

『かみなり』が無作為に襲いかかる。

「ギアツ!ギギイア！」

幸いだったのは、このギギギアルはサブウェイマスターが使えるほど鍛え上げられていた事か。

ギギギアルは直ぐにチビギアを呼び戻し、『かみなり』の制御を取り戻し、電気の放出

を止めた。

「…ふう、まさか『かみなり』が暴走するとは。御客様に御迷惑をお掛けして、誠に申し訳御座いません。」

「いえ、僕は大丈夫ですし、ちよつとした事故ですし、わざとじゃ無いんですから、謝らなくても…。」

……あれ？メイコさんがぎゃんぎゃん騒がないぞ？

「メイコさん？」

頭の上に手を伸ばす。…あれ？メイコさんが居ないぞ？

右見て、左見て、見つからないのを確認して、後ろを見る。

メイコさんが、ぐったりと、倒れていた。

「メイコさん?!?!」



未だ着かぬ電車の中で手術中

「落ち着きましたか？」

「はい。それよりメイコさんは大丈夫なんですか？」

「ここは緊急治療車両。」

メイコさんはこのベッドで治療を受けている。

「安心してくださいブル殿。此所のスタッフは優秀です。奇跡的な手術を何度も行っています。」

「でも……。」

「それに、メイコ殿もポケモンです。そう簡単には……やられませんよ。」

言葉を選んでくれたのが分かる。

ギギギアルの『かみなり』の暴発。その高圧な電気はメイコさんを打ち据えた。

メイコさんの体はペラッ。電気タイプの技は弱点だ。一撃で戦闘不能になってもおかしくはない。ポケモンである以上、仕方の無いことだ。

問題は、倒れた姿が余りにも死に迫っていたことだ。

普通ポケモンが戦闘不能になっても、息をしたり心臓が動いていたりその他にも理由で動いている。

触れれば体温を感じ、鼓動が聞こえ、呼吸を確認できる。

メイコさんは、ピクリともしていなかった。

「そうですね…。」

「何にせよ、駅に着くまで私達に出来ることは此所で回復を待つ事だけです。」

「そうですね…。」

取り乱していた。

まさかメイコさんが倒れるとは思ってなかった。メイコさんは最強。メイコさんならあのミュウツーでさえ倒せると信じて疑わなかった。メイコさんが他のポケモンに倒される姿が想像出来なかった。何時でもどんなときでもあの悪口と軽口を聴けると思ってた。落ち込んでも強引に前を向かせてくれると信じていた。

それが、暴発していたとはいえ、『かみなり』一発で死にかけるなんて……信じられなかった。

「…ノボリさん。」

「何でしょうか？」

「さつきは取り乱してすみませんでした。」

「何をおっしゃりますか。あれで取り乱さないポケモントレーナーなんて居ませんよ。」  
「そうだろうか。」

「いや、そうなんだろう。これを疑ってはいけない。それは、全てのポケモントレーナーに対する侮蔑だ。」

「……何度体験しても、やはり、この様な待ち時間は辛いものですね。」

「え？それって……。」

「私達双子が小さかった頃、何度かクダリが死にかけてたんですよ。」

ノボリさんが話始める。その内容の重さに驚く。

「クダリはあの通り無邪気で元気で、何時でも笑顔です。幼い頃もそうでした。その性格が気に入られるのか、よくポケモンと遊んでいました。それは良いのですが、シヤンデラと遊ぶ度に冥界に行きかけるんですよ。」

なんとも言えない。何と言うことも出来ない。

「フフフ。まあ、最近はその様な事は無くなりましたけど。」  
何て言えば良いのか。俺には分からない。

だから、

「いや……はい。良かったですね。」

この程度の言葉しか出てこない。

「ああ、いや、気を使わせてしまいましたか。そんなつもりは無かったです。まだまだですね。」

「ノボリさんは十分立派なサブウェイマスターですよ。」

「そうですかね。未だに自信がありません。……おや、駅に着いたみたいですね。」

電車を降りて急いでポケモンセンターへ。

医者に手渡されたメイコさんはまだ目を開けてなかったが、息を吹き返していた。

メイコさんリターンズく特権！特権！く

「ん？ん？は？」

気付くといつか見た雲の上。

「あー？またあたし死んだの？」

死ぬ直前は確か：バトルサブウェイでギギギアルの『かみなり』の暴発に巻き込まれて。…その程度で死んだの？マジで？

「いやいや。お主は死んどらんよ。」

「あ、クソジジイ！ちようど良いわ。あたしが死んでようと生きてようと関係無いわようやく話が出るわね！」

今までの鬱憤を晴らさせて貰おうか。

「む？？」

「む？じゃないわよクソジジイ特権とやらをミスリやがって何であたしがポケモンじゃなきゃいけないのよあたしはポケモントレーナーとしてのんびり生きていたかっただけなのよどう言う事よあたしがポケモンになっちゃったらトレーナーじゃ無くなっちゃうじゃないというか現在進行形でトレーナーじゃ無いのよしかも何なんであいつ

「がポケモンなのにトレーナーなのよどうかしてるんじゃないのそれとも何? ジジイは頭がボケてるの?」

一息で言い切ってやったわ。途中で自分でも何言っているのか分からなくなりかけたけどまあいい。

「それは本気で済まんかった。手違いは良くある事なんじゃ。だからどうか大きな心で許してくれんかの?」

「殴るぞジジイ!」

「あいたつ!」

殴る。そういえばここでは人間の体なのね。

「ちよっ!」

「何よちやんと『殴るぞ』って予告したわよ?」

「む…確かに…じゃなくてじゃな。」

「あんたがどう思おうとあたしには関係無いし老人をいたわれなんて陳腐な言葉じゃあたしには届かないわよ。」

「断定しおって……。」

「ああそれと。今更ペラップの体から元に戻せなんて無理な事は言わないわ。何だかんだ言って慣れちゃったから。」

さて、死んでないならどうやって帰ろうかしら。

「まあ待て。お詫びに新たな特権を与えてやろう。」

「は？ どんだけ上から目線なのよ。」

「それ、お主が言えたことかの……？」

「ま、貰えるものは貰つとくわ。どんなの？」

「それはこれじゃ。」

目の前にスクリーンが表れ、文字が浮かんでくる。

「何々？」

一、アイテムの全解放及び持ち物無限

二、自分で作った技を覚えられる

(ただしPPは5、効果発動確率は30%)

三、伝説以外のポケモンと遭遇しやすくなる

四、複数の特性を同時に発動できる

(ただし本来覚えられるものだけ)

五、相手のステータスを見れる

「この中から一つ選ぶのじゃ。」

「ふーん。」

取り合えず二は無いわね。作るの面倒だし。技スペース考えたら『そらをとぶ』を抜かすしか無いんだけどあれ、使いやすいのよね。生活的に。

現状有用なのは一、五かしら。

三は：要らない。どれだけ会いやすくなるか分からないし、必要が無い。どうせ捕まえられるんでしょ？

四はあたしが戦うこと事態が少ないから要らない。てかペラップの特性って『ちどりあし』と…何だっけ？

「んー。一の持ち物無限ってどういう意味？」

「一を選べばアイテムが全て無限に入っているバックを呼び出せるようになるはずじゃ。」

「それちゃんと書きなさいよ。」

んーとなると…でも五ってねえ。正直この世界じゃステータスなんて在って無いようなもんだしねえ。じゃなきやハーテリアとペンドラーでアイアントとかイワパレスとか倒せる気がしない。

って良く見たら三は伝説『以外』なのね。…常時『はっこう』とか嫌だわ。どっちにしろ無し。

「微妙過ぎるわね。じゃ、一で。」



「うむ、良いのじゃな？」

「そうよ。さっさとしなさい。」

「……よし、準備完了じゃ。それでは、次に目が覚めたらそこはポケモンの世界じゃ。おやすみ。」

ああ、何か懐かしいわね。

~~~~~

「ん、おはよう。」

目を開ける。うーん……これは例のあれを言うチャンスでは？

「知らない天井だ……」

ああ！何かみwnなwぎwつwてwきwたw！

「おはよう！皆さん！手術お疲れ！」

飛び上がり、羽をはばたかせ、扉に突撃する。

バターン！

「ハロー！元気にしてた!？」

「メイコさん！」

ブルが駆け寄ってくる。

ので、頭をつつく。

「あいたっ!」

「そう簡単にあたしがやられるか!」

ま、今回はあたしのミスだからこれぐらいにしといてやるか。

「うう、良かったよお。」

「お、泣くのか泣くのか?」

「ぐしっ。泣かないよ!」

「そう。あ、そうだ。ただいま、ブルル。」

「お帰りなさい、メイコさん!」

岩のあの娘く再開く

ジョーイさんにお礼を言つて、部屋へ。

ああ、本当に良かった。これが安堵つてやつなんだね。ブルです。

「そうだ、ノボリさんとクダリさんにも報告しないと。」

「流石にそれぐらいジョーイさんがやってくれるでしょ。」

それもそうか。まあ、どっちにせよ今日は一日休憩に使えとジョーイさんに言われているしね。

「そうそう、あのクソジジイから特権を貰ったわ。」

「へ？……ああ、成る程。」

寝たときとかたまに出てくるしね、あの神様。死にかけてのなら会えるんだろう。

そこまでして会いたくはないけどね！

「それで、どんな特権なの？」

「アイテムの全解放及び持ち物無限、らしいわよ。」

「何そのチート。」

「言うほどチートじゃ無いでしょ。」

「まあ、そうだけども。」

俺の中では『アイテム無限⇨チート』だから。

というかチート関係の本で分かりやすく乗ってるのって大抵アイテム無限が出てるよぬ。

「んじゃあ、お披露目。こい！バググ！」

メイコさんが高らかに叫ぶ。

……何も起こらない。

「あれ？」

「……これはあああああれよ、あのあのあのちよつとテンション上がってたっていうか実はどうすれば良いのか知らないとかそそそそういう訳じゃ無いのよ！えええええええつとおおおお！」

「お、落ち着いて！落ち着いてメイコさん！」

~~~~~

「ふう、取り乱したわ。何だったのかしらあのテンション。」

「そ、そう……。」

「ペアギユアア……。」

ハッサンとペティに手伝ってもらって暴れるメイコさんを落ち着かせました。

「バウバウ！」

「あ？やんのか犬ジジイ。」

「喧嘩は駄目だつて！ただでさえまだ本調子じゃないんだから！」

「バウツ！」

「はん、いい子ぶりやがつて。」

「メイコさんキャラがぶれてる！」

「ペアギユアア。」

とにかくこれ以上ゴタゴタにならないようにハッサンをボールに戻す。

「メイコさんは疲れてるんだよ、ね？」

「ペアギユアアアアア。」

「五月蠅いわねえ。さつきまで寝てたんだから疲れるも何も無いでしょ。」

「そうだけどさ…。」

「ペアギユ、ペアギユアア？」

「ん？んー。ああ、確かに。そうかも。」

「ペアギユアア。」

「え、え？」

何だ？何を言ってるんだ？

「えーと…。」

「あ、ブル。あんた男でしょ？外に行つてなさい。」

「え!？」

「ほらさつさと出る!」

「ペアギユアア!」

ペティに押されて部屋を追い出される。ご丁寧に鍵まで掛けられた。

「…何なの?」

やることも無いので外へ。

幸い、マスコミは見当たらない。じゃあ、バトルサブウェイに行くかな。

さつきメイコさんはああ言つてたけど、一応報告に…ん?町の入り口が騒がしいぞ?行つてみるか。

くくくくくくくくくくく

なんか凄いガヤガヤしてるなあ。人混みの後ろの方に居たお爺さんに声をかける。

「すいませんちよつと良いですか?」

「ん、なんだ坊主?」

「これ、中心で何をしてるんですか?」

「うむ。ここからじゃ良く見えんが、要するにやけに強いギガイアスが攻めて来たらし

いんじや。今はそれをカミツレ様が撃退しようとしている、と。」  
「へえー。ありがとうございます。」

ギガイアスかあ。…そうだ、あとでジュンサーさん探しだしてあの四人組について聞こうと。

今はそれよりもポケモンバトルを観なきや。

……とはいえ、俺の身長だと人混みのせいで観れないな。

うーん。……あ、そうだ。飛ぼう、うん。

近くの家の影に隠れ、『へんしん』を溶く。

尻尾のインクの色は白。

「メイコさんの『そらをとぶ』。」

背中に翼を描く。羽ばたかせ、文字通り空を飛ぶ。

「上からならく自由に観れるくっつと。」

お、カミツレさんがギガイアスと戦ってる。

使ってるポケモンは…エモンガかな？

ギガイアスの…何だあれ？……あ、『うちおとす』かな？をかわしている。

あ、当たった。

んー、カミツレさんじゃ流石にギガイアスは倒せないんじや？

確かギガイアスのタイプって岩、地面だよね。

あ、エモンガの『ボルトチェンジ』。

ん？普通に喰らってる。次に出てきたのはデンチュラだ。

……タイプ、岩単体だったよ。駄目だなあ、細かいとこまで覚えてないや。あんなに必死になつて覚えてきたのに。

あ、岩がこつちに飛んできて……ええ!?

「ドブフツ！」

顔面にクリーンヒット。ついでに背中の翼が掻き消える。

ここ、これは

「ドブフツ！」  
落ちるー!



## 一対一対一　　く新システムバトルく

「あいたつ  
ドブフツ」

「ギツガア！」

ギガイアスに撃ち落とされた。幸い、そんなに高いところを飛んでなかったからダメージは少ない。

「痛いじゃないか  
ドブウツドブ！」

「ギガアア！」

悪いが何を言っているのか分からないだよ！

「何が何だかビリビリしてるけど…デンチュラ『エレキネット』！」

「チュチュイ！」

デンチュラが電気の網を放ってくる…ちよつと大きすぎませんか？　これだと俺にも当たるんだけどおおあ!?

「ドブブツ!？」

ちよ、カミツレさん、俺にも当たったんだけど!?

「ギガギイイアツ！」

「あら、倒れないのね？なら、『むしのさざめき』！」  
「ドブドブドブ！」それも全体技

慌てて耳を塞ぐ。が、鋭い音波が入り込みけっこうキツイ。

そして、分かったよ。分かりましたよ。

カミツレさん、俺ごと倒すつもりですネ？

オーケーオーケー了解ですよ。それならそれでやりようはある。  
と、

「ギイツガア！」

ギガイアスが足を踏み鳴らす。

うわ、地面が上下に揺れる!?

「ヂュイ！」

「ドドブ！」

これは『じしん』だね？地面タイプの恐らく最高に使いやすく強い技。

「んな!?!:デンチュラ、戻って！」

デンチュラはやられた様だ。

さてさて。つまり現在の状況。

俺とギガイアスとカミツレさんと三つ巴の戦い。

ちよいとダメージ受けすぎたけど、こっから反撃タイムだ！

「行つて！ゼブライカ！」

「ブルヒヒイン！」

カミツレさんの次のポケモンはゼブライカ。

技は確か、『ニトロチャージ』『でんじは』『でんげきは』。

『でんげきは』は必中。『でんじは』は麻痺。

不明の技が怖いけど、気にはしていない。

「ギガアツ！」

そして、ギガイアス。

判明している技は『うちおとす』『じしん』の二つ。

『じしん』を避けたくても『うちおとす』が厄介。

「ドブドーブ！」

俺？

未だ『スケッチ』したのが『へんしん』だけのドーブルだよ？まあ実質、使用技無限だから気にしなくていい。

んじゃあまずは両方にちよつかいかけるか。

尻尾のインクの色は青！

『なみのり』だ  
「ドブドブブー！」

「ゼブライカ！ 『ニトロチャージ』で避けて！」

「ギガツ！」

ゼブライカは炎をまとい、インクの水を蒸発させていく。

ギガイアスは青いシールドに包まれている。『まもる』か！

「ギツガツアツ！」

ギガイアスが白く光るエネルギー：『パワージエム』をこちらに飛ばしてくる。

だが尻尾の色は緑！

『ドブブー！』

周囲の空間にインクを塗りたくる。

おし、全部耐えた！

「ゼブライカ！ 『でんじは』よー！」

うわ、めんどくさい奴。インクを精一杯維持する。

「ギギイアツ！」

「よしっ、『でんげきは』！」

音から察するにギガイアスは麻痺ったね。

『まもる』のインクを溶かす。

それじゃあカミツレさんにさっきのお返ししとこうか。

尻尾のインクの色は茶色！

「乗し<sub>し</sub>く<sub>ど</sub>ろ<sub>あ</sub>そ<sub>び</sub>」  
「ドブドブドブドブー！」

「なっ!？」

泥に見立てたインクをそこいらにばら蒔く。

これではらくは電気技の威力は半減する！

「ギイイツツガアアア！」

「うわ<sub>っ</sub>」  
「ドブウツ！」

ギガイアスが『うちおとす』を乱射しはじめた！

周りを囲っていた人達が蜘蛛の子を散らす様に逃げていく。

「くっ、ゼブライカ！そのダブルに『ふみつけ』よ！」

「ブルヒヒイ！」

「ギイツガア！」

ゼブライカがなかなかの速度で駆け寄ってくる。

ギガイアスが『パワージエム』をこちらに飛ばしてくる。

いや、集中砲火かよ。

尻尾のインクの色は変わらず！

「『あなをほる』逃げるんだよー」  
「ドブドブドブドブ！ドブドブドブドブ！」

地面に逃げ込む。…コンクリートぶつ壊しちゃったよ？

ギガイアスの『じしん』が怖いから早めに外に飛び出す。

「ドブツシヤア！」

誰にも当たらず！

「ブルヒヒイン!?」

「ゼブライカ！」

あ、後ろの方でギガイアスの『パワージエム』にぶつかったゼブライカが倒れた。

……偶然じゃないし！計画通りだし！

「お疲れさま、ゼブライカ。…ビリビリさせて！エモンガ！」

「エーモツ！」

エモンガか。

技は確か：『ボルトチェンジ』『エレキボール』。

残りの二つは多分飛行タイプの技だろう。『アクロバット』とかかな？

「ギガイアスに『エレキボール』！」

「エモオツ！」

「ギガア！」

空中で『エレキボール』と『うちおとす』がぶつかり合う。

どうするか…両方を攻撃出来て、少なくとも片方の弱点を突ける技…。

地面、格闘、草、水、鋼。

氷、岩。

うーん、両方の弱点を突けるタイプは無いのか。

「ギイツガア！」

「ドブツド！」おおっと

『パワージエム』が飛んできた。転がって避ける。

「エモンガ、ダブルに『アクロバット』！」

「エーモツ！」

速い!?!尻尾のインクの色はオレンジ!

「ドドブドブウ！」「カウンタ」

尻尾を振り上げる。

適当に振り上げたのだが、いい感じにエモンガの顎に当たる。

「エブウ!?!」

「エモンガ!?!」

よし、巧くいった!…事にしてね。

エモンガが空に吹っ飛ぶ。

「ギガア！」

あ、ギガイアスの『うちおとす』。エモンガに直撃して……エモンガ戦闘不能、だね。  
戻って、エモンガ。まさか、私がやられるなんて……。」

カミツレさんがうつむき……にわかに笑いだす。

「アハハハハ！ビリビリ、そう！ビリビリしたわ！これだからジムリーダーは辞められないのよ！どうなるのか予想も着かないポケモンバトル！ビリビリで、クラクラしちゃうのよ！」

ふう……と溜め息をはく。

「それじゃ、プール君。ギガイアス討伐頑張ってね♪」

スタスタと歩き去るカミツレさん。

……やっぱり俺の事分かってたんですか。

「ギ、ギガア？」

「ドブドブドブドブ。」  
俺にも分からない

なんと言っているのか分からないけど、なんとなく何が言いたいのか分かった。

なんとなくギガイアスに『へんしん』する。

「それで、ええと？」



「あ、やっと『へんしん』したの？ 全く、手間掛かったわ。」  
何を言ってるんだ？

「約束通り、強くなつて貴方を倒します！」

「・・・ああ！あの時の！」

## 途切れ途切れ～新たな…

「さあ！勝負よ！」

どうするか。一対一ならどうにでもなる。

てか、二つの技を同時に使えたことが有るから、それを使えば良い。『そらをとぶ』と『みずてつぼう』とかね。

けどそれで勝ったとしても前みたく「もつと強くなる！」とか言って何処かに行っちゃやう可能性がある。

今度こそは捕まえないからなあ。

「じゃあ、僕が勝ったら仲間になってくれる？」

「へ？」

「いや、どうせなら勝ち負けでメリットとか有った方が良いじゃん？」

「……。」

駄目か…？

「そうね。じゃあ、私が勝ったら何でも一つだけ言うことを聴いてくれる？」

良し釣れた。

「良いよ！」

「良いのね？絶対だからね？何でもだからね？」

「う、うん。」

あー、ろくに聴いてなかったせいで何かヤバイ？

…勝てば良いのか。簡単だね？

「よしじゃあ、やろうか！」

『へんしん』を溶く。と、『パワージエム』が飛んでくる。

「ドブツ」

右に跳んでかわす。おお、怖い怖い。

んじゃあ、さつき考え付いたあれで…っと飛んだら的になっちゃうのか。

ならば、ギガイアスの周りを走る。

尻尾のインクの色は灰色！

「困め、『あまごい』！」

インクで描かれた雲が膨張し、雨を降らし始める。

「ギガアツ！」

ん、『じしん』が来るな。多分。

インクの色は青！

「『アクアジェット』で！」

地面が揺れるが『アクアジェット』で低空飛行している俺には効かない。

「いつけえ！」

「ギガアツ!?!」

激突。

しかしこれで終わらせない！後頭部に張り付き、片手でギガイアスの頭を抱え、もう片方の手で尻尾を掴む。

インクの色は白！

「出来るか!?!『フリーフォール』！」

バババツと背中に翼を描く。

羽ばたかせ、空に浮かぼうとするが…重い。

「あ、無理だこれ。」

「ギガツギガツ！」

ギガイアスが頭を振るからしつかり掴む。

……『フリーフォール』は失敗したけど、ここ、いわゆる安置って所じゃない？

さて、まだ雨が降ってるし片手で描ける技は…。

インクの色は青!

「至近距離で『ハイドロポンプ』だ!」

尻尾からインクが溢れだし、水の形になり、ギガイアスに叩き付けられる。

「ギグアツ!」

「まだまだ! 『アクアテール』!」

今度は尻尾ごと叩き付ける。

「ギ…ガ…ア…。」

あ、倒れた。勝った勝った!

じゃ、そこらの家の影に置きっぱにしておいたバッグを回収。ついでに『へんしん』。

モンスターボールを取り出して、ギガイアスにコツンと当てる。

「ギガイアス、ゲットだ!」

「おー、パチパチパチパチ。」

「流石ですねブルーさん! どうですか、何か一言!」

あ、やべ。マスコミが湧いて出てきた。逃げよ。

~~~~~

「メイコさーん。開けてよー!」

「バウ!」

部屋に入れないよ。どうしょ。

取り合えずギガイアスの名前付けは後回しにしてジョーイさんに預けた。

ハッサンに軽く噛まれたけど、きつと親愛の甘噛だろう。歯跡ついたけど。

「メーイーコーきーんー！」

ドンドンドン！ドンドンドン！

ドンドンドンドンドン！ドーン！

ドーン！ドーン！ドーン！ドッドッドドーン！

「うっさいわー！！」

「あべしっ！」

一休みく手紙の行方く

「おお、ギガイアス捕まえたのね。お疲れ様。」

「うん…。」

昨日は寝れなくてライモンシティをうろうろすることになったブルです。

ああ、寝れなくてと言っても物理的に寝る場所が無かったただだから眠くなかった訳では無いから。

「えっと、眠そうね？」

「うん…。」

「ペアギユアアア。」

「昨日はね夜になつてもね部屋に入れてもらえなくてねバトルで疲れていてねベンチも無くてね遊園地は閉まつててね暴走族に絡まれそうになるしね散々だったね」

「口に出てるわよ…。あー寝なさい、ね？あたしが悪かったから。」

「ペアギユア。」

「メイコさんが優しいなんて…実はもう寝てたりするのか…？そうか…これは夢なのか

…夢の中でも眠いなんてなかなか無いんじゃない…?」

「余計なお世話よ…っっていうかあんたの中であたしはどんなキャラなのよ。」

「そんなの…何時もうるさい人に決まっているよ…。」

「あはは、誉めるな！」バシィッ!

あ、目の前が暗く…。やっとな寝られる…。

～○○○○○○○○～

場所は飛んで、カロス地方七番道路の脇の森の中、ドーブルの里。

「これは…?」

「手紙じゃ。フラベベとロゼリアの子供たちが持ってきよった。お主のマークが描かれていたので、持ってきた。」

「そうですか…ありがとうございます、長老。」

「…その、奥さんの様子は?」

「…。絵を、描いています。まだ描き終わりそうに無いですね。」

「そうか…。済まんなこんな事聞いてしまって。」

「いや、大丈夫です。」

「そうかの?では、お元気で。」

ドーブルの長老 ドブドブは話を切り上げ、いつもの広場へ戻っていく。

そうい
ちろ
う

俺

はその後ろ姿をしばし眺めたあと、家の中に戻る。今、家の中に子供たちは居ない。

ブルが消えたあの日から、家族は少なからずおかしくなった。カラの笑顔には影ができた。

キリは狂ったようにバトルの練習を繰り返している。

クルは：以前より何処かに行く頻度が増えた。

ケンはまだ笑わなくなった。

シリルは：最愛の妻は：ただ、絵を描いている。

一心不乱に。描いて、消して。描いて、消して。

その姿は鬼気迫っていて、狂ってしまったようで。

俺は：：不器用で。何も出来ないから、せめて子供たちの心の支えとなるように堂々と今まで通りに生きていく。上手くできてるか分からない。本当に心の支えなんかになつているのか分からない。もしかしたら逆効果かもしれない。

「はあ、こんな事考えても仕方無い：：か。」

目下の所、この謎の手紙の確認だ。差出人は：

「はあ!?!ブルだと!?!」

まるで落ちて着け俺。目を擦り、あらためて見る。

ブールの三文字は変わらない。

誰かのイタズラか？だとしたら質が悪すぎる…こんな事をするような相手はここには居ない。長老が持ってきたんだ、それはないと考えて良い。

同名の別人か？違う。確かに知り合いはカロス中に沢山居るが、ブールという名前の相手は居ない。そもそもこれが出されたのはイツシユ地方らしい。…イツシユ地方!?

駄目だ分からない。これは、開けて中を確認するしかない。

机に置き、左手で手紙を開封する。

「…日本語と、漢字だと？」

思わぬ伏兵に、郷愁に駆られる。

この世界では文字はなんとも言えない記号で書かれている。何故か意味は分かるが、書くことは難しい。昔は旅をしながら仲間たちに教えてもらったものだ。

「…待てよ、ブールは俺と同じ転生者。しかもこの世界の文字を習って無い。」

体が震える。これは、確定だ。ブールは…ブールは！

「生きてるのか…！」

こうしては居られない。子供たちに…いや、先に教えるべき相手が居る。

「シリル、シリル！手紙だ！ブールからだ！ブールは！生きていたぞ!!!」

ライモンシテイを越えてくレッツツフライングく

ハロハロ、ブルだよ。

ライモンシテイを後にして今は五番道路、ホドモエの跳ね橋前。

「あ、ブラツクさん。」

「おう、ブルに騒音か。」

「メイコ様よ黒帽子。あんたは人の名前も覚えられないの?」

「お前はポケモンだろうが。てかその言葉そのままそっくりお前に返すぜ。」

おお、出会い頭に言い合いですかメイコさん。

「それでどうしたんですかこんなところで。もつと先に進んでると思ったんですが。」
「それがな、見りや分かるだろうが跳ね橋が上がってこつから先に進めないんだ。」

「まあ、そうですね。」

そんな気はしてた。

「どうします、メイコさん。」

「あ?あたしたちはポケモンでしょうが。」

「まあそうなりますよねー。」

「は？」

『へんしん』を溶き、インクは白。

『そこをとどぶ』

「じゃあね、黒帽子野郎。」

「な、ずりいぞ！」

そんなこと言われても。

〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

「ち、あっち行きなさいよ！」

「クワーツ！」「クワーツ！」「クワーツ！」

「やっかましい！」

「どっちもどっちなんですけど……。」

跳ね橋の上空。そこにはなんとコアルヒーの群れが居ました。

……問題は、このコアルヒーたち凄く好奇心が強いのか俺たちにちよつかいを出してくるんだよ。

「すう……。」

「え、ちよ！」

パーーーーパーーーーラーーーー!!!

メイコさんの『ぼくおんば』が炸裂する。けど威力がいつもより無い。

コアルヒーが大量に居るせいで『複数体に当たると威力が下がる』からだ。

「クワーツ！」「クワーツ！」「クワーツ！」

「だーっ！鬱陶しい！」

「クワーツ？」「クワツクワツ！」「クワワーツ！」

「ブール！何とかしなさい！」

「無理です。」

ハッサンもペティもギイコも空飛べないですし。

あ、ギイコはギガイアスの事です。女の子だからニツクネームに苦勞したよ。

じゃなくて。

「クワーツ！」「クワワーツ！」「クツクワーツ！」「クワツクワツ！」「クワワツアー！」

「クワーツ！」「クワーツ！」「クワーツ！」「クワーツ！」

「じゃかあしい！」

インクは黄色！

「電気を帯びろ！」『10まんボルト』！

「ちよっ危ない！」

周りを高圧の電気で凧ぎ払う。

「クワーツ!!」 「クワーツ!?」 「クワクワーツ！」

ふう、すつきりしたね。

「あーんーたーねー！」 バシイッ

^ドフツツ
「いたっ！」

「あたしにも当たるところだったじゃないの！」 バシバシイッ

^ドフツツ^ドフツツ
「いたっ痛いっ！」

何とかしろって言ったのはメイコさんなのに！

その後は何も無く、ホドモエシティに着いた。

フアンとバトルと〜ホドモエシテイで〜

ホドモエシテイに到着。なるべく人の目にとまらないように森の中に着地する。
んで、『へんしん』。

「ねえプール。」

「なんですかメイコさん。」

「あんた他の服にしないの？」

「うん。だって結局はインクだし汚くならないからね。」

「ん〜。だからってその服のままはねえ〜。」

前世でのお気に入りの服装なんだけどな。

カッコいいメガレックウザのTシャツにピカチュウの：何て言うんだっけ？パッチ
じゃなくてレリーフじゃなくて…。

「アツプリケの事？」

「そうそれ〜！」

アツプリケのついた短パン。本当は帽子も付けたかったけどこの服装の時はなるべく帽子はかぶらないって決めてたから。

「はっきり言うわ。小学生臭くて凄くダサイ。」

「いや僕小学生だから。」

「そういうそうか。……でもダメよ。マスゴミに追っかけられてるんだし、どうせならカッコ良くテレビに映りたいでしょ?」

「う、まあ……ね。」

「だから……」

とメイコさんは地面に何か絵を描いていく。

「こんな感じに。」

「……絵、下手ですね。」

「う、五月蠅い!鳥だから仕方無いのよ!」

「あーはいはい。じゃあこれに『へんしん』しますね。」

くくくくくくくくくくくく

皆!これが新生ブルーだよ!

むう、ベレー帽がなんというか、もどかしい。

「うむ、ドブルーらしくなったじゃない。」

「そうかなあ?」

クリーム色のTシャツでワンポイントに足跡マーク。…背中はまだ何も無い。

「はい、どうぞ。」

「うわーっ良いなー!」「ずるーい!」

ミスカートちゃん二人がキヤーキヤー騒ぐけど、エリートトレーナーちゃんはなかなか…なんだ?

「ええとこれは?」

「サイン、のつもりだけど…おかしいかな?」

「……いえ、良いです。ありがとうございます!」

うん? 気のせいかな、何か気に入らないって顔してた気がするけど。

まあいいか。色紙と油性ペンを返す。

「それじゃあこれで。」

「あ、待つてください!」「私達にもサインください!」

「え…いやその…。」

ああ、断れないよ。性格的に。

「五月蠅いわよ。ほら、ブルー。さっさと行きましょ。」

「え?でもメイコさん」

「こういう輩はやから気を許すとグイグイ限度を知らずに来るからドライに対応しなきゃいけないのよ。」

ふーん。そういうものなのか。

「ちよつと！何勝手言ってるのよ！」「ブルーさんに命令なんて、頭が高いのよ！ポケモンの癖に！」

……はあ？

「はあ。あんたら自分が何言ってるのか分かってるの？」

「少なくともあんたよりはブルーさんの事を考えてるわよ！」「ブルーさん！こんな迷惑なポケモンよりシキジカとか可愛いですよ！」

「あー、そのツイントール。どうかしなさいよ。」

「ご免なさい。こうなったら私にはどうにも出来ません。」

「使えないわねー。ま、いいわ。たまには自分で考えなさい、ブルー。」

「言われなくても。」

この二人……ダメだね。お仕置が必要……いや、その前に自分達が何をしたのか分かってもらわないと。

「二人とも。」

「はい！」「なんですか？」

にっこり微笑む。

「君達、ファン失格。一から出直してきて？」

「え…?」

「うーわ、エグ。」

「ぎっくりきますね…。」

なんかメイコさんとエリートトレーナーちゃんが何か言ってるけど気にしない。

「まず、メイコさんは俺…僕の師匠みたいな人だから、貶すなら許さない。まあ、迷惑掛けてくるし可愛いげは無いけどさ。」

「ちよつとー!」

「それと…『僕の事を考えてる』?嘘つかないでよ。」

「う、嘘じゃ無いですよ!」 「本当ですよ!」

「嘘つき。『ポケモンの癖に』?僕はポケモンだよ?ドーブルっていう立派なポケモン。僕の事を考えてるならポケモンを貶すような言葉は出てこないよ?」

「うぐ…。」

「それと、まあこれは分からなくても仕方無いけど、僕はポケモンをそんな簡単に捕まえられるんだよ。自分がポケモンだからね。…だからこそ、僕のポケモンたちは強い。さあ、お喋りはこんなところで良いかな。」

二人から距離をとる。

「後はポケモンバトルで。ダブルバトルにしようか。」

「う、うう……。」

「いけ、ペティ、ギイカ。」

「ペアギユアアアア！」

「ギツガア！」

「さあ、出せよ。お前らのポケモン。メイコさんを貶したんだ、迷惑じゃなくて強いポケモン持つてるんだろ？」

「くうっ！いけ、モンメン！」

「チュリネ、お願い！」

「モンモーン」

「チュリツ！チュチュリツ！」

モンメンにチュリネか。

「ギイカ、初バトルだ。よろしくね？」

「ギツガア……！」

「メイコさん、お願いします。」

「はいはい。……バトル開始！」

「ペティ、チュリネに『ベノムシヨック』！ギイカはモンメンに『うちおとす』！」

「チュリネ、ギガイアスに『やどりぎのたね』！」

「モンメン！避けて！『みがわり』！」

モンメンが『うちおとす』を紙一重で避け、周りに綿を浮かべその中に隠れた。チュリネは『ベノムシヨック』を喰らいつつも『やどりぎのたね』をギガイアスに植え付け、倒れた。

「チュリネ！」

「チュリネ戦闘不能！ほら、ボールに戻しなさい。」

「うう…。」

「モンメン！ギガイアスに『がむしやら』よー！」

「ギイカ、『まもる』。ペティは『メガホーン』！」

ギイカが青色のシールドに包まれる。そこにモンメンがぶつかり、すぐさま綿の後ろに隠れる。その綿にペティの『メガホーン』が炸裂し、綿が飛び散る。

む：レバー『いたずらごころ』モンメンか。厄介な。

しかもギイカから生えた宿り木がエネルギーをモンメンに送っている。

「モンメン！『みがわり』！」

「ギイカは『パワージェム』ペティは『おいうち』！」

ダブルバトルじゃなかったら負けてたな。

モンメンが出した綿はペティの『おいうち』で霧散する。そして身を守る綿が無く

なったモンメンにギイカの『パワージェム』が直撃。

「モンメン!？」

「モンメン、戦闘不能! よって勝者、ブルー!」

「ありがとうペテイ、ギイカ! 戻って!」

ペテイとギイカをボールに戻す。

「うう……。ありがとう、モンメン。」

むう、やっぱりベレー帽が気になる。帽子の位置を直す。そこにメイコさんが飛んできて上に乗る。

「はいお疲れ様。そのツイントール!」

「は、はい!」

「その二人を家に連れてきなさい。あんたとのバトルはまた明日ね。それじゃ、ブルー、ポケモンセンターに行くわよ。」

「うん、メイコさん。じゃあね、えーと……。」

「レナです、ブルーさん……明日のバトル楽しみにしてます! それじゃあ!」

あ、走っていつちやった。

「あれは……あんたに惚れてるわね。」

「えー? それは無いでしょ。」

「そうかしらねえ？ま、良いわ。ポケモンセンター行きましょ。今日は回復させた後に
ギイカとの特訓よ。新入りとは徹底的に意思疎通の訓練よ。」

「うへえ…。」

訓練く転生者はやけに強いく

「んー、昨日は疲れたわ。」

メイコさんよ。

今はポケモンセンターの宿泊施設に居るわ。

昨日はギガイアスの『うちおとす』の訓練をしたわ。あたしが『そらをとぶ』で逃げ回ってそれを『うちおとす』。ま、まだまだってところだったわね。

「ん??」

机の上のボールが揺らいでる。三つとも全部。

「はあ。あたしはあんたらのトレーナーじゃ無いんだけど?」

ボールを羽で抱え込み、ぴよんぴよん歩きながら外へ。

くくくくくくくくくく

「はいはい出てきなさいな、ハッサンにペティにギイカ。」

「パウッ!」

「ペアギユアア。」

「ギツガアアアア!」

「ギイカうるさい。まだ早朝なんだからもう少し静かに。」

「う、ご免なさい。」

「なら良し。全く、それじゃあたしはハッサンと組むわ。ダブルバトルよ。」

実はポケモンセンターに泊まった次の日は、良くこうやってポケモンだけで訓練をしている。

当然ブルーには内緒。というかブルーの無茶な命令に応える為の訓練だから、秘密にしている。

「ふむ、メイコ殿。今回は宜しく頼むぞ。」

「殿付けよりも様付けのが良いのよ？ま、良いわ。実は今度のジム戦はあんたが頑張る必要があるからね。気張りなさいな。」

「おうよっ！」

ブルーはあたしとハッサンの仲が悪いとか言ってたけどそうでもないのよね。

ただ、ブルーをご主人とか呼ぶからその度にあたしがからかってるだけで。

「ようし！やってやるわ！」

「焦りすぎも良くないわよ、ギイカ。ましてや相手は歴戦の猛者、ハッサンと赤い騒害のメイコさんよっ！」

「おいこら、誰が騒害よペティ？」

「あら、てつきり気に入ってるのかと思ってたわ。ご免なさいね。」

ペティはあたしよりも精神年齢が高そうに見える……普段は。バトルになるとねえ。んで、新入りのギイカ。こっちはあたしたちの中で一番子供っぽい。ただしブルを除く。

前あたしたちと別れた後、がむしやらに強くなつたらしくごり押し大好きつ子なのが少しネックかしら。

「いい？この訓練の目的はブルの無茶をこなせるようになることよ。あいつたまにあたしでもビックリするような命令することがあるからね。」

そういうとハッサンとペティがうんうんと頷くがギイカはきよんとしている。

ああそうか、ギイカはあんまり分らないか。

「それじゃ始めるわよ。」

結果はあたし以外全員ひんし。

ペティはギイカの『じしん』で。

ハツサンはペティの『どくどく』にまみれて。

ギイカはあたしの『ばくおんば』を単体で喰らって。

うーん、疲れた。

くくくくくくくくくく

では恒例のブル起こしよ。

今回使う技はなんと！『ばくおんば』よ！

ではではでは！

すう……………。

「起きるが良い！」

「うぎゃあ?!」

エリートのリナ～BWで実在します～

うーがーあー。鼓膜があー破れたあーブールでーす。

「馬鹿言ってるんで外出するわよ。あのツインテールとバトルしないといけないでしょ？」

「うん、そうだね。約束は守らないとね。」

部屋を出て、ジョーイさんに挨拶した後外に出て、速攻で部屋に逃げ込む。

「いやなんで戻ってきたのよ。」

「メイコさん、マスゴミどうします？」

「あのまま突っ切りなさいよ阿呆。全く姿見せちゃったせいでマスゴミがこつちに気付いちやっただじゃない。」

「う、すみません。」

だってポケモンセンターの前に、産まれたたの子象を見に動物園に来たレベルの人混みが出来てるんだよ？そりゃあ逃げるよ。

「はあ、全く。」

うう、そんなにネチネチせめないでよ…。

「……分かりました。覚悟を決めて突っ込みます。」

「ん、マジ？んじやああたしは華麗に空を舞うから一人で頑張りなさいよ。」

「ええ!？」

理不尽、いや、冷酷非情だ！

~~~~~

「遅かったわね。あらかじめ見付けといたわよツイントール。」

「は……はひ……あひはほう……ほざいまふ……ぐはつ。」

「きゃつ、プールさん!？」

もうやだマスゴミ……。そろそろ熱が冷めても良いじゃんか……。

「僕もう疲れたよ、メイコラツシユ……。」

「あなたの耳元で『ぼくおんば』ラツシユするわよ?。」

「あれは止めて!。」

「元気じゃない。ほれ、さっさと始めるわよ。」

「はーい。じゃ、レナさん、やりますか。」

「は、はい!。」

……ちよつと遠くの方からマスゴミの視線を感じるけど気にせず移動。

目指すは近くのバトルフィールド。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

さて、バトルフィールドに到着して向かい合う。

「ええと……。ここでやるんですか？」

「そうだよ。…周りは気にしなくて良いんじゃないかな？」

レナさんは観客（マスコミ）が気になってるみたいだけど、このくらいは頑張っても  
らわないと。

「あんたもトレーナーでしょうが。それと……。そこ！」

「ん…俺ですかい？」

メイコさんが近くのマスコミを指差す。ん？指が無いから…羽指す？

「そう、その青色カメラマン！審判やりなさい！」

「え、いやでも。」

「やりなさい！」

「は、はいいい……。」

メイコさんの押しに押されてカメラマンがやってくる。

「そ、それでは……。ええと。両者、ポケモンを出してください！」

「行って、サナ！」

「ペティ、お願い！」



「サア〜。」

「ペアギユアアアア！」

サーナイト!?!別の地方のポケモンじゃないか!

「サナ、『サイコネシス』！」

「つー!『どくどく』だー！」

ペティが毒の塊を吐き出すが、見えない力場に邪魔されサーナイトまで届かない。力場はペティまで及び、ペティを宙に浮かばせる。

「叩き落としてー！」

「耐えてー!『おいうち』ー！」

バカーン!とペティが地面に叩きつけられる。

……ピクリとも動かない。

「ん……。ペティ、戦闘ー！」

「ペアギユアアアアアアアアアア！」

「んなつ!?!」

ペティが跳ね起き、サーナイトに『おいうち』をかける。

「ペアギユアア！」

「サア!?!」

「良いぞー！『どくどく』掛けろ！」

「サナ!?」

『どくどく』がサーナイトに当たる。ゲームとは違って連撃が出来るのが素晴らしいね。

「サナ！もう一度『サイコキネシス』よ！」

「走り回れえ！」

見えない力場がまた放たれるが、その範囲外をペティが走る。そして徐々に徐々に『かそく』していく。

「サア〜！」

「っ!? サナ、ダメ！」

サーナイトが焦れたのか力場が揺らぐ。

「決めるー！『メガホーン』！」

ペティが揺らいだ力場を突っ切り、光る角をサーナイトにぶち当てる。

「サア！」

「ペアギユアアアア！」

「……サナ、戦闘不能！ペティの勝ち！」

「っう……。サナ、ありがとう。戻って。…強いですね。」

「まあ、ね。僕のポケモンたちが強いだけだよ。」

「全くもってその通りね。」

メイコさん、はつきり言い過ぎですよ……。うう。

「私の、最後のポケモンです。行つて、レイシー！」

「ルツサア！」

そしてエルレイドか。うーん、相性が悪いなあ。

「ペティ、いける？」

「ペアギユアアアア！」

「よし、行くよー！『どくどく』！」

「レイシー、『つるぎのまい』！」

んむ、積んできたか。

エルレイドは『どくどく』を浴びつつも鋭く、カッコいい舞いを踊る。

良いなあ、『つるぎのまい』。カッコいい。

「じゃなくて。ペティ！『おいう』：違う！『ベノムショック』！」

「レイシー、避けて『つるぎのまい』よー！」

高速で走り始めるペティ。角から出る紫のプラズマがフィールドをはしる。

が、エルレイドは鋭い身のこなしでかわしていく。

つ、強い！『ベノムショック』を全部避けないでよ！

「よし、レイシー！『つばめがえし』！」

「げ！ペティ！『メガホーン』で迎撃して！」

エルレイドの姿が消える。ペティの角が光る。

バキイ！

「……ペティ、戦闘不能！レイシーの勝ち！」

ペンドラーが競り負けたようだ。

「うん……流石に辛いか。良くやったね、ペティ。戻つて。」

ペティをボールに戻す。

じゃあ次は……

「よし、じゃあギイカ！決めるよ！」

「ギツガアアア!!!」

「負けませんよ！レイシー『インファイト』！」

「ルツサ！」

エルレイドがギイカの懐に飛び込み、殴る殴る蹴る蹴る殴る蹴る！

けどギイカの特徴は『がんじょう』。一発なら確定で堪える。

「ギツガアア……！」

「ギイカ、一撃で決めろ！全身全霊の『じしん』！」

「ギガア!? ツガアアア!」

おお! ギイカが飛んだ!?

ギイカが飛び上がり、地面を文字どおり全身で揺らす。

「うわつとお!」

「きゃあ!」

うわ、地面がまるで水面みたいに波打ってる。こわつ!

「おおつとお!?!...とと。えーと?...うん、レイシー、戦闘不能! ギイカの勝ち!」

「よつて勝者、ブルル! ねえ、ブルル。これ後片付け大変ね?」

「あ、はい。」

フィールドは波打ち、フェンスは倒れてマスコミを巻き込んでる。

うわあ。これは不味い。

と、

「なんだなんだ! こんな馬鹿な事した奴は誰だ!」

良くとおる渋い声がフィールドに響いた。

# クエイクバッジ～ヤーコンロードは未だ無い～

「ヤ、ヤーコンさん！」

レナさんが叫ぶ。

うわあ、ヤーコンさんか。むっちや怒ってらっしやる。

「つたくー！……ああ!? フィールドがぐっちやじゃねえか！」

「ご、ごめんなさい！」

ことういうのは真っ先に謝るのが良いと思う。

「あ？ お前がやったんか？」

「はい。ポケモンバトルで……。」

「ほう。」

しげしげと俺の顔を眺めてくる。

ある程度眺めたあと、首を回し今度はギイカを見る。

「ふむ。」

「ギツガア！」

ヤーコンさんはギイカをペタペタ触り、何か納得したように頷く。

「ヤーコンさん、すみません！私、熱くなりすぎちゃって…。」

レナさんが駆け寄ってくる。とうるか知り合いなのか。

「いや良い。小僧、名前は。」

「っ、ブルです。」

「そうか。俺のジムに挑戦したいか？」

「はい！」

「駄目だ。」

「…はい？」

「ヤーコンさん!？」

レナさんが再度叫ぶがヤーコンさんは淡々と続ける。

「ジムバッチが欲しいならくれてやる。だが、ポケモンバトルは駄目だ。」

「え、ええ…?」

「ヤーコンさん、なんでですか!？」

「そうよ。せめて理由を言いなさいよ!」

レナさんとメイコさんが責め立てる。が、ヤーコンさんは顔色を変えずに言い切る。

「こいつの『じしん』。これを連発させたらジムが壊れるからだ。」

「いやいや、あんたのポケモンも地面タイプでしょうに、『じしん』や『じならし』程度

なら耐えるでしょ?」

「まあな。だが残念な事に俺のポケモンたちじゃあフィールドを波打たせるなんて芸当は出来ない。それにここまで威力が高いとどんだけしつかりしたジムでも基盤から歪んじまう。」

「ん…確かに。」

「分かったか?ましてや俺のジムは地下にある。最悪、皆まるごと生き埋めだ。壊される程度なら協会の方に金を請求すりゃあ良いんだが、死んだら元も子も無いだろう。」

「そんな…。」

「ギツガア?」

メイコさんも口を閉じちゃったし、レナさんに頼る訳にもいかない。

「じゃ、じゃあ『じしん』を使わなければ」

「バトルが始まったらそこまで気は回らん。それに、バトルをするならお互い全力じゃなきゃ不満が残る。見たところ、お前さんのポケモンは腰のボールの数から見て三匹。ギガイアスを使わないとすると…流石に俺には勝てん。」

「うう…。」

何も言えない。メイコさんに手伝ってもらっても良いけど、地面タイプ相手にペラッは辛すぎる。



残念無念。ちゃんと戦いたかった。

「……。ジムバッチは……くれるんですね……？」

「ああ。とりあえずその嬢ちゃんに勝つぐらいの実力。かなり鍛えられ、育てられたギガイアス。フィールドを壊すぐらいの『じしん』。ジムバッチを渡すには充分だ。」

そして、少し躊躇ってから続ける。

「出来るなら、俺も戦いたいがな。何分、場所が悪いんだ。悪く思うな。」

……ああ、悪い人ではないんだなあ。強面でぶつきらぼうで怖いけど、俺の事もちゃんと考えてるって事が分かる。

「……分かり、ました。」

「ブル、いいの?」

「うん、メイコさん。ジムバッチをください。」

「……ちつと待つてろ。」

ヤーコンさんがジムへと向かう。

「ご免なさい、私のせいで。」

「え、レナさんのせいじゃ無いですよ?」

「そうよツインテール。どうせホドモエシテイの地下にも空洞が大量にあつたりするんでしょ、悪いのはあんな無茶苦茶をさせるブルと、それを実現しちゃうギイカと、土

地よ。」

「ギツガアアア!?!」

ギイカに熱い風評被害が!

「ギツガ!ギイツガアア!」

「あーはいはい。ギイカで悪くないわよ、あたしが間違ったわ。悪いのは全部ブル。これでいいでしょ?」

「ギイ!…ギツガア。」

「え、ちよ、納得しないでよ!?!」

なんて騒いでいると。

「……強いですね、ブルさん。」

なんか、レナさんが俺たちを、慈しむ…違う、えっと、眩しそうな目で見てくる。

「へ?」

「普通、あんなこと言われたらもつと怒っても良いと思うんです。それか嘆くか。でも、ブルさんはそんなことにならない。……どうしてです?」

「サア。」と、幻聴が聞こえた。

あー、そういうえばサーナイトとかラルトス系統って相手の心を読んで、優しい相手じゃなきや懐かないんだっけ?つまり。

「レナさんって優しいんだね。」

「ふえ!？」

「なんでそうなのよブル。」

「後で教えますよ。それで…レナさん。」

「は、はい。」

「僕は別に悔しく無い訳じゃないし、怒ってない訳でもないよ。」

「え…?」

あー。こういう自分語りみたいなのは凄く苦手なんだけどなあ。

「わざわざ他人に見せないだけ。そういう性格だからね。」

元の世界では、有り得ない夢を信じ続ける子供だった訳で。

それだと当然、周りの眼が気になってくる。

変な奴だと思われてないか。頭がおかしくないかと思われてないか。

「有り得ない物語を信じ続けるには、他人には理解できない夢を信じ続けるには……何  
時でも元気に、弱さを見せない。」

「ブルさん…。」

「なんてね。」

お、ヤーコンさんが戻ってきたみたいだ。

「小僧、これが俺が認めた証。クエイクバッジだ。」

「ありがとうございます！」

とはいえ、すつきりしないなあ。

「そうだ。ヤーコンさん！」

「なんだ？」

「約束してください。今じゃなくていいので、何時か此処にでつかいバトル場を造ってください。ギイカの『じしん』程度じゃ壊れないような凄い場所を。世界中から強敵がやってくるような、バトルトーナメントを。」

「…それで？」

「そこで戦いましょう！出来たらお互い全力で、バトルしましょう！」

「……。」

ふつとヤーコンさんが笑う。

「ああ、そうだな。約束しよう。」

# ポケセンの中でのんびりゆっくりお話し

ようやくバッジ四つ目のプールです。

今はポケモンセンターでペティとギイカを回復してもらっているところ。

さて、クエイクバッジを貰ったけど…あれ？

「メイコさん。」

「何かしら？」

「このままだとバッジ一つ足りなくなる。」

「…あ。」

そう、プラズマ団のせいでシツポウジムに挑戦出来なかった。そして今のところBWのジムを回ってるから…：…イッシュリーグまでにシツポウジムが修復しないとバッジが総計七つしか回収出来なくなる。

あ、そうそう。

この世界ではゲームとアニメが少しずつ混ざって、チャンピオンに挑戦するにはポケモンリーグでベスト3以内に入って、なおかつ四天王を勝ち抜く必要がある。

そしてポケモンリーグはバッジを八つ持っていないと参加資格が与えられない。

ってアララギ博士から貰ったバッグに入ってたパンフレットに書いてあった。

「んー。ホミカに…いや、確かあそこは海を渡らないと駄目だったわね。」

「つて事は…もう少し進んで、セイガイハシティまで行かないと駄目かあ。」

「え、あの街ってジムあつたんですか？」

「うん、あるはずだよ。」

……あれ？

「うん？ ツインテール、あんたまだ居たの？」

「酷い!? 私のサナとレイシーもひんしだからポケモンセンターに来るに決まっています  
！」

「あ、それもそうか。」

女エリートトレーナーのレナさん。あのミニスカートの二人と違って（とりあえず）  
公認のファンだ。

「ねえ、レナさん。」

「何ですか？」

「どうして僕のファンになろうと思ったの？」

そう聞くと、顔を真っ赤にしてあたふたしたあとどうつむきがちに喋り始めた。

「ええと…元々はそんなに興味は無かったです。どうせ周りからちやほやされるだけ

でポケモンバトルは弱い上に態度が悪いんだらうって思ってたから。

でも、少し前にちよつと負け続けて落ち込んでた時があつて、その時にあの子達に誘われたんです。」

「あの子達つて、あのミニスカートの事？」

「そうです。あ、何時もはもつといい子なんですよ。その、きつとブルーさんに会えて興奮してあんなことを言っちゃつただけだよ」

「あーあー、良いつて。ポケモンバトルしたんだからアウトサイドだよ。うん。もう怒つてないよ。」

ファンとして公認するつもりは無いけど。

「聞こえてるわよ、ブルー。バツチリ怒つてるじゃない。」

「アハハ。ま、まあ、ね？えつと、続けて？」

「あ、はい。それで…テレビを見て。ジムバトルで本気のアーティーさんに勝つたのを知つて、ああ、この人は違う。ちゃんとしたポケモントレーナーだつて感じて。そこからファンに。」

「よーするに、にわかファンに引き込まれたらにわかよりよつぽどファンになつたつてことね。」

「う、ま、まあそうなりますね。」

ふーん。そういえばテレビをあんまり見てないなあ。ゲームだとそこらの民家に乗り込んでテレビを見させて貰うんだろうけど、現実になんな事出来ないしねえ。

ポケモンセンターのテレビは一部を除いて有料だし。

「ファンクラブとかあるの?」

「はい! 勿論です!」

レナさんが肩掛けバッグからポケナビみたいなのを取り出す。これは、まさか伝説のスマートフォンとやらでは!?

「これ、ブルさんのファンクラブのコミュニティです。」

……どうやって見るんだ?

「どれどれ。コミュニティ人数5231…多っ!」

「え…え…?」

「はんはんはん。んー、でもあちこちで論争が起きてるわね?」

「はい。悲しいですけど、やっぱり気の強い人とか居ますから…。」

「はあ。」

よく分かんないけど、色々難しいのかね、ファンクラブって。

「そういえばブルさんはやってないんですか? ポケッターとかポケエルとか。」

「うん。そもそもそれ持ってないから。」



一応バッグの中を確認。やっぱり無いね。

「ええ!?それは勿体無いですよ!今すぐ買いにいきましょう!」

「いやでも…。」

「ほら、ちょうどポケモンの回復も終わったみたいですし!」

「その必要は無いわ。」

暴走するレナさんをメイコさんが止める。

「何故なら、あたしには魔法のバッグがある。」

「え?!」

「ああ、そういえば。」

なんかうやむやになってたけどそういう特権貰ってたつけ。

「ちよつと待ちなさい。」ゴソゴソ「ほい。」

……え?待つて今何処からそのスマホ出しました?

「無、無から…スマホが…!?!」

「あ?もしかして他人には見えないのかしらね?まあ、別にいいでしょ?」

「…そうだね、メイコさん。」

スマホを受けとる。

「ふんふん。ほむほむ。ほほう。…ごめんメイコさんよく分かんない。」

「あんたねえ。たく、あたしの言う通りに操作しなさい。ツインテール、あんたも手伝いなさい。」

「は、はい。」

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「ほい、ポケエル登録完了。まあ、あんまり使わないでしょうけどね。」

「だね。あ、なんか来た。」

「え、速すぎませんか？」

「ブールさん 二番です」

「…え、二番さん!？」

ポケッター始めました！〜おお、荒れる荒れる〜

「プールさん、二番さんって誰ですか？」

「僕の特権…って言っても分からないか。知り合いだよ。何でも知ってるの。」

「何でも…ですか？」

「うん。森羅万象全ての事を知ってるんだ。」

ピロンッ

「それほど でも 有りません」

「あら、返事ね。」

「えっ!?!近くに居るんですか!?!」

ピロンッ

「私は この 世界 の記憶。この 惑星 そのものと 言っても 過言 では 無い のです」

「だってさ。」

二番さんがポケエルの登録をどうやったんだか気になるけどね。

……地球に手が生えてスマホを弄っているみたいな想像をすると少し笑える。

「そうだ、二番さんはポケッターはやってるの?」

ピロンッ

「当然 です」

「当然だつてさ。」

「当然らしいわね。」

「…もしかして。」

レナさんがスマホを弄る。

「これ…二番さん、ですか?」

画面はポケッター。

アカウント名『ポケモン・マスター』

『ポケモン大好き!皆フォロワー宜しく!』

…いやまさか、二番さんがこんな口調な訳が無いよ。

ピロンッ

「その通り です 良く 分かりましたね」

…:…ええ~~~~え?

「やっぱり!」

「ちよつと、良く見えないわよ。フムフ、フォロワー999999!?カンストしてんじやな

いー」

ピロンッ

「少し やり過ぎ ました」

「少してレベルじゃないでしょうが！」

メイコさんが叫ぶ。

「…ずばり、人気の秘訣は？」

「大変面白い呟きをするんですよ。大変ユーモアが合つて…これとか、スツゴい笑つたんですからー！」

「どれどれ？」

『下らない五七五をば。』

チラチーノ チラッとチラチラ ミテンジャネー!!!』

「…ええと、ええとお、深夜に見たのかな？」

「はい！友達と一緒に！」

「…ソウデスカ。」

絶対雰囲気のせいだと思っただけ。うーん？

ピロンッ

「ユーモア を 勉強 しましたから」

「…あからさまに失敗してるよ、二番さん。」

ピロンッ

「!?!」

ピロンッ

チラーミーがショックを受けているスタンプ

「…：…なんか、僕の中の二番さんのイメージが崩れていく…。」

「キエエエエエ！」

なんかメイコさんがおかしくなり始めたので一旦休憩！

ついでにレナさんをポケエルに登録したよ。

～○○○○○○○○○○

「ん、これで良いのかな？」

アカウント名

『ブルーwithメイコ様』

一言

『イツシュを旅してるです』

「まー最初は適当で良いでしょ。どうせ荒れるし。」

「空メール送信つと。…荒れるの前提なの？」

「仕方無いです、ブルーさんは有名ですから。真似する人が多くて…ほら。」  
レナさんがスマホを見せてくる。

うーん、『ブルー』で検索したのかな？

「うわ、僕が一杯。」

「…え、何でbotが既に出来てんのよ。」

「さ、さあ。」

メイコさんがバサバサツと羽ばたく。

「ま、良いわ。ブルー！」

「はい！」

「ここから数日間は炎上真っ盛り御中祭りになるわ。」

「何が言いたいのかわかりません！」

「荒れるわよ！」

「了解です！」

「あ…その、私、そろそろ帰らなきゃ。」

確かに外は既に暗くなっている。

ポケセンのロビーで話しているのも俺たちぐらい。

レナさんがいそいそと帰ろうとするが、目の前にメイコさんが立ちふさがる。

「ここぞというタイミングで勢いを削いでくれるじゃない、レナとやら?」  
「ひっ!」

「よし、分かったわ。あんた、ポケッターで高速でフォローしなさい。」

「え、まだ登録も終わってない筈なのに!？」

「ブルー、もう終わったでしょ?」

「うん、出来た…ね。」

うんうん、レナさんのアカウント見付けたいな。

取り合えず二番さんのアカウントをフォロー。

「じゃ、ノーヒントで見付けてきなさい。」

「そ、そんなあゝ、」

レナさんが涙目になりながらも帰っていく。

さて、それじゃあ何か眩こうかな?

「んー。」

自己紹介みたいなので良いかな?

『皆初めまして、ブルーだよ!』つと。」

次は…

「こら…いや、まあ最初ぐらいはあんたに任せるか。」



「そうだなあ…」

『『フォローよろしく』…いや、そうでもないからなあ。じゃあ…『これからポケットターをチョイチョイ更新していくからね!』…これで三十九文字つと。』

「こんなもんで良いかな…?」

「送信。完了!」

「どれどれ。…まあ、無難なところね。それじゃあチョイと貸しな…いや、違う。ブルー、例の『ブルボロ』を見せなさい。今すぐ。」

「あ、うん。ちよつと待ってて。」

『ブルー』で検索。…んー、これの事かな?

「はいこれ。」

「うむ。どれどれ…はあ、よくもまあ…なんと言うか…良くやるわね、全く。」

俺も見てみる。

『ギカイアス、確保完了!じゃ、ばいばい!』

『僕の尻尾、見てみたいって?駄目に決まってるでしょ!』

『ペティは『どくどく』からの『ベノムシヨック』で安定』

「…僕、こんなこと言っていない…。」

「こればかりはしゃーないわね。流石にアカウント封鎖させられるほどの力は無いし

ね。」

「……そうですね。」

メイコさんなら出来そうって思ったのはナイショ。

「お、フオロワー増えてるわね。えーと? 『ポケモン・マスター』、『レナ@ブルーさんファン』、『ブルーファンの釜飯』、『偽物撲滅委員会』。」

「……最後のだけあからさまにおかしいんだけど?」

「気にしちゃ負けよ。」

あ、なんか来た。

『@voool139 何番膳じだよ、これ?』@voool139 @buruki

ー 争いは何も産まないのだ……。まあ、偽物が増えるのは残念と言うかなんと言うか。』だってーアハハーシツレイダナー」

「……いや、荒れるとは言ったわ。言ったけど、ここまで素早く、尚且つ口頭一番に煽ってくるとは……。」

今、俺とメイコさんの思いは一致した。

許せん。

「ブルー、今夜は寝れないわよ?」

「了解です、メイコさん。」

夜更かし～ブールって中身小学生だからね?～

「はあ…はあ…。」

朝。朝だよ、皆。疲れたよ、パトラツ…ハッサン。

「バウ。」

「けど、やったね、メイコさん。」

「ええ。遂に、遂によ…。」

「認めさせた!!!」

「まさか虎の子の『写真』をCG扱いされるとは、思ってたよ…。」

「全くね、まったく。それじゃあ、あたしは寝るわ。お休み。」

「うん。僕も寝るよ…? 何だか外が騒がしいね。なんだろ」

「ペアギユアアアア。」

「ババウツ!」

「はくん? 成る程。ブール、御愁傷様」

「…え?」

扉が叩かれる。

「ブルーさん、ブルーさん！」

「あー、ジョーイさん？」

「ブルーさんのファンの方々がポケモンセンターに押し寄せてきています！」

「は？」

くくくくくくくくくくくく

ああ辛い。前世ではいわゆる良い子で居たから、夜更かしなんかしたこと無い。

「エルフーン、『ギガドレイン』！」

「ペテイ、『メガホーン』」

「ペアギュアアアア！」

「フ〜!?!」

眠い、というより、ただただ辛い。

「ああ！エルフーン！」

「僕の勝ちね。」

「くそう。流石に強い……！」

男の人が下がると、我こそはとトレーナーが押し寄せる。

「次は俺だ！」

「違う！ 僕だ！」

「どうしてこうなった……？」

理由は、まあ分かる。ポケッターでわざわざ『ホドモエのポケモンセンター』に居るかも』みたいなことを呟いたからだ。

しかし、こんなに来るとは。ポケモンセンターの収容量越えてるよね？

まあ、ここは外のバトルフィールドだけどね。

「ペティ、まだ行ける？」

「ペアギユアアアア!!」

「そっか。じゃあもう少しお願いね。」

ん、次の挑戦者が決まったみたい……あれ？ この人見た事ある。

「何処かでお会いしましたっけ？」

「おいおい。忘れんなよ。ほれ。」

男の人が帽子をかぶる。ん、あ。

「あーあーあー。お久し振りです、ブラックさん」

「おーう、久し振りだな。んじやあちやちやと終わらせてやるぜ。」

「ほわい？」

「お前、疲れてるみたいだしな。行けっ！ジャローダ！」

「ジャルウアアアア！」

「ペアギユアアアア！」

「ジャローダ、『へびにらみ』だ！」

「『どくどく』！」

ジャローダに睨まれ少し怯むペティだが、なんとか毒の塊をジャローダにぶつける。

「『リーフストーム』だ！」

「ペティ、避けて『メガホーン』。」

「ジャ、ルウア！」

「ペアギユ、ギユアア!?!」

「ペティ!?!」

ペティが『リーフストーム』を避けきれず、もろに喰らう。体が痺れたのか！

「よし！そのまま『つばめがえし』！」

「はえ!?!」

『つばめがえし』だと?!技マシン何で拾ってんだよ!?

目で捉えきれない速度で振られたジャローダの尻尾が、ペティの頭にクリーンヒットした。

「ペアギユアツ! ……ギユアア。」

「ペティ…お疲れさま。」

弱点とはいえ、ほぼ一撃でペティが倒れた。

強すぎんよお。・・・ポケッターに犯されすぎてるなあつて。

「うーん、僕の負けですね。」

「はん、本気の『ほ』の字も出してねえだろうに。ま、終わり終わり! 散れ散れ、てめえらー!」

ブラックさんがトレーナーたちを追い払う。

荒々しいなーとか思いながら見てたら、

「あ、あの、ブルさん、おはようございませす。」

「眠いです、僕は。」

「はい?」

青髪ツインテールのレナさんが居た。



「・・・あ、おはよう、レナさん。」

「だ、大丈夫ですか？」

「んー、駄目かも。」

倒れまーす。ボタンキューー。

寝起きく騒々しくも進まないストーリーく

「うう…ん。」

「あ、ブルルさん！ 起きましたか!？」

「あー、えーと。」

確か…ブラックさんとポケモンバトルして…負け…？

「ああ、これが『目の前が 真っ暗になった!』か。」

「その通りよ、あほ。」バシィ

「あいたつ!」

あ、ああ？ まだ…あ、あー。

朝か。

「起きました。おはよう、メイコさん!」

「やつと起きた?」

「うん。…あ、レナさんに、ブラックさん。朝からおはようございます。」

「訂正、まだ起きてないわね。」

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

ベッドに座り、前後にフラフラと揺れているブルを指差してブラックが聞いてくる。

「なあ、騒害。」

「あによ、帽子。」

「こいつ、何時もこんな感じなのか？」

「そうよ。あたしがしっかり起こさないと寝惚けるのよ。全く、困ったものだわ。」

「へえ、そうなんですか。」

話に割り込むな、青髪。

青髪こと、レナがブルの事をジッと見つめ、ゆっくりとスマホを取り出す。

「こらー！」

「ひゃっ!？」

「勝手に写真撮らないこと。あたしが許さないわよ?」

「え、ええ!?! そんな、酷い! 横暴です!」

「じゃかあしい!」

レナのツインテールをついばみ、引っ張る。

「痛い痛い!!」

「要らんツインテールめ! もはや髪型を変えられないあたしに謝れ! 土下座以外許さん!」

「理不尽!」

ひとしきり暴れる。

ふう。とあたしが一息つくと、レナとブラックが互いを指差す。

「こいつ、誰だ?」

「この人、誰ですか?」

ほぼ同時に聞かれる。どうしろって言うのよ。

「黒帽子、そっちのツインテールはブルー…あたしのファンよ。」

「ブルーさんのファンです!」

「ほおう?」

「んーで、ツインテール、そっちの黒帽子は…あ!…その…帽子よ。」

「それ以外無いのかよ。」

「はあ。立派な帽子ですね。」

「え、はあ? それ以外無いのか?」

「あ…その…ええと…」

「マジかよ!？」

ブラックが崩れ落ちる。ふん、良い気味ね。

「んで、今はお昼頃なただけど。あんたたちはどうすんのよ?」

「私は、出来ればブルさんとお喋りしたいなあつて∴。」

「俺は誰かさんのせいで復活草を取りに行かなきゃいけないんでね。」

「ん? 誰かって誰よ。」

「お前ら以外居ないだろ。」

「え、どういう事ですか、ブラックさん。」

やっところさ起きたわね、ブル。

く〇く〇く〇く〇く〇く

おはよう、皆! ブールだよ!

挨拶は大事だよね!

それどころじゃ無いけど。

「つまり、僕のギイカのせいって事ですか?」

「そういうことだ。たく、何でお前の尻拭いをしなくちゃあいけないんだよ。」

要するに、ギイカの『じしん』で空洞が崩れて、それに巻き込まれた人がいるって訳で。

「手伝いますか？」

「いんや、そこまで子供じゃねえよ。と言うか、むしろ中身だけなら大人だ。」

「・・・ええ？」

「なんだその目は。どっちにしろ、お前よりは大人だよが。」

そうだけど。

「：メイコさん、あの人ブルーさんに対して馴れ馴れしくしないでですか？」ヒソヒソ

「そうよね。帽子の癖に生意気だわ。やっちゃいなさい。」ヒソヒソ

「でも、強いですよ、あの人。」ヒソヒソ

「強いかもね、帽子の癖に。」ヒソヒソ

「聞こえてんだよ！」

ブラックさんが叫ぶ。おー、怖い怖い。

「まあまあ、落ち着きなさいよ大人のブラック君？」

「そうですよ。こっちはか弱い乙女ですよ？」

「ど、こ、が、か弱いんだよ！」

ブラックさんがメイコさんとレナさんに無謀な口喧嘩を挑む。

「どうでも良いけど、大人のブラックってなんか格好いいね。」

「ぐ、ギギギギ。」

「はん、その程度じゃあたしどころかツインテールにさえ勝てないわね。」  
「ですな。」

・・・女って怖いね。うん。

と、メイコさんが何処からか薬草を取り出す。

「ほい、これ、復活草よ。」

「…ありがたいが、突然脈絡もなく渡してくるなよな。」

「ふん、土下座して敬いなさい！」

「断る！」

けっこうブラックさんもノリノリだよな。

# 電気石の洞穴へ～研究所なんて無かったんや～

おはよう……まあ、こんにちはの時間だね。ブルです。

今は電気石の洞穴に向かって歩いていきます。

「あ、メイコさん。ポケッターやらなくて良いんですか？」

「良いのよ。わざわざ騒がせる必要はないでしょ？」

「それもそうですね。」

ピロンッ

「ん？ 二番さんだ。」

「電気石の洞穴まで 残り1km」

「・・・車のナビみたいね。」

「そうだね。とてもじゃないけど、『世界の記憶』だなんて大層な物とは思えないね。」

ピロンッ

デデンネが泣いているスタンプ

そういうスタンプとかのせいだと思っただけだなあ。



「に、二番さん、大丈夫ですよ！ 二番さんは素晴らしい人ですから！」  
ピロンッ

「当然です」

ピロンッ

カイリキーが胸を張っているスタンプ

「はあ。案外…いや、案の定、乗せやすいわね。」

「全くだね。」

ピロンッ

チラーミイがショックを受けているスタンプ

ピロンッ

「私の味方はレナさんだけです…。(。・皿)」

「そう言えば何であんた着いてきてんのよ。」

「ええ!? 理由言いましたよ！ ポケモンセンター出るときに！」

「…え？」

「ブルさんまで!?!」

あー、ごめん。聞こえてなかったよ。

「ブルさん公認ファンとして、一緒に旅させて下さいって言ったら、頷いてくれたじゃ

ないですか!」

「そうだっけ?」

「そうです!」

そっか。じゃあ良いか。

「ペラペレペロ。何て言うか、色々ツツコミたい所はあるけど……ブルにツインテール。電気石の洞穴よ。」

ペラペレペロって何ですか、メイコさん。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「ぶ、ブルさん、あれ! 怪しい三人組が!」

目の前で忍者っぽい格好した三人組が、デンチュラを使って洞穴の入り口を塞ごうと  
しているね。

ダークトリニティだっけ?

「そのあんたら!」

メイコさんが大声で叫ぶ。

「……………」

「……………」

「……………」

「邪魔はしないわ。あたしたちぐらいは通しなさい。」

「邪魔はしないんですね、メイコさん…。」

「いーのよ。ジム戦してる黒帽子に嫌がらせよ。しかもあたしは見逃すだけ。楽で良いわよっ。」

「は、腹黒い…！」

レナさん、僕もそう思う。

ダークトリニティは無言で顔を見合わせる。

「どうするのよ。退くか！ 戦うか！」

「……………」

「……………」

「……………」

あ、さっ と脇に避けた。通っていいのかな？

「うむ、よろしい。ほら、さつきと進むわよブル。」

ベレー帽の上からバシバシ叩かないでよメイコさん。

痛くはないけど、鬱陶しいよ。

それと、レナさんがおろおろしてるよ？気にしないで進むけどさ。

そう言えば、ダークトリニティはイコールでNさんだけど…再会出来るのかなあ。会

えると良いなあ。

## アララギスルー洞窟の中で

「ふへー。綺麗だなー。」

「あたしは…苦手ね、ここ。」

「電気石の洞穴…名前通り、電気石がフワフワしてますね。」

電気石の洞穴の中からこんにちは。ブルだよ！

メイコさんが少し元気が無いけど、そっか、メイコさんペラッパだから電気が苦手なのか。

「てか、ツインテール。スマホ出していいの？」

「え？ 何ですか？」

「ここ、電気石の洞穴よ？ 携帯なんて一瞬で壊れると思うんだけど。」

「…だ、だだ大丈夫ですよ。」

「ふうん？ なら良いけど。」

レナさんがスツ…とスマホをしまう。

そう言えば。

「メイコさん、レナさんの心配したんですか？」

「違……いえ、ま、そうね。なり行きとはいえ一緒に旅する仲間だし。」

「はー。流石メイコさん、仲間思い！」

幻想的な景色の中、三人……あ、二人と一匹かな？ 喋りながら先へ進む。

「アララ？ そこに見えるはブルル君とメイコ様じゃないの？」

何か聞いたことのある声が聴こえてきたよ。

「ブルルさん、呼ばれましたよ。」

「ん？ メイコさん、今なにか聴こえましたか？」

「いえ。何も聴こえなかったわよ？ 空耳じゃない？」

「え？」

「ですよ。気のせい気のせい。」

わースゴク綺麗な洞穴だなー。電気石の洞穴なだけあってギアルとかバチユルとか  
けっこう居るなー。

「お、おーい。メイコちゃん。ブルルくん。私よー。」

「ブルルさん？」

「ほら、レナ。あたしたちの目的はさっさと先へ進む事よ。」

「そうですよ、レナさん。」

「で、でも……。」

と、後ろから誰かが走ってくる。

「わ~~~~~! どいてどいてどいて~~~~!」

「ブール!」

「はい!」

「え? きゃつ!?!」

メイコさんの指示に従い、レナさんの腕を掴み脇に退く。

「ウヒヤ~~~~~」

ドングリみたいな形をした緑の帽子をかぶった女性が、直前まで僕たちが居た場所を通り過ぎていった。

「行ったわね、ブール。」

「行きましたね、メイコさん」

「へ? エ? な、なんなんですか~!?!」

レナさんの叫びが木霊した。

「うっさい!」バシッ

「痛い!」

~~~~~

「要するに、あたしたちはあれの被害者なのよ。」

「少し大げさだけどね。まあ、そんなところだよ。」

「だから、博士と会いたくないと。」

レナさんが頷く。

いやまあ、別に僕は会っても良いんだけどね？　メイコさんがアララギ博士を攻撃する未来が見えたんだよ。『みらいよち』で確定ダメージなんだよ。

それに、ここで捕まっちゃうと面倒な事になりそうだし。ダークトリニティとか。

「んじゃ、先に進みましょう。」

「あ、はい。」

再度歩き始める。

メイコさんは何時も通り僕のベレー帽の上に留まる。

僕は歩く。

レナさんは僕の横を歩く。

だから、レナさんが僕たちと一緒に無かったら、メイコさんとまたはぐれるところだった。

「!? レイシー！ 『サイコカッター』！」

「ルシヤア！」

突然、レナさんがエルレイドを出し、攻撃を指示する。

「え？ うわっ!？」

こわっ！ 僕の頭の上を『サイコカッター』が通り過ぎる。

「ぷはあっ！ ナイスよ、ツインテール！」

「え？え？何？」

「敵は上よ、ブール！」

「上？」

見上げると、数体のテツシードが天井にくっついていた。

逃避行くダッシュ、ダッシュ、ダッシュ、ダッシュユ!く

「ててて、テツシード!?!」

めっちゃこっち見てる。

「テツスウ!」

「うわっ!」

「レイシー、『インフアイト』!」

「れっしやつらつるああ!」

僕を目掛けて落ちてきたテツシードをレナさんのレイシーが弾き飛ばす。

「メイコさん、大丈夫ですか!」

「大丈夫よレナ! ほらブルボーツとしてないで!」

「あ、は、はい!」

えーとえーと、テツシードは鋼・草だから、ペティは駄目で、ハッサンもきつくて、じゃ

あじゃあ

「出てきて、ギイカ!」

「ギツガア！」

あ、ギイカは草タイプ苦手じゃん！

「まあいいや！ ギイカ、天井に居るテツシードたちに『うちおとす』！」「
「がっがっがっがっ！」

ギイカが放出する岩の塊が、天井に居るテツシードたちを落としていく。

「はん。ざつと十を越えてるわね。」

「群れバトルの倍以上ですね、メイコさん。」

「レイシー、『つるぎのまい』！」

ギイカとテツシードたちが睨み合う。その後ろで、レイシーが踊っている。

うーん、なかなか面倒だね。

「じゃあギイカ、『じしん』。ここが崩れない程度で。」

「ギツガア！」

レナさんのレイシーにも当たつちやうけど、多分堪えるでしょ。

洞窟が揺れる。

「テスウー！」「テシツテスツ！」「テスウー！」

テツシードたちが次々に倒れていく。

爽快だね！

と、ギリギリで堪えきったテツシードが高速回転を始める。

「テ、テ、テ、テーーーースユーーーー!!!」

「うわっ、なんだ?」

「あー、これは不味いわね。あいつ、仲間を呼んだわ」

「え、それって…ヤバそうです…よね?」

「そうだね、レナさん。どうします? メイコさん。」

ウームと考え込むメイコさん。

ん? 何処からか地鳴りみたいな音が……。

「来たわね。大量に。」

「うわあ……うっわあ……。」

「バチュル…ギアル…テツシード…モグリユ…それぞれの進化形まで居ます!」

うわうわうわ。電気石の洞穴の通路がポケモンたちで埋め尽くされてる。

こ、これは…流石に…。

「メイコさん。」

「あーんー。いや、逃げましょう。」

ペラッパの一声。

意味、リーダーが決定すること。多分。

「ん？ ブール、ストップ。」

メイコさんが走るのを止めさせる。

「はあっ…はあっ…」

「何ですか、メイコさん。」

「後ろよく見なさい。」

「え？」

振り返る。レナさんが息をはずませている。

「レナさんがツインテールなのが見えます。」

「阿呆。更にその後ろよ。」

「ん…？」

えーと？ ……あ。

「あんなに追ってきてたポケモンたちが見当たらないね。」

「そ。だから走る必要は無くなったわ。」

「必要は？」

「納豆…。」

「うひゃあっ!?!」

後ろ、つまり進行方向にナットレイが。 ……しかも、しかも。

トゲが、ピンク色だ。

「色違いだー!?」

「ナツツツトウウーー!!!」

二対一～あたい！～

「ハッサン！ お願い！」

「ババウツ！」

これは、きつついね。

こちらの手持ちはハッサン（ハーテリア）、ペティ（ペンドラー）、ギイカ（ギガイアス）の三匹。

ものの見事にナットレイと相性が悪い。

「サナ、出てきて！」

「サア〜。」

レナさんがサーナイトを出す。けど、エスパール・フェアリーのサーナイトじゃ、鋼タイルを持つナットレイにはキツイなんてもんじゃない。

「ほんと、あのヒビダルマを捕まえときたかったわね。」

「そうですね、メイコさん。」

「ナットウウ！」

「避けて！」

「バウツ！」

ナットトレイの『パワーウィップ』を避けさせる。

「『ふるいたてる』！」

「アオーンツ！」

「サナ、『シャドーボール』！」

「サア〜〜ナツ！」

サナが黒い何かの塊をナットトレイに投げ付ける。

直撃。が、あまり…いや、全く効いていないようだ。

「ナツ、ナツ、ナツナツナナナ。」

「うわっ、『まもる』！」

「バフツ！」

ハッサンが展開した緑色のシールドに、超高速回転するナットトレイがゆっくり当たる。

「『ジャイロボール』ね。厄介な。」

「サナ、『サイコキネシス』で吹き飛ばして！」

「サア！」

目に見えない力場に弾かれ、ナットレイと僕たちの間があく。

「強い…。」

「と言うか、単に相性が悪いだけよね。」

「うん。そうだね、メイコさん。」

非常に恵まれたタイプ。炎に焼かれて一撃だけど、それが気にならないほど耐性が高い。

更には特性『てつのとゲ』のせいで物理攻撃を躊躇わせてくる。

「まあ、何にせよ捕まえないね。」

「そうね。色違いだし、なかなか良いんじゃない?」

「捕まえても鋼タイプには全体的に弱いままですけどね。ハッサン、『ふるいたてる』。」

「バフウツ!」

ハッサンの赤みが増す。

これで二回。

ナットレイが『ラスターカノン』を撃ってくる。

「サナ、『ねんりき』で曲げて!」

「サアアツ!」

『ねんりき』で曲がった『ラスターカノン』が天井を^{えく}抉る。

「レナさん、もう少しお願いします。ハッサン、『ふるいたてる』四回！一撃で決めるよ!？」

「ババウツ！アオーーーンツ!!!」

ハッサンが最大まで赤くなる。

当然、隙は大きいがレナさんのサナが『ねんりき』や『サイコキネシス』でナットレイの攻撃を防いでくれている。

「レナさん、ありがとう！ハッサン、『とっしん』！」

「サナ、右に避けて！」

サナが退くことによって、ハッサンとナットレイの間に障害物は無くなる。

ハッサンの『とっしん』がナットレイに当たる。

「よし！そのまま『とつて』いや『まもる』！」

『とつておき』を使うとしたとき、ナットレイの体からアークが走った。

慌てて『まもる』を指示。一瞬で緑色のシールドがハッサンを包む。

「ナトウ！」

不意打ちの『10まんボルト』を、間一髪でかわす。

ハッサンまじ狩人。

「今度こそ『とつておき』！」

『てつのトゲ』が食い込んでいるだろうに、それでもハッサンの姿が掻き消える。

「バウアツ!」

「ナトウ!」

ナットレイが地面に叩き付けられる。

うむうむよしよし。仕上げは自分でやるかな。これでも俺、ポケモンだし。

「ハッサン、そのまま押さえ付けておいて。」

『へんしん』を解除する。

すぐにナットレイに『へんしん』。

「え!」

「ウンウン、無事『へんしん』完了。さてと。」

ゆっくり近付く。

「僕の仲間になる?」

「う、うう、なによ、あたいに選択肢は無いんでしょ? こんな風に押さえ付けておいて

さー!」

「まあね。」

「ぐぐぐ…。好きにすればいいじゃないか!」

触手を使ってメイコさんからモンスターボールを受け取る。

「はい、ゲット。」

人の姿に『へんしん』。

「ナットレイ、ゲット！」

言葉にするって大事だよね。

さ、と。

「ブルさん、やりましたね！」

「んで、そいつの名前どうするのよ？」

「それじゃあ……ナットレイだし…納豆…いや、それは酷いか。じゃあ、うーん。」

ナ…トレイ…トイレ…いやいやいや。

「まだるっこしいわね！ ナトルよ！ そいつの名前はナトル！」

「え、でも女の子っぽかったですよ？」

「それなら、ナト子って言うのはどうですか？」

「却下。」

「即答!?!」

ナトコ、か。ナットレイ…あ。

「じゃあ、レイカ。ナットレイの名前は、レイカにします！」

「んーまあ、良いんじゃないかしら。」

「それじゃあよろしくね、レイカ。」

嫌々そうに、だげどどこか嬉しそうに、ボールが揺れた。

到着く風吹き寄せる街く

「ふ、ふふふふふ、ふふふふふふ」

電気石の洞穴。謎の人影が笑い出す。

「Beautiful !! Wonderful !! Marvelous !!」

どこで覚えたのか、英語を連発する。

「良い！ 素晴らしくも荒々しい！ さながら、磨かれる前の原石！ 私が磨けば、きつと世界を照らす輝きを放つでしょう！」

「アクロマ君、あんまり叫ぶとポケモン逃げちゃうから。静かにね。」

「あ、はい。すみません。」

電気石の解析に戻る。

くくくくくくくくくくくく

レイカを連れて歩くブルだよ！

「んー、駄目ね。鋼の上だと爪が痛むわ。やっぱり一番はブルの頭の上ね。」

「僕は歩かなくてすむから、レイカの上は楽チンですね。」

「ナツナツナツ！」

「じゃかあしい。捕まるのが悪い。」

「納豆……。」

「ねばねばー。」

少し訂正。レイカの上に乗るボールだよ！

レイカは触手を使って天井を移動してる。それに乗っていると、あれだ、新食感。

「食感はおかしくないかしら。」

「そうですねー。」

メイコさんが考えを読んでくるのは、もう馴れた。

メイコさんだしね仕方無いね。

「レナさくん。着いてこれてますか？」

「大丈夫ですよー。」

良かった。レイカの大きさだと僕一人しか乗れないからね。レナさんには、悪いけど

歩いてもらってる。

「ん、ボール。風が来たわ。そろそろ出口よ。」

「了解です。レイカ、ありがとう。」

レイカをボールに戻す。

自然、僕たちは落っこちるけどポケモンだしね。

「着地いっつたい！」

足が痺れそうだ。いや、痺れた。痺れました。

「馬鹿ねえ。」

「あ、そこ、デンチュラの『エレキネット』張つてありますよ。」

「言うの遅いよ、レナさん。」

あー痺れる。シビレビレ。

痺れながらも歩いて、ようやく出口。

と、メイコさんが何かを見付けたようだ。

「ん？ あれ、誰よ。」

「さあ？」

「あ~~~~~!!!」

何か、ごく最近聞いた声がしたな。

「あなたたちさっきの！ どうして止めてくれなかったの!?!」

「ああ、さっきの退いて少女。」

「違います。私の名前はベルです。」

ああ、そうそう。ベルだ。どんぐりっぽい帽子の「やめたげてよう」だ！

「はじめまして、僕はブルーです。こっちがメイコさんで、そっちがレナさん。」

「メイコ様と呼びなさい。」

「ベルさん、はじめまして。レナと言います。」

「あ、はじめまして。」

うんうん、挨拶は大事だよね。

「それじゃあ、ベストウィッシュ。よい旅を。」

「あ、さようなら。」

さあて、ここを抜けたらフキヨセシティだ！

「自分でやっておいてなんだけど、ベルさん不憫過ぎない？」

「気にしたらまた来るわよ？ 面倒だし良いじゃない。」

「ベルさん、ブルーさんの事を知らなかったんですかね？」

口々に好き勝手言いながら洞穴を出る。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

ようやくとあの忌々しい電気石の洞穴から出れたわ。

「さて、その後特に何もなくフキヨセシティのポケモンセンターに着いた訳だけど。」

「夜、ですね。」

「夜、だわね。」

「それじゃあ、寝ましようか。」

「お馬鹿！」

バシィッ！ とブルーを叩く。

「あいたつ！」

「夜だからつてすぐに寝てちやあ、やることやれなくなるのよ!?!」

「わ、分かりました。分かりましたから耳元で叫ばないで！」

ふう、スッキリしたわ。

それで は。

「ブルー、外行くわよ。レイカの実力を見なくちゃ。」

「はい。」

「あ、それじゃあ私はお部屋を借りてきますね。」

「ん、頼むわ。」

ブールの頭の上に乗る。

「出てきて、レイカ！」

「ナットウ。」

「んじゃ、あたしが相手をやるわ。自由にやりなさい。どうせ、あたしには敵わないし。」

「は？ やる気？ あたいに勝てるんでも？」

レイカがグダグダ何か言ってくる。ま、気にしないけどね。

「うーん…。それじゃレイカ、『パワーウィップ』。」

「うりゃあー！」

レイカが触手を伸ばして叩こうとしてくる。

飛んで避ける。

「はん。」

「くそつがー！」

「レイカ、『10まんボルト』！」

「あばばばばばー！」

レイカが電撃を放ってくる。

んじやああたしは『はねやすめ』。羽をたたみ、落っこちる。

「あばばばばばば。」

電撃があたしの体を駆け巡る。けどまあ、飛行タイプが一時的に無くなってるから痛みは少ないわね。

羽を広げる。

「ほらほら、その程度!?!」

「な……!?!」

「レイカ『ラスターカノン』!」

「つ! ナーナツ!」

光の束が夜の闇を一直線に貫く。一直線だから軽く避けられるわ。

「んー、『ラスターカノン』は出が早いから重宝しそうね。ただ、今みたいにあっさり避けれるから気を付けなさい。」

「何よ上から目線で!」

気骨があるのは嫌いじゃないわ。言い負かすのが楽しそうね。

「うん。最後は……『ジャイロボール』!」

「ナツ、ナツ、ナツ、ナツナツナツナツナ」

回転が速すぎて ブーンッ って感じの音が鳴っている。あれね、掃除機みたいな音。

結構な速さであたしを追ってくる。

「おー、意外と速いわね。当たると痛そうだし、良いわね。うん。」

ま、全力で飛ぶあたしには追い付けないみたいだけどね。

さて、じゃあそろそろ反撃しますか。

「はて、とは言うもののどうやってやりましょうかね。」

『おしゃべり』か、『そらをとぶ』のどっちかでしょうね。

「夜だし、飛びますかね。」

大空高く、飛び上がる。夜空に満天の星ね。あの飛行機さえ飛んでなければ最高だったわね。

急降下。

「しねい！」

「ナトウツ!？」

全身でレイカにぶつかる。トゲが痛いわね。

「レイカ、大丈夫？」

「もちろん！」

「終わり終わり！ あー、疲れた。敵にすると結構厄介ね。」
さっさと寝よう。明日、他の奴らと一緒に特訓すれば良いでしょ。

はぐれて別れて～出会って戻って～

み、み、みなさん！ おーはようございまー「じゃかあしい」あいたっ！

「朝の挨拶しろって言ったのメイコさんじゃないですか。」

「そうね。で、ツインテール。あんた敬語やめなさい。ブルと被って分かりにくいったらありやしない。」

「理由が……いや、良いもん。だったら敬語なんて使わないもん。」

「ガキか。」

「酷い！」

時刻は朝の6時前。

眠いのもあって、よく分からないのも考えますよ。

ええと、自分で言うのも恥ずかしいけど、私は公認のブルファンです。

でも、実を言うとメイコさんのことは全然知らなかった。

精々、ブルさんの手持ちの一体程度だと思ってた。

けど現実はどう？

メイコさんは高慢で、傲慢で、うるさくて、たまに意地悪で。

「では、第二回『ブールの起こし方会議』を開催します。」
変にリーダーシップがあつて、強くて、ええと。

「そこ、聞いてる?」

「あ、はい。ブールさんはそつと優しく起こせば良いと思います。」

「敬語。」

「あ。えーと、良いと、思う…:よ?」

「却下。そんなつまんないのじやつまんないわ。」

「勝手にすなあ。」

よくもまあ、ブールさんはこんな意地っ張りの人…:じやない、ペラツプに着いてい
けますね。

「あんだ、レイシー出しなさい。」

「え?」

「ここは一発ドカんと『インファイト』で起こすわよ。それぐらいのインパクトが無いと
いけないわよね。」

ダツシユでポケモンセンターから逃げ出した。

「逃がすか!」

三分で捕まった。

むぎゆう。

〰〰〰〰〰〰〰〰

「レッ！ ラララララララ！ レラアツ！」

「フギユ！ あばばばばばば！ ガフウツ！」

お、おお……おはよう、ごさいま……ぐふつ。

「寝るな。」バシイッ！

「痛い！」

おはよう。連日の過酷な起こし方、そろそろ慣れたと思ったんだけどなあ。ブルで
す。

「レイシー、ごめん、ありがとう。戻って。」

「な……レナさん、う、うう、裏切った……の？」

「っ！」

え？ 半ば冗談だったのに、なんで顔を背けるの？

「ごめんなさい！」

「え、ちよつと。」

走ってつちやった。え、しかも泣いてた気が、ええ!?

「あーらーらーこーらーらー。ブールーがーなーかしたー。」

「懐かしい！ じゃなくて！」

あーもう！ メイコさん、嫌がらせ兼セクハラは程々にしてくださいよ！

「行くの？」

「はい。」

「なら、モンスターボール置いてきなさい。こっちで訓練しとくわ。」

「あ、お願いします。」

フキヨセシティを駆けようか！

「あー、そうそう。空港だ。フキヨセ国際空港だつて。」
ふう、すつきり。

・・・あれ？ 何してたんだっけ？

ああ、そうそう、空港がある港町なんだからお店とかお土産を売るお店が沢山あつて当然だよねつて話。

「おいっ！ 待ちやがれ！」

「野生の癖に生意気だぞ、この野郎！」

「バチユル、『でんじは』！」

ん？ 何か騒動が向こうからやって来るぞ？

「アブねえ！」

「くそっ！ あいつすばしっこいぞ！」

「有り得ねえ！」

「『でんじは』をかわしやがっただど!？」

んん？ いや、まさか。ここに居るわけ無いし。

「くそっ、回り込まれてたか！」

「お父さん!？」

三人組に追われていたのは一匹のダブル。

右腕の肘から先が無くて、左手で泥棒が持つてそうな模様の風呂敷を掴んでいる。
あれは、俺のこの世界でのお父さん、そういちろうだ。

・
・
・
ええ!?

「ドブドブドブドブ!」

「ていやっ!」

「がふっ!」

地面に叩き付ける。……あ、地面、コンクリートなんだった。痛そう。

「おいてめえ!」

「そいつは俺たちが見つけたポケモンだぞ!」

「バチユル、もう一度『でんじは』だ。」

「バチユツ!」

問答無用ってか!?! お父さんごめん!

「ドーブルバリアア!」

「ドブフウツ!?!」

「なっ! ポケモンを盾にしやがった!」

「効率的だ。効率的だが……。」

「なんて非人道的な行動なんだ!」

「人間じゃなくて悪かったね!」

逃げ出す。『へんしん』溶く暇も無いしね。

くくくくくくくくくく

走る走る。

「『でんじは』！」

「ドールブルバリア！」「ドブウツ！」

まだまだ！

走る走る走る。

「ドリユウズ、『ドリルライナー』！」

「当たるかあー！」

くそっ、しつこい！

走る走る走る走る走る。

よし居た！

「レナさん！ ヘルプ！ たすけて！」

「っ！ ごめんなさい！」

ちよっ、なんで逃げるの!? 今それどころじゃない！

「あーもうっ！ 怒った！」

逃げるのをやめる。『へんしん』を溶く。よし、周りは安全だね。

「おうっ!? こいつポケモンなのかよ!」

「これはつまり、」

「二匹も捕まえられるのか。」

「^{ドブドブ}やってみろよお!」

相手はドリリュウズとバチユル、スワンナ。

ああ、スワンナで空から追ってたのか。どうりで振り切れない訳だよ。

「スワンナ、『アクアリング』!」

「バチユル、『でんじは』。」

「ドリリュウズ、『ドリルライナー』だ!」

ここは取り合えず『まもる』。インクのバリアが全ての技を防ぐ。

敵は水飛行、電気、地面鋼。だったらまずは面倒なバチユルから潰す。

インクの色は茶色!

「『ロックブラスト』だ!」

尻尾の先から、岩のようになったインクの塊が連射される。

「バチユル、『エレキネット』だ。」

「スワンナ『そらをとぶ』!」

「ドリリュウズ、『ドリルライナー』で突っ切れ!」

うわ、見事に無効化された。

インクを弾きながら突進してきたドリユウズを避ける。

バチユルは『エレキネット』でインクを絡め取っちゃったし、スワンナは空高く飛び上がって避けてる。

くそつ、やつてられない。

だげど！

インクの色は黄色！

「必中の『かみなり』だあー！」

尻尾を振り上げる。インクが雷となって空へ逆行し、今まさにこちらに向かって落ちてくるスワンナに直撃する。

「スワンナ!？」

「今だバチユル『でんじは』。」

「ドリユウズ、溜めろ！」

く、『でんじは』喰らっちゃった。

でも取り合えずスワンナだけでも倒せたし、後は二匹。

「戻れバチユル。」

「『じわれ』！」

「うっそだろ!？」

慌てて『そらをとぶ』。白いインクで描かれた翼ではばたく。

立っていた場所に亀裂が走る。

あ、危なかった。あと少しであの亀裂の中に埋められるところだった。

「おまつ、スワンナ! 戻れ！」

「あ、すまんわりい！」

「一匹落ちてる。」

「はあ?」

え、あ、お父さんが落ちてるう!!!

くそっ、間に合わない!

「サナ！」

「サア。」

お父さんが急激に上昇してくる。

「レナさん!!!」

「サナ、そのドープルはこっちに。レイシー、やって！」

「レラアツ！」

レイシーが出てきた瞬間に『サイコカッター』をドリユウズに飛ばす。

「ドリユウズ！」

「ブルルさん！ こっちです！」

「分かった！」

レナさんに着いていく。

三人組は、流石に追ってこなかった。

そううまく行かないのが人生だけど～感動の再会～

さて、ところ変わってポケモンセンターの部屋です。ブルルだよ？

「えっと、その、それは、……トイレに、い、行き、」

「あ、いや、それなら仕方無いですし。」

何をしていたかって言うとなレナさんが何で一回逃げ出したのか問い詰めてたよ。

何か凄い渋ったので無理矢理聞き出してみたけど……うん、まあ、ね。

「んなことより、それは何なのよ。」

メイコさんがお父さんを指差す（羽差す？）

「こつちでのお父さん。右腕が無いでしょ？」

「あ……本当ですね。」

「厨二？」

「いやこれ、ミュウツーにぶつたぎられたらしいですよメイコさん。」

「ふーん。」

ミュウツー、ねえと呟くメイコさん。

いやでもアカさんのミュウツーじゃないかもしれないし。

「え、それって……ミュウツーって伝説のポケモン、ですよね？ 十数年前にカントー地方で、ええと、宇宙っぽい名前の悪者集団が産み出したって聞いたことがありますけど。」

「知ってるんだ、ミュウツー。」

「十数年前？ へえ、成る程ねえ。成る程。そういう感じ？」

メイコさんは何か分かったみたいにしきりに頷いている。うーん？ 何が分かったんだらう。

まあ取り合えず。

「その宇宙っぽいのは多分ロケット団だよ。カントー地方を拠点として世界征服を目論んでた集団。」

リーダーはサカキ。確かゲームだとレッドに滅ぼされてたけど……アカさん、潰したのかな？ どうなんだらう。

「えつと……ロケット団ですか。」

「レナ、あんまり大きな声で言わない方が良いわよ？ 残党が何処に居るか分からないんだし。あたしたちはまあどうにかできるけど。」

「え、出来るんですかメイコさん。」

「あんだねえ……いや、いいわ。それより、そのドールブル起きるわよ？」

「え？ あ。」

「うくん、ん、ここは？」

「おはよう、お父さん。ここはイツシュ地方、フキヨセシティのポケモンセンターだよ。」
「フム、知らない土地だな。確か……カロスから……ブルーを探しに……そうだブルー
！」

「何？」

「探しに行かなくて……は？」

「どうしたのお父さん。」

フリーズ。静寂。お父さんはこつちを見詰めて……いや、品定めしてる。

「……いやいやいや、人間がブルーな訳無いだろう。確かに俺と話せるのは人間としては珍しいが、それをもってブルーとするのは可笑しい話だ。」

「それもそうだね。」

変身を溶く。お父さんの顔が驚愕に目を開く。

「はあ!? ど、ど、どど、ドブドブ!？」

「言葉になってないよお父さん。」

お父さんがあまりのショックに気を失な「させるかあ！」

で、出た！ メイコさんの翼で打つ！ 技じゃ無い癖にやけに痛い翼で打つだ！

「ドブツ!？」

「鬱陶しいのよ! 『へんしん』見せられたぐらいで失神しようとするな! さつさと感動の再開に入りなさいよ!」

メイコさんが捲し立てる。

「う……………む……………しかし。」

「……………ねえブル、あんたのお父さんはこんな優柔不断だったの?」

「え?」

「!？」

メイコさんの質問には俺よりもむしろお父さんの方が驚いてる。

「うーん、どうだったっけ? 優柔不断……………というよりは、頑固の方が似合う気がするけど。」

「ど。」

「あら、思いの外まんまじゃない。よし、じゃあそこのブル。名前は?」

「ブルだよ?」

「あんたじゃないわ阿呆。そっちの右腕が無い阿呆よ。」

「あほ……………む……………。そういちろうだ。」

メイコさんは一度理不尽にレナさんを叩く。

「ええ!？」

「ポケットとしてんじゃないわよ。」

「り、理不尽……。だって私、ポケモンの言葉は分からないんですよ？ 人の言葉を喋れるメイコさんがおかしいんですよ。」

「敬語。」バシイ

「忘れてたっ！」

メイコさんがなんだかんだでレナさんを部屋から追い出す。

……あれ？ いつの間にか部屋の中には俺とお父さんだけだ。

「お前……。本当にプールなのか？」

「そうだよ、お父さん。」

「……。お母さんの名前は？」

「ええと……。ああ、思い出した。シリル。シリルがお母さんの名前だよ。ちなみにお兄ちゃんたちとお姉ちゃんたちは上からカラキリクルケン」

「プール!!!」

お父さんは、ようやく、行方不明の子供おれと出会えた。

ほのぼのゝあれ？　何か忘れてる？ゝ

「レイシー『つるぎのまい』！」

「遅い！」

うわ、エスパータイプも入ってるレナさんのレイシー（エルレイド）を『スカイアツパー』で一撃って、お父さん、貴方何者ですか？

……あ、感動の再会が昨日で今日はお父さんが皆に稽古をつけてくれます。ブルですよ。

「……ねえ、ブル。これじゃあ稽古にならないんだけど。」

「そう？　でも僕とメイコさんはそれなりにいい勝負になったよね。」

「あたしらが強くなってもしょうがないのよ。ハッサンを進化させたりレイカとのコンビネーションを強化しようと思ってたのに、何よあれ。」

まあねえ。俺はお父さんの特権を知ってたからとにかく逃げまくって『カウンター』使ってみたけど……『カウンター』の構えをとる前に『スカイアツパー』を喰らって倒れた。

てか『カウンター』のやり方は知らなかった。

メイコさんとはかく『ぼくおんぱ』連発して封殺してた。お父さん片腕無いから耳を塞げないんだよね。

「つーかあいつも転生者だなんて聞いてないけど。」

「言つてないですもん。」

お父さん……そういうちろうの特権は「バトル開始から二十秒間はほぼ無敵」というもの……だったはず。

だからお父さんの技構成も特権をフルに活用できるものになってる。

「ふうむ。『スカイアツパー』に『マグネットボム』。後は？」

「確か……んん。よく思い出せないや。」

「あつそ。」

「ああ、サナー！」

あ、レナさんのサナーが倒された。……んー、こつちではフェアリータイプって適用されるのかなあ？

「つ、強いですね、ブルさんのお父さん。」

「そうでもないさ。俺なんてまだまだ。」

「『まあな、当然さ』だって。」

「おいっ!?!」

レナさんはドーブル語が分からないから俺が通訳します。

「はあ、凄いですね。親子揃ってそんなに強いだなんて。あの、私も強くなれますか？」
レナさんがかなり真剣な顔でお父さんに質問してる。

「んん。そうだなあ。……強くは、なれる。」

「『強くはなれる』ですつて。」

「本当ですか!？」

「ただし、俺たちみたいなの圧倒的な強さは望まない方がいい。」

「ちよつと、然り気無くあたしも人外だなんて言わないでよ。まあ、ペラツプたけどね。」

「……ええと?」

「うーん。まあ、僕たちを目標にするのは辛いから止めといた方が良くって言ってます

よ。」

「そう、ですか。」

こんな感じで良いのかな？

アイコンタクトをお父さんに送る。

オーケーだ。

大丈夫だったみたい。

「しっかし、ブルがトレーナーとして旅してるだなんてなあ。」

「また言ってるの? ……まあ、良いけどさ。」

昨日お互いの状況を話し合ったんだけど……俺が旅してるのがそこまで衝撃的だったのかあ。

俺としてもお母さんが茫然自失とか聞いたら今すぐに帰りたいんだけどね。まさかのレナさんから猛烈な反対をもらった。『せめて今期のチャンピオンリーグは出てください!』だって。

……んー。正直決めかねてる。俺としてはこつちでの両親が病気とか怪我したとかだったら直ぐに行ってあげたい。

けど、ファンからのたつての願いを無下に出来るほど冷血じゃない。

むむむ。まあ、取り合えずフキヨセジムに挑戦するまではお父さんはこつちに居ることだからゆっくり考えよう。

「……んーむ。ま、明日ジム戦なのは確定何ですよね、メイコさん?」

「そうよ。」

頑張りますかあ。飛行タイプなら結構相性は良いはずだしね。

ぶっ飛びボデイ〜飛行のジム戦〜

さて、お父さんとの特訓も上々。しつかり休んで元気も満タン。

ここはフキヨセジム、五つ目のジムバッチを貰うためのジム戦！

メイコさんとレナさん、お父さんは二階の観客席で見学だつて。

バトルフィールドを挟んでフウロさんと向かい合う。

「来たね、ブル君！」

「始めまして、フウロさん！」

お互いにあいさつする。そして、

「なんで僕（私）の名前を知ってるんですか！」

同時に叫ぶ。

「いやいやいや、フウロさんジムリーダーじゃないですか。」

「何言ってるの、ブル君は有名人じゃん。」

あれ、また同時。

「気が合いますね。」

「うんうん、だけどバトルの手は抜かないからね！ 審判！」

「はい！ ルールは四対四！ 先に全てのポケモンが倒れた方の負けとなります！ ポケモンの交代はチャレンジャーにのみ許されます！」

「よし、ぶっ飛ばしてあげる！ 行くよ、バルジーナ！」

「バジャー！」

バルジーナか。しかもサングラス……『くろいメガネ』を着けている。うーん、レイカはスワンナ用に残しておきたいからここは……。

「ギイカ！ 行くよ！」

「ギツガアアアア！」

よし、調子は良さげだね。

「バトル開始！」

「バルジーナ、『おいかぜ』！」

「まずは落とす。『うちおとす』だ！」

「バジャー、バジャー、バジャー！」

当然バルジーナの方が速い。羽を大きく飛ばたくと強めの風が吹き始める。

けどまあ、ギイカには関係無いね。

「ガアツ！」

「チャツ!!」

おお、顔面にクリーンヒット。飛び回るメイコさんには未だに当たらないけど動かないのなら百発百中だね。

『じゆうりよく』でも喰らったかのように地面に落ちるバルジーナ。

『まだ行けるよ！』『あくのはどう』！

「バアアツ！」

「これぐらいなら耐えられる！』『じしん』！」

「バチャアツ！」

「ギツ。……ガアアアアア！」

『あくのはどう』が当たり一瞬怯むものの、大声を上げながら右前足で地面を揺らす。

ドオンツと空気が揺れる。

「バジャツ!？」

「だ、大丈夫!？」

「ブ……アアジャツ！」

仕留めきれなかったか。なら……。

「『うちおとす』！」

「『ブレイブバード』！」

「『ブレイブバード』!？」

「バツチャアアアア！」

「ギガアツ！」

「ギイカ！」

『ブレイブバード』は飛行タイプ最上位の技。反動というデメリットはあるけど、その分強い技だ。

「ガツ……アアツ！」

「よしっ！」

だけどギイカは耐える。それぐらいしてもらわないとね！

『うちおとす』だ！」

『おいかぜ』！」

ぎりぎり反動では倒れなかったバルジーナは、また羽ばたいて風を起こすが、そこまで。

ギイカが放った岩の塊がぶつかり倒れ伏す。

「バルジーナ、戦闘不能！」

「うん、お疲れ様バルジーナ。……流石、ブルル君は強いね。」

「皆が強いだけですよ。」

「うんうん、『過ぎぬ謙遜は美德』だね。うーん……スワンナ、お願い！」

「クワアツッ！」

来た、スワンナだ。ギイカはタイプ相性が悪いうえに少なからず傷ついている。なら、ここは。

「『アクアリング』！」

「戻って、ギイカ。また出番はあるから。」

ギイカはボールに戻す。不満げだったけどここは我慢してほしい。

「よし、お披露目だよ！ レイカ！」

「ナツトウ！」

「『つばめがえし』だよ……つてええ!？」

既にスワンナは突撃してきてる。

「ナツツ。」

「クワアツ!？」

レイカの特徴である『てつのトゲ』が刺さったみたいだね。

「い、色違い……まさか電気石の洞穴の!？」

「はい！ この間捕まえました！」

「はへえ、凄い、凄いよブル君！」

「クワアツ!!!」

「ナッツトウ！」

フウロさんのテンションと共にポケモンたちのテンションも上がっているね。

「だからこそ負けられない！ スワンナ、押すよ！ 『つばめがえし』！」

「やるよ！ 『ラスターカノン』だ！」

レイカが全身から光の束を照射する。

けど、スワンナは軽くかわしてレイカにぶつかる。

「クワアッ！」

「トウ……！」

流石はレイカ。耐性が高いお陰でダメージは少ないみたいだ。

と、言えども『てつのトゲ』の地味なダメージは『アクアリング』で回復されて……
ん？

「モグモグしてる……まさか『たべのこし』!？」

「大正解だよ！」

むう、これは、長期戦になりそうだ。

「『10まんボルト』！」

「甘いよ、『アクアリング』！」

レイカが放出した電気はスワンナを覆う水のボールに誘導されて消えてった。なん

かスワツとする臭いがしてくる。

「電気対策なんて三代前のジムリーダーが確立済みだよ！」

「むむう、レイカ、『ラスターカノン』だ！」

「少しは反応してよ！ 避けて『おいかぜ』！」

『ラスターカノン』はあつさりかわされる。そしてスワンナは羽を大きく羽ばたかせる。

ん、確かに風が止んでたね。基本関係無いけど……ん。

「『つばめがえし』！」

「……つてことは。」

スワンナがレイカにぶつかる直前まで堪える。

「ここー！ 『ジャイロボール』！」

「ナツ、ナツ、ナツ、ナツナツナツナツナツナツナツナツ！」

「クエアツ!？」

『つばめがえし』は必中技。つてことはカウンター気味に技を撃てば避けられない！

更に『ジャイロボール』はすばやさの差で強さが変わる！

「スワンナ！ まだ行ける!？」

「ク、クワアツ！」

今のところスワンナの使った技は『つばめがえし』『おいかぜ』『アクアリング』。

残りの技が飛行タイプの特特殊技ならとつくに使ってる筈だし、となると水タイプの技か補助……いや、もしかしたら回復用の『はねやすめ』かも。

「なんにせよ、やるしかない！ 『10まんボルト』だ！」

『アクアリング』！

やっぱり効かないか。ズルいね。しかもこうしてる間にも『ジャイロボール』のダメージは回復していくし。

このままだと俺のじり貧……かな。

「でも攻める。『10まんボルト』！」

『アクアリング』！ 効かないって言ってるでしょ！」

また無効化される。

「レイカ！ 『アクアリング』ごと吹っ飛ばせえっ！」

「ナットウ！ ナーナーナーナーッ！」

レイカが溜める溜める溜める。

バチツ、バチバチツ

「う、ちよーつと不味いかも。スワンナ！」

「クワッ！」

フウロさんとスワンナが何かを意志疎通する。

「だったら計算も計略も『アクアリング』ごとく消し飛ばせ！ 『10まんボルト』!!!」

「ナトウー!!!」

『『はねやすめ』！』

スワンナが羽をたたみ、地面に降りる。

そこへ電気が直撃する。

爆発。

「スワンナ！」

「レイカ、『ラスターカノン』準備。」

「ナトウ……………」

煙で見えなくても次の手は止めない。さて、どうなる？

「……………スワンナ、戦闘不能！」

審判の声。

「ふーっ。レイカ、良いよ。」

「ナトウ……………」

スワンナ、実に強敵だった。うん。

「スワンナ、ありがとう。……うーん、やられちゃったあ。まさか一撃だなんて。」

フウロさんは眩き、次のボールを手に取る。

「でも、私はまだまだ行けるよ！ 次はこの子だよ。飛んで、ケンホロウ！」

「キョーーツ！」

ケンホロウ、頭飾りがあるからオスの姿か。

ん？ なんかケンホロウの右目に違和感が……気のせいかな？

「レイカ、行ける？」

「ナットウ、ナットウ！」

「よしっ、なら行けるね！ 様子見の『10まんボルト』だ！」

「決めていくよ！ 『エアカッター』！」

両方の技は奇跡的に打ち消しあう事もなくお互いに当たる。

「ナットウ!!」

「え、レイカ？」

見るとレイカの体に深い切り傷が。

「ナ……ト……ウ……」

「レイカ!!」

「ナットレイ、戦闘不能！」

ええ!? た、確かにスワンナとのバトルで消耗していたけど、一撃!?

「……急所か!」

「またまた大正解!」

『エアカッター』は急所に当たりやすい技。そしてつまり、持ち物は急所に当たりやすくなる『ピントレンズ』か!

「ありがとう、レイカ。」

となると、残りはペティ、ハッサン、ギイカ。

ギイカは既にダメージを喰らってる。

ペティはタイプ相性が悪い。

なら。

「ハッサン、行くよ!」

「バウツ!」

さて、どうするかな。

「とにかく『ふるいたてる』!」

「『ちようはつ』するよ!」

「キョウツ!」

「アオー……ッ!」

何い!? 不味いぞ、これは!

「更に更にい、『フェザーダンス』!」

ケンホロウが舞う。羽根がハッサンにまとわりつく。

「くくくくッ! ハッサン戻って! ギイカ!」

「ギツガア?」

ここは交換するしかない。ハッサンがほぼ完全に無力化される!

「もういつちよ『フェザーダンス』!」

「『パワージエム』!」

こうげきを下げられるのもういい。特殊技で攻めればいい。

「ガアッ!」

「キョッ!」

『パワージエム』が直撃する。

「隙を見せるな! 『うちおとす』!」

「堪えて! 『フェザーダンス』!」

うう、『うちおとす』で決められなかった。

「ここは『パワージエム』だ!」

「『エアカッター』!」

空気の刃に光るエネルギー弾がぶつかると。

「ギイカ『パワージェム』！ 撃て撃て撃てえ！」

「全部全部全部『エアカッター』で迎撃して！」

「ギツガツガツガツガツ！」

「キョツキョツキョツキョツ！」

炸裂。爆発。粉碎。

「『うちおとす』に変更！ まだまだ撃て！」

「くっ、避けて、ケンホロウ！」

よしっ！

「ギイカ、メイコさん落としだ！」

「ギツガアアアア！」

『うちおとす』と『パワージェム』が走り回るケンホロウを追い詰める。

「っ！ 当たった！」

『パワージェム』がケンホロウに当たった！

「今だ！」

……あれ？ 『パワージェム』も『うちおとす』も飛んでかない。

「ガッ、ガアッ、ガアッ！」

「……………」

ギイカがすごく疲れてる!?

「『エアカッター』!」

「ごめんギイカ、『じしん』!」

『エアカッター』がギイカに当たる。

恐らく急所に当たったと思う。

が、ギイカは地面を揺らす。

「ええっ!?!」

フウロさんは驚きのあまり指示を出せない!

そりゃあ、確実に倒した筈の相手が行動したら驚くよね。

でも。

「…………ケンホロウ、ギガイアス、共に戦闘不能!」

「はあ。ごめんね、ギイカ。」

「す、凄いな。凄く凄いなよ、ブル君のポケモンたちは。」

「僕もそう思います。」

やられたのに意地で『じしん』を放つだなんて。

「絶対に勝つから、ギイカ。……ペティ！」

「ペアギユアアアア！」

「私は最後の一体だね。行って、ウォーグル！」

「ピーーッ！」

甲高い声。よし、少し狡いけど勝ちに行く。

「ウォーグル、『つばめがえし』！」

「『どくどく』。」

圧倒的な速度でウォーグルが迫る。

ペティは焦らずに『どくどく』をウォーグルに叩きつけ、『つばめがえし』を受ける。

「うんうん、良いね！ こうでなくっちゃ！ 『エアスラッシュ』！」

「『ベノムシヨック』！」

紫電がウォーグルを包むが、ウォーグルは怯まずに風の刃を放つ。

「ペンドラー、戦闘不能！」

「……あれ？ あっさりだね。」

「行って、ハッサン。」

「グルルル……！」

さて、ここからだ。

「むう、雰囲気全然違う……『ブレイククロー！』」

「『まもる』」

ハッサンが 緑のシールドに包まれ、ウォーグルの攻撃を受け流す。

「む、そう言うこと？ もう一回『ブレイククロー！』」

「『まもる』」

またもウォーグルの攻撃はハッサンには届かない。

「『ふるいたてる』、『まもる』」

「『きりさく』！…… って速い!？」

一瞬で『ふるいたてる』ハッサン。そして結構ギリギリで『まもる』。

「くっ、『ブレイククロー！』」

「『とっしん』で吹き飛ばして。」

「バウツッ！」

「ピュイツ!？」

余りに近付き過ぎたウォーグルの腹に、ハッサンが全力で『とっしん』する。

その勢いでウォーグルとハッサンの間が開く。

「なら『エアスラッシュ』だよ！」

「『まもる』」

「またも防ぐ。」

「ま、不味い不味い不味い！ ウオーグル、『エアスラッシュ』！ 攻めて！」

「ピーーーーーッ！！！」

風の刃が大量に迫ってくる。

「これが『とつておき』だよ。」

「バフッ！」

「ピイツ!？」

ハッサンがウオーグルの真上に瞬間移動。地面に叩きつける。

「ええっ!？」

「これで終わりだね。」

猛毒がウオーグルの体に廻りきった。

「ウオ、ウオーグル、戦闘不能！ よってチャレンジャー、ブールの勝ち！」

俯瞰く赤い翼は何を見るく

バトルが終わったからブルの所まで飛んでいく。

バサバサツとブルの頭に着地。ブルがベレー帽の位置を直す。

「はいこれ、ジエツトバツチ！」

「ありがとうございます！」

ブルがフウロからバツチを手渡される。

ま、そこそこ危ないバトルだったけど。まだまだね。

「そうだ！ ねえねえ、ブル君。」

「何ですか、フウロさん。」

「サイン頂戴、サイン！ 後ポケエルとポケッター！」

「あ、はい。メイコさんスマホください。」

「はいよー。ほれ。」

他人からは見えていないらしいバッグからスマホを取りだし、ブルに放り投げる。

未だに上手く扱えてないスマホでたどたどしくフウロとポケエル登録しているブルを見る。

……まさに人にしか見えない。

なんとなくベレー帽を脱がそうとしてみる。

「あいたたたつ！ め、メイコさん！ 頭引つ張らないで！」

「……はんつ！ フウロごときに勝った程度で浮かれてるあんたが悪い！」

「理不尽っ！」「『ごとき』っ!？」

ブルとフウロが同時に声をあげる。

あー、しくったかしら。どうかしら。

「『ごとき』って何よ！ 失礼なペラッブね！」

「知ったこつちゃないわね！ 青二才がわめくんじゃ無いわ！」

「青二才なんかじゃないもんっ！」

「それは勝つてから言いなさい！」

「うぐう……！」

そこに割り込むように

「あ、え、えつと。ポケエル登録とポケッターの相互フォロー終わりました、よ？」

ブルが声をかけてくる。

「……ブル、あんた、ほんと、間が悪いわね。」

「え？」

「あたしは先に行ってるわ。ポケセンに戻りなさいよ？」

「あ、はい。」

プールの頭から飛び立つ。

さーて、レナとそういちろうさんはどこまで行ったのかしらねえ。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「お、居た居た。」

レナはジムの裏、ポケセンとは反対側に居た。

「……………」

レナがそういちろうさんに何か喋ってるみたいね。ちよいと盗み聞きさせてもらおうかしら。

「ふむふむ?」

「……………」が好きなんです!」

「それは俺に言われても……………」いや、しかし……………むむむ。」

おつとおつ? これはこれは。

「どうすれば良いんでしょうか……………」プールさん、フウロさんと仲良くなれそうでしたし、それだけなら別に良いんですけど、相性も良さそうで、お似合いで、うう……………」

「お似合い? あれはプールには多分合わないと思うが。まあ、肉付きは良いが。」

親父め！ まあ、フウロはブルに会わないってのは同意だけど。あれは『皆の友達』って性格だし。

「……うちは結構放任主義だからなあ。俺に言われてもどうにもできないぞ？」

「……慰めてくれてるんですか？ 優しいんですね。」

「はあ？」

あ……。そっか、レナはポケモンの言葉が分からないから……。

「分かりました。私、頑張ります！」

「お、おう。……若い女の子は扱いが難しいなあ、昔っから。」

うーん……。まあ、結果オーライ、で良いのかしら？

他人の恋まで面倒見切れないからねえ。

「ハロー。お話は終わったかしら？」

「メイコさん!! き、聞いてたんですか!？」

「んー？ 何の話かしらあ？」

「……メイコ、何でこの子は俺に相談なんてしてきたんだ？」

「はいはい、ブルはポケセンに居るわよ。多分。」

「……そうか。」

流石そういちろうさんね。あたしより長く生きてるだけあるわ。

ま、
あたしのが良いポケモンだけど？

再出発し志、新たに

告白された。嘘じゃない。『好きなんです！』と言われた。

まあ、俺もそれなりに長生きだ。告白の二回や三回は受けてる。

その子も、告白してきたんだ。

もう一度言おう、『好きなんです！』と言った。

その前に『ブルルのことが』が付いたけどな！

いや、いやいやいやまでまで。良く考えたら別におかしな事じゃ無い。相手方の父親に貴方のお子さんが欲しいですと言うのはああああああああああああああああああああああ！

誰がやるかあ！と、言わなければいけないのか！?

いや、落ち着け。落ち着くんだけ俺！　そもそもあの様子、まだブルーに告白してないんじゃないか？

すると、単に心の中を誰かに打ち明けたかっただけ……か。
ふむ。

「この俺を混乱に誘い込んできたんだ、あの子は強いんだよな？」

「そうかしらね？　そもそんなつもりは無いと思うけど。後、なんでそれを今あたしに言うの、そういちろうさん？」

「……いや、そのだな。」

メイコ。珍しい色違いのペラップ。ブルーのジム戦を横目に聞くと、彼女も転生者らしい。

『あたしにはあんたじゃ思いもよらないような過去を持つてるのよ』

『そうか。因みに俺はこの世界の生まれじゃない』

『……奇遇ね』

だったか。

「やはり、そういう相談は女同士でやるものじゃないか？」

「流石にそれは偏見だと思うけど。ま、一理あるわね。」

謎の多いペラップだ。未だに年齢を読めない。年上っぽく堂々としていると思った

らまるで子供のようになりたてる時もある。

「しかし……今のこの状況、なんなんだ？」

「そうね……久しぶり、って感じね、これ。」

ポケセンの前。始めはなにか事故でも起きたのかと思っていた。いわゆるマスコミが大量に居たからな。まあ、事件ではあった。

ただ、まさかブルー達がマスコミに追われているとは思っていなかったな。

「しっかし、なんで俺がブルーと間違えられていたんだ？」

「人間にはポケモンの個体の違いなんて分からないわよ。」

「それもそうか。」

「しっかし、派手にやったわねえ。はあい、レナ。起きてる？」

「う、ううん……」

急に殺到してきたんでつい攻撃してしまった。

うむ、正直、すまないと思ってる。特にそのレナとやら。巻き添えにしてしまった。

まさか『トンボがえり』使ったらレナとやらが前に出ていくとは考えもしなかったな、うん。

「見る限り死屍累々。しかもこれだけの騒ぎになってるのにジョーイさんどころかブー

ルも出てこな……あ、ジョーイさん倒れてるじゃない!？」

メイコがジョーイとやらの元まで飛んでいき、その頭をバシバシ叩く。

「ほらほら! 起きなさい! 職務怠慢よ!」

「あ、あれ? これは……。」

「お、起きたのかレナとやら。すまなかったな。」

「……ええ!? な、なんでこんなに大量の人たちが倒れてるの!？」

「む、レナ! 今のうちにブル探しなさい! ここはあたしが何とかするわ!」

「わ、分かりました! 行きましょう、ブルのお父さん!」

「おう!」

ポケセンの中へ入る。……部屋にはブルの姿は無かった。

なら外だな。外に出てちよいと空気の臭いを嗅ぐ。

ふむふむ、分かりにくいがあっちか。

「こっちだ。」

「え、え? 何処行くの?」

無論、ブルの場所だ。と、言っても伝わらないのだから行動で示すしかあるまい。

そして歩くこと少し。

「ん? ハハハは……。」

「フキヨセジム？ まだ戻って無かったのかな……。」

ううむ、分らんな。中へ入るしかあるまい。

「あれ、お父さんにレナさん。どうしたの？」

「あ、チャレンジャー？」

居た。それも意外とあっさり見付かった。まだフウ口とかいう女性と一緒に喋って
いたらしいな、まったく。

「どうしたのじゃないですよ！ ポケモンセンターの前が酷いことになってるんですよ！？」

「ええ!？」

「半分はお前のせいだからな、ブール。」

「僕何もしてないんだけど!？」

と、フウ口の顔が青ざめていく。

「ね、ねえ。酷いことつて、も、もしかしてマスコミがいつぱい来てた、とか？」

「そ、そうですけど……。」

「正確にはそれを俺が倒したからだ。」

「お父さんのせいじゃん!？」

何を言う！ と言う前に。

「ごめん、もしかしたら私のせいかもー！」

フウロが手を合わせて謝ってきた。

くくくくくくくくくく

要するに、フウロさんがポケッターに俺との写真を流しちやつたからって事なのかな？

うーん。そんなに悪いことはしていないように思えるけどなあ。

で、お父さんはすぐに帰るらしい。

本来の予定なら明日のカロス行きを待ちたいところだったらしいけど、マスコミのせいで俺達はフキヨセシティから早々に立ち去る必要が出来たから。

……うーん。お父さんと静かに感動の別れ、とはいかないみたいだね。おのれマスコミ。

「はいこれ、メイコ特製、超高性能大陸間通信可能ポケギアよ。それとメイコ特製、中略、ホロキヤスターよ。要するに携帯電話だと思ってくれていいわ。」

「ほほう。通話料金はいくらだ？」

「通常料金月々五万ポケのところ、なんと！メイコ特製製品に限り無料よ！」

「安い！買った！」

……なんか、ノリが、軽いのね。

「そんなじゃ、さようなら、そういちろうさん。」

「じゃあな、メイコ。……………」

「ん……………またね。お父さん。」

「いや、最後にやることがある。ブル、『へんしん』を解いて後ろを向け。」

「う、うん。」

言われた通り『へんしん』を溶き、後ろを向く。

「うむ、では。」

ポスツと背中を押される。

「俺から贈る言葉だ。心して聞け。」

「……………はい。」

すうつ、と息を吸う。

「……………お前が、立派になって帰ってくるのを待っている。バトルを楽しめ。仲間を慈しめ。己を見失うな。」

「はい。……………必ず、元気な姿で帰ります。」

……………行つてきます。

リスタート～山を前にして～

お父さんが乗った飛行機が空の彼方へ飛んでいく。

大きく振っていた手を降ろす。

「……行つたね。」

「そうですね。」

「今のままでと親不孝。……チャンピオン倒せば親孝行、ね。さ、気分切り替えて行きましよう?。」

「うん。」

そろそろマスコミも復活してくる頃だしね。

「えーと、次の目的地は? 二番さん。」

ピロンッ

「セツカシテイです。行くためにはネジ山を越える必要がありますね」

「セツカシテイ……うーん、いまいち記憶に無いわね。」

「セツカシテイは氷の町、ジムリーダーのハチクさんは氷タイプの使い手にして映画俳

優でもあるんですよ！」

「……あ、思い出した。あの変な仮面つけてる人だ。」

「ん？ ……あ。今のでジムリーダーの姿は思い出したわ。ふーん。イツシユでもつとも影が薄いんじゃない？ じいさんキャラならヤーコンさんが居るし。」

ピロンツ

「この地方の人の中では、じいさんキャラはハチクさんですから。むしろヤーコンさんのことを知ってる人の方が少ないと考えられますね」

だつてさ。まあ、鋼タイプじゃないだけ凄く楽なんじゃない？

氷タイプか。炎、地面、格闘、鋼に弱くて、ドラゴン、草に強い………虫もだっけ？ 俺の手持ちでは、今度もギイカが頑張ってくれそうだね。次点でレイカ。

「ふーむ。そうね、そろそろ頃合いかしらね。」

「え、何がですか、メイコさん？」

「ハツサンの進化。未だにハーデリアじゃない、あのじい犬。」

「バウバウツ！」

あ、ハツサンが勝手に出てきて吠えてる。

「それもそうですよね。基本的にポケモンは進化させた方が強いですし。」

「んー。でも、ムーランドかあ。」

「何よ、なんか文句でもあんの?」

「そういう訳じゃ無いですけど。」

ムーランド……ゲームではすぐにでも進化させるところだけど、現実だとトロそうなんだよなあ。

トロいというか、どっしりのっそり、みたいな?

「ははあん。成る程ねえ。……ハッサンなら大丈夫じゃない? 既にじいさんな今でもガンガン動いてるし。ねえ?」

「ババウバウバウツ!」

「んー、まあ、そうですね。動けなくなったらそれに合わせて指示すればいいし。」

「ババウツ!」

「あつ! ブールさん! あれがネジ山の入り口じゃ無いですか?」

レナさんが声をあげる。

あ、本当だ。おどろおどろしい入り口がある。

『ネジ山フキヨセシティ側入り口』

うん、看板にもちゃんと書いてあるね。

「そんなじゃ、回復アイテムならあたしが無限に出せるし、ハッサンオンリーでネジ山を攻略よ!」

「バフツ！ ババウ？」

「んー。……あ、あるわね。大丈夫、きのみでどうにかなるわよ。」

あ、そつか。ハッサン『きずぐすり』とかみたいな薬は嫌いなんだっけ。

「んーじゃ、改めて。」

メイコさんがアイコンタクトしてくる。

合わせろって事かな？ よし。

「ネジ山出発！」

「ネジ山攻略！」

「頑張ります！」

「誰か一人ぐらい合いなさいよ!？」

分散くもはや恒例行事く

「つたく。なーんでこうなるのかしらねえ」

「……」 スンスンスンスン

「はくくくくまったく」

「……………」 スンスンスン

「ホーントコマルワー。ナーンデコウナツタンカシラネー」

「うるさいぞメイコ殿」

「だつてつまんないのよー、ハッサン。よりによつて何でブルたちとはぐれちゃったのかしら」

と、言うわけでメイコよ。ここはネジ山のどこか。

軽く説明すると、ネジ山入る？ マスコミ待ち伏せ？ 逃げ出す？ 謎の崖崩れ？ はぐれる
(今こころ)

ボールから出たハッサンと一緒にだったのが幸いと言うかなんと言うか。今、ハッサンがブルたちの匂いを探ってる。

「何が問題かってブルとレナが一緒かどうか確認出来なかったのが辛いわ」

「何故だ？ レナ殿ならば主人が助けられるだろう。そもそも、レナ殿も十分強い」

「そうだけどそうじゃない。根本的に違うわよ、ハツサン。あたしが心配してるのはそうじゃないのよ」

「ふむ、ではなにか？」

「甘酸っぱい恋の予感」

「……………バウ」

自分で言つてて恥ずかしいわね。まったく。

「恋……………か」

「そ。レナがブルーにメロメロ♪ だけどブルーはどんかんで♪ だけどこれは超チャ

ンス♪」

「ふむ、その心は」

「ノリが良いのか悪いのか。要するにね、あたしが見てない今、告白してるかも知れないわけよ」

「なんと」

「……………あんまり驚いてないわね」

「俺は、レナ殿ならば良いと思ってるからな」

「ふーん」

分かれ道に突き当たった。さあて、右か、左か、後ろか。

「ハッサン、どれ？」

「暫し待て。スンスンスン……どちらからも匂いがするが、右の強い」

「んー、じゃあ右で」

念のために目印付けておくわ。そうねえ……今抜けた方の道に傷でも付けておけば良いでしょ。

「爪で引つ掻いてーっと」

ふむ、これでよし。

「……それで、何をメイコ殿は心配しているのだ？」

「あ、続ける？ 続けちゃう？ そうね……うーん。一番はやつぱり、ブルがどんかんなことね。『ブルさんの事が大好きなんです！』って言われて『ありがとう』で済ましちやいかねないわ、あいつは」

「むう……確かに」

「それと、無いとは思うけど、ブルが告白を断ったら、と考えるとこの先面倒な事になるわね」

「と言うと？」

「ぎこちない雰囲気って嫌いなよねー、あたし」

「ふむ」

お、今度は三叉路ね。右か左か、真つ直ぐか。

「ハッサン、どれ？」

「左だ。かなり近付いてるぞ。」

「そりゃあ良いわね」

そーいや、コロモリとかクマシユンとか見かけるものの襲つてこないわね。どうしたのかしら。

「。――！」

「お、噂してれば見付かるものね。ハッサン、良かったわね。ブルルよ」

「む、では急ぐか。主人も俺とはぐれて悲しんでいるに違いない」

「それはどーかしらねー」

「ほぎけ」

バウバウツとハッサンが走っていく。あんの馬鹿め。こういうのはこっそり行つて盗み聞きするところでしょうに。

仕方無く着いて行く。

「はあい、ブルル。生きてる？」

「あ……………うん……………」

ブルは顔を真っ赤にさせている。レナの姿は見当たらない。ハッサンはブルの足に体をこすりつけている。

あつ、ふーん。察したわ。

「……………んーと」

どうしようかしらねえ。レナの居場所を聞きたいんだけど、『レナ』とか『ツインテール』とか言ったら余計に固まりそうだしねえ。

「はあ。ハッサン」

「なんだ？」

「あれ探さない」

「『あれ』？ ……もしかして、レナ殿の事か？」

「他に何かあるのよ。ほら、探さない」

「バウ」

ハッサンがレナを探して洞窟の奥に消える。

さあて、と。

「ブル。みっちりむつつりぺちゃんこのべろべろになるまで詳しく教えて貰うわよ」

恋の味はく甘いポフィンと渋いポロツクく

どうも、崖崩れでメイコさん、ハッサンとはぐれたボールです。

「幸いなのはモンスターボールを一つも無くしてないことと、レナさんが一緒に居ることだね。」

「ただ、ね。」

「あてて。」

「ボールさんっ!」

「大丈夫だよ、足が挟まったただけだし……イテテ。」

はぐれた時に足を負傷した。うーん、ついてない。死んでないだけかもしれませんが。」

「これじゃあ動けそうにないし、メイコさんが見付けてくれるまで待った方が良いね。」

「そうですね……メイコさんは無事でしょうか?」

「メイコさんが、怪我で動けない?」

「……………うーん。」

「無いね。」

「無いですね。」

二人同時に眩く。うん、やっぱりそうだよね。

「……暇だね。」

「そんなこと言っていると怖いポケモンが出てきますよ?」

苦笑しながら注意してくるレナさん。

「噂をすれば……ってやつだね。」

「はい。」

と、何かの唸り声が何処からか聴こえてくる。

「……ハッサン? にしては……声が低いような……」

「ぶ、ぶ、ブルさん、あれ、あれ!」

「何、レナさ……ドブ!」

「ぐるううつううう」

「ツンベアーだっ!」

「まずい、まずいよ? 俺は逃げられないから倒すしか無いんだけど、何このツンベ

アー!

「お、大きい……」

「ねえ。ツンベアーってこんな大ききなの?」

「い、いえ、これは大きすぎます……!」

このツンベアー、明らかに大きすぎる。四つん這いなのに天井を背中が削ってる。――それなりに長身のレナさんがジャンプしても届かない天井に、だ。

「戦う?」

「に、に、逃げたいです。」

「なら、逃げなきゃ……イテテ。」

「ブールさん!」

う……足を負傷したのを忘れてた……。

「大丈夫、レナさんは逃げて。」

……はレイカを出して時間を稼げば良い。よし。

「駄目です!」

モンスターボールを手取るより速く、レナさんが俺を抱き上げて走り出す。

「ベアアアアアアアア!」

当然、逃げた獲物を追い掛けるツンベアー。

「レナさん良いから! このままだと追い付かれるし!」

「キャアアアアアアア!」

駄目だ、聞こえてない!?

ツンベアーはけっこうなスピードで追い掛けてくる……ただ、この洞窟が狭いせいか

なかなか全速力を出せないらしく追い付いてこない。

これ、意外と逃げ切れるかな？

「はっ、はっ、はあっ！」

あ、無理だ。レナさんが力尽きるのが先だこれ。俺が荷物だから。

……………でも、レナさんは俺を置いていかないだろうな。……………となると。

「レナさんそこを右！」

出来るのはナビゲーションしかない。幸いなのかどうなのか、ツンベアーは大きすぎる。

未だに攻撃してこないところを見ると走りながらの攻撃は出来ないみたいだし、より狭い通路に飛び込めば逃げ切れる……………筈。

「はっ、はっ、はっ、はっ！」

「……………っ、そこは左！」

少しでも、狭い通路に。

「頑張つてレナさん！」

「はっはあっ、はい！」

そして、数分たったのか、もしくは数秒か。

「ん！ その穴に飛び込んで、右！」

「っー」

人が一人入れるかどうかの穴に、飛び込む。

「ベアアアアアア！」

ドシン、ドシンとツンベアアが体当たりしてくるけど、中に入ってはこれない。

「はっ、はっ、はあっんく、はあっ！」

「お疲れ様、レナさん。なんとか逃げ切れたみたいだよ」

「そつ、ですつ、かつ」

「あ、うん、先に息を整えて良いから」

息を整えるレナさんを横目に、ツンベアアの様子を確認する。

……………諦めていないらしく、まだ穴の前でこつちが出てくるのを待っている。

「ふうー。ブルルさん、大丈夫ですか？」

「レナさんよりは大丈夫だよ、多分」

ポケモンの治癒能力をなめないで欲しいね。なんちやつて。

立ち上がる。少し痛みはあるけど、まあ、歩けない程では無いね。走るのは……

ちよつときついかな。

「ほらね」

「良かった……」

レナさんが胸を撫で下ろす。

「あ、この穴奥に続いてるみたいだけど……もう少し休む？」

「い、いえ、大丈夫です！」

「じゃあ、行こう」

うーん、メイコさんみたいにビシツとは言えないんだよね。

ともかく奥へ向かう。

俺は身長は低いからまだ立って歩けるけど、レナさんは少しかがまないと歩けないみたいだね。

「……………」

「……………」

無言で歩くこと少し。三叉路に出た。

メイコさんが居ないとお喋りが無くなって少し寂しいね。速く合流したいよ。

「さて、ど・っ・ち・に・し・よ・う・か・な」

左の通路から指差していく。

「ア・ル・セ・ウ・ス・の・い・う・と・お・り」

右かあ。メイコさんが居たら『じゃあ左にしましょう』って言うんだろうなあ。

「……………あの」

「ん、なに？ レナさん」

「その……ええと……」

「？」

なんだろう、顔を真っ赤にして。と、こつちを睨んでくる。あんまり怖くはない。

……ただ、ふざけた答えは許されない雰囲気だ。

レナさんのこの顔は何処かで見えた。確か……そうだ。鏡で見た、飛び降りる前の俺の顔にそっくりなんだ。

そう、何かを決心した顔だ。

「その、こんなこと、ここで言うことじゃないかもしれないですけど、ようやく二人きりになれて、今しかないって、その、迷惑だったら断つてくれてもいいんですけど」

「うん」

待つ。何が言いたいのか、薄ぼんやりも見えてこないけど、待つ。

「……ブルさんの事が好きです」

「……え？」

「ブルさんの事が好きです。……付き合って、くれますか？」

………はい？ え、告白？ 告白？ え、はい？ 予想外だけに余

計混乱する。

「駄目、ですか？」

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「——それでなんとか、返答は待ってくれ、とだけ言ったと」

「……はい」

「うん、頭を冷やす時間を設けたのはナイスよ、ブール」

「……なんで、俺のことを？」

「言葉使い崩れてるわよ。……てか、気付いて無かったの？」

「……うん」

「あのねえ……いや、いいわ。そうね、元々はファンとしての『好き』だったんでしょけど、ひよんな事から一緒に行動することになったでしょ？」

「うん」

「一緒に行動する内に本気の『好き』になっちゃったんでしょね。そうでなくても、あの子ファン一号でしょ？」

「……そういえば」

「さて、これでホワイは分かったわね？ 5 w l h …… w h e n ・ w h e r e ・ w h o .
what・why・howは揃ったわ。あんたのanswerは？ これについてはあ
たしのアドバイスは無しよ」

俺は……………どうしよう。

「さあ、そろそろ待ちくたびれる頃合いよ。行きなさい。どんな結果になっても全力で
フォローしたげるわ」

レナさんの事は……………嫌いじゃない。

「っ！ ブール、さん…………」

……………ただ。

「ゴメン」

「っ……………」

「レナさんの事は嫌いじゃないよ。むしろ好きの方に入る」

「……………」

「だけど、僕は…………俺はポケモンだし、レナさんは人間だし」

「それは——」

「でもそれは、本当はそんなに関係ないね。だって多分、俺は、レナさんとずっと一緒に
は居られないから。そんな気がするから」

「……………」

「だから、付き合えない。ゴメン」

「……………」そう、です、か。そうですね。ブルさんは、このまま戦っていつて、チャンピオンになつて、そじで、がえんるでもんね」

「……………」

途中からは涙声で、でも、レナさんは、気丈にも、泣いてるけど、笑う。

そして、両手で涙を拭い、続ける。

「……………」分かりました。……………なら。ブルさんがチャンピオンになつて、帰るなら。新しい旅に出るなら。私も、もつと強くなつて、隣に立てるようになります。……………」

ブルさんに、置いていかれないぐらい、強く強く、なります」

「……………」うん」

「……………」待つててください、絶対に辿り着きます」

「うん」

「辿り着いて、戦つて。そして、その時に、また……………。……………その時まで……………頑張ります」

「うん。そうなつたら……………うん。でも、その時に勝つのは僕だけだね」

「……………私です。絶対に、勝ちます。勝つて、改めて、告白します。……………だから、負けない

てください」

特訓　　くバトルバトルバトル！　もつとこい！く

「ハッサン、『とっしん』！」

「バウアツ！」

「クシュツ!?!」

よしつ。これで……十五体目！

「私も終わりました！」

レナさんもモグリュー倒したみたいだね。

「ほら、どんどん行くわよ。あまいみつ掃射！」

メイコさんがどこかからあまいみつを取り出し、洞窟に撒き散らす。豪勢にもビンごと放り投げて割っていつている。

「ん、あれは……フリージオ！　ハッサン、『とっしん』！」

「サナ、『シャドーボール』！」

ハッサンがフリージオに『とっしん』をかます。

同時、サナが投げた『シャドーボール』がハッサンを巻き込みつつフリージオに当た
る。

「ハッサン! ちょ、レナさん!」

『シャドーボール』はゴーストタイプだから大丈夫です! ほら」

いや、まあ確かにハッサンは無傷だけどさ。

「これ、あくまでハッサンの進化の為の特訓なんだけど」

「強くなるって言いましたもん」

「むう……………」

そうだけど、そうだけどさ。

「お喋りはおしまいよ! あまいみつ!」

メイコさんがまたもあまいみつを撒き散らす。

多分、メイコさんなりに気まずくならないようにしてくれてるんだろうなあ。きついけど。

現れたのはドテツコツ。……が、五体。

「ハッサン、『とつておき』!」

「サナ、『サイコネシス』!」

ハッサンとサナが一体ずつ倒す。残りの三体がそれぞれ『きあいパンチ』『ビルドアップ』『いわおとし』を放ってくる。

「ハッサン、避けて! 真ん中に『とつしん』!」

「サナ、耐えて『サイコキネシス』！」

『きあいパンチ』は見事に空振り、『いわおとし』は外れる。

『気合いパンチ』を外したドテツコツは隙だらけ。『ふるいたてる』を六回したハッサンにぶつかられ、吹き飛ばす。

『ビルドアップ』したドテツコツは『サイコキネシス』で壁に叩き付けられて動かなくなる。

「ド、ドツウ……!?!」

「サアアア〜」

「バウツ！」

「ド、ドドツ！」

残ったドテツコツはきびすを返して逃げようとする。

が、

「悪いわね、経験値になってもらうわよ」

「ドツ!?!」

メイコさんに行く手を塞がれる。

「ハッサン！」

「サナ！」

今回は動かなくても攻撃できるサナが仕留めた。

「さて、んん……これだっけ? 確か赤いやつだった気がするんだけど……ああ、これこれ」

メイコさんが放ってきたのはヒメリのみ。

ハツサンはガツガツ食べる。

「サナはこっちで良いでしょ? レナ、ほい」

「わっ、とっ、とっ!」

レナさんには……ピーピーマックスか。そりや、そっちの方が手軽だよな。

「あんたらも少し休みなさい。ほら、メイコさんのおいしいみずよ」

「ありがとうございます、メイコさん」

むう……同じことを同時に言うとなんか恥ずかしく感じる。ましてや直前にあんなことあったし……

「……いや言うまい。既に付き合い始めたばっかのカップルのように見えるだなんて言えるわけないじゃない」

「ばつちり聞こえてるんですけど」

「あらやだ、じゃあブルーはこれつけなさい」

「ええ!」

投げ付けられたのはきょうせいギプス。

メイコさんの命令でレナさんが手早く装着させてくれ……まてまてまて。

「いやいや、冗談ですよね？」

「あたしが一度でも冗談を言ったことがあるかしら？」

「一回どころか百回越えそうな勢いだよ！」

「あーらあーらあーら、そんなに言われたら仕方無いわねえ。パワー系一式をプレゼントするわ」

きょうせいギプスの上に更にパワーウエイトパワーリストパワーベルトオパワーレズウパワーバンドオパワーアングルウウ、うあああああ!?

「お、おお、重い、重いよ見辛いよ頭が絞められてお腹も絞められて動きがあ！」

「一気に成長ね。やったじゃない」

「バトル出来ないですよこれじゃ！」

と、クスクスと笑う声が。

「ちよつ、レナさん、これ、笑うところじゃない」

「す、すみません……クス」

「ほらほら、レナ。今こそシャッターチャンスつてやつじゃない？」

「確かに」

「ちよつとおー!?!」

ハッサン、プリーズヘルプミー!

「クウウウン……」

ハッサンじゃ無理か、無理なのか。

パシヤ

「良いわね、ナイスショット!」

「そうですか? そ、それじゃあもうちよつと……」パシヤパシヤ

……ああ、泣きたい。ドブドブ。

ズン……

——ん、何だ?

「メイコさん、この音は?」

「んー?」

ズン……

「あ、これは大物が釣れたわね。ブル」

「サナ、準備」

「サアアア」

「うつそでしよ……ハッサン『ふるいたてる』、取り合えず三回」

「バッフ！ バウツ！」

ズン……

「来たわ。凄くでかいわね」

「ベアアアアアアアアアアアア！」

な、こ、こいつ！

「ツンベアー！」

あの異常に成長してるツンベアーだ！ くつ、いつの間にかこいつが立って歩けるぐらい広い道にまで出てたのか！

「ハッサン、行ける？」

「バウツ！」

「サナ、やるよ！」

「サアアア〜」

「ふむ、偶然とはいえブルが逃げられないんだから全力で立ち向かうしかないわけね
——ま、んなのまったく必要無かったけど」

当然。あの時はメイコさんもハッサンも居なかったうえに俺は動けなくてレナさんが焦ってたからバトルしなかったただだけだ。

「ハッサン、『とっしん』だ！」

「『シャドーボール』で援護!」

「ベアブウウ!」

ツンベアーが天上に向かって氷の息を吐く。高い位置にある天上が凍り、つららが

『つららおとし』か。

「上から降ってくるつららに気を付けて!」

「パウツ!」

「サアアアア」

ハッサンがツンベアーにぶつかる。そしてそこに『シャドーボール』が。

だが、びくともしてない。右手が振り上げられる。

「つ、ハッサン下がって!」

「サナ、もう一回!」

ハッサンがバックステップで退避。ツンベアーの『きりさく』は宙を切る。その隙を

『シャドーボール』が襲うが、偶然上から落ちてきたつららがツンベアーの身代わりにな

る。

「サナ、『ねんりき』でつららをぶつけて!」

「ハッサンは『ふるいたてる』!」

「サアアアア、サアツ!」

「アオーンッ！」

「ツツベアアア！」

駄目だ、『アクアジェット』でつららを弾きつつ突撃してくる。

「ハッサン前に出て『まもる』！」

「サナ、『でんげきは』用意！」

「バツウウツ！」

「サアアアア……」

ハッサンが緑のシールドでツンベアアを受け止める。その間にサナが電撃を溜める。

「ハッサン、『とっしん』で通り抜けて！」

「サナ！」

よし、ハッサンがツンベアアの股下を潜り抜けた。

ツンベアアが後ろを向こうとした瞬間にサナの『でんげきは』が放たれる。

「ベアア!?!」

「ハッサン！『とつておき』だ！」

「サナ、『サイコキネシス』準備！」

ハッサンがツンベアアの上、天上すれすれに現れる。

そしてツンベアアの頭を地面にまで叩き付ける。

「よし! ハッサン下がって!」

「バウツ」

ハッサンの『とっておき』が決まったんだ、倒したと思いたい。……いや、ここは気を抜く時じゃない。

「ハッサン今のうちに『ふるいたてる』二回」

「バフウツ、バオオオオオオオツ!」

ハッサンが限界まで赤くなる。

「べ…ア……!」

「やっぱりまだ立ち上がるのか……ハッサン、」「サナー!」

俺がハッサンに『とっしん』と言うより先にサナが『サイコキネシス』でツンベアーの動きを縛る。

「モンスターボール!」

「え」

レナさんがツンベアーに向かってモンスターボールを投げ付ける。

モンスターボールはツンベアーの頭に当たり、ツンベアーの中に入る。

「あらあら?」

ウインウイン。ウインウイン。ウインウイン。ポーン。

「……」

「……………レナさん？」

「——はっ！ あ、あれ？ 捕まえ、られ、たんですか？」

「ぼいわね。おめでと」

……………なんか、なんだろう、腑に落ちない。

ハッサン。ねえハッサン。なんか体が重くて動けないんだ。なんでかな。拍子抜けしたからかな。

「レナさんおめでどう。本当は拍手したいんだけど、なんか体が重くて」

「えっと……………ありがとうございます。体が重いのはそのパワー系一式のせいだと思います、よっ。」

「……………そういえば」

誰か、これ外してよ。自分じゃ脱げないんだ、これ。

「レナ、駄目よ？ これはブルの特訓なんだから」

「あ、はい」

「……………まじ？ 俺、なんかさ、疲れてさ、寝たいん、だけど」

「そーいや今何時よ」

「えっと……………うわ、夜の十一時です」

「あら。んじや寝ていいわよ。いやー、洞窟の中だと時間を忘れちゃうわー」

「……………立ったまま?」

「無論、問答無用」

……………そうですか。寝れるのかな、この状態。……………はす……………あも

ら……………ZZZZ……………

猛進くもはや勝てる者はなくく

ジ———ッ

「Z z z……」

「ちよん」

軽く触れると、色々着けているブールの体がぐらあつと後ろに傾き——

「ドブツ!？」

「おはよう。暗いけど朝よ」

と、いうわけで珍しく優しくブールを起こしたわ。

「えつと、『優しく』？」

「そこなツイントールなにか文句でも？」

「い、いえ」

「ドブ……イテテ、おはようございますブールです。んーっそっか、ここネジ山の中か。洞窟は嫌だね。なんていうか、空気が重い。おかげでどうにも体が重いよ」

あ、ブール寝惚けてるわ。こいつ寝惚けると心の声駄々漏れなのよねー。

「あのお、重いのは空気じゃなくて——」

「へい、そこなツイインテール。何か言ったかしら？」

「……………いえ、その、ナンデモナイデス」

「よろしい。ほらブール、さっさと起きる！」バシイ！

「あいたつ！」

結局はたいて無理矢理起こすしかないのね。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

ブールだよ。今日もまたネジ山でハッサンの特訓。

……………なんか、俺を見るハッサンとレナさんの眼が生暖かいというかなんと言うか、ちよつと気になる。

「ハッサン、『とっしん』！」

「バウツ！」

「フリツ!?!」

なんとか無視して通算三体目のフリージオ（昨日からの合計だよ）を倒した。

「んー、フリージオはやっぱりそうそう出てこないんですねー」

「そりやそうでしょ」

まったく、ゲームでもなかなか出てこなくて捕まえるのが面倒だったんだからね。
「それならなんで捕まえ無いんですかブルーさん」

レナさんが聞いてくる。まだ少し恥ずかしいから敢えて顔を見ずに答える。

「……んつとねえ。ほら、僕ってドーブルじゃん？ だけど『へんしん』してポケモント
レーナーとしてポケモンたちを捕まえて、バトルさせるわけだ」

「そうですね」

「それってつまり、種族の違うポケモンに命令してるわけなんだよ。そして少なくとも、
ドーブルっていう種族は強い方じゃ無い」

「……そうなんですか？」

「そうなの。僕とお父さんは例外だよ。ね、メイコさん」

「そうね。ついでに言うとおたしも例外よ。ここまで流暢に喋れるうえに賢いペラッ
は世界どこを探してもあたしだけよ」

「あ、あはは……そうですね」

だって中身人間だしね。例外になるのは当然……だよな？

「しっかし、あまいみつ投げてもポケモンどもが寄ってこなくなっちゃったわね」

「そうだね、メイコさん」

「ん、あれ？ はぐらかされた……？」

「どうしたのレナさん？」

「むむむ……」

レナさんは腕を組んで唸ってる。どうしたんだろ。

「あー、ついに視界内に居るポケモンがブルルとハッサンしか居なくなつたわね。こりやさつさとネジ山抜けた方が良いかしら」

「そつか。ハッサン、進化出来なかつたね」

「バウ……」

「ハッサンのせいじゃ無いけどね」

「んじや、ブルル。二番に出口の場所聞いてちょうだい」

「はい。………あ」

スマホを取りだした、んだけど。

「どしたん？」

「なんか、通信がなんたらくくつて出てます」

「なんと。いやまあ、そりや、山の中だし、分かるけどねえ」

「？」

ええとつまり？

「山の中だから二番の通信をスマホで確認出来ないのよ」

「うそっ!？」

それはきつくない?　　つていうか、それって

「迷子?」

「——ブル、ここでさよならね。らしくないけど、今までありがとう」

「メイコさん……そんな……ここで、こんな形で終わるだなんて……」

「え、あれ?　ちよつとぼおつとしてただけなのに何ですかこの雰囲気」

話を聞いてなかったレナさんの肩に手をのせる。……背、高いね。

「レナさん……僕たちの冒険に付いてきたせいでこんなところで……うう」

「え」

「レナ、悪かったわね」

「は、はい?」

メイコさんがレナさんの肩にとまる。

「……」

「メイコさんが無言なのが一番不安になるんですけど——」

「……」

「え、何ですかその目は……な、なんか事情を教えてもらえずに捨てられるポケモンを見るような悲しい目は……」

「……レナ」

「はい」

「……」

メイコさんはレナさんをじつと見たあと、俺の方に飛んでくる。

「駄目よ、ブル。あたしには、あたしには耐えられないわ！」

「……分かったよ、僕が説明する」

レナさんの方を向く。ああ、体が重い。やりたくない事をやるときは、やっぱり物理的に重くなるんだね。体って。

「レナさん」

「ええと……？」

「僕たちは、遭難しました。助かる見込みは無いです」

「——え」

「こんな暗いところで僕たちはその一生を終えるんだ……うう……」

「で、でも！」

レナさんがあるものを指差す。

「あそこに縄ばしごがありますけど……？」

「……」

メイコさんと顔を見合わせる。

「ちっ、これだからエリートは」

「は、はいい？」

「ノリが悪いよレナさん」

「……」

つまんないの。

そりゃ、だってメイコさんはあなぬけのなわ出せるし俺は『あなをほる』使えば良いし、脱出の方法はいくらでもあるしね。

「ふん、ブール。中々の演技だったわ。褒めてつかわそう」

「ははー、ありがたきしあわせー」

地面に膝をつき、両腕を伸ばしてひれ伏す。

「でも、実はちよつと焦ったでしょ？」

「ドブツ!? ま、まっさかあ」

「……………ああ、はい。なんか察しました。要するに遊んでたんですね」

「オフコース」

レナさんは大きく溜め息を吐く。

メイコさんはその周りをバサバサと飛び回る。

「ほら、縄ばしごさっさと登るわよ」

「じゃあ、僕が一番最初で良いですか？」

「……………ブルル、いくらなんでもそろそろそれ脱いだら？」

「え？」

それ？ なんだろう。

—— あ、きょうせいギブスパワー（以下略

「……………まさか、忘れてた？」

「だって寝てる間に外してくれてると」

「ブルルさん……………ほ、ほら！ 修行ですよ修行！ 外すの手伝います！」

「あ、うん——」

……………。。強くなったってことでいいや。うん。

マスコミのいづつもの

「出れた~~~~っ！」

「うっさいわ」バシッ

「あいたっ」

だつてネジ山出れたんだよ？ 久し振りの空だよ？ そりゃあテンション上がつても仕方ないじゃん。

「……レナ、居るわよね？」

「え、居ますよ……？」

「ブル、レナとはぐれたかも。ネジ山の中に行つて探してきなさい」

「居ますつて！」

「アイアイサー、メイコさん！」

「ブルさん!？」

ふざけながら町へ……セツカシティへと足を踏み入れる。

~~~~~

「はあつ、はあつ、はあつ！」

「何がどーなつたらあたしらが死んだことになんのよ！ あの程度で死ぬとでも!？」

「マスコミ……怖いですね」

「ここはセツカシティのポケモンセンター。の、宿泊施設。通称『お部屋』。」

「いやしかし、今回はマスコミも取り囲んできたしいつもと一味違ったね。」

「マスコミに煽動された素朴な民衆まで居たから力づくで吹っ飛ばす訳にもいかなかったわ。……たく」

「レナさんのツービーが居なかつたらもみくちやにされてゲームオーバーだったよ。ありがと」

「え、いや、えへへ……」

「あ、ツービーっていうのはレナさんが捕まえたツンベアーのことね。あの異様にでかい奴。」

レナさんがとつさにツービーを出して威嚇してくれたんだ。

「……ここまで外の喧騒が聴こえてくるね」

「やってらんないわー。ブルー、ここはあんたが生け贄になれば一件落着よ。その間にハッサンやらサナやらを回復させるから」

「嫌なんだけど……」

「……………うわ、私の顔がどアップっだなんて恥ずかしい……………」

「ん？」

レナさんの方を見るとスマホを取り出して　何か見えた。

「レナさん、何してるの？」

「あ、これスマホで見れるニュース速報です。ええと、『ブル生還！　しかし横に謎の女性が……………』」

「うわ、何それくだらないわね。てかもっと前からレナは一緒に居たじゃない。こつちからしてみれば今更？　って感じなんだけど」

「ふーん」

俺も自分のスマホを出して確認。初めだけ読んでみる。ほうほう。

『ポケモントレーナーポケモン』であるブル氏がネジ山から生還した。

ブル氏は一昨日にネジ山に入り、謎の岩崩に巻き込まれ行方不明となっていた。『……………これなんて読むの？』

「ん？　あー、それは『せいかん』で『おととい』は読めるでしょ？　んで『なぞ』の『いわくずれ』に『まきこまれ』『ゆくえふめい』となっていた」

「ゆくえふめい？」

「行方つてのは居場所。居場所が分からないつつつてんのよ」

「へー。……でもここに居るよ?」

「だから助かって良かった——って感じよ」

「成る程」

そんな話をメイコさんとしてたら、

「はいい!?!」

レナさんが急に大声を出した。

「ド、ドブ!? レナさんどうしたの!?!」

「あ、な、なあ!?! あ、いや、なんでもないでしゅー!」

あ、噛んだ。顔が真っ赤になってる。

その際にメイコさんがレナさんのスマホの画面を確認する。

「何々? ——これはえげつないわねえ。無いこと無いこと書かれてる。ま、ブルーじゃ読んでも理解できないでしょうけど?」

何だろう。凄く気になるなあ。まあ、見ても意味無いなら良いけど。レナさんも嫌がってるし。

「ブルー、ポケッター開きなさい。それでレナは正式……じゃなくて公式で、ええと……旅の仲間だと言いなさい」



「良いですけど」

ポケッターを開く。あ、そういうやネジ山から出ましたって報告してないや。ポチポチと。

んで、レナさんは旅の仲間ですと。

「うわ、スマホの振動が止まんない」

「……瞬く間にリツイート300越えたわね」

「さ、流石ですプールさん」

リツイート先をちよつと見てみる。……………。

「————メイコさん」

「あら何かしら」

「俺の、仲間の、レナさんを、馬鹿にされてるんだけど。メイコさん、これは許されますか？」

「はい？ わ、私は別に……」

「ごめん、レナさんには聞いてない」

「つ……………」

冷たく聞こえたかも。けど、本当にこればかりは許してほしい。

「……………」

「メイコさん」

「言うまでも無いじゃない?」

「ですよね」

「取り合えず断罪決定、んで二度とこうというのが無くなるように公式発表。……幸いマスコミは外にごまんと居るわ」

「それじゃあさつさと行動に移ろう。レナさんはゆっくりしてていいからね」  
「え、あ、はい」

レナさんからモンスターボールを受け取る。

まずはジョーイさんにポケモンを預けて……次にマスコミに突撃。

しっかり問答してあげるよ、後悔しないでよねマスコミさん?

## 波乱万丈く世の中山ばかりだけでもく

「ふう〜」

指で目元をほぐす。

「うう目が痛い」

ふと外を見る。うわ、真っ暗。

「……ん、ブル。ポケッターの方は大丈夫なの？」

「おっけーです」

ポケッター確認。うん、もはやレナさんをいじるようなポケットは流れてない。

「そう。んじや、明日ついにジム戦ね」

「そうですね、メイコさん」

レナさんは既に寝てる。さつきまで起きてたけどメイコさんに無理矢理寝かされた。

「それにしても……」

「ん？ なによ」

「見慣れない言葉があったんですけど。腰振ったとかビツ「ブーーツ!」うわ、きたな」

てか久々に台詞かぶせられたね。

「どういう意味なんですか？」

「さ、さ、さあね。流石のあたしでも知らないし教えられないわー」

「ふーん」

なんとなく貶してるのは分かるんだけど……んんん？

ビッチビッチビッチビッチ……魚？

「成る程」

「はん？」

「ビッチはきつとコイキングみたいに能無しって意味だね。今更ながらムカムカしてきた」

「——当たらないけどムカムカしていいって意味では当たってるわね」

「そうですか。って知ってるんじゃないですか」

「えーそーよー気付かなくて良いことだけ気付くんだから。たく、良いから寝なさい」

「はーい」

それじゃあおやすみ！

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

おはよう、皆！ 少し寝坊したブルーだよ。今はセツカジムの前に居るんだけど……  
「ジムリーダーが居ない？」

和風な着物を着た男の人が立ち塞がってる。

「はい。ハチクさんは今朝、映画の撮影のためにポケウッドに行きました」

「ふうん。なら仕方無いかな」

「そうね。仕事ならどうしようも無いわね」

「なら、ポケセンで調整しましょうブルーさん」

そういつてポケセンに帰ろうとして

「お待ちください」

「はい？」

「ブルーさん宛に手紙をたまわっております。こちらをどうぞ」

「うん」

渡されたのは丁寧に封をされた……橋の描かれた手紙。

~~~~~

ピロント

『ブリッジメールCです。描かれているのはシリンドーブリッジ。八番道路と九番道路

をまたぐ橋ですわね』

ふうん。イツシユ地方には橋が沢山あるから覚えきれないですよね。

「らしいですよ」

「へえ。んで、ブルル中身は？」

「……………」

「ブルル？」

ブルルさんの様子がおかしいです。顔が真っ青に……あ、青!?

「ブルルさん、肌、肌の色が!？」

「ブルル、何が書いてあったの？」

「……ハチクさん、バトル拒否、だって」

……え？

「ちよ、わけわからんわ貸しなさい!」

メイコさんがブルルさんから手紙をひったくる。

バツと床に広げてくれたので私も横から覗き見る。

ふむふむ。

「……………ねえ、ブルル」

「なあんでえすかあ」

「うぎ。あんたが言ったのはこの文のことよね」

メイコさんが一文を指し示す。

「うん、『バトルをするのはよそうと思う』って」

「成る程ねえ。たく、面倒な事になるわね」

手紙にはこう書かれていた。

『(前略) ポケッターでの荒れよう、まさに愚者のごとし。テレビに映る者として余りにも目に当てられぬ。故に某はバトルをするのはよそうと思う。他のジムにてバッチを受け取るべし』

「そんな、ブルルさんは私の為に徹夜してまで頑張ってくれたのに……」

「しゃーないわね。ここは負け惜しみでも吐き捨てて前向いて行くしか無いわね」

「それ、前向きですか?」

「さて。つてことは分かる中で残るジムはソウリユウシテイ、セイガイハシテイ、タチワキシテイの三つね」

あれ? ソウリユウシテイのシャガさんは分かるけど、セイガイハにジムリーダーなんて居たかな。それにタチワキシテイ? そもそも聞いたことが無い地名だ。

「それじゃ、まずソウリユウシテイ目指すわ。そこでシャガなりアイリスなりを倒してセイガイハシテイ直行……いや待つて。確かタチワキシテイつて」

「海の向こうだったはずだよ」

ピロンッ

『タチワキは立ち上がる水蒸気。ちやうどポケウツドの南に位置する町ですね。行くならばヒウンシティから船が出ています』

あっちの方だったか。これはエリートトレーナーの名を返上しなきゃいけないかなあ……。

「どうしようか。北に先に行くか、それともヒウンシティまで戻るのが先か……」

「ふうむ……」

「な、ならー!」

つい、言葉をかけてた。だって話に入れてなかったし、それに――

「南から行きましょう!」

「ほほう? その心は?」

「チャンピオンリーグがあるのはソウリュウシティの近くです。順番的にタチワキシティから行けばチャンピオンリーグが始まるときに間に合いやすいと思います」

「……そう、ね。そうしましょう。ブルも良いわね?」

「もちろん!」

ブルさんが笑顔で言う。

そう、この顔をもっと長く見ていたいから、だからずるいかも知れないけど、少し長いルートを提案した。

「んじや、まだ昼前だし外で色々やるわよ。ボールはパワー系一式ときようせいギプス着けてランニング、その間にあたしとレナでポケモンたちのトレーニング」

「ええ!!」

「ボールに限り異論は認めないわ。んで、明日はヒウンシティに向けて出発。ところで、空飛ぶ？ それとも歩き？」

「歩きじゃない？」

「飛んだ方が速いですよ」

「じゃあ飛ぶわ。ボールとあたしは自力で。レナは……………乗る？」

乗る？ ボールさんか、メイコさんに？

そ、そんな恐れ多い。

「サナの『サイコキネシス』で行きます。行ける？ サナ」
腰のボールがカタリと揺れる。うん、大丈夫らしい。

「そんなじゃあ——」

メイコさんがしめようとする、部屋の扉がドンドンと叩かれる。

「ボール君！ メイコちゃん！ 助けてほしいんだ！ 開けてくれ！」

聞いたことないけど、若い男の声だ。しかも凄く切羽詰まった声。

「な、まさか……」

「レナ！ 速く開けて！」

「は、はい！」

私が一番近くに居たから扉を開ける。

鍵を開けた瞬間勢いよく扉が開かれ、全身に強く打ち付けられて吹っ飛ぶ。い、痛い

……！

「レナさん!？」

「あ、す、すまない。急いでたから……怪我はないかい？」

「大丈夫、です」

入ってきたのは、背が高く帽子をかぶった男の人。帽子から緑色の髪の毛が覗いている。

「お久し振りねお坊っちゃん。んで、何を助けて欲しいの？ レシラム？」

「……………その、メイコちゃん。横から核心を突かれると結構動揺するんだけど」

「そう？ んじゃ、予定変更よブルー」

「当然！ Nさん、僕は全力で手伝うよ！」

「ありがとう、本当にありがとう！」

えつと……話に着いていけないのですが……。

「レナ、Nについては空飛んでる間に教えるわ。今すぐ出発の準備！」

「はい！」

メイコさんが有無を言わせない。

でも、人助けなら結局行つたんだろうな。なにより、ブルルさんがやる気なんだから。

伝説の ～倒せるのか?～

「どこへ行けば良いのよ?」

「ジャイアントホール。ブラック君が既に戦ってる!」

「嘘!? 速く行こう!」

『へんしん』を溶く。すぐに『そらをとぶ』で背中に翼を描き出す。

「サナ、お願い」

「サア〜」

「ギギギアル!」

「ギツギギツ」

Nさんはギギギアルに乗って、レナさんはサナのサイコネシスで浮遊する。

「お坊っちゃんが先行しなさい! あたしらは後から着いてくわ!」

「分かった! トモダチ、お願いだよ!」

「ギギギツ」

意外とギギギアルって速く飛ぶんだね。知らなかった。

「……で、あの人って誰なんですか?」

「あれはお坊っちゃんことN。何でも、ポケモンの心が分かるとかほざいてる優男よ」
「ちよ、聴こえてるからねメイコちゃん！」

前から声がとんでくるが、

「聴かせてんのよばーか！」

メイコさんには露ほども効かない。

なんかNさん、疲れてるね。

「Nさんは前、マスコミに追われた僕たちを助けてくれてね。そこから少しの間一緒に旅をしたことがあるんだ」

「成る程」

結構なスピードで飛んでるからビュービューと風が吹き付けてくる。うう、なんか徐々に寒くなってきた。

「レナさん、大丈夫？ 結構寒くなってきたけど」

「大丈夫です、これでもエリートトレーナーなんですよ？」

「なら良いんだけど……寒かったら言っただけ。メイコさんに」

「あたしにかいっ！」

おお、流石はメイコさん。突っ込みの冴えが違うね、冴えが

と、

「ん? 何か聴こえなかった?」

「僕にも少し聴こえました。なんか、ヤバそうな奴の雄叫びが」

「——みんな! 危ない!」

うわあっ?! 前の方から巨大な炎の球が飛んできた!

間一髪でよける。つ、翼の先っぽのインクが焦げた。

「くっ、ブラック君……無事でいてくれ……!」

「N! 今のは完璧にこつちを狙ってた!?! それとも、流れ弾!」

「分からない! ただ、少なくとも次の攻撃が飛んでこないから流れ弾の可能性が高い!」

「オーケー! ならこのまま突っ込むわよ! 良いわねブルー、レナ!」

「了解!」

雲を避け、飛行ポケモンたちを追っ払い、飛び続ける。

……前から飛んできた帽子をキャッチする。

「Nさん帽子落としましたよ!」

「ごめんブルー君! ありがとう!」

「着くまで持つてますね!」

「そうしてもらえると助かる!」

風が強いから自然、声が大きくなる。

「そういやN！ あんたゼクロムは出せないの!？」

「黒の理想は僕には合わない！ 僕が呼び出せたのはレシラムだけだ！」

「あつそう！ 使えないわね！」

「聞いたいてその反応は酷くないかい!？」

「そんなポンコツだから帽子も落とすのよ！」

「ぐっ……………」

メイコさん、ほどほどにしてあげて。

「ブールさん、前！」

「ん？ つてうわ！」

前方に火柱が立っている。この距離で蠟燭ほどの太さつて…………でかすぎる!？」

「ギギギアル、もっとスピードを出せるかい？ 僕の事は気にしないでいい！」

「ギギギッ！」

ギギギアルが更に加速する。Nさんはもはやしがみついている。

あーもう、速すぎる。だったらインクの色は白！

「地味に使える『でんこうせつか』！」

「サナ、もっと速く！」

「サア〜」

「ほらほら遅いわよあんたら！ カップルか！ はせてしまえ！」

俺とレナさん相手にその方向でからかわないで欲しいなあ！

「着いた！ ハンサムさん、連れてきました！」

「おお！ ……ペラツプの色違いに、ドーブルに、サーナイトを連れてたお嬢さん！」

「ドブ!?!」

なんでハンサムさんがここに!?!

「つたく……プルーール！ 遅いんだよ来るのが！」

慌てて『へんしん』。

「それは僕じゃなくてNさんに言つてよブラックさん！」

「な、ドーブルが人の姿に！」

と、メイコさんがベレー帽の上に降り立つ。

むう、ベレー帽がずれちゃうじゃん。

「へいそこな茶色コートの子ケメン。あたしらのお相手はあそこにいる……」

と、それを指し示す。

「ホワイトなキュレムで良いのかしら？ それともそれと奮闘してる色違いのタブンネ？」

「あのタブンネは俺の相棒だ騒音！ 勝手に敵にしてんじゃねえ！」

あの紫色のタブンネ、やべえ。ホワイトキュレムと力で互角にバトルしてる。

あ、『りゆうのはどう』！ タブンネに向かって放たれて……!?!

「て、手で、吹き飛ばした!?!」

「おい、流石にあいつでもそろそろ限界だ！ ブール、メイコ、それとおまけのエリート

トレーナー女！」

「レナです！」

「さっさとポケモン全部出せ！ そんで一斉攻撃だ！ そんなくらいしないとあれは倒せ

ない！」

了解、と言おうとして。

「ふははははは！ 無理ですよあなた方にこのホワイトキュレムを倒すのは！」

「とうさん！」

ゲーチスだ。黒幕が高笑いしてる。様になってはいるけどさ。

その手にはいでんしのくさび。

「……はあん、そこは一応原作通りなのね」

「すまないが自己紹介は後だ。あいつを倒してくれ、お願いする……！」

「ふざけてられるような状況じゃ無いわね。ブール、全員出なさい」

「はい！ ハッサンペティギイカレイカ！」

「レイシー、ツービー、出てきて！」

「アオーンツ！」

「ペアギユアアアアア」

「ギツ……………ガアアアアアアア！」

「ナツトウ……………」

「サアツ！」

「ベアアアアア！」

「ハッサンは遠距離技が無いから『ふるいたてる』を限界までやりなさい。んであたしと

ブルルはトレーナー側。レナ、ツービーは」

「昨日『ふぶき』を覚えさせました」

「……………効果はいまひとつだけど、この際気にしちや駄目ね。よし、総員準備！」

準備完了。後は撃つだけ！

「いいか？」

「はい！」

ブラックさん、お願いします！

「タブンネ、下がれ！」

「よしつ、ハツサン『ふるいたてる』フル、ペティは『どくどく』からの『ベノムショック』、ギイカは『うちおとす』、レイカは『ラスタターカノン』！」

「サナは『シャドーボール』レイシーは『サイコカッター』、そしてツービーは『ふぶき』！」

「ペツ、ギユアアアアア！」

「ギツガア！」

「ナア〜ツトウ！」

「サア〜ツ！」

「レッラアツ！」

「ベアアアアア！」

六体の攻撃がホワイトキュレムに着弾。

よしつ、流星に伝説のポケモンっていつてもこれだけ喰らえば——うっそでしよ。

「ふはははは！ その程度の攻撃でホワイトキュレムが倒れると思っていたのですか！？」

よろめきさえしてない。ただ、パチツと目をつぶっただけ。

「〜っ！ もう一回よ！ N、あんたもやりなさい！」

「分かった！ トモダチ！」

ギギギアルも含めて、もう一度！

「みんな、お願い！」

「ペツ、ギユアアアアア！」

「ギツガア！」

「ナアツトウ！」

「サアツ！」

「レッラアツ！」

「ベアアアアア！」

「ギギ……ギアツ」

全てがホワイトキュレムの顔面に当たった。

なのに、

「キュルキュルアアアア！」

「ちっ、ぜんっぜん効いてないわね」

「で、でも猛毒になってる筈！」

「おい！ くるぞ！」

『コールドフレア』

ホワイトキュレムの口から低温の炎が吐き出される。

「ハッサン『まもる』！」

ハッサンが飛び出て、緑色のシールドを展開。『コールドフレア』を受け止め……きれず吹き飛ばされ、俺が受け止める。

「うわっ、ハッサン！」

「グ、グルルル……」

良かった、傷は無さそうだ。

「……こりゃあ、きつついわね」

「ホワイトキュレムは伝説のポケモン二体分の力を持つのですよ？ 勝ち目はありませ

ん！ たったの一欠片もね！」

……いつだったか聞いた神様の言葉を思い出す。

『伊達や見栄で伝説を名乗れるわけじゃあない』

でも、確か、こうも言ってた。

『ただ、転生者は伝説や幻と互角以上に戦える……やもしれん。『選ばれた』転生者のお主ならなおさらじゃ』

「……僕が、俺が行く！」

「ブール？」

「ハッサンペティギイカレイカはメイコさんの指示に従って！ レナさん、これお願い！」

「え、わつとと」

モンスターボールを付けられるベルトを外し、レナさんに放り投げる。

『へんしん』を溶く。

「ドブラッ！」

大声を出して走り出す、駆け抜ける！

「馬鹿ねえ…若さっていうか…ハッサンはボールの盾になりなさい！」

「バウッ！」

「ペティは『かそく』溜めてなさい。『どくどく』が効いてない時点であなたの役目は無いも同然だからね」

「ペアギユア……」

「ギイカ、レイカは撃ちまくりなさい！ この際当たる当たらないは気にしないわ！」

「ギガアアアアアア！」

「ナトウッ！」

ホワイトキュレムが顔を上に向ける。その先、巨大な火の玉が生成される。

『クロスフレイム』か。

俺はドールブル。残念な事にドールブルの耐久は低い。当たれば一撃でやられる。
「だけど突っ切る！」

だって俺には

「サナ、『サイコキネシス』であれをずらして！」

「サア〜！」

仲間が居る！

『クロスフレイム』は軌道をずらされ、俺の真横にぶつかる。あつつ、熱い！

しかも衝撃が凄い、危うく転ぶところだった。

「バウバウツ！」

「ハッサン！」

ハッサンが追い付いてきた。ハッサン速いね。

「キュルキュルア！」

ホワイトキュレムが吠える。何だ？

ゴゴゴゴゴゴゴ……

空から何か轟音が聴こえてくる。走りながらちらと上を見る……隕石が。『りゅうせいぐん』か！

だけどホワイトキュレムまでの距離はもう数メートル。

「ババウツ！」

「お願いハッサン！」

「ギイカ、レイカ、『うちおとす』に『ラスターカノン』よ！」

後ろからメイコさんの声が聞こえた。

ハッサンが俺を狙ってきた『りゆうせいぐん』を『まもる』ではじく。

他にもいくつもの『りゆうせいぐん』が不自然な軌道を見せる。

俺は走るだけ。みんながはねのけてくれるんだ！

やっと足元に着いた！ インクの色は藍色お！

「『ドラゴンテール』だあ！」

飛び上がり、尻尾を両手で持ち、ホワイトキュレムに向けて、切り上げる！

「キュルアアアア!？」

「まだまだあー！」

塗れ！ 塗れ！ 塗れ塗れ塗れ塗れ塗れ塗れ塗れ！ 藍色に染めるんだ！

「さっさとお……」

左足を振り上げ、尻尾を後ろに。

「倒れろ！」

左足を降り下ろしその勢いで尻尾を叩き付ける。

「キュルキュルアアアア！」

よっし、少しは効いただろ！

「張り付いてりや攻撃出来ないでしょ?！」

ホワイトキュレムは確か炎、ドラゴンタイプだったはず。ならインクの色はそのまま
でいい！

『げきりん』で仕留めきれなかったら……いや待てよ？

「俺の特性はマイペース！ 『げきりん』だあ！」

怒れ！ 倒せ！ 消、え、ろ！

「ドブドブドブドブドブドブドブドブ！」

やったらめつたらに殴り、蹴り、尻尾を叩きつけ、頭突き、噛みつき、体当たり、そ
して殴る。

「ちっ……カッターなあ！」

ホワイトキュレムが手で叩こうとしてくるけど、そんなのが当たるわけ無いだろ！
むしろその手を踏んで上に、ホワイトキュレムの顔まで飛び上がる。

「(ハッ)なら……」

拳、まだいける。脚、大丈夫。尻尾、余裕しやくしやく。

「どうだ！」

『げきりん』

『げきりん』 『げきりん』

『げきりん』 『げきりん』 『げきりん』

相手のターン? 知ったことか!

立ち向かいしは　　く勝てそうに無いく

ジャイアントホール。冷たい雪が吹き付けてきている。

その中心で、ブルルが狂ったようにホワイトキュレムを攻撃し続ける。

「ギイカ、ホワイトキュレムの左手！」

「ギガアアア！」

ギイカの『うちおとす』がブルルを払おうとしたホワイトキュレムの左手に当たる。『うちおとす』の効果でホワイトキュレムの左手がだらんと下がる。

ブルルはホワイトキュレムの顔を集中して攻撃している。そのせいかホワイトキュレムが口から出す技が出せない。

んで、あれの使える技は今のところ『クロスフレイム』『コールドフレア』『りゅうのほう』『りゅうせいぐん』の四つ。ブルルみたいにもつと使えるのなら別だけど、これしか使えないはず。

「レイカ『10まんボルト』！」

「ナツ……トウウウウウウ！」

ブルルのおかげで『クロスフレイム』と『コールドフレア』は使えない。『りゅうせい

ぐん』をブルーに当てようとするると自分にも当たってしまうから使わない。

つまり。

「キュルキュ」

「ハッサン『とつておき』！」

『りゆうのはどう』さえどうにかしてしまえばただのサンドバッグよね！

「な、く……ホワイトキュレム！ 何をしていますのです！ そのような目障りな「うつさいわよあんたのが耳障りだわ口閉じて目え閉じてさっさと降参しなさい許さないけどね！」つくううう！」

指示一つ出させない。トレーナーが動けずポケモンも動けない。そう、これが『ハメ』という戦闘方法。

「あんたはチェックメイトにはまったのよ！」

「ぐぐぐぐ……」

……問題は。あれだけブルーが攻撃を加えているのにホワイトキュレムにダメージが見られないところ。

これじゃあ体力5000000000（五兆）相手に1ずつしかダメージが入らないよ
うなもの。正直、勝ち目が見えない。

ハエの体当たりで人が死ぬのかって話。

「サナ『サイコキネシス』！」

「サアツ！」

サナが飛び上がろうとしたホワイトキュレムの体を『サイコキネシス』で押さえる。

「おい、騒音」

「あによ黒帽子」

「このままじゃあ泥試合すぎる。なんか良い手は無いのか？」

「………んだつたら、ほい。げんきのかたまりを六個。それとかいふくのくすり。ピーマックスも大盤振る舞いよ」

「良いのか？ っていうかその量どっから出したんだよ!？」

「細かいのは気にしちゃ負けよ。………」

ブルルはまだ乱舞している。

ハツサンにはあらかじめ大量のヒメリのみを与えてある。『とつておき』のPPは気にしなくてもいい。最悪そこいらに放り投げてあるやつ食うでしょ。

ペティとツービーが手持ちぶさたつぽいわね。まあ仕方無い。

レナは………ん、流石はエリートトレーナー。ちよいちよい休憩してるわね。

「ブラック君、N君。それと……メイコ君？ わたしには良く分からないのだが………これは勝てそうなのか？」

国際警察のハンサムが声をかけてくる。

「あー。そのだな」

「この調子ならいつかは勝てます」

「いつかは、か。……やはりゼクロムが必要だ。だが……」

ハンサムがコートから黒い何かを取り出す。

「……ん？ ちよ、ハンサムなんであんたがそれ持つてんのよ！

「ブラックストーンはここにあれど認められし使い手がおらん！」

「ばつかなの!? ブラック！ さっさと呼び出さない！」

「………俺？」

「~~~~~っ！」

余りにも馬鹿みたいに聞き返してくるからちよつと声がつまっちゃったつ、わあ！

「あんたしか居ないでしょうが！」

「うおっうっせえ！」

「良いからさっさと………」

ん、待て。何かしら。なーんか見落としている、そんな感じ。とてつもなく大事な事を見落としている。

「おい、どうしたんだ？」

——そしてその大事な事は。あたしらが殺される事に直結している、そんな予感。

「おい、おい！」

「メイコちゃん？」

「つと。なんか……いえ。何でもないわ」

そう、ここはポケモンの世界よ？ 寿命とかならまだしもそんな死ぬとか殺すとか、

そういうのは無い。………無い、と、思う。

「……………」

「ちっ、何でもないなら……試してやるよ」

「ではブラック君。これを」

ブラックがハンサムからブラックストーンを受け取る。

その途端、ブラックストーンが光を出す。

「むっ、これは……」

「これは……レシラムの時と同じ……！」

その光は、光なのに黒く、何故か落ち着いてくる。

ふとこれを見てゲーチスはどうしているか気になり、奥を見る。

ゾクッ

ゲーチスは、そう、笑っている。

狂人の笑いだ。頬をひきつらせるような笑い方。思わず鳥肌がたったわ。……いやまあ、あたし既に鳥だけど。

——そこで、嫌な予感を放つ存在が目に入った。

「え、N。N!」

「なんだいメイコちゃん」

「ゲーチスが使ったいでんしのくさび! ホワイトキュレムになるとき使ったわよね!?!」

「そ、そうだけど——」

「どうなった!?!」

「どうって」

「いでんしのくさびはゲーチスの手に戻ったかって聞いてんのよ!」

「いや、溶けてキュレムの体に溶けていったけど……」

サアアアアアと全身から血の気が引く。

「ブラック! 今すぐゼロロムの復活を止めなさい!」

「はあ?」

「はやく!」

「いや、もう出てくる!」

ブラックストーンが宙に浮く。

アークがブラックストーンに走る。

「っ……………」

羽を伸ばし止めようとするが、あたしが触れる直前で弾け、

「バリバリッシュー！」

ゼクロムが復活する。復活してしまふ。

「これが……………」

「ゼクロム……………」

ハンサムとNがゼクロムを見上げ、呆然とする。

「よし、ゼクロム！ ホワイトキュレムを倒すんだ！」

「バリバリダー！」

伝説のポケモンの声はあたしでも理解出来ない。

なんて現実逃避してる場合じゃない！

「ふっははははは！ これを、これを守ってましたよ!!!」

「ほーう、ゲーチス！ ゼクロム相手に何が出来るってんだ！」

駄目、駄目ダメダメ！

「んなことさせるかあああああ！」

羽ばたく。飛べ、ヒツピーちゃんの体!

「もう遅い! 二つ目のいでんしのくさびは既に発動しています!」

ゲーチスが手に持ついでんしのくさびをホワイトキュレムに投げる。

いでんしのくさびは空中で溶け、ホワイトキュレムの体に吸い込まれ……

「キュルキュルアアアア!」

「ドブツ!」

ホワイトキュレムの全身から炎が吹き出し、ゼクロムに向かって伸びていく。

あまりの熱量にブルーが一旦離脱し、あたしの場所に転がってくる。

「な、ゼクロムよけろ!」

ゼクロムは宙に浮き、炎から逃げる。

「メ、メイコさん? これは、俺が『げきりん』してる間に何が」

「……いでんしのくさび。二つ目」

「はい?」

怒りか悔しさが分からないけど、体に力が入らない。文章を口に出すことさえできない。

「これで、ホワイトキュレムと、ゼクロムが、融合されるわ」

「は? ……え!」

ゲーチスは確か、ホワイトキュレムは伝説のポケモン二体分と言ってたわね。つまり、これで、三体分。

「フフフフフ、ハハハハハハ！ アクロマの残した研究のお陰でキュレムは完全に進化し、言うなればグレーキュレムとなり！ わたしの目的は達成されるのです！」

ホワイトキュレムの炎がゼクロムを包み込んだ。

そのまま、炎の中にホワイトキュレムも入り込む。

炎は一層強くなる。空には雷雲が集まり、雷鳴。

雷が炎に落ち、電気を帯びた炎はまるでタマゴのように丸くなる。

壊さなくちやいけない。壊さなくてはあたしたちに未来はない。

そう、頭では分かってもその神聖なタマゴには誰も触れられない。ましてや……攻撃だなんて……

バキツ

バキバキツ

雷に打たれた大木が倒れるような音が鳴り、炎が、帯びている電気が、凍りつく。

まるで太陽。炎の本体が太陽そのものでアークは太陽の表面を跳ね回るプロミネンス。

……はんつ、いつからあたしは詩人になったんだか。

うじうじうじうじ怯える？ それのどこがメイコなのかしら？ あたしはメイコ様よ。この世にあたしより強い奴は居ないわ！

「すうううううう。ふうううううう」

息を吸え。そして、吐け。考えろ。

あれの孵化は止められなさそうね。

「……んだつたら、出てきたところを吹き飛ばす。全力でね。ブルル！」

「……ドブツ！ え、あ、なんですかメイコさん！」

「あなたのポケモンたちを全部かき集めなさい！ あれを吹き飛ばすわ！」

「はい！」

飛べる？ オーケー体は反応してくれるわね。

飛び、レナたちの元へ向かう。

「レナ！ ブラック！ N！ ちやつちやと起きなさい！」

「……はっ、メイコさん！ あれ、あれ！」

「見りやあ分かるわ！ あれから出てきたところを消し飛ばすわよ！」

「メイコちゃん、それは……」

「あらN起きた？ あなたのとうさんとやらは笑いすぎでこつちの事なんか見てないわ

「よ」

「そうしやなくて……」

Nの顔も雰囲気も暗いわね。

「なら何もしなくていいわ。ハンサムを安全なところまで避難させときなさい」

「……………」

「んで、ブラック——」

「は、ははは、ゼクロムがあんな簡単に喰われるなんてな、ははは、はは、あはは」

うわあぶつ壊れてやがるわ。こわっ。

まあ、これぐらいなんだったらあのタブンネでも出せば良いでしょ。

ブラックの腰のモンスターボールを片っ端からぽちぽちぽちと。

一つ目ローブシン。二つ目ジャローダ。三つ目、お、ビンゴね。

「ああ？ もしかしてまた私の出番？ なら嬉しいわねえブラックのやつ最近まったく

出してくれなくてつまんなかったのよお！」

「そうよタブンネちゃん。まずはそのバカを殴ってあげなさい」

「けっ、勝手な命令しないでよねえ。……って、勝手な、じゃないわねこれえ。こんの

……………」

色違いのタブンネが拳を振り上げる。

「あほんだらあ!」

「グハツ!」

殴られたブラックは吹き飛ぶ。目算二メートル飛んだわね。

「ヒュー♪ 素晴らしい。マーベラス。拍手までしちゃうわ」

「ふふ、まあねえ。こんぐらい出来ないとお」

「さて」

ハンサムの様子は無い。Nが安全なところまで連れていったわね。

……まあ、恐らく、あたしらがここであれを倒せなければ。

世界に安全なところなど無いけど。

「メイコさん、準備出来ました!」

「私もいけます!」

「ブル、レナ。ブラックは?」

「わりいわりい。あんまりにもあんまりだったんでブーツとしまった」

「たく、トレーナーなんだからもつとハイメンタルで居なさいよね」

「その通りねえ」

タブンネも同意してくる。

バキバキツ

「……そろそろよ。面倒な指示はしないわ」

「うん」

「了解です」

「ただ、全力で——」

「「吹っ飛ばす！」」

ほう、珍しく揃ったわね。

バキバキバキバキツ！

「産まれるが良い！ グレーキュレムよお！」

氷にヒビが入る。ヒビから炎と雷が吹き出る。

伝説が、産まれる。

「今よ!」

「いけえ!」

「お願い!」

「やっちまええ!」

ギイカがレイカがペティがサナがレイシーがツービーがローブシンがジャローダがシビルドンがシャンデラがクリムガンが

一斉にタマゴから顔を出したそれに攻撃を加える。

岩にビームに電撃に念力に斬撃に吹雪に気合い玉に葉っぱに泥に炎にエネルギーが当たり。

一切のダメージを与えられ無かった。

転生者　　く倒したいく

「そんな……」

「うっそでしょ……？」

「あ、ありえねえ」

さっきのあの攻撃は…俺は攻撃しなかったとはいえ……かなりの攻撃だったのに。

「「ギグユエアアアアアア！」」

三体の伝説のポケモンが融合したポケモン——グレーキュレムがタマゴを壊し……吸い取り……姿を現す。

その姿は、巨大。かなり大きいツービーを縦に五体並べてもまだ足りないぐらい。チラツと後ろを見るとグレーキュレムの影が遠くの森さえも隠していた。

右半分はゼクロムで左半分はレシラムの体。そして、まるで日曜の朝にやる戦隊もののロボのように胸元にキュレムの顔。右半身の黒と左半身の白、その境を隠すかのよう
に体が凍っている。

背中から一対の大きな翼。羽ばたきはしていないけど……

「「ギャレリヤアアアアアアアッ！」」

ブヴウウウウンと奇妙な音をさせながら浮かぶ。

「くっふははははは！ 分かる、分かるぞ！ グレーキュレムウ！」

ゲーチスが高笑いし、グレーキュレムに指示を出す。

『凍る過去』です！」

「「キユルリアアアアア！」」

は？ 何それそんな技無い。知らない。

グレーキュレムが吼え、冷たい風が吹き付けてくる。

「っ!? これ、は」

「ギッ!？」

「ギイカ？レナさん？」

「ボールさ——」

レナさんとギイカが凍り付いた。氷漬けになった……!？」

「レナさん！ ギイカ！」

「……あいつ、ポケモンも人間も一緒くたに攻撃しやがったぞ！」

「しかもなんてえげつない技なのよ！」

「……戻って、ギイカ」

ギイカをボールに戻す。

「ペアギユアアア」

「ナットウ……」

「バウツ」

「大丈夫。大丈夫だよ、みんな」

レナさんの方を見る。ここまで見事に凍ると、むしろ称賛したい気持ちになつてくる。

「レイシー、サナ、ツービー」

レナさんのポケモンたちに声をかける。三体ともこつちを見たね。

「レナさんを入れて近くのポケモンセンターに行つて」

「レラ!?!」

「サア、サア〜!」

「グルルルル……」

「今はレナさんの命が最優先! ここは僕たちがどうにかする!」

「……サア〜」

「レラ……ラツ!」

サナが『サイコキネシス』でレナさんを浮かせ、レイシーと共にツービーの上に乗る。

「うん、行つて！」

「ベアアアア！」

ツビーが走る。その姿を最後まで見送ることなく、前を見る。

「フフフ……どうせすぐに世界はわたくしの物となるのに。まあ良いでしょう。グレーキュレム、『神鳴る現在』」

「二」バリバリユウウウ！」「二」

グレーキュレムの巨体から大量の電撃が放たれる。

一発一発が『かみなり』レベルの大技なのが分かる。

「ちっ……戻れジャローダ！ ロープシン！ シビルドン！ クリムガン！ シャンデラ

！ 全力で吹っ飛ばせ！」

「みんな、一々指示はしない！ 行くよ！」

「ハッサンあんたはあたしを守んなさい！」

『へんしん』を溶く。駆ける。

レイカはブラックさんの前で触手を上下に伸ばしている。きつと避雷針になっているつもりだ。

メイコさんはハッサンと共に大きく迂回しつつゲーチスに近付いている。

ブラックさんのポケモンたちも、それぞれの技を限界まで放っている。

『神鳴る現在』がクリムガンに当たる。一撃で倒れる。

確認出来たのはそこまで。真横に『神鳴る現在』が一発落ち、衝撃が襲ってきて吹き飛ばされる。

「うわあつ……………ペテイ!？」

「ペアギユアアア！」

飛ばされた先、ペテイが受け止めてくれる。よし、なら!

「足元までで良い! 連れてって、ペテイ!」

「ペアギユツ!」

特性『かそく』のおかげで極限まで素早く走るペテイ。

う……………しがみつくだけで精一杯だ……………!

ただどその分、近付くのが速くなる。

「むう、三匹程度しか倒せませんでしたか。まだ使いこなせないということですか？

……………ならばグレイキュレム! 『咆哮』!」

「二 キュルキュルキュル——」

グレイキュレムが顔と胸、二つの口から息を吸い込む。

そして巨体というのは、それだけの行動でも周囲にかなりの影響を及ぼす。

具体的には、豪風が吹く。

「つわあ!」

ペティから引き離された! うわついたつ、ぐぐ……。

ゴロゴロ転がってようやく止まる。

でも、寝てる暇は無い!

そして、起き上がろうとして………

「」
——
ツ
!!!!!!
「」

逆さに飛ぶキャモメが三匹見えた。

……気付いたら世界が横倒しになっていた。

身体が動かない。手を、脚を、顔を、動かしているつもりなのに、行動に出ていない

!?

「——！——レーキュレム、『燃え尽きる未来』です」

ようやく見えてきた視界を覆いつくすかのようにグレーキュレムが存在している。

「まずいまずいまずい、技名からしてほのおタイプの技なのは分かるけど身体が動かない、避けられない！」

「狙われてるのは、俺だ……！」

「「「 キュルリアアアアア！」」」

「つ~~~~~……あれ？」

「何も起きない。あれ？」

「ま、まあ、ならチャンスつてことでインクの色は白。『そらをとぶ』で一気に上へ。『神鳴る現在』の発動は終わってるから電撃が飛んでくることもない。」

「ブール！」

「メイコさん！ ハッサンは!？」

「進化してすぐにやられたわ！」

「そうですか!……え、はいい!？」

「詳しくは終わってからよ！」

並んで上を目指す。かなり頑張ってるのにまだグレーキュレムの腹の辺り。

「くっそでかすぎんよ……チリ？」

メイコさんが何かぼやいた後に、何か呟く。チリ？

「メイコさん？」

「……………ちっ、ブル。こいつは任せたわ」

「はい？」

メイコさんが俺の背中を撫で、急転換して下へ。あつと言う間もなくに地面に墜落する。

ぐっ……………助けるか？ いや、任せられた。

ならやることは決まってる！

「メイコさん、レナさん、俺はやるよ！」

飛ぶ。……………下から絶叫が響いてきた気がしたけど、振り向かない。そんなことどんなことだろうが良いから飛べ！ それしかない！

「「バリバリユウウウ！」」

グレーキュレムから雷がほとばしる。

「あぶっ、あぶなっ、うわっとお！」

避ける避ける避ける！ 多分だけど攻撃は顔面にしか意味が無い！ あの一番高い

顔のところまで飛ぶんだ！

「どつぶりやあああああああ！」

「「キュルキュルキュル——」」

「「もたもた豪風。抗えず、吹き飛ばされる。そして風の行き着く先は、グレーキュレムの口！ ラツキー！」

「……いや待て、このままだとさっきの『咆哮』とやらを喰らっちゃうんじゃない？」

「それは止めれば良いだけだろっ!？」

「インクの色はオレンジ。いままで、このタイプの技は使ってこなかった。何故なら俺の技は全て自分のイメージを絵にしたもの、イメージしづらいのは使いにくかったからだ。」

「「ただ、これなら知っている！」

「「うおおおっ、レイシーの『インファイト』だあっ！」

「「狙うは顎。上に向けて殴れ蹴れ頭突け肘膝肩踵全身を使って口をふさげ！」

「「ッ！ ……………！」

「「よしっ、上手くいったっばい！」

「「ここからはようやくこつちのターンだ！」

「「『二重の炎雷』です！」

「「「キュルリアアアアア！」」

『クロスファイア』と『クロスサンダー』が混じったような物体がグレーキュレムの頭上に現れる。見たまんまの技っぽいね。

問題があるとすれば……流石にこの距離じゃ避けられなさそうぐらい大きいって事かな。

仮に避けられる距離まで行ったら、今度こそ『咆哮』を喰らう。

こうなったらがむしやらに行く！

『がむしやら』あああああああ！」

尻尾を叩き付ける。

——その先に、インクが出ていない。

ふさつと気の抜けた音が鳴る。

「……………」

フツと背中の中のインクが蒸発し、翼が消える。

当然落ちる。

「……………」

インク切れ。始めてだよ、こんなの。このタイミングで、インク切れは……あんまりだよ。

『二重の炎雷』が迫る。

下を見ると、ブラックさんがこちらを見上げてる。その周りには倒れ付したポケモンたち。

それ以外にも、俺のポケモンたちはみんな倒れてる。

……真下にある赤いのはメイコさんかな？ ピクリともしていない。

「……………はは、あはははは」

こんなの笑うしか無いじゃん。伝説のポケモンに、勝てる筈が無かつたんだね。ましてやグレーキキュレムは伝説三体系分。

転生者だからなんだって。『選ばれた』からなんだって。……………意味、無いじゃん。『二重の炎雷』が当たる。

熱い、痛い、身体中を燃やされて中身さえも焼かれて。

自分が叫んでいるのか笑っているのかも分からない。

何か、硬いものにぶつかる。地面、なら良いんだけど……………目の前が見えない。

見えているのは、赤と黒の視界だけ。

死んだのかな、俺。

「……へい……………ブル。……………重いのよ……………どきなさい……………」

……メイコさん。メイコさんも死んだの？

「……………まだ死んじやいないわよ」

そう、つてことは俺も生きてるの？

「…どうかしら。もうすぐ死にそうだけど」

……………だよ。レナさん、大丈夫かな。

「生きるわよ、あの子なら」

…寒い。ここ、そういえば寒いね。

「……ねえ、ブルル。そろそろグレイキュレムが止めを刺そうとしてくるころだけど。止めてきなさいよ」

無理だよ、勝てない。尻尾のインクも切れた。

「うじうじと……。てか取り敢えずどきなさいよ。こっちはさつきまで全身火だるまだったんだからね」

……………そうなの？

「そう。あんたの身代わりになってあげたのよ」

……………？

「んーで。あんたがここでやられたら……そういちろうさん、なんて言うかしらね。名前も知らないあんたのお母さんは。レナは、あんたのことをどーゆーかしらねー」

さあ。分かんない。興味も無い。

「ちっ、『わるあがき』つて技があるのよ、知らない？」

知ってるけど、グフツ

誰かに蹴られた。

「よくもまあわたくしの邪魔をしてくれましたね、ポケモンの分際で」

なんだ、ゲーチスか。

「『二重の炎雷』でやられたと思ったのですが……まさかまだ生きていますとは。しぶといですね」

ドブツ。また蹴られた。

「ならばわたくしが直々に終わらせてあげましょう」

蹴られた。痛い。

蹴られた蹴られた。痛い痛い。

蹴られた蹴られた蹴られた。痛い痛い痛い。

「痛い……」

「ふむ……まだ息があるのですか。これだからポケモンというのは。仕方ありませんね、

グレーキュレム！」

「「キュルリアアアア」」

「『凍り付く過去』です。このドールと……ついでにその赤いベラツプを凍らせなさい」

……ん、なんか熱い。これは……ビリジオンから貰った草笛……。そうだ、来てもらおう。
「む、待ちなさいグレイキュレム。……その草。何かありますね」

あ……………踏みつけられた。踏みにじられた。

空を見る。グレイキュレムが見える。そのさらに上は、雷雲。それとも、雪雲？

あ、なんか雲がレナさんみたい。

『ブルーさん』

雲のレナさんが声をかけてくる。幻聴かな。

『負けないでください』

無理言わないですよ。

『絶対に、勝ちます。勝って、改めて、告白します。……だから、負けないでください』

あの時のか。……なんて答えたっけ。確か——

「勿論」

そうか。そうだった。約束は守らないとね。

「ふむ、……まですればもう使えないでしょう。ではグレイキュレム！」

ゲーチスがグレイキュレムに指示を出す。

「ねーえあんた」

「『燃え尽きる未来』です！」

メイコさんの言葉を無視するゲーチス。

「チエツクメイトよ」

「一人忘れてるぜ！ ジャローダ！」

「シヤアツ！」

「!？」

ジャローダがゲーチスに巻き付く。

「さりげなくボールに戻しといて良かったぜ。ジャローダ、絶対に緩めんなよ」

「ぐ……くく……」

「どうだゲーチス、ジャローダに攻撃したらそのままお前に攻撃が来るぜ？ 見た感じ

あれに小回りが効くような技は無さそうだしな」

俺も、ようやくと起き上がる。身体中が痛い。

「ふ、ふふふ……ダークトリニティ！」

「!？」

黒ずくめの三人が現れる。あの、電気石の洞穴の前で出会った三人だ。

「助けなさい！」

ゲーチスが命令する。
が

「どうしたのです！ 速くわたくしを助けるのです！」

「……………」

三人は動かない。

「ゲーチス様、終わりにしましょう」

「!? な、何を」

「そのメイコとやらが言った通り、チェックメイトです」

「……………裏切るのですか」

「いえ。これはあくまで……………」

「裏切るのですか！ ならば良いでしょう！ グレーキュレム！ こいつらを消し飛ば

しなさいー！」

「「「 キュルキュルキュル—————」」」

まただ。この鳴き方は…『咆哮』。

「ちつ、わざわざ大人しくしてあげてたらこれよ！」

メイコさんが悪態を吐く。なんだかんだで元気そうだね。

そうだ……………止めなきや。俺が止めなきや。

「ド……………ブツ……………！」

「あらブール、起きて……………？」

尻尾を……………駄目だ、グレーキキュレムは浮かんでる。飛ばなきや届かない。

「ブール、伏せなさい！」

『そらをとぶ』？ インクが無い。

『じゅうりよく』で落とす？ インクが無い。

『うちおとす』？ インクが無い。

「」

ツ

「」

!!!!!!!!!!!!!!

(タオセ)

なんだ、この声。

(タオセ)

どっかで聞いたことあるような。

(タオセ、タオセ)

……ああ、そうか。俺の声だ。

『そうです。貴方の本能の部分です』

あ、二番さん。スマホじゃないの？

(タオセ、タオセ)

『そもそもは、こうして脳内に直接話していました』

そうだった。

(タオセ、タオセ、タオセ)

うーん、ちよつとうるさいかな。

『……………』

(タオセ、タオセ、タオセ)

どうしたの二番さん。

『ブルさん。もしもグレーキュレムを倒したいのならばこの声をよく聞くことです』

……………ん？

(タオセ、タオセ、タオセ、タオセ)

『そうすれば恐らくグレーキュレムを倒せます』

そうなの？

(タオセ、タオセ、タオセ、タオセ)

『ええ。ただし、知識を消費します。知識を使い限界を超えます。オススメはしません』
ふうん。

(タオセタオセタオセタオセタオセ)

……なら。どうなるかは分からないけど。

世界を救ってみようかな。

(タオセタオセタオセタオセタオセタオセ)

「タオス」

タオスく限界を越えてく

ブルルが立っていた。しかし他の者は人間ポケモン敵味方関係無く『咆哮』の影響で行動不能に陥っていた。

今、この場で意識があるのはグレーキュレムとブルルの二匹のみ。

「ドブ」
タオス

……ブルルに意識があるのならば、だが。

「ドブ」
オトス

ブルルが纏う雰囲気はいつもの物とは違い、重く、きつく、何か覚悟が決まった者のみが纏えるものだ。

と、ブルルが跳ぶ。ドブブルが本来跳べる高さを大幅に越え、家の一つや二つを軽く潰せるグレーキュレムの足に飛び乗る。

「バリバリユウウウ……」

グレーキュレムが反応する。始めて、自らの意思で、技を使う。

『神鳴る現在』グレイキュレムの表面から無数の雷を放つ技だ。

一発一発が重く、当たれば確実に倒れるといっても良いほどの熱量を持つ。その分、当たりにくいのだが……

「ブツツツ!？」

触れている相手に対しては確実に当てることが出来る。

ブルルの体内をすさまじい威力を持った電撃が駆け巡り、弾かれ仰け反り倒れ伏す。グレイキュレムの足の上から落ちなかつたのは偶然としか言いようが無いだろう。

そして、ブルルが再び動くことはなかつ「ドブ」

……ブルルが、起き上がる。その目からは涙が流れている。

ドロツとした血の涙が。

『全技のPPが0、かつ相手の攻撃により戦闘不能。二つの条件を達成しました』

『……これより、ブラッディモードを開始します』

世界が紅く染まる。

話は変わるが、ブルルの今まで使ってきたインク。これはどうなっているのか。『へ

んしん』を始め、ブルーの行動の全てに関わってくるインク。

答えは、『蒸発して消えている』

例えば、『へんしん』を溶いた後のインクはほんのわずかの間だけ地面に残り、すぐに消えている。

でなければブルーが逐一インクを処理しなくてはいけなくなってしまう。

さて、先程インクは『消えている』と言ったが皆様は質量保存の法則を知っているだろうか。

読んで字のごとく『質量は形が変わっても無くなったり、増えたりしない』というものだ。モンスターボールには何故か適用されていない法則だが、最低限ブルーのインクには適用される。

つまり蒸発して、空气中を漂っているのだ。

もう一つ。ブルーのインクとは何か。

ブルーの……いや、ドーブルたちの尻尾のインクは何で出来ているのか。ポケモン図鑑を見ていただこう。なんとドーブルたちの体液なのだ。

では体液とは何を指すのか。少し辞書から引用させてもらおう。

(たいえき【体液】〔名〕動物の体内で、細胞外にあつて流動する液体の総称。脊椎(せきつい)動物では、血液・リンパ液・組織液など。)

成る程。

そして、ドーブルは『スケッチ』した技を自在にコントロール出来る。

これはイコールで体外のインクを操れるということだ。

長々と説明していたが、要するに

「ドブツ」

ブールの目から出た血が、意思を持って動き出す。

空気中を漂うインクが、血の色となりブールの力となる。

『これがブラッディモード。代償は肉体と知識の損耗』

血色の霧が拳となり、グレイキュレムを殴る。

「!?!?!」

その拳の大きさ、グレイキュレムの顔とほぼ同等。

顔を殴る。引き、殴る。延々と殴る。

とはいえグレイキュレムも黙ってやられるだけではない。

「「キュルリアアアアア!」」

『二重の炎雷』グレイキュレムの頭上に電撃を纏う巨大な炎を産み出し、相手に叩き付ける技。グレイキュレムの技の中ではかなり使いやすい命中率と比較的穏やかな威力を持つ。

穩やかとはいえ、理解可能というだけであつて、その威力は『はかいこうせん』や『ギ
 ガインパクト』のそれを上回る。

拳は、あつかりと打ち碎かれる。『二重の炎雷』は途中でその軌道を変え、ブルルの元
 に。

「ブツツツツ！」

焼かれる。外を炎で中身を電撃で。焼かれ、焼かれ、焼かれる。

ようやく『二重の炎雷』が消え——

その焼かれた場所から、血が噴き出す。

「ドブ」
オトス

噴き出た血の一滴一滴がブルルの知識と体力の塊であり、経験値であり、武器である。
 血がグレーキュレムに貼り付く。べったりと。

それはグレーキュレムへと刺さる。硬い皮膚も覆う氷もあつかりと突き刺す。

「「 キュルリアアアアア!?!」」

ここまでして、ようやくグレーキュレムにダメージが入った。

——チリツ

途端、ブルルが燃え上がる。

『燃え尽きる未来』数ターン後に相手が燃え出す。『みらいよち』と『もやしつくす』が

混ぜたような技で、必中。

ただし一体しか対象にできないので、メイコが行なったように火種を他の物に移せば一切問題は無い。無い、が。

問題はその火種が何処に出来ているのかは直前まで分からないということ。

そして、今のブルーにはその様な分析が出来るような状態ではなかった。

「ド……ドブ……ドブ……」

燃える燃える燃える。技名通りに燃やし尽くす。

普通ならばそれで終わりだろう。

「……ドブ」

しかし、ブルーの全身から噴き出た血が炎を消す。もはやドブらしいクリームの色の毛皮は見えず、全身が紅く染められている。吹き出る血は留まるところを知らない。

「ドブ」
タオス

ブラッディモードのブルー相手に攻撃は不毛。与えれば与えただけのダメージが血となり反撃してくる。

殴る。蹴る。斬る。撃つ。射る。叩く。潰し、押し付け、刺し、えぐ 挟り、絞め、そして殴る。

技ではない。ただの暴力だ。

「「キュルアアアア！ バリバリユウウウウ！ギグユエアアアア！」」

グレーキユレムは『二重の炎雷』や『神鳴る現在』で血を吹き飛ばすが、それでもすぐに集まり攻撃を……暴力をふるう。

流れ弾の雷がブルルに当たり、更に血が噴き出る。

「「キュルキュルキュル——」」

『咆哮』相手を二・三ターンの間怯ませる。音の技なので『みがわり』では防げない。特性『ぼうおん』ならば怯みが一ターンに減る。

ただ、発動までに時間がかかるので……

「^{タオス}ドブ」

「「——ッ!?」」

簡単に止められる。単純に下からアツパーをかますだけ、それだけ。……まあ、普通ならそれが難しいのだが。

「「——くはっ、はあっ、はあっ、何が………ブルル!?」」

メイコの意識が戻る。

紅い視界に驚き、グレーキユレムの声に上を見てブルルを見て驚く。

「ブーーーーール！」

返事はない。

「二 キュルリアアアアア!! バリバリユウウウ!!!」
「うわっ」
「二」

『神鳴る現在』がメイコの近くに落ちてくる。

「な、何がどうなってるのよ……ブラック、ブラック! うぐう……身体中が痛い……」
何時ものように飛ばず、這いずるように移動するメイコ。どうにかこうにかブラックの元へ。

「ブラック! 起きなさい、ブラーック!」

「……うるせえ。起きてはいるさ」

「だったら何で寝っ転がってるのよ」

「いや、そのだな。上の激闘に巻き込まれかねないからな」

「はくあ?」

メイコは改めて上を見る。しっかりと。

「……ん。どうにもブルが暴走してる感じね」

「それだけじゃねえ、周りも紅くて分かりにくい……あいつ、血まみれだ」

「……………」

「それと、この紅いのはインクだ。ダイイングメッセージごっこが出来る」

「なら、あたしはあんたが悪いって書いてあげるわよ」

「おい」

こんな状況でのんびりお喋り出来る二人は肝が座っているのか？ 肝が座っていない訳では無いだろう。

だが、答えは『否』。むしろ肝を潰している。有り体に言えば恐怖している。

「二」バリバリユウウウウ!!」

「ブール……」

「どうした、実は恋い焦がれてたとかか？」

「馬鹿なの？ 死ぬの？ 死んだあとなら冗談も聞いてあげるわ」

「死んだら喋れねーっての」

「……恋愛の好きではないけど、弟とかよく遊ぶ近所の子供ぐらいには気に入ってるわ

よ」

「そうかい」

いつ終わるとも知れない戦いを、二人は見守るしかなかった。

「二」キュルキュルキュル—— 「二」

「……………ドブ^ダドブ^オ」

何度目になるかも分からないグレーキュレムの雄叫び。

ブルは『咆哮』を止めるため、インクを総動員し殴り付ける。

「——ッ」

巨大なインクの拳によるアッパを受け、グレーキュレムが仰け反る。

そして

グレーキュレムが嘲笑った。

「………!!!」

胸元のキュレムの口が開き、未だに足の上に居るブルに向けて冷たい風を送る。

『凍り付く過去』最大二体までを凍らせる。この氷状態はアイテムでは治せない。

出も速く、確実に相手を仕留められる必殺技のようなもの。弱点としては、胸元の

キュレムの顔はゆつくりとしか動けないうえにその口内は急所というところか。

だが、ブルは一匹だ。しかも先程跳び上がった時から動こうとしていない。……いや、動けない。

や、動けない。

全身が動かせないのだ。

当然だろう、ただでさえ『ひんし』なのだ。それを無理矢理動かし、更に攻撃され、体

液……血も何処から出てきたと尋ねたいほど失っている。

結果、ブルは足元から凍り付く。

レナのように、氷像と成り果てる。

「「キユルキュルキュル……キユルリアアアア！」「」

グレーキュレムが勝利の雄叫びを上げる。

そして足を振り、ブルを落とす。

ゴトツと。鈍い音を立ててブルが地に落ちる。

「……おいおい、ブル。これで終わりとか言わないよな……？」

「ブル……ブラック。あたしをあそこまで運んで」

「……んなことしても意味ねえじゃ「いいから」……分かった。どうなっても後悔するなよ」

ブラックが立ち上がり、メイコを掴み、投げる。

そしてすぐに倒れる。けっしてグレーキュレムに睨まれたとかグレーキュレムが怖いからとか、そういう理由ではない。

ブラックもまた、ギリギリの状態だったのだ。

グレーキュレムは……いや、ゲーチスはトレーナーとポケモンの区別なく攻撃させた。ブラックは転生者の一人とはいえ肉体は単なる人間だ。ポケモンではない。

そういう意味では、一番根性があったとも言える。

「……そういうやダークトリニティが居ねえな。ゲーチスも」

そこまで言い、意識が飛んだ。

「ちっ、荒っぽいのよ……あんたは……」

メイコはブルルのすぐ近くまで投げられた。が、少し届いていなかった。

「これじゃ、グレーキュレムに睨まれるじゃない」

這いずる。とにかくブルルに近づく必要があった。

今、グレーキュレムを倒せるのはブルルしか居ない。メイコはそう考えたし、それは事実なのだ。

「「「キュルリアアアア……」」」

そして、メイコはまだブルルがやられていないと分かっている。

「よし……ようやっと……届いた」

メイコがブルルに、ブルルを覆う氷に触れた時。

——チリッ

『燃え尽きる未来』の発動する音。

しかし、

「ここまで、計画通り、ね」

メイコが燃え上がる。だが、メイコは気にせずブルルを抱き締める。

「~~~~~ッ！」

熱いだろう。辛いだろう。いくら彼女と言えど、一介のペラップなのだ。伝説のポケモンの攻撃を何度も受けられるような耐久は無い。

だが、耐える。全てはグレーキュレムを倒すために。

「……ドブ」

『燃え尽きる未来』の炎で、プールの氷が溶ける。

同時に炎が消える。残ったのは、血に染まるプールと灰のようになったメイコ。

「ぐ……はあ………プール、起きるのが、お、そ……」

そこでメイコの限界が来た。動かなくなったメイコを見下ろし、プールは

「………ドブ。ドブ」

何かを喋り、

「………ドブ」
タオス

駆ける。一步踏み出すだけで血が噴き出る。身体の限界が来ている。いや、とつくに越えている。動くだけでダメージを受ける程に。

「ドブ」
タオス

それでも走る。だが……遠い。遠すぎる。このままではインクが届かない。

だから、走る。

「……キュルリアアアアアアア！」

『二重の炎雷』が迫る。それでも走る。インクが届くまで、残り十メートル。
「ドブ」

九メートル

八メートル

七メートル

六メートル

五メートル

四メートル

三メートル

二メートル

一メートル

……………ゼロ。

「「キュルリアアアアア！」」

タツチの差で届かなかった。インクを動かした瞬間、『二重の炎雷』がブルを包んだ。

うつぶせに倒れたブル。遂に血も枯れたのか、血は噴き出ていない。

世界が紅から白に戻る。

「「……………」」

しかし、グレイキュレムはブルから眼をそらさない。

グレイキュレムは体感していた。この相手は厄介な相手だと。

諦めない。やられても立ち上がる。何度倒しても倒そうとした分だけやりかえしてくる。

故にこの敵だけはなんとしてでも倒しきる必要がある。そう判断した。

「「……………」」

ブルの体が、かすかに動いた。

「「キュルキュルキュル——」」

やはりだ。だが、次はない。

敵を仕留める為に、選んだ技は『二重の炎雷』。

『神鳴る現在』では当たらない可能性がある。『凍り付く過去』は凍らせはするもののダメージ自体は一切ない。『燃え尽きる未来』は発動までに時間がかかる。『咆哮』は言わずもがな。

「「キュルリアアアアア！」

『二重の炎雷』がブルに当たる。何の妨害も無く、当たる。

グレーキュレムをして、拍子抜けな最後だった。

さて、ではこれから何をすべきか。

グレーキュレムの知能は高い。自らの実力を知り、自らの能力を知り、それを使って何をすべきか。

取り敢えずは他の伝説のポケモンたちに会ってみるのが良いか、と判断したとき。

「なんでヒメリのみが落ちていたのかと……」

有り得ない声を聞く。

「それでどうしてインクが戻ったのかと……」

確実に倒した。絶対に倒した！

「（こ）は何処で相手はなんなのかと……」

仕方無いならばもう一度倒すだけだ。

「「キュルリアアアアアアアアアアア!」」

「……………それはもうどうでも良いかな。インクの色は——」

『二重の炎雷』が、再びブールを襲い、包み込む。

「ドブウウウウウツッ!」

やつと、今度こそ、倒した。

『道連れ』

ベタッ

「「!？」」

黒い手が、グレーキュレムの氷を掴む。

ベタッベタッ

「「キュルツキュルリアアアアア!」」

黒い手は次から次へと現れる。

ベタベタベタッ

「「ギュルリアアアアア!？」」

そして、遂に、グレーキュレムが落ちる。

「バリバリユウウウウ!」

「キュラアアアアアア！」

氷は全て黒い手に呑み込まれる。後に残ったのは、解放されたゼクロムとレシラム。
「レナさん、勝てなかったけど、負けなかったよ——」

ブルーが、今度こそ動かなくなった。

戦後〜戦いの後、戦士たちは〜

暗い。ピーピーと音が聞こえる。

あ、誰か来たみたいだな音がした。ってことはここは何処かの部屋？ にしても暗いなあ。

「あら、レナ」

「……………」

あ、メイコさんの声。案外近くに居る。

「グレーキュレムと全く戦えなかったけどどんな気持ち？」

「……………」

「ねえねえ、今どんな気持ち？ 愛しのブルのお手伝い出来なくてどんな気持ち？」

「…………チツ」

「!？」

今のはメイコさんが悪いと思うけど、レナさん怖っ。

「……………！ ブールさん——起きてます？」

うん。…………あれ、口が動かない。体も全く動かせない。

なんだろう、この世界に転生したばかりの時を思い出す。なら、暗いんじゃないやなくて目を開けられないだけ、か、あ。

——ん？ あれ、なんか、、、い、しき、が

~~~~~

目が覚めた。けど目を開けられないのはそのままだ。

「はーあー。レナは不機嫌だしNはハンサムに連れてかれたしブルーは起き上がってこないし」

「あら、メイコさん。あなたもまだ起きちや駄目なのよ？」

あれ、ジョーイさんの声だ。ってことはここはポケモンセンターなのかな。

「いーのよ、別に飛んでる訳じゃ無いし」

「はあ。全く……そんなに心配なの？」

「暇なのよ」

「——またそんな事言っつて。意地っ張りなのね」

「今更ね」

そうだよな。まあ、意地っ張りっつていうよりは素直じゃない、みたいな。



「んで、ブールはどうなの？」

「そうね。心拍は一定。少なくとも、表面化している傷も無い。……ただ、血が。他の体液もまだ足りない様ね」

「あー。……使いまくってたしねえ。……ねえ。本当にお問い合わせするわよ」

「はいはい」

「あたしだって……ブール——

その先は、聞けなかった。

~~~~~

「まだなのか？」

「らしいわね」

いや、意識は戻ってはいるんだよ。ただ、何故かまだ体が動かせないんだよ。

「んにしても、そろそろ二週間だぞ？ 基本ポケモンつてのは三日あれば大抵の傷は自

然治癒するんじゃないのかよ」

「普通ならね。……あれが普通だと思うの？」

「あー、いや」

「ブルさんのポケモンたちを見てきてました。ギイカ以外は皆元気になってましたから受け取ってました。ギイカも、今日退院できます」

「ふむ、よろしい」

あ、皆元気になったんだ。良かった。

うーん、そういえばなんかお腹が空かないね。

「まだ、ですか？」

「そうねえ。流石にそろそろ起きると思うけど」

「そうですか……」

「案外、叩けば起きたりしてね」

「……………」

「ちよ、冗談よジョーダン！ ストップ！」

え、ちよ、レナさん!?

「落ち着きなさい、ね？」

「はあ、はあつ、……………ブルさん、早く起きてください……」

そんなこと言われても。一応起きてるし。

「そうねえ、レナ。ブルとあんたのポケモンたちに特訓してきなさい。その間になんか考えといてあげるわ」

「……何をですか?」

「ブルを起こす方法。ほら、行った行った」

誰かが部屋から出ていく音。

「さあて。どうすりやいいのかしら。キスでもさせる?」

フェアツ!?

「…しつかし…あゝ。帰りたい。家に帰りたいわ。お父さんのあの声を聴きたいわ。……とうー。違うわね。とうー。やっぱりおかしい」

俺には全く同じに聴こえるけど。っていうかこんな弱音を吐いてるメイコさん初めて見た。

そっか、メイコさんと俺は元々カロス地方から飛ばされてきて。俺はお父さんに会えたけどメイコさんはお父さんに会ってないし……寂しくなったのかな。

「とうー、とー、とーうー、とうー、ととととととー」

その日は、眠るまでメイコさんの声が響いていた。

くくくくくくくくくくくく

起きた。けど、暗い。朝なのか夜なのか分からないのはつまないや。

……静かだ。メイコさんは寝てるのかな？

(（キュルアアアアアアアア！))

っ、グレーキュレム!? ま、マズ、動けない!

「アツ!? ～～～ツツ!」

熱い、熱い! 痛いいたいイタイ! 燃える! 燃えるう!

やめて嫌だいたい! 怖い怖いこわいコワイ!

助け、助けて、誰かあつ!!!

「ア～～～～ツツツツ!!!」

「——ブル、ブル!」

メイ、コ、さん! 助けて、痛いよ、辛いよ、熱い熱い熱い! いたいいたいいたい

いいいたいいたいいたいいたいいたい!

「ブル、落ち着きなさい! グレーキュレムは居ないわ! 痛いのは気のせいよ!

ブル!」

気のせいな訳無い、痛い、痛い!

あ、ぐあつ、く……あ……あ……痛く、無くなったけど。

——ああ、死にそうだ。



「ジョーイさん、ブルはどうしたの!? ねえ、痛がつてたわ! ねえ、ねえ!」

「静かに!」

「! ……ごめん、なさい」

「……はあ。これは多分フラツシユバック現象ね」

「……つまり、グレーキュレムとのバトルを思い出したの、ね?」

「そうなるわ。……でもほら、逆に言えば意識は有るってことだし、痛がつてるっていうのは生きてる証拠のようなものだから——」

「ブルは」

「?」

「何で飛び降りたの? あたしには分からない」

「……………」

「だって、夢の話よ? そんなのを真に受けて、普通飛び降りる? ううん、有り得ない。

……ねえ、ブルは、そんなに現実が嫌だったの? ねえ。答えなさいよ……………」

そろそろ起きよ、主人公

起きた。けど、やっぱりまだまぶたさえも動かせない。

そういえばなんか、おっそろしく恐ろしい夢を見た気がするんだけど………なんだっけ？

まあ恐ろしい夢なんだから思い出せない方がいいか。

……んー、静かだ。機械の音しかしない。つまらないなあ。

あの時は、タマゴの中に居たときはどうしたんだっけ。

確か――

『ここは、カゴメタウンです』

そうだったね、二番さん。久し振り……かな？

『ブルさんが倒れてから二週間。その間一度も思い出してもらえなかったので、ええ、久し振りであつてます』

……怒ってるの？ ごめんね？

『いいえ、システムわたくしに感情はありません』

そうなの？ そのわりにはポケッターとかで感情豊かなポケットしてるけど。

『見せかけです』

あつさりと断定するね。まあ、そういうことにしておいてあげるよ。

……で、ねえ。二番さん。俺は何時になったら動けるようになるの？

『動くことは可能です』

え、そうなの!?

『肉体的な損傷はほぼ完治しています。ただ、暫く寝しほっていたのでなまっていますでしょう』

そつか。……じゃあ、なんで、動けないの？

『肉体に原因は存在しません。故に、精神的なものだと考えられます』

精神、的な？

『例えば。動くのが怖い、現実が辛い、目覚めたくないといった理由で目覚める事をしなくなる、といったものです』

ふうん。……あれ、いやでもこれって俺の事だよな？

別に動くのは怖くないし、現実はすごく楽しいし、目覚めたくないなんて思っていないだけ。

『人は、何か認めたくない事柄があるとき、目をそらすことがあります』

……それってつまり、俺が何かを認めたくないから、目をそらしてること？

『そうです』

ムムム……ちよつと酷いんじゃない？ 俺がそんなにメンタル弱いと思われてたなんて。怒るよ？

『いえ、仕方無いでしょう。むしろブルさんだからこそ、まだこうして喋ることが出来るのですから』

……ん？ 褒められた？ 褒めるのか貶してるのかどつちかにしてよ。混乱しちゃうじゃん。

『グレーキュレム』

……グレーキュレムが、どうかしたの？ 確かもう居なくなつたつて言つてたけど。

『ええ。ですが、ブルさん。貴方は恐れています。またあのグレーキュレムに襲われてしまうのではないかと』

そんなわけじゃないじゃん。いつかいたおしたんだよ？

『ですが、その代償として……死にかきました』

……べつに、こつちにくるときにいつかいしんでるし。

『そうです。ブルさんの元居た世界のこととは全く分かりませんが、人間はこの世界とほぼ同じように進化しているでしょう。……ならば。怖くない訳無いでしょう』

なにが？

『死ぬのがです』

……………。

『神からインストールされた『貴方』の情報によると、かなり高い場所から飛び降りた、とあります。飛び降りる直前、怖く感じなかったのですか？ もしこの世界……ポケモンの世界に行けなかったら、と考えなかったのですか？』

……………。

『……貴方には答える義務があります。黙秘は有り得ません』

……………確かに、二番さんに感情なんて無いね。

『……………』

……………怖かったよ。ああ、怖かった！ 死ぬんだよ！ 死ぬんだよ!?

怖くない訳無い！ 死ぬのが怖くないなんて、そんなの、人間じゃないよ！ 俺は人

間だもん！

それに考えたさ！ あれは本当にお告げだったのか!? ただのリアルな夢だったん

じゃないか!? ずっとずっと考え続けたさ！

お父さんは優しくかった！ お母さんも優しくかった！ もしかしたらもうすぐ弟か妹

が産まれていたかもしれない！

友達も居たよ！ ポケモン以外にも楽しいことはあったさ！ 本当にこの世界を捨

てていいのかなんて、毎晩のように考えた！

でも、それでも、この世界に来た！

そして、来れて良かったと思う！ 無駄死にとか、そういう意味じゃなくて、メイコさんレナさんそういちろうお父さんシリルお母さんカラキリクルケンハツサンギイカペティレイカ他にも沢山！ 皆に会えて良かった、そう思えたんだよ！

『……………』

グレーキュレムは、それを奪っていこうとした！

だから許せない。あんな『みちづれ』なんかじゃなくて、もつと殴ってやりたい！

でも……だけど……そう……だからこそ、怖い。怖いよ。

『みちづれ』でようやく。本当にギリギリの所で、何回も奇跡が起きて、それで『みちづれ』なんて狡い勝ち方をして、それでなんとか勝てた。

次、現れたら勝てない。絶対。

だから怖い。居なくなつたつてだけじゃ怖すぎる。

また出てきたら？ 今度は俺は確実に殺される。

痛いんだよ。熱いんだよ。冷たいし大きいし、それでやっぱり、痛いんだよ。

俺だけじゃない。レナさんは凍らされた。メイコさんは燃やされた。ハツサンたちは電撃で倒れた。

……死ぬのは、怖い。誰であろうと、怖いんだよ！

もつとこの世界を楽しみたいよ！ 色んなポケモンに出会いたいよ！ お父さんやお母さんやお兄ちゃんたちお姉ちゃんたちとも全然喋れて無い！ メイコさんにも追いついてない！ レナさんともつとバトルしたい！

『……………』

…………………ねえ。ポケモンの世界は、もつと楽しいものじゃなかったの？ 少し悲しいこともあつて、苦しいこともあつて、それでも最後は笑えるような、それがポケモンなんじゃないの？

『……………』

ううん、そんなの、俺の勝手な思い込みだよね。

——少し。熱くなりすぎた、ね。動いてないのに、疲れちゃった。

おやすみ、二番さん——

『寝るんじゃないわよこの、この、このあほがあ！』

!?

『起きてるんでしょ？ 生きてるんでしょ!?! だったらあたしが無理矢理引きずり出してやるわ！ レナ、あんたも手伝いなさい！』

『は、はい！』

え、ちよ、メイコさん!? な、どうして!?

『私は貴方の特権二番。つい先日のアップデートでポケエルの通話機能も追加されました』

はいいい!? つまり、つまり、さっきの全部!?

『はい。「二番さんに感情なんて〜」の辺りから全部です』

……………。恥ずかしい。恥ずかしくて死にそう。いやむしろ殺せ! 今こそ出番なんだよグレーキュレム! うわつ、ちよ、誰かに持ち上げられた! まだ体動かせない…………。ちよ、どこ触ってるの尻尾は、その部分はくすぐりたいからやめて〜!

た、たすけ、助けて二番さん!

『私に感情はありませんので』

やっぱり怒ってる!?

リハビリ～荒療治、かな?～

ポケモンセンターの一室に連れていかれて、今。

「うらあ!」

あだだだだだ!

「メイコさん、私がやりますよ?」

「あく? じゃあもうちよつといいじ……マツサージしてから交換するわよ」

苛めてって言うおうとした! 今メイコさん絶対苛めてって言いかけてた!

「分かりました」

分からないで!? レナさん、そこはもっと自分を主張していいこうよ!

「はいさいかい!」

あだだだだつ! むりむりこれ以上前屈出来ないから海老になる海老になつちやうつだだだだだ!

「ふー。……レナ、良いわよ」

「は、はい」

ああ、なんでもこうなってるの?

『精神云々以前に、まず身体の筋肉が硬直しています。なので、まずはマツサージをすることで動く下準備をする必要があるのです』

あ、はい。

「えーつと……まずは普通に……」

レナさんがぐつぐつと背中を押ししてくる。あゝ、気持ちいい。さっきのに比べたら天国だよ、これ。

「うーん……こういうのはあんまりしつかり習わなかったからなあ……」

レナさん、聞こえてるよ。まあ、レナさんはブリーダーじゃなくてエリートトレナーだから仕方無いのかも知れないけどね。

「レナ、肺の後ろの辺りに全体重を乗せるように押すのよ」

「あ、はい。こうですか？」

ングエエエエ！ こ、こきゆ、呼吸が……

「ちよ、ストップストップ！ やりすぎ！」

「あ、は、はい！」

かふうふうと空気が肺に入っていく。

「げほつ、げほつ」

「お、ブルが咳したわ。そろそろ喋れるんじゃないの？」

「どうでしょうね……念のためにもう一回やっておきますね」

ま、まっ………!

「はあく、ふっ」

ガフウアアアア……い、息が………!

「はい」

「コフユ……、ガハツガハツ」

急激に空気が通り、咳き込む。

「ほれ、なんか喋ってみんさい」

「あ……、な……ん……て……」

自分でもビックリなほどがらがら声だったので口を閉じる。喉が痛い。

「ドッ、ブ、ドッ、ブ」

「水よ、水。そういう時は水を飲むのよ」

「はい、水です」

コップを渡されたので流し込む。

「さて、そんじゃあ次は——」

「ああ! ……こんなところに居たのね!」

扉が開かれ、ジョーイさんが入ってくる。

「勝手に病人……病ポケを連れ出さないでください！ 最悪、死に至るんですよ！ 分かっているんですか!？」

凄いい剣幕でメイコさんに怒鳴り付ける。

「分かっているわよ」

「だったらなんで」

「ブルルだからねえ。大丈夫よ、元気なのは確認してあるわ」

「だからって」

「うるさい。……いや、悪かったわね。でも」

メイコさんは静かに、けどしっかりと言う。

「こっからは任せて頂戴」

「……………」

「メイコさん……」

「……………」

……喋ったがらから声で変に心配かけちゃうから喋らない、けど。

「ジョーイさん、私からもお願いします。何も出来ないのはもう嫌だから……!」

「……………」

レナさん……。

「分かりました」

ジョーイさん、良いの？

「ただし、私が監督します。無茶をされたら困りますからね」

そう言つて、ジョーイさんはウインクしたくれた。

のうのうとく旅とはいったいく

じ、地獄のリハビリ、が、一週間、た……ち……がふ。

「お、ブルナレーターが戻ってきたわね」

「それに歩いたり喋ったりも出来るようになりましたしね」

「旅をするのはまだジョーイストップですけどね」

だつてき。と、リハビリ室にポケモンが入ってくる。

「ペアギユアア」

「ギガア」

「あ……ペティにギイカ。久し振り。こここのところリハビリのせいで会ってなかったね」

「ナットウ？」

「うわ、レイカ。上から出てこないでよビックリするからさ」

久し振りの再開に三匹ともじゃれついてくる。うーん、ペティは柔らかいけど残りの二匹が硬すぎて硬すぎて。

「い、いた、痛い痛い！」

「バフウ」

「ん……ムーランド？ ジョーイさん、このムーランドは？」

「え？」

「ん？」

「バ、バウウ!!？」

ん？ ジョーイさんは何を驚いてるんだ？ メイコさんは呆れたように首振ってるし。

「ブルさん、その子、ハッサンです、けど」

「……………へ？」

い、いや待て。確か、ハッサンは進化した、とか、言っていたような。

「ハッサン？」

「バウ」

「……………本当に？」

「バウバウ」

「……………えく？」

「バウウ！」

ムーランドが『とっしん』してくる。うわ、けっこう本気だ。部屋の端まで吹き飛ば

された。

「ババウバウバウ！ バウババウウツ！」

「わ、分かっている分かってるよハッサン。冗談だってハハハ」

「……バウウ？」

信じてないな？ だったらせめて俺の見てる前で進化してよ。そしたら見間違える訳無いのに。

「さて、それじゃあ旅に出れるわね」

「だからまだ駄目ですから！」

「ケチねえ」

「ケチ？ 私はジョーイとしては有り得ないくらい妥協しているのですけどね」

「まあそうだけど」

そもそも患者室から連れ出されただけでも、ポケモンセンターから追い出されて仕方無いのにリハビリを手伝ってくれてるしね。

……まあジョーイさんがつきつきりになるわけにもいけなくて、ジョーイさんが見えない時のメイコさんとレナさんが酷かったけど。

ああ、レナさんがメイコさんにのせられて変な趣味が出来てたりしませんように……。

「ぶ、ブルさん……私をなんだと……」

『う、ふ、うふふ』なんて不気味に笑いながら好きな相手の背中を押してたら、そりやあ怖くなるでしょう」

「そ、それはメイコさんがくすぐるから……!」

「じゃあその時ぐらいマツサージ止めれば良いじゃない?」

「だって止めた瞬間メイコさんブルさんを取るじゃ無いですか!」

うわあ、何これハーレムってやつ?

「バウ」

……なにさハツサン。肩に手を置いてさ。悲しそうに首を振らないでよ。

「ペアギユア?」

「ギツガア、ギイガツ!」

「ナトウ……!」

ちよ、いた、ペティギイカレイカなんで攻撃を、ペティ『メガホーン』は止めてギイカ『のしかかり』は覚えてないでしょレイカも『パワーウィップ』は止めてえ!

「んにしても、ブル」

「はい?」

「次のジムは何処に……いや、どっちにするのよ。そろそろ時間が無くなってきてるわ

エリートトレーナー (?) レナ〜お、おもい〜

こんばんわ、私はレナです。夜なのでヒソヒソ声でナレーションしています。

……なんで夜に私がナレーションしているのかと言うと、まあお察しの通りメイコさんの無茶ぶりのせいです。

「ちよつとレナ。あたしが毎日のように無茶ぶりを言っているみたいと言わないでよね」

「いや、どの口が言ってるんですか?」

「よく喋るこの口よ」

「あ、はい」

頭の上でメイコさんが喋る。

メイコさんを相手にするには、言葉を受け流す必要があるとこの一週間で学びました。

……話を戻します。ブルーさんは寝てて、他のポケモンたちもモンスターボールの中で寝ています。

そして、私たちは今、カゴメシティのポケモンセンターを抜け出して南、サザナミタ

ウンへと向かっています。

……ジョーイストップを無視して、です。ちなみにブルさんは寝ています。

「はいナレーションお疲れさま。しつかし、大丈夫かしらね。恐らくマリンチューブなんて出来てないでしょうし、そもそもセイガイハシテイのジムが公認されているかどうかも分からないのよねえ」

「そ、それなのに抜け出して大丈夫だったんですか？」

「まあ二番が大丈夫って言ってるし。何がどう大丈夫なのかは教えてくれないけどね」

そ、それは大丈夫って言えないのでは？

「さて、今は夜だけど意外と明るいわね。どうしてだか分かる？」

「誤魔化さないでくださいよ……単純に月が明るいからです。海が月の光を反射してるんです」

「ふーん。あたしは羽毛があるけど、あんたは寒いんじゃないの、レナ？」

「……実は少し……いや、けっこう寒いです」

「でしょうねー。だから最愛のブルに抱きついてるのよねー」

「っ!? そ、そうです寒いからです」

メイコさん、突然そういうことだからかおうとししないで欲しいんですけど……。

「んーで、真面目な話していい？」

「……なんですか?」

「あんだ、本当にエリートトレーナー?」

ズバリと心をぶつたぎってきた。

「あーいや、別にそれが悪いとか言うつもりは無いわよ? 全然。全く。レナはレナだし」

「……な、なんで、そう思っただんですか?」

声が震える。寒さのせいじゃない。

だって、寒いんだったら、こんなに嫌な汗はでない。

「だってあんだ、ツインテールじゃない」

「……」

やっぱりそこですか。そりゃあ気付きますよね。

「エリートトレーナーって案外少ないのね。お陰でカゴメシティで滞在するまで全然気付かなかったもの。でも流石はカゴメシティ、本物のエリートトレーナーも利用するのよね」

「………そうですね」

「ツインテールが似合ってるから尚更ね。ゲームでも大体そんな髪形だった覚えがあったし」

ゲーム……前世の話。私にはよく分からない。でも、ブルルさん、メイコさん、ブラックさんの三人には通じてるから、つまらない事だけど、少し疎外感。

なんて関係無い事を考えてしまうほど動揺してます。

「いやあ、まさかエリートトレーナーの正式な髪形が——」

止めて、言わないで。

そんなささやかな願いも、メイコさんの前では無意味なもので。

「ツインロールだったとは」

言われた。それがばれちゃったらおしまい。全部。

さよなら、ブルルさん。私の大好きな……あいたつ！

「はいナレーション変わりなさいい」

~~~~~

はい、ナレーション変わってメイコよ。

「ちよつとレナ、ブルルを海に投げ捨てようとしなさいよ」

「で、でも、でも……」

怒った親を目の前にした子供みたいに震えてる。あちやあ、そんなつもり無かったの

にねえ。

「落ち着きなさいって。別にあんたがエリートトレーナーだろうがコスプレイヤーだろうが気にしないっての」

「その、でも」

「だー！ やかましい！ なんか理由があるなら言ってみんさい！」

喝を入れる。ブルー起きてないわよね？ ……よし。

周囲の様子を確認。砂浜を歩いているから野生のポケモンが襲ってくる事はない。それで、夜に出歩く馬鹿はあたらぐらい。

「……」

「周りに誰も居ないわよ。まあ、言いたくないなら……後で二番から教えて貰うだけなんだけど」

「え、聞かないという選択肢じゃないんですかそこ」

「え!？」

ブルーの鋭い突っ込みが入る。ってかいつの間にか起きてたのこいつ。

「ブ〜〜ル！ あんたは寝てなさい！」

「ふぎやっ」

首筋の後ろに手刀（ただし羽）を叩き込む。これでよし。

「女の秘密を嗅ぎ回ろうとするボンクラは沈んだわ」

「あ、はい」

レナ、それはそれほど便利な言葉じゃ無いから。今は良いけど。

「さて、理由を吐いてもらおうじゃあないの？」

「……………」

「だから、別に誰かに言いふらしたりしないし、どんな理由であれ相当なものじゃない限りお別れなんてしないわよ」

そう言ってあげると、レナはうつむく。

「ちよつと、あんたの頭に乗ってるんだから急に動かれると危ないんだけど」

「え、あ、すみません。…………その、言わないと駄目です、か…………？」

「別に？」

「でも言わなかったら——」

「二番に聞くだけよ」

「ですよね……………だったら、自分で言います」

レナがブルを抱き直し、止まっていた足を動かし始める。

砂を踏む音が静かに響く。

「私はまだエリートトレーナーじゃありません。正確にはエリートトレーナー見習い

「……です。ですけど……ですから、エリートトレーナーを名乗るのは駄目なんです」

「ふーん。でもんなの気にしてるのいないでしょ?」

「……そうですかね……エリートトレーナーはあらゆるトレーナーの憧れの的なんです。だから私もエリートトレーナーを目指していたんです」

「へーえ」

「ただ、短パンこそうやじゆくがえりとは違ってエリートトレーナーとなるには厳しい審査があるんです」

「ほーう」

「……本当にちゃんと聞いてます?」

「はーん」

「メイコさん?」

勿論起きてるわよ。やっぱこのネタは鉄板よね。

「つーことはその審査とやらに?」

「落ちました」

「あらどんまい。んーで、心の傷をえぐって良いなら、理由を聞きたいんだけど」

「ええ。髪です」

「……ん? あ?」

あまりにもあつさりと言われたから、上手く聞き取れなかった。ええ、まさかそんな理由で落とされる訳無いわよね。

「悪いけどもう一回良いかしら？」

「髪です。髪が半端だと言われました」

聞き取れなかった訳でも聞き間違えた訳でもなかったわ。

「……………少し落ち着こうかしら。それ…髪長さ以外の審査は何があつたの？」

「ええと……………ポケモンについての知識、手持ちポケモンの実力、ポケモンバトルの腕前、ブリーダー能力、身体能力、スリーサイズ——」

「スリーサイズウ!？」

おっと、大声で（気絶させた）ブルルが起きるところだった。危ない危ない。

「はい。私も不思議に思っていましたけど、まあ範囲内でしたから気にしてませんでした……………よく考えたらそこで気付けたかもしれませんでしたけど」

「…なに、つまり、厳しいのは審査だけじゃなくて」

「エリートトレーナーとしての資格好まで決められていたんですよ。…専門の学校行ってたんですけどね……………聞き流していたのか、教えて貰ってなかったのか……………まあ、きつと、思い込みか勘違いしてたんですよ。アハハ……………馬鹿みたいですよね」

自虐的に笑うレナは、それはもう枯れ木のように折れそうで。

「それで、私と違って合格した同級生の顔を見ていられなくて、故郷から逃げ出して。でもやっぱりトレーナーの私がかんなのだから負け続けて。それでホドモエシティであなたたちと会って、ブルーさんの事を教えてもらって。最初は、別に興味が無かったんですけど……ってこれは前に話しましたね」

「そーね。会ってすぐ、だったかしら？ いやあ、懐かしいわね」

あれからどんだけの時間がたったのか——ってなに、せいぜい三ヶ月程度なの？ まじで？ 計算間違ってるじゃない？

「……まとめると。私は現在軽犯罪者で、無職で……嘘つきです。……こんなのに。こんなのに好きなんて言われて、挙げ句には着いてこられて、ブルーさんも迷惑してますよねきつと」

「……そうかしらねえ？」

「グレイキュラムのときだって、勝手に着いていったのにすぐに凍らされて何も出来なくて」

「あー、そうだったかしら」

「……。慰めはいららないですよ、メイコさん」

んなこと言われても。別に慰めてないし。

「はあいブルー、起きてる？」



……ふむ、まだ寝てるわね。

「しっかし、髪ねえ……まあツインロールにするには短かったってわけね。だったらその場で切ればいいのに」

「小さい頃からずつと伸ばしてきた自慢の髪です。切るなんて——」

「ふーん。……青いのは地毛？」

「はい。エリートトレーナーを指摘したのはそれもありません。『生まれつきエリートトレーナーになる運命なんだー』って子供の頃は思っていましたよ」

ここまで聞いて確信したわ。

こりや、あたしじゃ如何ともしがたいわね。あたしがどれだけ慰めても同情しても怒っても、レナの救いにはなり得ないわ。

と、なると。やっぱブルーがぼつきり切ってくれることを願うわ。

んで……あたしが今言えるのは、と考えたら。

「ま、軽犯罪者だろうと無職だろうと嘘つきだろうと。ここまで一緒に旅してたんだから今更見捨てたりしないわよ。……まあ、あんたが離れたいって言うんなら止めないけどね」

「……………」

「その判断をするのはあんたしか居ないわ。なんでであろうと、あたしは受け入れちゃう

からね」

そりゃあ旅の仲間が多い方が楽しい。けど、あたしとブールは転生者。気ままな二人旅が元々のスタイル。

「受け入れるん、ですか？ 私を？」

「受け入れてるでしょ？」

「……」

「ふわあ、眠い。頑張つてサザナミタウンまで歩いてね？」

「……、え？」

スパッと寝た。

## さざ波く女性たちの別荘地く

はい、ここはサザナミタウンだよ。ポケモンセンターで休憩中。

メイコさんたちに連れ去られたとはいえ、まだ全快していないしね。

それでね？

「マスコミが目の前を横切っていった……………」

「あたしからすれば事件ね。それも相当の」

「サザナミタウンは著名な方々のリゾート地ですから。マスコミもおいそれと手を出せないですよ」

ふうん。…………あれ、サザナミタウンってなんか嫌な思い出が…………あ。

「ん、どうしたの震えて」

「オンミヨーン…………オンミヨーン…………」

「レナ、これどうしたらいい？」

「さ、さあ？」

ゲームでのオンミヨーンが…………ぶんしんどくどくぶんしんぶんしん…………。

「つたく。ほら、そろそろ海渡ってセイガイハに行くわよ」

「そうですね、さうしましょう、さうしましょう、さうこんなところであれに会いたくなんかないです、行きましょう」

「……そこまで必死だとむしろ気になるわね」

「あはは……」

レナさん、けつこう笑い事じゃ無いんだよ。

「さて……ねえ、なんか視線を感じない？」

「はい？ 僕にはさっぱり」

「うーん……私もです」

「ふーん？ なら気のせいかしら」

メイコさんはベレー帽の上でキョロキョロしてる。

メイコさん。多少のズレなら気にしないけど、けつこうズレてるんだよ？

ベレー帽の位置を直す。インクだけどね。

「ねえ」

さてポケモンセンターから出ようとしたところで後ろから声をかけられる。

「あ、はい、なん」

固まった。メイコさんも動きを止めたしレナさんは失神しかけてる。

「サインくれるかしら？ それとちよつとポケモンの調整に付き合っただけ」

……」

うん、この人には会いたかったけど会いたくなかったよ。

流星に温暖地帯だから服装はラフなものだけど……長い金色の髪に、何かの黒い尻尾みたいな髪止め。スタイル抜群で見とれてしまうほど美人。

「どっちも断つちや駄目ですかシロナさん」

あ、レナさんが倒れた。泡吹いてるし。

かくいう俺も顔がひきつってるのが自分で分かる。

「え？ ま、まあ私も無理強い出来ないけど……ねえ、本当に駄目？」

「……………」

そこで上目遣いって、どこまで計算してやってるのこの人。

「メイコさん、どうします？」

「アン？ まずは慌てたらどーよ。なんかあんたらしくくないわよ、やけに冷静なのは」

「成る程。……れ、れれれられ、レナさーん!？」

~~~~~

「う、ううん……あれ？」

「大丈夫?」

「……し、しろろなららん!? は、はははひ、はい!」

レナさん、シロナさんを目の前にしてこの慌てよう。全然大丈夫に見えないんだけど。

ちなみにここはシロナさんの別荘。けっこう汚ない。

「そう、それならよかったわ♪ で、ブル君。さっきの話は——」

「やります。さっきはちよつとビックリしただけですから……代わりに、このボールにサイン書けますか?」

「あら、良いわよ?」

ハッサンが入ってるモンスターボールを渡す。

するとシロナさんは胸元からペンを取りだし——つて

「し、シロナさん! それ万年筆! ボール削れちゃう!」

「え……あ、あらあ、ごめんなさい。つい癖で……」

「そーいや天然気質なんだったわね……」

メイコさん、その眩きが聞こえてなくて良かったね……ほこされるよ?

「あー? ブールなんか言った?」

「ううん。はい、シロナさん。サインどうぞ」

「わあ、ありがとう！ ……上手ねえ」

「まあドーブルですから」

「そうだったわね。テレビでたまに見てるわ♪」

「ありがとうございます」

ぐつ、駄目だ緊張する。え、待つて今更だけどこの人シンオウ地方のチャンピオンだよね。

「え、とあ、ん、そ、その」

「ん？」

「その、ば、そう、バトルしましょう！」

んあああああああ！ 俺はバトルジャンキーかよ!?

「ぶっはあ！ あははははは！ ブウルウ！ 緊張しまくってるわねえ!? あはひやひや

ひやひや！ は、はら、腹痛い〜！」

ぐ、むぐぐ、うぐぐぐ……。

「メイコさん笑いすぎですよ……ほら、ブルさんの顔が真っ赤に……真っ赤に……ぐ、黒になつてます!?!」

「うひやあ!?! べ、ベレー帽が黒に！」

「あ、あら？」

良いよ、良いさ。やってやるやってやるやってやる！

「バトルだ！ ヤツテヤルヨ！」

「緊張で暴走してる!？」

チャンピオンの余裕く電話にバトルく

「いけっ、ハッサ——」

プルルルル プルルルル プルルルル

「あ、プール。そういちろうさんからよ」

「え!?!」

何て言うかこのタイミングで!?

「あー、すいませんちよつと待ってて下さいシロナさん」

「ええ、良いわよ」

ニツコリと笑いかけられる。

後ろを向き、ホログラム通信に出る。

あ、voice onlyだ。

「はい、プールです」

『おお、やつと繋がったか! すまないプール、どうにも俺は機械が苦手な……通信出来るまでこんなにかかっちゃまった!』

「お父さん……ちゃんとカロスに戻れたんだね」

『当然だろ。俺はお前のちちお『ブル、ブル!』『生きてるんでしようね!』『キリ!ケン! お父さんの邪魔になってるでしょ!』おいおいお前ら……』

ホログラムがガンガンぶれる。

「カラお姉ちゃんキリお姉ちゃんケンお兄ちゃん……元気そうで良かったよ。……クルお兄ちゃんは?」

『……良かった。忘れられたのかと』

「あはは、まさか。むしろ僕の事を忘れてないか心配だったよ」

『……。……実はちよつと——』

「え? ちよつと……何?」

『なんでもない』

なんでもなくないよね!?

『クル! 速く変わりなさいよ!』『……』『ふん、それでいいのよ、それで』

「キリお姉ちゃん、虐めは良くないよ」

『い、虐めじゃないわよ!?! ……速く帰ってきなさい、良いわね? そしたらわたしがボ

コボコにしてあげるわ!』

「出来るといいねー」

『ムキー!!!』

ドタンバタンと暴れる音。

『はいはいキリ姉ちゃんは落ち着いてねー。暴れなーい暴れなーい。ブル、姉ちゃんを怒らせないでよ……』

「あー、ごめんなさい」

『まったく。……ちゃんと帰ってこいよ?』

「分かってるよ」

おお、ケンお兄ちゃんがお兄ちゃんっぽい。

『はい、カラ姉ちゃん』『うん。ぶ、ブル? カラです。元気? 怪我してない? あ

と、えつと、えつとお……』

「大丈夫だよ、カラお姉ちゃん。そつちこそ病気とかしてない? キリお姉ちゃんに虐

められてない?」

『そ、その、病気はしてないわ、よ』

「虐められてるんだ……」

『あーあーあー!!? 大丈夫大丈夫されてないされてないわよ!!?』

「あはは。……元気なら良いんだよ。大丈夫。ちゃんと帰るから、ね」

『うん。——でも、その言葉を聞きたいのは、私じゃないの』

「え? ……ああ」

「そうだ。まだ一人、話してないね。」

『あ、お父さん……はい』『おう。……ブルー』

「うん。お母さんは？」

『あ……ちよつと、その、病気で、声が出せないんだ』

「病気!?! そ、え、だ、大丈夫なの!?! 風邪!?! 熱!?! それとも……」

『落ち着け、命に関わるような危ないやつじゃない。だから声だけでも聞かせてやってくれ』

「分かった。お母さんは？」

『ちよつと待て——』

——長い。移動が長い。それともそう感じるだけ？

『シリル。ブルーから電話だ』

「お父さんへの返事はない。そ、そんなに酷い病気なの？」

『ブルー、良いぞ』

「あ……お母さん! お母さん!?!」

あ……つと、お母さん病気なんだから大声は駄目かな。

「お母さん、僕だよ。ブルーだよ。その……僕は元気だよ。だから、ええと、ありきたりだけど、元気になってね」

『……ブール?』

小さいけど、お母さんの声だ。掠れてるけど、聞き間違えないよ。

「うん。そうだよお母さん」

『ブール?』

「うん」

『本当に、ブール、なの?』

「偽物の僕でも居るの?」

『ブール……ブール……! 良かった……死んでしまったのかと……良かった……!』

「死なないよ!」

あ、そっか。お母さんから見たら急に自分の子供がどこかに連れていかれたみたいに……。

「うん……ごめんなさい。速く連絡しておけば良かったね」

『良かった……』

ブツッ

「へ?」

「通話……切れましたね」

「充電? 通信障害? ……つたく、いいところだったのに」

ん……でも、まあ、きつと大丈夫。だって生きてればまた会えるし。

「さて。すいませんシロナさん、遅くなりました」

「いいのいいの。正直、ドブドブとしか聞こえてなかったし、ね」

なんで残念そうな顔するの……？

「……んじゃあ、外に行きましようか。流石に家の中じゃポケモンバトル出来ないでしよっ」

「そうですね……ブルーさん、し、シロナさん」

「うん！」

「ええ！」

～○○○○○○○○○○

サザナミタウンのバトルフィールド。

ブルーとシロナが向かい合う。

「いつて、クーリャン！」

「ハツサン！」

シロナが出したのはグレイシア。ん……耳で上手く隠してるけど、スカーフを着けて

るわね。

「クーリヤン、ねえ……」

「メイコさん、どう見ます?」

レナが聞いてくる。

「んなのブールの負けに決まってるでしょ」

「え?」

「見てりや分かるわよ」

火を見るより明らかだけどね。

「クーリヤン、『れいとうビーム』!」

「ハッサン避けて『ふるいたてる』!」

「グゥ、ルゥゥ」

「バウツ」

ハッサンが横に跳ぶが、その足を『れいとうビーム』がかする。

「バウツ!」

「ハッサン!」

結果、足の一部が凍り、滑って転倒。

そしてシロナはその隙を見逃すようなトレーナーじゃないわ。

「クーリヤン、『れいとうビーム』！」

「ルル〜〜！」

ハッサンが一瞬で凍る。どうみても戦闘不能ね。

「く……戻って、ハッサン」

「そんな、ハッサンがあんなにあつきり……！」

レナは有り得ないものを見たような顔してるけど……。

「ま、想定内ね。グレーキュレムとやりあつてから一度もバトルしてないんだもの。そ

れに加えてハッサンは進化したばかり。動きが鈍るのも当然」

「そう、ですか……」

納得いかない？ そういうものよ。

さて、ブルルは次に誰を選ぶのかしら。

「ギイカ！ お願ひ！」

「ギツガアアアア！」

ふーん。

「そう……『れいとうビーム』！」

「『まもる』！」

一回は止めた。次は……

「『れいとうビーム』！」

「『じしん』！」

スカーフのグレイシア……もとい、クーリヤンの方が速い。

だけど、ギイカは特性で一撃は必ず堪える。

『じしん』がクーリヤンに当たる。

「……。まさかクーリヤンを一撃だなんて……なかなかやるわね」

「やられっぱなしじゃカッコ悪いですしね！」

うんうん、ブルも調子が戻ってきてるわね。さっきはバカみたいに緊張しまくってたしね。

「なら……行つて、ハート」

出てきたのはトゲキツス。……トゲ白キツス悪魔!?

「うげえ!」

「行くわよ! 『エアスラッシュ』！」

「『うちおとす』！」

あー。

まあ、すばやさの差があるからね。

しかもさつき限界まで削られたし……。

「……まあ、仕方無いよ。ありがとうギイカ」

ギイカは倒れた。と、なると次はどうするのかしら。

てかシロナ、あんた誰にウインクしてるのよ。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「さあ、次はどうするのかしら？」

「……………」

残りの手持ちはペティとレイカ。そして相手はハートこと、トゲキツス。さつき『エ
アスラツシュ』使ってきたってことは……となると……。

「レイカ！」

ペティじゃ少し荷が重い。

「ナツトレイ……？」

「ナツトレイですよ。色違いですけど」

触手がピンク色になってるんだよね。普通は緑。

「へえ……可愛いわね♪」

「ナトウツ!？」

レイカが触手をうねうねさせる。あー……照れてる？

「でも手加減はしないわ!　ハート、『でんじは』!」

「レイカ『10まんボルト』!」

ひこうタイプ入ってたよね!

フィールドを電気が飛び交う。……流石に耐えるか。

「『ジャイロボール』!」

「『エアスラッシュ』よ!」

レイカが回転を始める。

けど、運が悪く『エアスラッシュ』が目元にあたり、怯んでしまう。

「ぐ……レイカ、もう一度!」

「そういうの嫌いじゃないわ……だけどゴメンネ!『だいもんじ』!」

「なっ!？」

大の字に広がった炎がレイカを包む。

レイカの回転が、止まる。

「ナツ………トウ………」

はがね、くさタイプのレイカにほのおの技は凄く辛い。

具体的には普通の四倍のダメージが入る。

「……大丈夫、後はペティが何とかしてくれるよ」

「ナツ、トウ……」

レイカをボールに戻す。

「ペティ！」

「……ペアギユ」

あれ……なんか元気無いね。

「ペティ？」

「……」

な、なに？ 無言でこっち見てこないでよ……怖いから。

俺、何かしたっけ？

「あらあら……」

「つつく」

「ブルルさん……」

シロナさんは頬に手を当ててるし、メイコさんは見てられないとばかりに首を振ってる。
レナさんは願い事でもするかのように、心配そうに、手を組んでこっちを見ている。

「……ええと……ペティ、頑張つてね！」

「ペアギユウ」

溜め息をつかれた。地味に……辛いです。

「準備はできたかしら？」

「あ、はい。（多分）大丈夫です！」

「なら。ハート『エアスラッシュ』！」

「避けて『どくどく』！」

飛んでくる風の刃はステップでかわされ、毒の塊が白い羽毛に当たる。

「へえ……あれを避けるのね……」

「ペティ！」

「ペア……ギユウ——アアアアア！」

うつわペティなに怒ってるの!?

「『でんじは』！」

「『ベノムシヨック』！」

パリパリした電気が、紫の電流とぶつかりあい弾きあう。

「もう一度よ！」

「まだまだ！」

でんきタイプポケモンが居ないのに電気が場を支配する。

「もう一度！」

お互い譲らない。

弾けて、打ち消しあつて、当たらない。

そして。

「つ、きた！ 『ベノムシヨック』からの『メガホーン』そして『おいうち』！」

こつちが先に戦術せめにはいるを変える。

「迎え撃つて！ 『だいまんじ』！」

シロナさんが指示をだす。

が、遅い。『かそく』してなおかつマヒ状態になっていないペティには遅すぎる！

「やれえ！」

「ペアギユウアアアアアア！」

紫電を走らせ、角を光らせる。

飛び上がり、『でんげきをあびせる』。

そして『つのをたたきつける』。

「とどめえ！」

最後に踏みつけ、高々と跳躍。着地。
ハートは地面に落ちる。

「……」

「……」

瞬間の静寂。

「ありがとう、ハート」

シロナさんがハートをボールに戻す。

「調整に付き合ってくれてありがとうね、ブルー君♪」

「……………それは……………つまり……………」

「勝つ、た？」

お話～友好度上昇イベント的なあれ～

喜びいさんでペティの元まで走る。

「勝った、勝ったよペティ！ ……ペティ？」

なんだか、様子がおかしい。

「ペアギユアアア」

勝手にボールの中に……。

「……ペティ？」

「ボール。あんまりにも酷いバトルだったから、セイガイハに行く前に特訓ね」

「メイコさん!？」

いやまあ、良いんだけどさ。

「ブル君、ちよつと良いかしら？」

「なんですかシロナさん」

「その、もしかしたらお節介かもしれないけど、一度貴方のポケモンたちと……そう、お話しの方が良いと思うわ」

……なんでそんな困った顔なんだろう。

「それじゃあ、しばらくの間よろしくね♪」
ん？ え？

〜〇〜〇〜〇〜〇〜

はいはい、安定と信頼のメイコさんよ。

ここはシロナの別荘。ここで少しの間泊まらせてもらうことになったわ。つたく、面倒臭くなったわねえ……それも全てブルが悪い。

と、言いたいんだけど。あたしが少し手出しすぎたかも知れないわね……。

「メイコ殿。このソファア、中々のモコモコ具合だぞ」

「くそひつくい渋い声で何ぬかしてんのよじしいぬ爺犬」

「爺犬!？」

爺犬以外のなんなのよ。

「そんな爺犬してるからあの程度の攻撃避けられないのよ」

「ウグルルル……」

「つたく。……ん、ブルね。んじゃあちゃんと話し合いなさいよ」

「分かってる……バフツ」

ブルーと入れ違いに部屋の外へ。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

別荘の中には居なかったから、外へ。

「はあいギイカ、何してんの？」

「あ、メイコ。見ての通り特訓」

「……………身体を上下に動かしてる様にしか見えないわね。」

「それ、なんか意味あんの？」

「バトルの時に自分の身体を動かせなくならないようにするの」

「ふーん。意外と考えてんのね」

「意外とって何よ」

「だってあんた…………いや、やっぱ何でも無いわ」

自力で特訓とかする脳筋じゃない。♀だけど。

「おっと、ブルーね。そんじゃ」

「え？」

バサバサと大空へ行ってみる。うーん…………お、見覚えのあるピンクの触手ね。



波打ち際に降り立つ。

「ん……メイコやん。どうしたんだい？」

「やんって何よ『やん』って」

「クーリヤンちゃんに関西弁っちうのを教わったんよ」

「元に戻しなさい。今すぐに」

「えー、あたい関西弁気に入ったのに」

「あんたねえ……そうだ、ブールの事どう思う？」

レイカは四匹の中で一番最後に仲間になったから、ある意味一番客観的にブールの事
を見てる……筈。

「ん、え、恋ばな？ んー、付き合うにはちよつと子供っぽいかな」

「そうねえ、実際子供だし……ってちがぁう！」

「おお、まさか、それは、ノリツツコミ！」

何この生き物。クーリヤンにキャラぶらされすぎでしょ。

「……あー、ほら、あたいってあの洞窟から出た事無かったからさ。見るもの全部新鮮な

んだ。そーゆー意味では、うん、そう、ブルさんには感謝してるよ」
「へえ」

成る程、そういう見方もあるのね。

「あ！ メイコさーん！ レイカーー！」

おっと。まだよ、まだ。イベントのボスキャラのように逃げまくらせて頂くわ。

～○○○○○○○○○○

「んー……何処にー……行つたのー……かしらねー……」

ここのいらー帯のどっかに要る居る筈なん、だ、けど、つて！

「鬱陶しいわキャモメどもおー！」

キヤークワー

『ばくおんぱ』を放つ。

つたく。あたしがそんなに珍しい？……いや珍しいに決まってるでしょうが。

「ん？ めーつけ」

紫の物体目掛けて急降下。角ツノの間に降り立つ。

……角っていうより、触角なんだけどね。

「あんたよくもまあこんな崖の上まで登れたわね？」

「あらメイコ。この程度なら……ビリジオン様に習った登り方でどうにかなるわよ」

「ふうん……ビリジオン？」

「ええ」

ビリジオン……つて……ええと……。

「ま、いいわ」

「知らないの？」

「知ってるわよ？ 思い出せないだけ。今必要な情報でも無いしね」

「あらそう」

大人っぽいのよねえ……凄く『大人のおねえさん』してるのよねえ……普段は。

「ねー、バトルの時に性格変わるのどうにかなんない？ あのトゲキツスもちよつと顔

ひきつつてたわよ？」

「……何の話かしら？」

こいつ……。わざわざ明後日の方向向いて……。

「……はあ。つたく。ねえ、ブルとあんたら……なんつうの？ ズレ、みたいなのつ

て何が原因だと思う？」

「そうねえ……ヒトと、その他のポケモンとの違い……みたいなの？」

「そんなもんよねえ」

「後は、目標の相違、かしらね」

目標の相違ねえ……。。

「バトル中もそれぐらい聡明なら良いんだけどねえ？」

「もう、言わないで」

バウツバウツくハッサンのターン！く

「んむ……」

俺の仲間たち……ハッサン、ペティ、ギイカ、レイカはメイコさんとシロナさんに任せである。

あのバトルの最後、シロナさんに言われた言葉が頭から離れない。

『一度貴方のポケモンたちとお話した方が良いと思う』——か。

「はむ」

考えてみれば、短い間に色々な事が詰め込まれたなあ。

この世界に産まれて、その後三日で別の地方に飛ばされて。アララギ博士にトレーナーにさせられて。

ハッサンと出会って、ギイカと出会って、ペティと出会って、レイカと出会って。

短い間だけど、あのNさんと旅したし、レナさんと一緒に旅をしている。お父さんと再開も出来た。

レ、レナさんに、告白された、し。

——良いことだけじゃ無かったけど。

Nさんと別れた。メイコさんが捕まった時もある。グレーキュレムとのバトルはまだ生々しい記憶だ。

「……………」ゴク

あ、ハッサンは進化したんだから動きが変わってるか。

ギイカは今のままで強いよね。

レイカは技構成を変えてみようかな。そうだな、いわゆる『受け』にしてみる？

……技、か。ペティは『おいうち』を『いわおとし』にしてみる？ 多分そっちのが使いやすいし。

つまり、そういうことなのかな？ 分からないけど、分からないなりに答えは出た。

「ごちそうさまでしたー。よっし、それじゃあ行くかな」

まずはハッサンの所へ。

くくくくくくくくくく

「ハッサンー、うわつと」

部屋の扉を開けると、メイコさんが飛んでいった。

んー、なんだ？ なんか違和感を感じたけど……いつか。

「ハッサン、元気になった？」

「バフツ」

うん、立派にお爺ちゃんになってるね。威風堂々、みたいな。

「バウツ？」

「んー……その、ハッサンはさ」

あれ、何を言おう？ 喋るのってこんなに難しかったつけ。

「その……進化したから、前と同じには動けないよね。どうしたい？」

「バウ？ バフツバウバウ」

「え？」

「バウウ」

……あれ、なんとなく言葉が分かる。

「つまり、僕に任せる……って？」

「バウツ！」

そっか。でもそう言われるとなあ。

「せめて動きたいか動きたくないかくらい教えてよ」

「バウ……バフツバウ」

「速く動くのは難しい？」

「バウ……」

そっか。となると……

「無理じゃない範囲でどこまで動けるか確認しなきゃね。技を変えるかどうかはその後でも大丈夫だよな?」

「バフツ!」

頭を撫でてあげる。あゝ毛がフサフサだゝ気持ちいい。

「バウツバウツ……バウウ?」

何か心配そうにハッサンが聞いてくる。んつと、えー、ハッサンについて僕がどう思ってるのか、かな?

そんなの決まってる。

「ハッサンは一番の相棒だよ。最初から、ずっとね」

「——バウツ!」

「うわっあははっ」

ハッサンがのしかかって、顔を舐めてくる。重い。

けど、見た目が変わってもハッサンなんだなあって思えた。

きつとそれだけで充分なんだろう。……きつとね。

……違ったらどうしよう。大丈夫だよな?

「
バ
ウ
ッ
！」

ギツツツツガア!~ギイカのターン!~

「それじゃあ、行こっか」

「バウツ」

ハッサンに乗って移動開始。ハッサンにはあらかじめギイカ、レイカ、ペティたちのうち近い所から立ち寄るように伝えてある。自分で探すより速いしね。

「……あ、ギイカだ。ハッサン」

「バウ」

ギイカは近くの広場に居た。朝早くでも無いのに周りに人は居ない。

ハッサンがゆっくりギイカのそばに歩いていく。

っていうかギイカ何してるんだろう。何処かに向かって歩いてるみたいだけど。

「おっいギイカ! 何してるの?」

「ギツガア? ギガギガア………ギツガアアアア!」

ギイカは立ち止まって俺たちが追い付くのを待ってくれる。少しも経たず、追い付く。

「よつと。ハッサン、ありがとう」

「ウバウツ」

ハッサンをボールに戻す。次はギイカによじ登る。

「ギガ？」

「散歩かな？ 一緒に行こうよ」

「ギ……ギガツギツガア！」

あれ、怒っっちゃったつたつとうつ!?

「うわつとと……振り落とさなくても良いじゃん」

「ギガアアアアア！」

「え、ちよ、うわつ！」

急に『パワージエム』を撃ってきた。とつさに横に転がってかわす。

「ギイカ！ ストツプ！ 待ってつてうわつ！」

今度は『うちおとす』を連射。ぐつ、流石に避けきれない……。

「いたつ！」

顔面に岩石が当たる。頭が揺さぶられて動きが止まる。

——そのまま『うちおとす』で蜂の巣にされた。

しかもぶつ倒れた俺の上に足を乗せてきた。

「むぎゆう……酷いよギイカ……」

「ギガ」

ドストドスツと何度か踏まれる。お、重いよ、ギイカ。

「ギガア……!」

暫くして、やつとどいてくれた。

立ち上がり、服に着的いた砂を払い、ギイカと向かい合い、

ギイカが発光していた。

「つ!?!」

嫌な悪寒が走り横に飛び退る。

一瞬前まで立っていた場所を凝縮された『パワージエム』が通りすぎ、轟音と共に広場が弾け飛ぶ。

「ちよつギイカ! 危ないじゃん! 近くに人が居たらどうするの!」

「ギガア!」

こっこの言葉も聞かずに、ギイカは片足を踏み鳴らして『じしん』を起こす。

「うわつとつだから近所迷惑なんだよ! それ以上は怒るよ!」

「ギツガア? ギガギガアツ!」

足を踏み鳴らして挑発してくる。

「……なら僕が直々に止める！」

ボールが付いているベルトを外して放り投げる。

『へんしん』を溶き、即座に走り出す。

「先手必勝！ 『アクアテール』！」

「ギガッ！」

尻尾がギイカに当たる前に青いバリアに阻まれた。

だけどさ。

「ここまで近付かれたら何も出来ないでしょー！」

インクの色は茶色！

「『マッドシヨツ——』」

ふと、凍ったギイカの姿が頭の中をよぎった。

「ギガッ！」

「うぐふうっ！」

鳩尾に『うちおとす』がめり込み、技の効果で地面に落とされる。

なんで今このタイミングで。さっきのシロナさんとのバトルではそんなこと無かったのに。

「う、ぐう……」

「ギガア? ギガギガアツギツガアアアア!」

あ、なんか体が重い。なんでか分からないけど動けない。

「ねえギイカ」

「…ギガ?」

「僕の負け。動けないや。だけど他人に迷惑かけるような事はしちや駄目だよ」

「……ガ? ギツガア?」

あ、そういえば……ギイカって俺に負けたから仲間になったんだっけ。俺に勝ちたいが為だけに自力で進化までしたんだよね。

ってことは、俺に勝ったから、仲間である必要が無い?

「ギガア、ギツガア? ……ギガツギガアツ!」

「……あ、何とか起き上がれそう」

足が震えてる。呼吸が辛い。……無いとは、思うけど。聞いてみる?

「ギイカ、僕に勝ったけど……まだ一緒に居てくれるよね?」

「ガ? ギガア。……ギガツ、ギガガア」

「そっか。良かった」

まだ一緒に居てくれるみたいだ。

ナットウ……～レイカのターン!～

「ごめんってハッサン。僕が悪かったからさ」

「ウバウツ!」

うーん、怒ってる。どうしよう。

「ほら、オボンのみあげるから」

「……」

今耳がピクツて。ちよつとピクツてしたよね?

「……オボンとオレン」

「……」

ちらつちらつとこつちを見てくる。

「……それとメコブのみ」

「バウツ!」

じゃれついてくる。もー、いつの間にそんな腹芸覚えたの?

「それじゃ行こうか。うーん……もう町中には居ない?」

「スンスン……バウツ」

「そっか、じゃあ海岸にでも行ってみよう」

サザナミタウンは海の町。海岸も広いから、誰か居る可能性はあるよね。

つてことで海岸沿いに歩く。ギイカはボールに戻してある。水は苦手だろうし、悪いけど歩くの遅いし。

「あつメイコさん——行っちゃった」

メイコさんは何してるんだろう。レイカと喋ってたみたいだけど、俺を見た瞬間どつか飛んで行っちゃったし。

「……今度は気付かれないようにしてみよう、うん」

「ナットウ?」

それよりレイカだよね。

……でも正直、レイカって良く分からないんだよね。ナットウとしか喋らないし、表情が無い——つてそれはギイカも同じじゃん。分かるじゃん。

「あー、レイカって僕の事どう思ってる?」

「ナット!!? ……ナツ……ナットナツ……トウ……」

そつぽを向かれた。そ、そんなに嫌われてるの……!?

「ナツ……ナツ……ナツ……ナツ……!」

うっわ、『パワーウィップ』を砂浜に叩き付けてる。これはショックだな……そっかあ

……嫌われてるんじゃないなあ……。

「バウ」

「うーん。いやでも、レイカ」

「ナットツ？」

「僕を嫌ってても良いから、いや良くないけど——強くなりたくない？」

「ナツナットツ？ ナツナットツ、ナットウ!？」

「なりたいたいよね。ただね？技を変えて持ち物を持つだけなんだけど、かなり……イヤらしい技を覚える事になるんだ」

「ナットウ？」

「具体的には、『やどりぎのたね』『まもる』『ステルスロック』『パワーウィップ』。持ち物はゴツゴツメットかたべのこし」

「岩残して『やどりぎのたね』と『まもる』で時間稼ぎ。そしてたまに『パワーウィップ』。」

……アタッカーを捨てて完全にサポートに回る感じになる。

「もちろん、嫌なら違うのを考えるけど……」

「ナットウ！」

「触手がウネウネと俺の肩を叩いてくる。えっと、これで良い、のかな？」

「良いならそれで早速……と言いたいんだけど。メイコさんに色々貰わないといけないからね」

「ナトツ？ ナトツナトツナトツウ！」

レイカが元気に動き出す。そんなに素早くないけど、なんていうか無邪気で楽しそう。

「あはは、待ってよレイカ」

「ナトツウ……」

急にレイカのテンションが下がった。うーん。やっぱり良く分かんないや。

ペアギユアアアツ!～ペティのターン!～

「……居ないんだけど」

「バウツ」

一通りサザナミタウンを見て回ったけど、ペティが居ない。海岸には居なかったし、ポケモンセンターとかフレンドリイシヨップ、シロナさんの別荘にも居なかった。

「どこ行っただら……メイコさんも見当たらないし」「バウツバウツ」

「ハッサン、何か見つけたの?」

「クウウン……」

あ、違うんだ。ただの相づちだったみたい。

「いつそのこと、夕飯まで無視してみるのも良いかな……」

『へんしん』を溶いて上から探すっていうのも方法の一つではあるけど、そろそろお昼だから人が見てるんだよね。この場所なら大丈夫だとは思うけど。

「……っていうかテレビでそこそこ騒がれたし、最低限イツシユ地方なら結構有名なんだよね、僕」

「バウ?」

「つまりここで『へんしん』したところで誰も驚かないんじゃないや……いやいやいややっぱ止めとこ」

「バウツ」

さて、じゃあちよつと戻るかな。ハッサン、移動お願いね。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

えつと……。

「ペテイ、ちよつと現状把握していい？」

「ペアギユ」

オツケー。

まず、さつきシロナさんの別荘に戻った。これはオツケー。

次、なんか疲れてたから寝転がった。これもオツケー。

その時レナさんに膝枕してもらった。……オツケーオツケー。

そして、今。起きたらペテイに啜えられて何処かに連れ去られている――

「オツケーじゃない!」

「ペアギユ?」

「うひゃあつ」

ペティ首かしげないで落とされそうで凄く怖いよ!?

「ペアギユ、ペアギユ」

「ひいつ、うわつ」

だからって顔かないで〜!

「ち、ちなみに、ど、何処に向かっているの?」

「……ペアギユ」

『ペアギユ』じゃ分かんないって。

まあ、寝起きというのもあってそれ以上の反抗はしないけど。

そうしてたまに落とされそうになりながら数分後。

「ここは……『思索の原』……!?!」

「ペアギユアアアアア!」

ど、どういいうこと!?! 確か『思索の原』ってヤグルマの森からしか行けないんじゃないかな

いの!?!

『いいえ。森は繋がっているのです』

そんな声と共にビリジオンが姿を現わす。

『お久し振りですね、ボール』

「……喋れたんですね。お久し振りです」

『いえ、これはテレパシーです』

「うん、まあ、正直どつちでも良いです」

何だかんだで喋れるポケモンは居る（はずだ）し、準伝説ともなればテレパシーはデフォルトで付いてる能力だろう。ルカリオだって出来るし。

「それで……ペティ、どうしてここに？」

「ペアギユアア。ペアギユ……ペアギユアアアアアア！」

『……成る程、話は分かりました。……しかし……貴女がそうなるのも中々珍しい。ふふっ』

「ペアギユ……」

おお……ビリジオンの笑い声とか、ペティのたじろいだ姿とか、レアだ。SRだ。『ではボール、新たにこの草笛を授けましょう』

「あ……ありがとうございます。……その」

『分かっていきます。悪しき者に奪われたのでしょうか？ 貴方の責任ではありません』

「……そう言ってもらえるとありがたいです」

『その伝説のポケモンが何体居ると思ってるのです?』

「え……」

『それに貴方は、人間ならば一目見ることすらできない私に出会っています。それも二回』

「……は笑うべきなのかな？」

「使いませんよ。本当に必要な時以外は」

『………その本当に必要な時、とは?』

「俺の仲間に手を出した時」

レナさんとか、メイコさんとか、ハッサン、ペティ、ギイカ、レイカ、他にも居る。

俺が本気で怒った時、『ブラッディモード』を使わないとは言いつれぬ。だから、そこまでは約束しない。

『……『ブラッディモード』は貴方を蝕むしばみます。出来る限り使わないように。でなければ

ゴウツと風が吹き、次の瞬間にはビリジオンは居なくなっていた。

「……帰ろう、ペティ」

「ペアギユアア」

「うわっ」

ペティがのしかかってきた。そのまま、暫く一緒に遊ぶ。たまにはこんな事もしないと、息が詰まっちゃうよね。

——でなければ、死にます。

「それで皆を助けられるなら、それでも良いよ」

ビリジオンの最後の言葉に、小さな声で言い返す。

「ペアギユ?」

「ん? どうしたどうした? もっと掛かってきなよ!」

「ペアギユアアアアア!」

『思索の原』に笑い声が響いた。

旅の再開くえ、あたしのターンは？く

「……もう行くのね？」

「はい。この一週間お世話になりました」

深々と頭を下げる。シロナさんには本当にお世話になったよ。毎日のようにポケモンバトルに付き合ってもらって、何処がおかしいとかこういう時にはこんな指示が良いとか、色々な事を教えてもらった。

……結局、シロナさんのポケモン一匹を倒すのに精一杯だったけど。

「袖すり合うも多少の縁えんって言うものね。こっちこそ、家のお掃除とか手伝ってもらっちゃったしね」

「ほーんと、あれは疲れたわ。よくもまああそこまで汚せたものね」

「メ、メイコさん……言い過ぎですよ」

「いーのよレナ。こう言うのはグサグサ心に突き刺さる程度がちょうど良いのよ」

そ、そうなの？———というかメイコさん鳥なのに掃除出来たの？

「あ、あはは……ま、まあこれからはちゃんとするわ」

「どーだか」

「そ、それじゃあ、さよなら! 今度会った時は勝ちますからね!」

「ふふ、待つてるわ」

さあ、もう振り返らない。向かうはセイガイハシティ!

~~~~~

と、意気込んだのは良いんだけど。

「えーと……プールさん。どうするんですか?」

「うん……うーん」

目の前には海。マリンチューブは……建設途中だつて。

つまり、セイガイハシティに行くには海を渡るか山を越えるかしなくちゃいけない。

いけないんだけど……。

「あたしは嫌よ。飛ぶなら自力で飛んでちよーだい」

「それか……海を渡る方法を考えますか?」

とはいっても海を渡れるポケモンは居ない。ハッサンには少しばかり荷が重いし、ギイカは無理。ペティは泳げないだろうし、レイカは……溺れるよね。はがねタイプだし。

「となると飛ぶ？　僕は普通に『そらをとぶ』して、レナさんはサナの『サイコキネシス』で浮かんで」

「ところで、セイガイハにジムがある前提でこれまで話してきたけど、本当にあるの？」

——メイコさんそれ今までの話あらかた覆るくつがえるんだけど!?

ピロンッ

『セイガイハシテイにポケモンジムは存在します』

あ、二番さん久し振り。ここぞと言ったタイミングで出てくるね。

「えーと、ジムはあるらしいね」

ピロンッ

『ただし、田舎すぎて今のところチャレンジャーが居ません』

「……」

「ほ、ほらブルさん！　ブルさんが最初のチャレンジャーになれるかもしれないって事ですよ！」

レナさん……その前向きさに救われるよ。

「うん……じゃあ、まずは船を誰かに借りよっか」

「それが妥当ね」

とはいっても、そんな都合よく船なんて無いし……。

「それなら。その……私の両親に頼みますか？」

「え？」

「私の家が隣町にあるんです。私のお母さんは顔が広いから、もしかしたら……」

ふーん。レナさんの両親かあ……どんな人たちなんだろ。

「うん、他に案は無いしそうしょっか！」



## エリートトトレナーの里帰り〜彼氏を添えて〜

レナさんの故郷へ向けて南下していく。あれ、そう言えばサザナミタウンの下つて……。

「その、レナさんの故郷ってどんな所なの？」

「えつとですね。ビルやマンションが建ち並んでいて——」

あー、ブラックシティか。

「大きな木が絡み付いてます」

「へーそつか……ちよつと訳が分からないかな」

「ですよね」

え、待つてブラックシティじゃないの？ 『巨大なビルが建ち並んでいる』っていうのはブラックシティの特徴だけど……『大きな木』っていうのはホワイトフォレストの特徴だし……。

「ドーユー名前よ、あんたの故郷」

メイコさんが尋ねる。ああ、たまにメイコさんのそういう無遠慮なところが格好よく見える。

「グレールインズです」

「ふーん。ブル、お仕置きね」

「え？ ふぎやつ！」

頭をつつかれた……痛いな……。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

歩くことかなり。いやまあ、歩いた距離自体はそんなでも無かったんだけど、なんかトレーナーたちとのポケモンバトルに時間がかかったんだよね。

イツシユに居ないポケモンも繰り出してきたけど、これぐらいはまあ何とか出来ない  
とね。

「ん、この先です」

いつもは一歩下がっているレナさんも、少し興奮したように前を歩く。まあ、そりゃ、  
故郷に帰るんだし当然か。

「うーわ、ボロい看板ね」

「あはは……森に囲まれてる秘境みたいな町ですからね」

ボロボロの木の看板。なにになに……『この先グレ——インズ。途——つてくるヤ——

「ノヤ——ン——に注意!!」

ボロボロすぎて所々読めない。途……なんだろう。あんとか『ヤなんとらノ』とか『なんとかン』に注意しろって書いてあるけど……。

「レナさん。これってどういう事?」

「それはですね、ちよつと育ちすぎちやつた野生のポケモンに気をつけてくださいって事です。基本的に皆優しいんですけど中には気性が荒いポケモンも居ますから」

「ふーん」

ま、大抵のポケモンなら大丈夫でしょ。

~~~~~

「うおわっ! ペティ『いわなだれ』!」

「ペアギユアツ!」

ペティが鳴くと、宙に大量の岩が現れる。

「グオオオオオツ!」

重力に従って落ち、ボーマンダが一匹埋もれた。

———けど残り三匹もいる!

「あーもうなんでボーマンダが群れで襲ってくるの!? ペティ戻れ! レイカ!」
「ナツトウ!」

しまった、『かえんほうしゃ』は来ないよね?!

「ゴオウツ!」

「よっし『りゆうのいぶき』! レイカ、『やどりぎのたね』!」

「ナツナツナツ……!」

よーし、二匹は縛れた。残り一匹。

「グオオオオツ!」

残った一匹はオーラを纏って突撃してくる。『ドラゴンダイブ』かな。

「なら『ステルスロック』だ!」

「ナ……ツトウ!」

レイカにボーマンダがぶつかる。が、レイカは気にせず触手を地面に叩き付け、とがった岩を作り出す。

とがった岩が、硬いヘルメットにぶつかったボーマンダに刺さった。痛そう。

「ブルさん! 大丈夫ですか!」

「なんとか……レナさんこそ大丈夫?」

「はい! 戻って、ツービー」

それじゃあボーマンダたちが復活しないうちに逃げようか。

「メイコさん、これにこりたらあんまり暴れないですよ?」

「え、なんで?」

「メイコさんが寝てるボーマンダにちよつかい出すから襲われたんだよね? 分かって

るよね?」

「ペラッブ〜♪」

とほけないですよ!?! 危うく食べられる所だったんだから!

「あ、ブルさんこっちです!」

「え?——うわあ……凄いい幻想的……」

窓が割れている黒い四角いビルに、真っ白な幹の木が巻き付いている。鳥ポケモンたちの巣もある。

ここの住人と思われるおばちゃんが二人、コリンクとウソハチを連れて歩いている。

ピロントツ

『グレールインズ——つまり、灰色の廃墟。略すと灰墟』

灰色の廃墟く存在しない街く

「ブルーさんたちはまずポケモンセンターに行ってください。ハッサンたちを回復する間に、私は両親に説明してきますね」

そう言う　ことでレナさんとは別行動中。

……ポケモンセンターにまで木が　絡み付いてきてる　とは思ってなかったけど、ね。

「こりやあ、スゴい自然豊かねえ。こんなところで生活できんのかしら」

「そりやあ、生活出来るから、ポケモンセンターがあるんでしょ？」

「あんだねー……ま、良いわ。中、入りましょ」

で、ポケモンセンターに入　ったんだけど……まさかここにまで木が侵入してるとは思わなかったよ。

「ジョーイさん、回復お願いします」

「ええ、お預かりします」

トレーナーやボーマンダたちとのバトルで皆それなりにダメージを　受けてるからね。

回復完了まで、少し ポケモンセンターの中を見回す。

他の建物に 比べたら損壊は少ない。中に侵入している木は天井を埋めつくし、緑色のきのみが ぶら下がっている。一つ取って食べてみた。

「うえ、まずっ!」

「ん? あー、それ、熟していないチーゴのみね。もっと青くなるまで育たないと、食べたもんじゃないわよ」

「先に、言って欲しかったな……」

まあ、緑色の時点で 美味しいきのみでは無いだろうと思つてたけどさ。

「ブルーさん。お待たせしました、ポケモンたちは皆元気になりましたよ」

ジョーイさんから モンスターボールを受け取る。ついでに気になる事 も聞いておこうかな。

「ジョーイさん。この町って、凄く……」

「それはまだよく分かってないの」

まだ! 俺まだ 何も言っていないよ!

「あ、ごめんなさい。ここに来たトレーナーさんたちが皆同じ質問してくるからつい」

「いのよー。で、よく分かってない、っていうのは、この木のこと?」

「あら……ええ、そうよ」

一瞬 メイコさんが喋ったことに驚いたみたいだ。この反応、なんだか新鮮だなあ……。

「切つてもすぐに生えてくるし、燃やしても他の場所から新しく生えてくるのよ。しかも徐々に耐性まで付いてきちゃって」

「た、耐性？」

「そう。例えばこのポケモンセンターの木は、燃えにくい、なかなか切れない、暑さや寒さに強いっていう特徴があるわ」

え、やりすぎじゃない？ 頑張りすぎ だよな？

「しかも処理すればするだけ余計に繁殖力が上がっちゃって。お陰で窓ガラスが割れちゃってね……」

「た、大変なんですかね」

「まあ、サザナミタウンが近いのもあって観光客には困らないんだけどね」

そう言うと ジョーイさんはウインクした。

流れるような説明、何回も話した んだらうなあ……。

「ブルーさん、メイコさん」

「あ、レナさん。どうだった？」

「えっと、ですね……その……」

うん？　なんか様子が　変だね。

「先に！　あ、その、準備とかがあるので先にこの町の名産を見せてきなさい、だそうです」

急に怒鳴ってきたから、ちよつと　ビックリしちやつた。てへ。

「名産？」

「名産というか観光スポットですね。この町が潰れてない唯一の理由です」

「けつこう、ガンガン言うわね……ジョーイさんの顔が凄いことになってるわよ？」

さつさと出て見に　行こう……じゃないと　ジョーイさんに怒られそうだ。おお、こわ。

~~~~~

「じゃーん！　ここがグレールインズを中心、『シンギュラーポイント』です！……ブルーさん？　メイコさん？」

う　……ぐ　……なんだここ　、なん　だここ!?　体　の中　心からね　じ切られそう　な感覚……！

「っ、ブルー！　誰でも、いいから、『まもる』しなさい……うぎゅう……！」

「ハッサン……!」

「バ、バオウツ!」

ハッサンが青いバリアを張る。よ……くあ……きつつい……さつきよりはマシだけど。

「今のうち、に出てきて、皆。交互に、『まもる』だ……!」

「ギツガアツ!」

「ナツトウ……!」

「ペアギユア?」

……ふと、思ったけど俺って全員に『まもる』を覚えさせてるんだね。

「なんか、やけに息切れすると、思ってたわよ……! どういうことよ、二番!」

ピロンツ

『原因不明……調査中……』

ピロンツ

『シンギュラーポイントとは、特異点の事。故に元は別世界に住んでいたお二人に何かしらの影響を与えていると判断しました』

つ、つまり……?」

ピロンツ

『即刻この場から離れる事を提案します』

そつ かあ…… どんなどこ ろか 見ておきたか つたのになあ。

「じゃあ、離れよ、う……」

「そ……ね……」

あ、メイコ さんが ダウン 寸前だ。結構 まずい。

「レナちゃん……おねぎや、い」

あれれ？ うまく 舌が 回らない なあ。

あー これ、あれか。

ブルーは 目の前 が 真つ暗 になった！

## 特異点く神との邂逅く

雲の上。なんだか雲の色がピンクっぽいオレンジだ。ふかふかで美味しそう。

「……あー、夢？ ってことはまたあのくそジジイが出てくんのかしら」

横から声。見ると、俺よりも背が高い女の人が居た。紺色のセーラー服なんて着てる。

……いやまさか、ね。

「あのく、もしかしてメイコさんですか？」

「うん？ 誰よあんた……え、ブルー？ あんたもしかしなくてもブルーよね？」

「う、うん」

「はえ〜」

ほっぺをつつかれる。耳を触られてからほっぺをむにーっと引っ張られる。その後ひよいつと持ち上げられた。

「はー、軽いわねー。ちゃんとご飯食べてたの？」

「えっと、うん。一応……好き嫌いは無かったけど」

「部活は何してたん？」

「え? ……あー、小学生だから部活はまだ」

「あ、そうだったわね。んじやあクラブか何かは?」

「ポケモンやりたかったから何も」

「ふーん」

メイコさんからの矢継ぎ早な質問になんとか返していく。

「……かなり猫かぶりねーあんだ」

「そういうメイコさんは変わらないよね」

「でしょ?」

そんな風に笑ってて悪いけど、褒めてないよ。

「さーて」

「うわつと」

ポイ捨てしないでよ! 俺がゴミみたいじゃん!——口には出さないけど。

「こんの……くそジジイー! さっさと出てこいやー!」

「うわつ」

うるさつ! 人の姿なのにペラップの時よりうるさい!

と、後ろで咳払いが聞こえた。慌てて振り向くと、黄色く縁取られた銀色のローブを

着てる男の人が居た。凄い……なんていうか……神々しいな。

それに、なんかアニメとかに出てきそうなくらいイケメンだ。爽やかっぽいのに目付きがとろんとしてて影もありそう。

「ふむ、予想以上に元気だな。勿論、予想通りでもあるが」

「あん？……あんた誰よ」

「我が誰か、か。神だ。或いは、なんじ汝たちの同類だ」

神？ 同類？ どういう……うーん？

「同類ってことはあんたも転生者？」

「うむ」

「それにポケモンってこと？」

「そうだ」

「ポケモンなのに人の姿なん？」

「そこな子供も人の姿である。そして今の汝もまた、人の姿である」

子供……いや、そうだけど。っていうか俺さつきから何も喋ってないや。

それになんとなくこの人……いや、このポケモンの正体も分かった気がする。

メイコさんも少しやりにくそうにしてるから、助けなきや。

「あの一」

「なんだ」

「名前は何て言うんですか?……アルセウスで良いんですか?」  
「ほう?」

男の人——アルセウスが、面白そうに俺の顔を見てくる。

「何故そう思った? また、何時いつ気付いた?」

「……初めから色で大体予想はついてました。あとポケモンで神なんですよね?」

「うむ」

「なら、アルセウスしかありません」

「……」

アルセウスが初めて口をつぐんだ。柔らかく微笑んでるのに、なんだか寒気を感じる。

「成る程。私も年老いる訳だ。いや、若者とはいと賢きものよ。私の正体を一目で見破ってみせる」

「ちよつと。そのガキがポケモンバカなだけで三割ぐらいのわ・か・も・のはあんたの正体なんて気付かないわよ」

「ふむ。そういうもの、か。安心するがいい。汝もまた、我から見たら若者だ」

「そ、そう?」

メイコさんの顔が真っ赤だ……はっ! もしかしてメイコさん、アルセウスが好きな

のか!?

うんうん、アルセウス強いからね。全部のタイプでタイプ一致技を出せる訳だし。ただ、プレートを集めるのが本当に面倒で……。それに配信ポケモンだから新しい方のポケモンだとチート使わなきゃ出てこないし。

「んじやなくて! なんてあたしたちはここに居るわけ!?! あたしだけならまだ夢だつて言えるけど、こいつも居るし!」

「うむ、それは汝らがあの存在し得ない場所に近付いたからであろう」

「それってグレールインズのシン……えー、シンギュラーポイント、のことかしら?」  
「うむ」

存在し得ないか。……存在し得ない場所に住む人も、存在し得ないのかな? それは、なんか嫌だな。

「そしてまた、あの場所が汝らに近付いたというのも有るだろう」

「ワケわかんないわね」

「あの、それで、僕たちはいつ戻れるんですか?」

話が終わわりそうに無かったから割り込む。うーん、流石に無遠慮だったかな?

「ふむ。直ぐにでも戻れる。或いは、永遠に我の元に居る事も出来る」

「それはどういう……いや、どうすれば戻れるんですか?」





いうことぐらいしか分からない。っていうかここどこ？

「おや、目が覚めたのかい？」

ぼんやりしていると、青い髪の男の人が部屋に入ってきた。

「はじめましてブルさん。私はタツヤといます。貴方の活躍はテレビでよく知ってますよ」

「あ、はじめまして」

ベッドから降りてペコリと頭を下げる。ファンの人かな？

「さて、起きたばかりですまないのですが……娘が欲しければ私を倒して見せてください」

「お父さん!？」

レナさんが叫ぶ。……うん？ え、あ、はい？

「レナさんのお父さん!？」

バトル AND アセプト〜アセプトって『認める』ってこと〜

「準備は良いでしょうか？」

「はい！」

フィールドを挟んでタツヤさんと向かい合う。既にお互い、ボールを手に持っている。

「ルールは1対1！先にポケモンが戦闘不能になった方の負けです！では、ポケモンを出してください！」

審判のレナさんの声と同時に、二つのボールが投げられる。

「ハッサン！」

「バッチャー！」

俺が選んだのはハッサン。このバトルは大袈裟に言えば、レナさんを賭けた戦い。だったらここで出すのはエースであるハッサンしか居ない。

そしてタツヤさんは……デンチュラ、か。

「では……バトル開始！」

「さあ、君の力を見せてくれ！ バツチャ、『かみなり』！」

『まもる』！』」

緑色のシールドに電撃が弾かれ、周りの地面をえぐる。

初めから倒しにかかってくる……これは、隙を見せたら負けるな。

『とっしん』！』」

『かみなり』です！』」

ハッサンは強力な電撃に怯まず頭から突っ込み、そのままデンチュラの体にぶつかる。

「そのまま『かみくたく』だ！」

『『エナジーボール』で振り払ってください！』」

ハッサンが嘔み付こうとするけど、大きく開いた口の中へ『エナジーボール』が着弾する。

「ハッサン！」

「攻め手は緩めません！ 『かみなり』！」

『『まもる』だ！』」

『かみなり』が当たる直前に緑色のシールドが張られる。あ、危ない……。

「流石にやりますね」

「まあ、トレーナーですから」

「……プ……クツクツクツ、アハハハハ！ 成る程、『トレーナーだから』ですか！」

な、何か俺今面白いこと言った？ チラツとレナさんを見るけど、首を横に振られた。

「良いですね！ ポケモンの眼にも力がある！ 良いトレーナーですよ、君は！ バッチャ、『むしのさざめき』！」

「ハッサン』とっておき』だ！」

デンチュラが嫌な音を出してくるが、ハッサンの姿が消える。

瞬間、デンチュラが上から叩き付けられていた。痛そう。

「なっ……バッチャ!？」

「……バッチャ、戦闘不能！ よって勝者、ブルさん！」

ふう。やっぱり『とっておき』が強すぎるね。擬似的に回避できる訳だし。……

まあ、使えるようになるまでに時間がかかるけどさ。

「ブルさん！」

「うわっ！」

ハッサンをボールに戻したら、レナさんが抱き着いてきた。

「凄い、凄いです！ 私じゃお父さんに勝てなかったのに！」

「あ、あはは……待って。それって多分相性の問題じゃない？」

レナさんって今でこそツーンベアーツーンベアーが居るけど元々はサーナイトサーナイトとレイシードエルレイドしか持って無かつし……だったらむしろタイプを持つてるデンチュラはかなりきついよね。

「それもありませんけど……」

「いや、久し振りにポケモンバトルに勝てると思ったんですけどね。……ごほん」

ニコニコと笑っていたタツヤさん。だけど咳払いすると雰囲気が変わった。笑うのを止めて鋭い眼で俺を見てくる。

「ブルさん」

「は、はい」

「……レナとどこまで行きましたか？」

へ？

「お父さん!？」

「レナ、今はブルさんと話しているんだ」

「っ……」

えーと。どこまで……かあ。どこに行ったかな？

「まず、ホドモエシティで出会って、フキヨセシティとか、サザナミタウンとか……まあ、色んな所に行きました」

「……成る程、成る程。まだ汚れてない、と」

「? ホコリまみれになった時もありますよ?」

「ブルさん……」

えつ、なんだろうこの疎外感というか呆れたような雰囲気は……。

「ふふ、これなら大丈夫だね」

あ、ニコニコし始めた。だけどレナさんからジトツとした視線が来てる……。

「私はレナとブル君が付き合うのに異論は無くなったよ。むしろ良くこんない人を見付けたね、レナ」

「う、ん……」

……ええと。良く分からないけど、一件落着?

「一難去つてまた一難だったりしてねー」

「あ、メイコさん……と、誰ですか?」

メイコさんは女の人の肩に留まつてる。女の人はレナさんと同じ水色の髪をまとめずに流している。

その女の人は、まじまじと俺を観察してくる。

「ふうん? んー。あら……」

「あー、その、何ですか?」

っっていうか近い近い。寄らないでよ。

「……複雑ね。このままだとレナの相手がポケモンになってしまう。だけど、タツヤが認めちゃうんだったら私がおねても意味ないし」

「……」

あ、分かった。この人つてもしかしなくてもレナさんのお母さんだね？

「仕方無いわね、お義母<sup>かあ</sup>さんと呼ばせてあげるわ」

ごめん、それはまだ速いと思うんだけど。